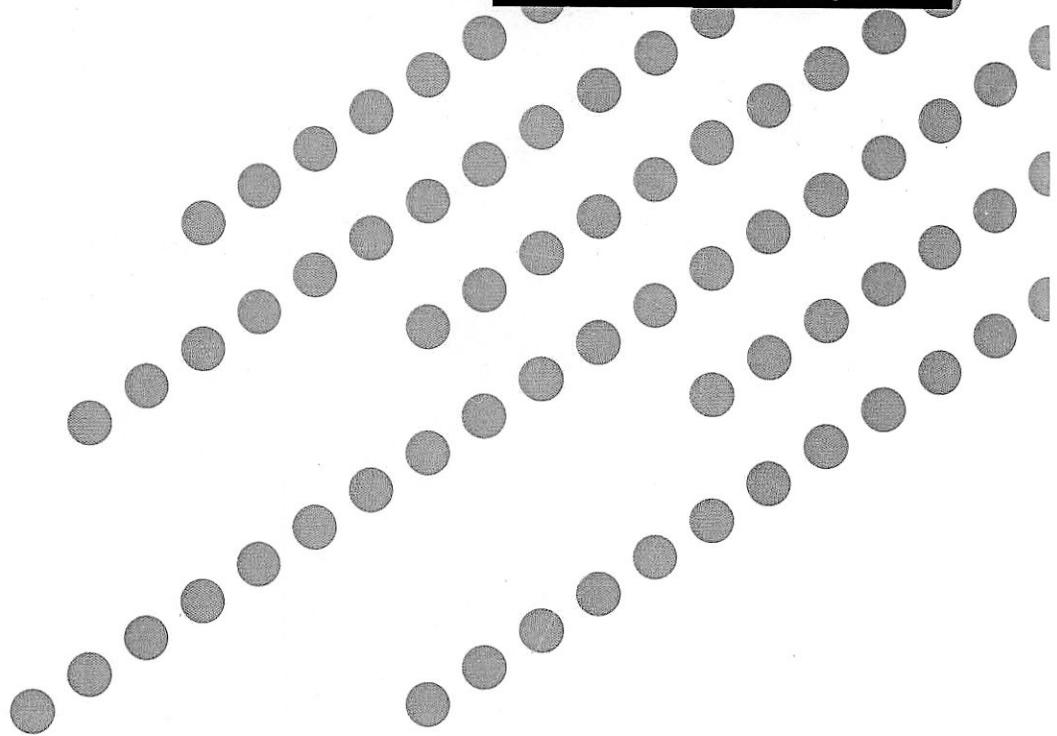


30th

30周年記念誌



北海道高等学校教育研究会

目 次

発刊の辞	北海道高等学校教育研究会会长	染 谷 昌 志	1
祝 辞	北海道教育委員会教育長	寺 山 敏 保	2
祝 辞	札幌市教育委員会教育長	藤 島 積	3
祝 辞	北海道高等学校長協会会长	村 上 侃	4
創立30周年記念誌に寄せて	初代会長	梶 浦 善 次	5
思いだすままに	6代目会長	尾 崎 信 夫	7
高教研30周年に寄せて	7代目会長	小 柳 六 郎	8
思いだすままに	8代目会長	高 畠 慎 彦	10
高教研への期待	9代目会長	本 間 恒 太	13
高教研30年の歴史と運営			17
地区支部この10年のあゆみ			40
教科部会この10年のあゆみ			58
高教研への提言			77
高教研の発展によせて			82
研究成果一覧			88
研究紀要・研究調査一覧			117
歴代役員名簿			122
年 表 (30年のあゆみ)			132
本部事務局のあゆみ			147
編集後記			148

発刊のことば



北海道高等学校教育研究会

会長 染 谷 昌 志

本研究会は、昭和38年5月の設立総会をもって発足し、翌39年2月に第1回研究大会が開催されました。本会設立の目的は、会則にありますように、「高等学校の各教科などに関する事項を研究し、会員相互の研修と識見の向上につとめ、高等学校教育の振興を図ること」とあります。この30年間に国の内外の状勢は大きく変わり、高校教育においても、時代や社会への対応の要請が高まる中、種々の論議や実践が行われてまいりました。この間にあって高教研が、教科部会と地区支部の活動を軸に、計画的・継続的にその事業を展開し、本道教育の中で信頼される研究団体として定着してきたことは、極めて意義あることと考えます。

本研究会の発足当時の先見性あるご努力、さらに、この会を広く、自由な立場から参加できる研究と研鑽の場へと発展させてきた会員、及び関係各位の熱意あふれる取組に、心から敬意を表するものです。30年という年月は、よく人間の一つの世代であると言われます。その意味では、高教研は活力に満ちた壮年期に入ったことになります。教育活動には常に若さと情熱が望まれることから、私たちの高教研は今後、さらに円熟した永遠の壮年期を目指して、これまでの歩みを振り返り、時代や社会の変化に伴う課題に向って、着実な歩みをしていくことが求められています。

このたび、記念すべき30周年に当たり、記念行事の一つとして、30周年記念誌を発刊いたすことになりました。この記念誌を通して高教研のこれまでの運営をはじめ、地区支部、教科部会の活動について回顧することができると思います。また、研究紀要に発表された研究、調査の業績がまとめられております。さらに、本会の今後の在り方や展望について、担当者による提言が集録されています。

この記念誌が高教研の新しい出発の礎として活用されるよう願ってやみません。本誌の編集に当たり、お世話くださった関係各位に心から感謝申し上げ、発刊のことばといたします。

祝辭



北海道教育委員会

教育長 寺山敏保

北海道高等学校教育研究会が設立されましてから本年で30周年を迎えたことは、誠に喜ばしく心からお祝い申し上げます。

本研究会は、昭和38年5月、札幌南高校で設立総会がもたれ、翌、昭和39年2月に第1回の研究大会が札幌旭丘高校を会場として開催されましたときは、参加会員350名であったものが、現在は会員数も5,300名を越え、本道の高等学校における総合的な教科研究会として最大規模を誇るまでに発展をみたのであります。

本研究会がこのように隆盛発展をみましたのは、高等学校教育の内容と体質の改善という時代の要請に応えるべく、「各教科の立場から本道高校教育の前進を願い、あらゆる角度からの研究や発言が自由になされる」ことを目標として発足されたこととともに、この目標実現のために幾多の障害を乗り越えて、本会の運営と発展の為に尽くされた歴代会長をはじめとする役員の方々のご努力と、本会を自主的な研究の場として守り育てようとする会員各位の熱意によるものであります。ここに深く敬意を表する次第であります。また、各学校における質の高い実践研究の発表の場として活用されてまいりました「研究紀要」は30号を数え、その時代その時代の教育課題の解決を目指そうとする会員各位のご努力の結晶として、本道の高等学校教育の大きな指針となるものであります。

さらに、本研究大会・全体集会でご講演された講師の先生方は57名にものぼり、多くの示唆を与えていただいておりますことに対しても感謝を申し上げます。

さて今日、我が国の教育は、国民の強い熱意と努力で国際的にも高い評価を受けており、教育に寄せる道民の期待も非常に大きいものがありますが、その一方では、改善しなければならない課題も多くあります。文部省は、第14期中央教育審議会の答申を受けて、提案内容の具体化のため、「高等学校教育の改革の推進に関する会議」を発足させ、昨年6月には教育部会が、全日制の単位制高校の導入や総合的な新学科等について第一次報告を出し、8月には高校入学者選抜の改善などについて第二次報告を出したところであります。

このような状況の中で、21世紀の北海道を担う創造性豊かなたくましい人材を育成するため、各高等学校においては、生徒一人一人の個性を生かした主体的な学習の一層の促進が求められております。学校週五日制の導入や新学習指導要領の実施など当面する課題解決をも含め、「高等学校教育と学習指導の現代化」を共通テーマとして、本研究会が各教科の立場から本道の高校教育を前進させようと願う使命は極めて大きく、会員各位の研究に寄せる期待も計り知れないものがあると存じます。

最後に、この機会に本研究会が果たしてきた役割を思い起こし、さらに、本道高等学校教育の向上に今後一層のご研鑽を重ねられんことをご祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

祝　　辭



札幌市教育委員会

教育長 藤島 積

このたび、北海道高等学校教育研究会が創立30周年を迎えるに当たり記念誌を発刊されますことは、誠に意義深く、心よりお喜び申し上げます。

各会員におかれましては、昭和38年の本研究会の発足以来今日まで、時代の変化に応じて後期中等教育に求められる課題を的確に把握し、日常の教育実践を基盤としながら貴重な研究成果をあげてこられました。そのご努力と真摯な取り組みに対しまして衷心より敬意を表する次第であります。

明治の近代学校制度導入以来1世紀を超える我が国の教育史の中で、戦後教育の占める期間はすでに40年以上を経過しておりますが、この間、教育の機会均等の理念の下に、教育の著しい普及、量的拡大と教育水準の維持向上が図られてまいりました。このような教育の進展が社会経済の発展の原動力となり、また、国民生活や文化の向上に大いに寄与した点は高く評価されてしかるべきであります。反面、時代の進展とともに、我が国の教育は今日、多岐にわたる新たな課題に直面しております。

科学技術の発展は、人類に大きな物質的豊かさと便利さを与えたが、一方で、人間を取り巻く環境の変化等をもたらし、自然との触れ合いの減少、映像等による間接体験の肥大化と直接体験の減少、便利さの代償として人間のもつ様々な資質の退行や人間相互の触れ合い、思いやりの心等の希薄化などが指摘されております。

平成6年度から実施の高等学校学習指導要領では、このような社会環境に生きる生徒に、物事を主体的に判断し、適切に適応しうる思考力、表現力、実践力等を育成することが強く要請されております。また、同時に基礎・基本を重視し、多様な価値観をもつ生徒一人一人の個性を生かす教育の充実が求められているところであります。

その具体化のために、先般、文部省の諮問を受けて、「高等学校教育の改革の推進に関する会議」では、その第一次及び第二次報告の中で、様々な視点から改革の具体案を提示しております。教育行政が積極的に進めるべき施策が多く盛り込まれておりますが、各高等学校における主体的かつ創造的な取り組みが大いに期待されるところであります。

さらに、学校週5日制の導入に伴い、平成6年度からの教育課程編成に当たっては各高等学校での創意・工夫がこれまで以上に求められております。その意味におきましても、全道の高等学校教育の先駆的役割を担ってこられた本研究会の今後の研究成果は、大きな示唆を与えてくれるものと確信するものであります。

このたびの本研究会の創立30周年を契機とし、会員の方々の一層の研鑽をお願い申し上げ、本道の高等学校教育の充実・発展のためお力添えをいただきますようお願い申し上げましてご挨拶といたします。

祝辭



北海道高等学校長協会

会長 村上 健

北海道高等学校教育研究会が創立30周年を迎えられましたことをお喜び申し上げます。

この30年の間に、本会は全教科にわたって全道の高校教員の半数近くを組織する研究会に発展されました。これまで本会をお育てくださった歴代会長先生をはじめ役員の方々のご努力と会員の皆様のご熱意に深く敬意と感謝を表するものであります。

顧みますと、この間本道の高校教育は幾多のきびしい課題に直面しながらもこれを乗り越えて発展してきました。本会が発足した昭和38年は戦後のベビーブームが高校に押し寄せた時であり、さらに高校への進学率が急速に上昇している真最中でもありました。しかもその増え方は世界的にも例を見ない程で、本会の発足当時の進学率は70%程度であったものが、その後5年ごとに10%づつ上がるという驚異的な状況が続き、昭和55年には94%にも達するスピードぶりでした。

このような生徒の急激な増加が高校教育にいろいろなひずみを生み出し、それが質的充実をはばむ要因ともなりました。それに加えて、昭和38年度から新たに実施となった教育課程が必修教科科目とその単位数を大幅に増やしたこと等もあって、授業を十分消化できない生徒が増え「落ちこぼれ」等という言葉がしばしば登場する等、生徒も教師も苦しい思いをすることになりました。こうした状況を背景にして、高校教育の質的改善を求める声が高まり、昭和46年には中教審から「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」答申があり、これが第三の教育改革といわれた程の話題を呼びました。しかし、このときの多様化路線はその後の努力にもかかわらず十分な成果が上がらず、それから10数年を経て臨教審、さらにそれに続く第14期中教審からの答申による個性重視の教育へと移り今日に至っています。

こうして見てきますと、本会は創立以来高校教育の量的拡大に伴う質的变化への対応の連続であったように思われます。そして第30回目の研究会を迎えた今、今度は中卒者の減少期を迎えることになり、この時こそ高校教育の質的充実の好機と考えられています。

今、学校教育は生涯学習の一環として、一人一人の子どもの個性を尊重し創造性を育てるとともに、学ぶ意欲と基礎基本を大切にする教育が強く求められています。このため、とくに高校では、教える教科について十分な知識を持つことはもちろん、指導方法についての研究を深めることも益々重要になっていきます。そして、こうした資質能力は教職生活を通して絶えず研鑽することによって形成されるものであり、それだけに本会に寄せる期待も大きなものがあります。

創立30周年に当たり、本研究会が教育課程の編成・実施そして改善に尽くされたこれまでの高い実績の上に立って、今後とも本道の高校教育の充実発展に一層寄与されますようお願い申し上げる次第であります。

創立30周年記念誌に寄せて

初代会長 梶 浦 善 次

十年ごとに発行される本会の創立記念誌に、会発足の経緯や会によせる期待や希望などを書いた。この三十周年誌に対しては私的なことにわたり恐縮だが、私自身の心境から始めたい。この研究会の会長3名の方が、すでに鬼籍に入っている。会員の方にも多くの変化があったことであろう。私自身は87才、米寿を迎えた。天命とはいえた幸運に感謝するのみである。青年教師の時代、病弱であったことを考えると、奇蹟のようにさえ思うのである。幸せであった、有難いとくり返すしかない。

今回述べるエピソードは、組合の交渉の中で生じたものである。ただその唯一の証人である教頭の成田勇三君（後の岩見沢東高校長）が、昨年の春、故人となつたことは残念の極みである。

組合の工作で、当初道教委へ申請した半ばにも達しないのでは、と懸念された。不安であったが研究会の事業を(1)研究大会の開催(2)研究紀要の刊行を行なうことを提案して、役員会の承認をえ、昭和39年2月旭丘高校を会場に第一回の大会を開催することとして、準備を進めていた。研究会が後1～2週後に迫つたある日、組合からその日午後研究会のこととで若干名の者が訪ねたい旨の電話があった。どうせ「研究会を止めよ。」ということだと承諾したのであった。しかし私には彼らと会う考えはなかった。成田教頭に「先生、僕は出るつもりはない。今日は先生が副会長ということで話を聞いてください。組合が来る前に僕はいないから。」と頼んでいた。ところが彼らもしたたかで、約束した時間よりも30

分以上早く校長室にどやどやと入つて來た。5～6名。「しまった。」と思ったがもう遅い。「今さら逃げかくれすることもできないので、今日は付き合うが、僕はだんまりで終始するから、先生が応待してください。」と、咄嗟の打合せをした。

応接セットにそれぞれの位置が定まるとき、キヤップらしい人が口火を切つた。研究会をやめよといふのである。やがてやりとりは会員数の問題となつた。会員の数は何名か正確にいわせようとする。成田教頭の返事に対して「われわれがつかんでいるのとはちがう。もっとすぐない筈だ。」と喰いつく。研究会が道教委に申請している数とのちがいをつかもうとしていることは明らかである。話はさらに旭丘高校の会員数や会費の出し方に及ぶ。「入会していない先生はごく少数で、大部分の先生が会員である。会費はPTAの予算に大学の講師程度の額が組まれている」という成田教頭の説明に対して、「それはおかしい。PTAの会費をこのような会の研究費に当てることは不当ではないか？」と追求する始末である。

ここまでじつと我慢していた私は、とうとう発言を抑えることができなかつた。「君たちは一体高校教育研究会のことを話し合いに來たのではないか。旭丘高校の運営について、君たちから何かと指図を受ける必要はない。話し合いは中止するから帰つてもらいたい」と私。ところが彼らは待つていましたとばかり、私に突かかって來た。高校教育研究会をやめよ、という再度の要求である。「いや、止めるわけにはいかない。高校の先生方には、義

務教育の先生方のような研究組織がない。この会がパイプ役となって、文部省や道教委から補助金を受けて、研究を盛んにしたいのだ。」「それがやがて文部省のご用団体になるに定まっているんだ。」「それは会の運営に当っている人たちへの侮辱ではないか。君たちはいつから未来を予言する力を身につけたのかね。」「先生は社会科学の専門家でないか。理解できないというのはおかしい。」「社会科学の専門家だから君らのような短絡的な結論は出せないんだ。」

こんな質問をくり返している馬鹿らしさを感じ始めていた。彼らは決定的な止めをさすつもりであったろう。鞄の中から大判ノートを取り出し、「ここに最近行なわれた池田＝ロバートソン会談の記録がある。日本の教育を軍国主義の教育として強化するというものだ。日本の各新聞にも紹介され論議をよんだものだ。」彼らは重々しく読みはじめた。「君は随分熱心なんだね。君はそれほど熱心なのだから、ついでに原文を届けてくれないか。」

「いや、新聞に載ったものだからそんな必要はない。」「君には必要ないかも知れないが、僕には必要だ。僕は英語をよめるから。一体翻訳というのは訳者の解釈にすぎない。どんなことばにどんな訳語を当てているかを見なければ、答は出せないよ。」

ここで私にあることばが浮かんだ。「ところで僕は君たちに聞くが、代数と算術はどうちがうかね。答えてくれたまえ。」 答なし。顔を見合せているだけ。「君らが説明してくれないならば、僕が答を出すよ。いいかね。つまり $a + b = c$ という代数の公式を暗誦しているからといって、 $3 + 5 = 8$ という算術計算ができるか、ということだ。」 沈黙。

「君たちが小学校に入ったとき、先生が指を使ったり、おはじきや鉛筆などを使って、ひとつひとつ数の観念をつけてくれたことを思い出すだろう。こうして数の計算ができる。要するに、君らが言っているのは『革命の代

数』だ。こういう条件があれば、こうなるだろう、という信念を表現しているだけではないか。昭和という時代、札幌という土地でこの研究会が行なわれることは算術なんだ。公式の暗記とはちがうことだ。」

「先生がそういうのであれば、われわれは改めて歴史とは何か、じっくり話し合わねばならない。」「それならば僕も大賛成だ。それこそ大いに議論したい。僕はいつでも喜んで応ずる。今からでもいいよ。」 こういう結果になったところで、一緒にいた他の人たちが「今日はこれ位で帰ろうや」とちいさな声で話し合っていた。彼らは入ったときとは全くちがった雰囲気で立ち去った。

私は青年時代に、19世紀におけるロシアのマルクス主義理論家G.V.プレハーノフ（1856～1918）の「史的一元論」（岩波文庫）で革命の代数学ということばを知った。その後マルクスの伝記などから、このことばはマルクス自身から出ていることもわかった。マルクスは、彼の亞流たちが具体的な事実を確かめる労を省いて大言壯語することを、にがにがしく思っていたという。

さて戦後教師は聖職者から人間として解放されると共に、さらに一きょに労働者となつた。これとともに心情的なマルクス主義者が生じた。昭和初期の学生運動はマルクス主義の文献をよむ読書会に参加することであった。「賃労働と資本」や「賃労働と利潤」のような易しいものから始めて「共産党宣言」や「ユダヤ人問題」に進む。集まっている人たちの程度によってちがった文献を取りあげたであろう。スターリンによって肅清されたブハーリンの「共産主義のABC」や「唯物論の哲学」なども啓蒙的な参考書であった。すでに述べたように、戦後の活動家はマルクスを知らないマルクス主義者である。それゆえにマルクスの見解そのものによって敗退せざるをえないという滑稽なことも起きるのである。

さてどのようにマス・コミが発達しイメー

ジの時代になっても、教師は読書と省察を捨ててはならない。文字を読むことは人間にとつて格別な意義をもつ活動である。本会もそ

うした先生たちに支えられて発展するだろうし、またそうあることを願うのである。

(平成4年9月27日)

思い出すままに

第6代会長 尾崎信夫

高等学校教育研究会の名称が、何時とはなしに「高教研」と呼ばれるようになって、もうすでに久しい。その高教研が30周年の記念すべき日を迎えるなんて、大変すばらしいことです。丁度私が在職のとき、昭和58年1月12日に20周年記念式典をあげましたが、はやそれから10年を経過し、ここに30周年記念式典を迎えることになりましたことを心からお祝い申し上げます。

かつては少ない学校予算の学校配分旅費の中から、この高教研に参加する先生方に旅費を出していった時もありましたが、今では自分から進んでこの研究会に参加し、平素の現場での研究の成果を発表し、互いにその問題について真剣に論じ合える場として定着し、年々会員数も増えて、ますます隆盛発展をとげていることは、大変ありがたいことです。

他県に出張いたしましたとき、全国的に「高教研」のことが知れわたっており、訪問先の校長先生から、大変うらやまれたことを思い出します。このように大きな規模の研究会組織は、他にない北海道独自のものといってよいと思います。

それだけに、全体集会での講師の依頼については、随分苦労いたしました。先ずもって講師に対する謝礼の問題でした。全国的に著名な方を講師にお招きするということは、少ない予算だけに、失礼になるのではないかと、気にしながらお願いに伺ったことを思い出し

ます。

第19回研究大会は、私が会長に就任して初めての研究大会でした。京都大学の広中平祐先生のときなどは、一面識もない私が先生にお目にかかるのですから大変緊張いたしました。ところがお会いいたしますと、大変気さくな方で、今までの緊張感はどこへやらほっと安堵したことが思い出されます。それ以来4回の大会を開催することになりましたが、どの講師の方も、高教研の実情をご理解くださいって、快く講師をお引受けいただいたように思います。これもこの高教研が大変ユニークな全国的にも知れている研究団体であることがそうさせたものだと思います。どの講師の方々も、一年一度のこの全体集会を成功させて上げようといったところからであろうと思い、今でも当時のことを思い出しながら感謝いたしております。また、教科研究集会の場合であっても、全く同じだと思います。教科部会の先生方の熱意が、講師の先生方が快く講師をお引受けいただいているのだと思います。

私が在職時、高文連の事務局が他校に移動することになりました。高体連も同じような歩みでした。そのとき、私は高文連の事務局が移動するのなら高教研の事務局も、是非他校に移して欲しいと申しました。しかし、これだけはそういうかないということでした。事務局を担当している旭丘高校の先生は、会員の登録、研究紀要の原稿収集、編集、出版、

研究大会参加者の申し込み、参加者名簿の作成、大会時の受付、会場作成、記録等々この研究大会が終わらなければ正月にならないといった感じでした。でも教職員全員が高教研の事務局校として誇りをもって頑張って来てくださったことが、大きな支えになっているのだと思います。校長は大会の晴れがましい壇上での出番があるのに、裏方として活躍しておられる先生方に心から感謝いたします。その後大会に参加いたしますと、他校の先生方も一生懸命に役目を果しておられる姿を見し、みんなの研究会として定着してきたのだなあと思い嬉しく思います。

毎年研究大会にお招きをいただき、参加させていただいておりますが、晴れがましい壇上で参加者のみなさんにお会いし感激でいっぱいです。退職してはや8年、6代会長の私が初代会長梶浦先生、3代会長磯貝先生と3番目に座るようになってしまいました。

こう考えてみると、これからも精々健康に留意して、生きているあかしとして末席をけがしたいと考えています。

高教研の30周年記念式典を心からお祝い申し上げるとともに、会のますますのご発展と会員みなさまのご健勝をお祈りいたします。

高教研30周年に寄せて

第7代会長 小柳六郎

北海道高等学校教育研究会が「高教研」の略（愛？）称で、道内の高校教員及び教育関係者、また道内外の識者になれ親しまれてから、ちょうど30の節目を数えるに至った。この間、年を追って高まる業績、回を重ねる度に広がる声価等々、歴史を観る目は10人10色だが、高教研の30年に及ぶトキ・コトの積み重ね、そして、その重さに対して異論を差し挟む向きはあるまい。

教職に拘ること37年。鰐の子よろしく、現場と役所とを出たり入ったりしたが、数年前文字どおり大過なくリタイアした。その間、高教研とは発足この方二十余年間、陰に陽に関係を持ち続けてきた。なかんずく、札幌での校長時代は、昭和55年、本部監査を仰せつかって以来、56年には教科部会長を、また、60年からは、7代目会長として、高教研の総合的運営に当たらせてもらった。で、地方の一会費負担会員時代？を含めて、いろんな立

場から高教研に接してきたので、30年目の現実をまのあたりにして、正直、うたた感慨にたえない。

ところで、高教研の世話役は、昭和38年の発足この方、一貫して旭丘高校が受け持ってきた。もっとも、当初5年が程は、市内各校から若干の手伝いもいたようだ。が、43年度からは、その一切を旭丘で賄うことと相成ったのである。これまでの長い道程において、一度だけ事務局交替案が提出された由。しかし、関係機関の会議で一蹴され、今日に及んでいるのが実態である。高体・野連はもちろん、高文連でさえ交替制がとられて何年かになる今日、高教研の事務局は、それ等と性格を異にするとは申せ、団体として全く特異な存在にあるといえる。加えて、事務局の構成員の一人びとりが、高教研の重要性を認識し「情けは人の為ならず」（他校への奉仕は即自校への奉仕）の共通理解に立って、献身的協

力を惜しまないので、全国的にも例を見ない研究会の、大組織の存続が許されているのである。

華やかな舞台にも裏方は必須。それも、大向こうを唸らせる大舞台であれば、その数も質も一層要求される。高教研の裏方、本部事務局にあっては、年間を通しての事務処理、正月、冬休みを返上して大会準備そして跡始末等々、高教研のP・D・Sのすべてに枚挙にいとまない仕事が黒子として要求されるのである。

研究大会の初日、開場時刻に間のある大会場に、人語があるので覗いてみると、何と担当者がトップウォッチ片手にマイクの前に立ち、空席に話しかけているではないか。人気ない開場に反響したその声は、ある種の滑稽さとともに、胸に込み上げさせるものがあったことをよく覚えている。

晴れ舞台二日目は教科別研究会。分科会は発足来12部会構成だったが、61年度から、「養護部会」が新設されて13分科会となった。実のところ、その何年か前から、部会設置の要請が養護教諭の先生方から出されていたのである。が、教科部会に養護がなじめるかどうかとか、予算が先細りの現状で見通しがつかない等々がネックとなって、話題にはされながらも持ち越しの状態となっていたのである。ところが、当時、講師謝金の増額、各種会議出席旅費の支給の案件に加え、専従事務職員採用等の件が検討された結果、数年来据え置かれていた会費・参加費とも61年度からは値上げをせざるを得ない状況下におかれていた。それで、タイミングよく養護の件も取り上げられ、高教研は、全ての教員が参加できる研修研究の団体であらねばならぬの謂をもって、日の目を見るに至ったのである。昭和61年1月9日、中島体育センターにおいて初の養護部会が開催された。設立に当たり若干の雑音を耳にしないでもなかったので、雪の降りしきるさ中、ひそかに視察に出向いたことも、

いまは懐しい思い出の一つである。因みに、部会は大勢の参加者のもと、大盛会だったことは言を俟たない。

事ごと然様に、狂言回しや黒子は必要であって、彼等には、観客は言うまでもなく、役者にも分からない苦労がついて回るもの。そして、打ち上げには、その労苦に逆比例した大入りの悦びを、舞台裏は待っているのである。

さて、高教研にあっては、主役を演ずるのは個々の会員である。研究大会なる檜舞台に登場したら、紀要という花道で研究成果を発表するなどして、大いに喝采を博することになるわけである。だから、主役の者が、稽古を怠ったり、ましてや、公演に際して出番をしぶったりすることは、当然あってはならないことである。一座の衰退はおろか、劇団の解散にもなりかねないからである。

高教研は、1,985名の会員で昭和38年にスタートした。それが毎年着実に増加して、10年後には5,714名となり、続いてすぐに六千名台に突入した。53年度の6,549名を最多に、年度により多少の増減はみたものの、23年目の60年度までは常に六千名台の大台を確保してきたのである。ところが、何故か61年には5,859名の登録ということで漸増の流れにピリオドが打たれたのである。その後は毎年減少して、平成3年度は5,269名ということで、50年代の登録者数に比べると何と千名も少なくなっているのである。もっとも、大会参加者数こそ会員数ほどの落差は見られないが。

会員数の漸減傾向に併せて留意すべきことに、紀要への執筆応募者の減少という問題がある。紀要是ご承知のとおり、研究論文と研究調査の2本立てとなっているのであるが、とりわけ研究調査にあっては、笛吹けど踊る者なしといった年度も、これまでには、幾度かあったようだ。また、論文にしてもが、年度的偏り、地域的偏りが顕著であり、しかも、長年にわたり発表が全然見られない教科等も

あるのが実情のようである。

ついでながら、もうひとこと言わせてもらえば、それは、支部活動についてである。支部を有する他団体にあっては、本部の活動以上の動きを見せてているのが通例だ。わが高教研が、他と仮にその性格を異にしているにせよ、支部は規約に明記されている立派な組織であるのである。本部の思惑を会員に伝達するだけの、単なる下部機関であつていいのであろうか。あたら支部の機能を枯渇させたくないものである。

いま、思いつくままに二、三の懸念される点に触れてみた。が、何れの問題も複雑な因子がからんでいて、一朝一夕には解明できなかかもしれない。しかし、舞台の裏方も表方も、舞台を愛するのであれば、解決に向けて全員真剣に取り組まねばならない大きな課題である。この会員意識に拘る課題は、高教研の、ひいては北海道高校教育の生殺与奪の権

に関する根本的な問題だからである。もっとも、この懸念も実は一過性の現象であって、一OBの単なる杞憂かもしない。とすれば事情はいずれ好転もしようし、黒子たちにもいらざる気遣いをさせる必要もあるまい。

教職の専門職論が云々されてから大分経ったようだ。が、同じ専門職でも、医師や弁護士とはいまだ同一視されていない。教師が両者と同じように社会的に認知されるには、より専門性を向上させることが肝要である。そのために、当然ながら研修研究は必須。高教研存在のゆえんである。高教研が、今後一まわりも二まわりも肥え太ったとき、教職の専門職化が確立するのだろうか。

高教研は論語でいう「而立」の歳を迎えたのである。何はさておき、30歳を祝うとともに、とりあえず、「不惑」に向けての大精進に期待してやまない。

思い出すまさに

第8代会長 高畠 慎彦

北海道高等学校教育研究会が、昭和38年に発足しましてから、本年で30周年を迎えましたことは、まことに意義深く心からお祝いを申し上げます。

北海道高等学校教育研究会創立30周年を祝うということは、絶えざる時の流れを、十年二十年そして三十年をもって区切り、そこに何らかの道標を置こうとするからであると思います。それは、しばし歩みを留め過去、未来に思いを馳せて、自らの正しき姿を模索しようとするがためであると考えるのであります。

そのような思いをもって、当高教研三十年

の歩みを振り返りますとき、歴史の中に一筋、常に真理を求めて、不变の道を歩いてきた、軌跡を見い出すことができるのです。

時代の変化の洗礼を受け、今こえる風雪30年、流れ行くものと変わらざる教育の真髓、無限の時に、有限の生を刻印して後世に悔い無きよう、最善を尽くすことに努めなければならないと思います。

歴史とは過去を振り返って現在を知り、そして未来を洞察するものといわれますが、その意味では過去との対話であり、将来への思索とも言えるものであります。時の流れは瞬時も止まることはありません。歴史は人が作

り、人はその歴史によって作られると申します。

私は、昭和62年4月1日から平成3年3月31日までの満4年間、札幌旭丘高等学校に勤務いたしました。いろいろな役職が学校に割り振られ多忙な日々であります。その中でも特に大きな比重を占めたのは高教研の仕事であったと思います。昭和62年6月13日第1回高教研役員会で規約第9条に基づく役員改選が行われ当研究会の会長の大役を仰せ付けられ、その責任の重さを痛感したのであります。何しろ何年かに一回責任を果たせばすむ全道大会や全国大会ならば、それだけに気が楽な面があります。ところが、毎年毎年、永劫回帰のようにやってくる、全会員は6,000名に近く、出席者が約4,000名の全道大会であり、そのための準備や、大会当日に至るまでの気苦労は本当に並み大抵のものではありませんでした。

しかしながら、この北海道高等学校教育研究会が全国的にも高く評価され、しっかりと定着し続けているのは、初代の梶浦校長以来の識見を持った姿勢と、札幌旭丘高等学校の全教職員が多年に亘る大きな忍耐と犠牲によって成立っていると言わざるにはいられません。さらに加えて、会員各位のご熱意によるところです。

高教研の会長としての発言の場は、年2回発行される会報、全道大会要項の挨拶、研究紀要の巻頭言、全道大会開会式の挨拶、役員会の挨拶などありました。

会長に就任した昭和62年は、教育改革について非常に大きいうねりが生じた年であります。第25回大会（昭和63年1月7日）開会式の挨拶の中で、「（前略）昭和62年は、戦後6・3制が第一歩を踏み出してから40年目の年であります。が一年間を通じ、臨時教育審議会そして教育課程審議会から最終答申が提出され両審議会により、21世紀に向けて新しい教育施策の基本方向が提示された年といえ

ます。さらに、12月には教育職員養成審議会は最終答申の中で、教員養成免許制度の改革案を打ち出しました。（略）

私達の願いは、未来の国家・社会が平和であり、経済的にも安定し活力に満ちたものであり、文化的にも優れた住みよいものであることです。その未来社会を形成するための基本となるものは、教育による人材の育成にあることを、また、教育は何事にも優先しなければならない国家的な大事業であることは、国民共通の認識であると思うのであります。

21世紀は目前であり、来たるべき時代の変化は必至であります。新しい時代をよく生き、より発展させ、文化を後世に伝える現在の青少年の教育を些かも停滞させることは出来ません。そのためには、現在の教育の改善に、果敢に挑戦していかねばならないと思うのであります。坐して待つことなく、より広い視野と優れた先見性を磨きながら、21世紀への誤りのない教育推進のため、慎重に吟味し、検討を加えていかなければならないと思いを新たにする次第です。（後略）」

第26回大会（平成元年1月10日）は、昭和から平成に改元された第1回目の大会となりました。開会式の挨拶の中で、「開会に当たり、一言ご挨拶申し上げます。新しい年を迎えるにあたり、大行天皇の崩御あらせられましたことに対しまして、心から哀悼の意を表する次第でございます。

日本の光と影の部分を歴史に残した激動の昭和も終わり、国内外にも、天地にも平和が達成されるという意味を込め、平成と改元されました。本当に、世界が平和に安定することを念ずる次第でございます。（略）

変化する社会にあって、多様化した一人一人の生徒に見合う教育課程を編成するため、まず教師自身が社会の変化を肌身で感ずる感性を磨き未来を洞察する目を持つなど、教師自身の変容が必要であると思うのであります。

(略) 教育改革実施に当たって、教育諸条件の整備が必須条件であり、いま一つは、教師の意識の変革であると思います。これらが不十分なままだと、改革は内容の伴わない形骸化したものになってしまう恐れがあると思うからです。しかし反面、これらが十分整ったら実施するというのでは、何時まで経っても改革はできません。やるものはやると踏み越えていかなければならぬと思うのであります。(後略)

第27回大会（平成2年1月9日）開会式挨拶の中で、「(前略) 思い起こしてみると、昭和から平成に変わった昨年は、国の内外とも、まさに文字通り激動の年であります。

我が国の教育界に限ってみても、リクルート事件が教育界を直撃し、また、登校拒否が不気味な広がりをみせております。

一方、教員の資質向上については、新任教員に対する長期研修が明治以来の課題と云われておりましたが、臨教審の提言による初任者研修制度が平成元年4月小学校を皮切りにして本格実施に入りました。平成4年度には、すべての校種で全面実施となるのであります。

そして、大学入試センター・テストの導入など一連の教育改革策が進められ、また、第14期中教審が4月に再開され進行中であります。(略)

新学習指導要領がこれからの中等教育に求めている基本理念の一つに個性を生かす教育があります。しかしながら、その教育の達成は難しい課題であります。難しさの一つの理由は、個性重視は本来集団教育の場として発展してきた近代学校のあり方とは、二律背反的な要素を含んでいるからであります。個性を生かす教育を真に実現しようとするならば、これまでの学校教育のあり方を根本的に見直す必要があります。そして、単に理念の詮索に止どまらず、難しさはありますが、実践に努めなければならないと思うからです。さらに言

えば、生徒と教師が具体的にかかわる教育指導の実践の場において、先ず生徒を見る教師の目が変わらなければならぬことです。画一的、固定的な尺度からみて、一定の水準に達したかどうかでなく、一人一人の異なった価値ある存在としてみて、生徒を見るようにし、その観点から評価するようにしなければならないということであります。

教育改革はこのように、実践の場における教育の質的転換をはからなければならぬと思うのであります。(後略)

第28回大会（平成3年1月9日）は、私にとって最後の機会となった。万感の思いを込め、開会式の挨拶の中で、「(前略) 昨年（平成2年）9月に、国連児童権利条約が発効して、我が国も署名いたしました。9月末には、子どものための世界サミットがニューヨークの国連本部で開催され、海部首相が出席しております。この条約は、今迄の我が国の学校教育ではばかり知れない学校の在り方を大きく変えるものであります。(略) また、高等学校の教育改革を検討しております中央教育審議会の学校制度小委員会は、去る12月18日に、大学受験競争の構造にメスを入れた野心的な審議経過報告を発表しております。この報告は、教育の閉そく状態に風穴を開けよう訴えております。(略)

90年代の教育の目ざすべき目標の一つは、新学習指導要領の基調である個性化の推進であります。個性化を正しく認識するためには、個人間差異だけでなく個人内差異をとらえる必要があるし、また、個人の伸長を目指す教育での評価は従来の欠点指摘型評価から脱して、長所伸長型評価への転換が求められると思います。ということは、過去の経験から作り上げられた尺度の目盛では、使用不可能であることを意味しております。私達自身の意識改革によって、創造された尺度をもって測定し、評価することが強く求められていると

思うのであります。(略)教育とは結局、人間が人間にに対する働きです。したがって、我々一人一人が人間への洞察を深め、専門性を高めて、優れた教育者たらんと努めることが必要であると思います。(後略)」

燐然と輝く当高教研の歴史と、さらに未来に向かって飛翔せんとする姿に思いをいたし

ますとき、今日あるを期して献身的にご尽力をいただいた歴代会長をはじめ役員ならびに事務局員など関係機関各位に重ねて深甚なる謝意を表する次第であります。

最後に、お世話になりました北海道高等学校教育研究会の益々のご発展と会員各位のご健勝をご祈念申し上げます。

高教研への期待

第9代会長 本間恒太

北海道高等学校教育研究会が発足して30周年を迎えることとなりましたことを衷心よりお祝いを申し上げます。

昭和38年5月に、多くの難題を抱えながらスタートした当高教研が、年毎に充実発展を続け、昭和53年度には6,549名の会員を擁する組織となり、本道高等学校における総合的な教科研究会として、また同時に全国に誇る最大規模の高校教科研究団体として、確固たる地位を築き上げてまいりました。

私事ながら、昭和53年4月、本会発足以来の事務局校である札幌旭丘高等学校の教頭を拝命し、同時に本研究会の事務局長を務めさせて頂くこととなりました。

時あたかも前述した本会発会以来の最大会員数を数えた年でもあり、日常の事務局業務を通して高教研の持つ言い知れぬエネルギーが、ひたひたと身に覚えるものがあり、夢中のうちに5年間その業務を遂行させて頂きました。その後いくつかの職場を経た後の平成3年4月、札幌旭丘高等学校の校長を拝命し再度の事務局校勤務となり、その上会長として、その運営に参画させて頂きました。

教頭として、事務局長として業務に当つて

いた当時と、およそ10年を経た高教研は、その研究活動の幅の広さや質の高さは不動のものでありましたが、残念なことは、会員数が昭和53年度以降漸減を続け、平成2年度までに1,067名、約16.3%の減少となっており、例年前年比1.4%の減少を続けておりました。

とくに高教研会費の値上げが行われた、昭和61年度はその低下率が最も著しく、この年のみが前年比3.1%の低下をきたしております。

これらの会員加入数の減少傾向に対する調査研究は、本部事務局においても鋭意取り組んできており、その原因となるもの、またその打開策について、分析検討を行ってきたところであります。

私が会長に就任をした平成3年度は、会員数の減少傾向に伴い高教研会計の維持が困難な状況にいたっていた時であり、前年度の役員会において、関係団体等の協賛、後援を頂く案が提起承認されており、同時にこの度の30周年記念事業に向けての財源確保と併せてこれに対応することが迫られておりました。

しかし幸いなことに、過去30年に亘る高教

研の活動実績は、広く関係方面に浸透しており、多くの団体より大変積極的なご理解を頂き、予想を上回る協賛、後援を頂くことができたところであります。おかげ様で、この度の30周年事業もなんとか目途もつき、計画通り実施することができました。

のことにより、高教研活動の偉大な実績が、かくも広範囲にしかも絶大な信頼の上に認められていることを、あらためて感じ入ったところであります。

しかし高教研の高教研たるゆえんのひとつには、高教研独自の健全財政によりその事業を遂行していたところにあります。これが会員数の減少による収入減と年毎に諸物価上昇等による経費の増加に伴い、30周年を迎えるこの時期に、緊急避難的に止むなく上記の措置を講じたわけであり、その根本的解決を図ることが今後の急務と言えるわけであります。

会員減の要因は、ひと口には申し上げられませんが、单一要因によるものではなく、複数の要因がかかわってきているものと考えられます。事務局として分析しているいくつかの要因のなかから主たるものを見せてみます

- (1) 研究会活動のマンネリ化
- (2) 高教研以外の教科研究団体の充実
- (3) 会員の意識変化
- (4) 広報活動の不足

などを挙げることができます。その他にも組織活動を強固なものとするための本部組織地区組織、教科組織の組織化にあたり、近年の管理職をはじめとする、特定年齢人口の大転換期が重なり、したがって年毎の異動や退職による定着が図れず、継続的な情報組織活動が効を挙げ得ない面もまたその一因と考えられます。

さらに近年の中卒者の減少や人口の都市集中化に伴い、道内高校の適正配置計画等の行政措置条件も大きく影響を与えていたものと考えられます。

事務局としての各種実態調査によりますと例えれば石狩地区の場合、管内公立高校教員数が昭和53年度は1,797名であり、うち会員数は1,213名で加入率72.2%でしたが、平成2年度では、教員数3,200名と増加しながらも会員数はその55.6%の1,780名に止まっています。これを全道的にみると、昭和53年度は教員数10,440名で会員数6,549名であり、加入率60.3%であったのに対し、平成2年度では教員数11,916名、会員数5,482名、加入率は44.5%となっております。

しかし、このような会員数の減少傾向という悲観的な情況を申しあげてまいりましたがそうしたなかにおいても、研究会当日の参加者数でみてみると、最も会員数の多かった昭和53年度は、会員数6,549名中、大会参加者数は3,660名と参加率55.9%であり、その後会員数は漸減をみながらも、参加者数はむしろ漸増あるいは一定数を保ってきております。その例として、昭和56年度は会員数6,317名中参加者4,121名参加率は65.2%となっており、昭和61年度以降においては、会員数は6千名台を割るようになりましたが、むしろ参加率は上昇し、60~70%として推移し、平成3年度においては、会員数5,269名に対しその70%の3,690名の参加をみているところであります。しかしその内訳をみるとときに会員以外の当日参加者の数が少なからず関連しており、この対応を如何にしていくかも新たな課題となるものと考えられます。

このように、会員数の漸減傾向をみながらも大会参加者数はむしろ漸増の傾向すらみせていることは、高教研活動自体の存在意義は不变であり、むしろ組織活動としての運営面での改善を通じて、さらに魅力ある高教研として一層の充実と所属意識の高揚を目指し、その上で会員数の増加を図っていくことが課題解決の大きな緒となるのでなかろうかと考えます。

さて、今や高等学校教育をとりまく諸情勢

は一層激動をきわめ、困難な課題が次々に直面してくる状況にあります。

間近かに控えた新学習指導要領への具体的対応、そのための個性を生かす教育の推進即ち教育の多様化、生涯学習、情報化、国際化への対応、在り方生き方教育の推進、これらを実現するために、自校の教育課程でどのように具現するか、伴っての直接課題として、履修と修得との関連、選択の拡大、標準単位数の増減の措置、その他の科目やその他必要な教科の設置、科目の一単位ごとの分割履修の認定、進級卒業認定の弾力化などの措置、家庭科男女必修の進め方など枚挙にいとまがないほどであります。加えてこの度実施されることとなつた学校週5日制の問題も含め、極めて困難な課題が山積し、しかもこれらは

集中して目前に到来しております。

そのためには、時代の変化を洞察する目を持ち、教師自身の意識改革を図りながら、誤りない教育を推進していく必要を、あらためて思いめぐらしているところであります。

こうした課題解決を図るための英知を結集し、切磋琢磨していくためにも、高教研の果す役割は極めて重要なものとなるであります。

このたびの30周年を期に、高教研の一層の充実と向上前進への新たな緒が明らかになりますよう衷心より念願申し上げ、今後とも我が国最大規模を誇る高校教科研団体として、洋々発展されるよう祈念し、30周年にあたつての期待のことばとさせて頂きます。

高教研30年の歴史と運営

○昭和57年度（会員数6,230人）

本年度は副会長1名と地区支部では8名、教科部会で5名、合計14名の本部役員に変更があった。長い年月に亘って副会長を勤めてこられた赤塚利国（札東）先生に代られて、増川暁児（札北）先生がつかれ、同時に家庭科部会長と兼任されることとなった。また、本部事務局も20周年記念事業部を新しく作り、今までの5つの組織が本年度に限り6組織部となつた。

本年で高教研も満20歳になり、人間で例えるならば「成人」を迎えたわけです。この20年間の歴史の中にはいろいろなことがあったと言われています。だが現在のような「1年1昔」とでも言えるくらいの移り変わりの早い時代に「20年」の歴史を刻むことは、大きな意味があるよう思えます。

年度当初より、本年は20年ということもあって、地区支部においても、又教科部会にあっても、大変熱が入って来ています。ことに全体集会における講師については、なかなか決まらず最終的に回答を得たのが10月初めであった。何しろ知名度の高い先生ほど相当先の日程が入っていること、また逆に3～4か月も前には決めかねること等さまざまであるが、大学の先生ということになると、丁度高教研の数日後には共通一次試験があってどうしても都合がつかない理由が多くあるようです。

何時の大会の時でもそうであるが、北海道の高教研といつても、それ程の規模ではなく、せいぜい4～500名くらいの集まりと思っておられる先生方も多く、大会資料や大会参加者の名簿一覧を渡すと、印刷物を食い入るように眺めて、これ程の大勢の方の参加の研究会に驚かれる先生もおられるようです。

この激しい変化の多い時代に、何かを求める姿勢が現在要求される時に来ているようです。その意味でもこの研究会に参加することによって、こ

とに専門教科以外のことにも眼を向ける必要があるのではないかとも思われます。

20周年記念事業についても、各パートが連絡をとり合い、手落ちのないように準備段階に入っています。記念誌の係では9月中に「地区支部の10年間の活動」「教科部会の10年の歩み」（いづれも11回大会から20回大会まで）の原稿もほぼ集まり、本部事務局において掲載内容も10月15日には原稿完了と仕事は順調に進行しました。祝賀会も名簿作りに余念がなく、大会要項が出来次第各方面に案内状が発送出来るように準備を進めています。20年という1つの節目でもあり、さらによりよい方向へと前進させるためにも20周年を是非成功させたいものと思っています。

58・1・12（参加人員4,004名）

（全体講演 午前の部）

「共生の時代」

建築家 黒川 紀章氏

標題のテーマは20年間持ち続け、現在も自分のものにしているわけではない。

1959～1960年の頃（私が世界の建築家の仲間入りをした頃）ヨーロッパ中心の建築の世界は終わったと感じた。その感想は現在考えても当たっていると思う。世界の建築界をリードしていた国際建築協会が58年に解散し、その後建築界は戦国時代に入った。そして現在は共生の時代だと思う。共生の時代は近代主義の批判から生まれてきている。そこで近代主義について考えてみよう。

1. 近代主義は世の中に二元論（分離主義）を定着させた。（例えば、精神と肉体、科学と芸術、自然と人口、保守と革新、合理と非合理等）これは物事を割り切るには便利であるが、全てが分離できるかなどの矛盾な面を生み出している。（例えば、都市計画では、パターン化しそうな人間関係が崩れてきたし、福祉面では、健者と弱者の分離政策が精神的に不満を生み、同居を考える日本型福祉政策へと変化してきた）

2. 近代主義は、マスプロダクション(同一統一・不变主義)を基盤にしている。近代建築をガラス・鉄筋・コンクリートという共通材料でリードしてきたが、生活習慣・気候・地域性・文化・伝統等の違いによりそれも1958年に挫折した。各国各地の建築が皆同じであってよいのかという考え方は今では当たり前になってきている。(人間にとつては、自然の中で生活習慣を守り、文化を育てていくことが大切であり、砂漠に合った素材をもって建築することが必要なのである)

3. 近代主義では、文明はGNPと考えられているが、私は文化には差はない(これはまだ本流となってはいないが)と信じている。日本は、ヨーロッパから離れ、日本らしい建築様式を考えるべきだ。日本人は、生活空間での精神性を失っている。先祖は心の空間を大切にしてきた。(茶室、床の間、路地等)

4. 現代は創造的な教育を行う科目が少ない。そういう訳でないが、現代の日本人の建築に関する考え方は貧困である。近代主義では、住宅の規格化が重要(物質主義が便利さ、実利的なもののみに走らせているように思える)と言われていたが、本当は、心の寸法・人間の大きさが大切なである。(家の空間は精神的な器、儀式を行う場所であり、床の間は方向性と秩序・敬う心を育てるもの。柱は精神的な象徴などすべてに意味をもつ)

このような近代主義の批判から共生(共存)の思想が生まれてきた。そしてヨーロッパでも、日本特に、高密度社会であった江戸時代の相手の気持ちを察する(心の襞を読む)社会を手本にしたいという動きが現れてきた。今、日本人も日本の文化を学ぶべきであり、西欧中心の思想(近代主義)が大きな転換期にさしかかっている現在、伝統と科学(技術)の共生(共存)を十分に考え、自国の文化をしっかり持っていくかなければ日本の未来はない。

(全体講演午後の部)

「アイヌー日本文化の基礎」

京都市立芸術大学教授 梅原 猛氏

北海道にいるアイヌは、言語的にも人種的にも異民族であるといわれてきた。しかし、倭人とアイヌとは共通点があるのではないか、というのが今日のお話である。今日は、これまでの常識の間違いを、言語・人種文化の面から考えてみたい。

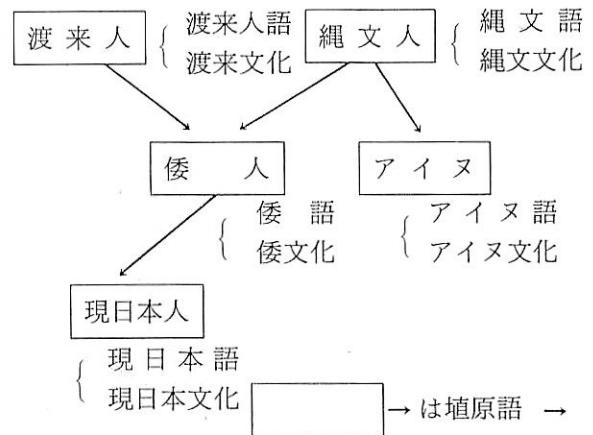
このアイヌと倭人の関連性を考えついたことについては、二つの出会いがあった。

[第1の出会い]

道開拓記念館の藤村久和氏のアイヌ信仰調査に関する報告書の中で、死靈・生靈に対する言葉に日本語との共通点を見出したことである。カムイ、ピト、タマ、イノツ、ラマツト、クルは、日本語のカミ(神、上)、ヒト(ヒコ)、命、玉・魂、生、黒・暗と共通する。本居宣長もよくわからなかつたヤツコラマツトを奴の魂とすればよくわかる。アイヌにも古代日本人の生活にも最も大切な靈を表す種族の基本語が同じというのはやはり元が同じなのではないか。

[第2の出会い]

東京大学の植原和郎氏が、自然人類学の成果を踏まえて、アイヌの祖先は倭人と同じ縄文時代人説を出しておられることだ。最近の研究では、アイヌも、日本人と同じく、人種的に、モンゴロイドに属するとされている。もしも、アイヌ(古モンゴロイド)と倭人(新モンゴロイド)とが、人



種的につながつているとすれば、言語・文化についてもその関連性が考えられるのではないか。

この図式は言語についても成り立つのではない

- (1) 人種が違う
- (2) 言語のカテゴリー
- 膠着語と包含語 -
- (3) 相似語は借用語

かと考える。従来、定説とされていたのは、金田一京助氏の異言語説である。

しかし、①人種論は、植原説で論拠は否定された。②について、金田一説では〈日本語はウラルアイタイ語であり膠着語である〉〈Rが語頭に立たない〉〈母音調和がある〉としているが、私は〈日本語は膠着語ではない、むしろ包含語の特徴がある〉〈Rが必ずしも語頭に立たなくはない〉〈母音調

和があるとはいえない」と考える。—具体的な語例略—③借用語については、言語学では、名詞が多く動詞・助詞には及ばないとされている。ところが、動詞・助詞に、日本語とアイヌ語の類語が多い。—具体的な語例略—。

最後に、文化について。

文化の基本は宗教である。その宗教が、日本とアイヌはつながっていると考えられる。アイヌの自然崇拜の多神論的な神々は、日本の古代の神々につながる。アイヌ語のカムイエロキヒ（神がそこにいる）はカムロギであり、カムイーカミ、ピトーヒト、イノツーイノチ、ラマチータマなどの共通語がある。

西洋の自然破壊の文明は、必ずどこかで批判される時がくる。その時、日本の文明がどういう役割を果たすことになるか。アイヌ文化の研究が日本文化の起源の解明につながるのではないか。

○昭和58年度（会員数6,246名）

20周年記念事業を終えて、すぐ各方面に礼状を発送し、次年度の研究大会の会場確保さらに全体集会の講師探し、とあわただしい毎日が続く。

年々増加する登録者数と研究大会の参加者数、ことに研究大会では、会場が狭く参加者からの苦情も少なくないが、現時点の札幌市内での大会場ということになると、真駒内アイスアリーナ（冬季間は使用不能）、スポーツセンター（暖房と座席設営に問題あり）、月寒共進会場（交通の便と座席確保が困難）位で、それも講演会場に設営は相当無理があり、結局は厚生年金会館というところにおちつてしまつたような状態である。

本年度は役員の改選年度と校長会の地区支部の増設に伴い、今迄の13支部から15支部へと変わり役員も本部役員を筆頭に大幅に変更を見た。本部役員では2名中1名、地区支部では（15支部中）13名が、また教科部会では12教科中7名が新しい役員として選出された。事務局でも事務局長が新しくなった。第一回役員会では、本部役員、地区支部長、教科部会長、事務局の順番で自己紹介から始まった。

またこの役員会では「地区支部での研究会をもう少し活発にすることは出来ないか」という話しも出たが、運営費があればという事で、道教委にかけ合いその結果、本年度は間に合わないので、道からの予算の裏付けがあれば、来年度より考えよう。ということになった。

59・1・11（参加人数4,061人）

予定していた飛行機で外山先生が来札、午後の講演の伊藤先生を囲んでの「講師を囲む会」では、もっぱら午後講演の伊藤先生の「北からの出発」が始めから終わりまで、話がもちきりであった。外山滋比古先生は、前回（18回）には国語部会の講師として1月のこの高教研に来られ、その時から「北海道の冬」の魅力に取りつかれ、今後発展するであろう「北方圏」にも大変興味をもっておられるとの事を話しておられた。

研究大会はいつものことながら、大混雑し、中に入ることの出来ない人にもロビーで聞いてもらうことが出来るようにテレビカメラを二台設置した。

（全体講演 午前の部）

「新しい人間像と教育」

お茶の水女子大学教授 外山 滋比古氏

アメリカの「タイム」という週刊雑誌が昨年、日本大特集を組み、その中で日本恐るべし、としながらも「しかしながら、コピーキャットである」、物真似である、と指摘しており、日本がいま貿易で外国を脅かしている物はすべて欧米の物、根本的に彼らは自らの技術を持っていないと結んでいる。

このことを深刻に考え、しっかり解決しなければ、日本には国際社会に胸を張って生きていける21世紀はやってこない。

過去100年の日本の目標であった欧米の近代教育の基本的背景として産業革命と印刷文化の普及の二つが挙げられる。

社会が事務系の人間と、印刷物を読む読者の養成を必要としたため、公教育は、読み、書き、算術をその中心に据えたのである。

しかし20世紀に入って、この考え方は徐々に変化してきているが、学校教育の性格は急激に変化することもできず、欧米先進国も社会の変動に十分対応しないまま学校教育が行われてきている。

日本はそういう現実に遅れがちな欧米の学校教育を手本とし、これを参考にして教育を考えてきた。そして今、社会と学校教育のズレというものを急激に経験しなればならない事態となった。

国民の8～9割が中流であるという意識を持っている現在、生活の不安をいつも感じていた時代の体制における教育が行われているのだから、そこいろいろなひずみが出てくるのも当然である。

さらに私たちが目をつぶっていけないことにコンピューターの出現がある。

学校教育は、ここ200年、読み、書き、算術のできる人間の養成を目的としてきた。言い換えれば“コンピューター人間”をつくってきたのだ。

しかし本物のコンピューターが出現して、人間のなすべきことは、これとの関連で再検討する必要がある。

今の学校教育が極めて機械的、コンピューター的教育を是認していることを私たちは深刻に受けとめ、これから的新しい教育に向かっていかにしてこの事態を打破していくかということを考える必要がある。

次にいちくかその方策を述べてみる。

1. “選択的忘却”の促進

コンピューター的無差別完全記憶ではなく、よほど重要なことではない限り、忘れることだ。学習の上で選択的忘却を促進することである。

2. とらえられる集中力を

本当の意味の勉強は量ではなく質である。

短時間であっても、灼熱した力でもって対象を一瞬のうちにとらえる、そういう勉強が大切である。（そのためには入浴やスポーツは大いに有効である）

3. 生徒との間に車間距離を

教師は、生徒との間に適切な距離を保ち、自分の身近を見せないこと、また接し方に留意することによって初めて良い影響を与えられるものだ。

4. 加点方式の教育を

社会全体もそうだが、人間の評価が減点方式でなされている。これでは創造的教育はできない。決してケチをつけず、誉めることだ。私に言わせれば「誉めれば豚も木に登る」である。

ギリシャ人は素晴らしい文化をつくり上げたが、その理由は、体育と知育の調和を最初に考えたからであろう。

それを忘れて知育をゆえなく体育の上位に置いて“コンピューター的人間”としての記憶だけを伸ばそうとしてきたのは非常に大きな間違いである。これからは人間的調和、全人的調和をもって機械が足元にも及ばないような、新しいニューマンを育成する必要がある。

(全体講演 午後の部)

「北からの出発」

北海道教育大学教授 伊藤 隆一氏

北海道に住む我々の中で「冬が好き」という人は少ない。8割が嫌いだという。その理由としては「寒い」「雪が多い」事を挙げ、冬に対する意識が低い。「北方圏」という言葉に関して、道の調

査によると道民の83%が知っているという結果が出た。これは、堂垣内道政が始まった12年前から使われ出した言葉である。しかし、本州で刊行される出版物には一行も出ていないのである。この言葉は、世界の北国を意味する。では、「北方圏」という言葉が何故流行るのか。それは、100年にしか満たない北海道に比べ、800年以上の歴史を持つ北欧から影響を受け、さらに北欧の生活を学ぶ事の肝要を自覚したからである。

「北方圏」とは、地球の1/3を占め、全人口の1/10が居住している地域で、北米・アラスカ・カナダ・シベリア・北欧・北海道・中国東北部などある。又、北緯40°～60°の線が一応「北方圏」で、代表的な樹木は、白樺で、海岸には浜ナスが共通に見られる。そして、北欧と北海道の自然は殆ど類似している。

さて、「冬の辛さ」はと尋ねると、北海道の人々は、「寒さ」「雪」を挙げるが、北欧人は「暗さ」を挙げる。北欧では、暗が冬の大半を占めて、日照時間が大変貴重になる。その為、子供を日中-10°以内の寒さの中に出し、外気浴をさせる。どの家にも、また公園、街などにも寒暖計を取り付け、科学的判断により外気浴を実行している。又、ヘルシンキには市立野外保育園があり、寒さを栄養として子供を育てている。さらに、精神面で寒さを忍耐させるのではなく、防寒具（衣類、沓、帽子）で合理的に寒さの対策をしている。又、「遊具」についても、北欧では公園内その他の施設の遊具は木製で、北海道の様な金属遊具を一切排除し、利用者の心理面や安全面に十分配慮されている。又、公共施設・公園・スポーツ施設などは、夏と冬の利用の有機的な対応が見事に生かされている。つまり、北欧では、冬と共存し、冬を自分の生活の中に取り入れ、エンジョイしている。

最後に、「北方圏」構想は、堂垣内知事の頃生まれ、北欧、ソ連、中国との交流を通して、又「北方圏センター」での活動やPRを通じ徐々に定着して来たが、さらに横路新知事のもとで新たな構想のもとに新機軸が期待されている。

北欧では、自然環境を十分に利用し、共存し合っている。北欧人は、北海道の人と違い冬を十分に堪能し、生活の一つに取り入れている。北欧の生活、考え方を学び、北海道の冬の過ごし方、考え方の充実に務める必要がある。

○昭和59年度（会員数6,245名）

本年度は役員補充の年であるが、道内高等学校の校長の大規模な異動に伴い、地区支部長、教科部会長合わせて27名中10名の部長さんに変更があった。部長（校長）さんが10名近く変わると、高教研の役員会の内容について充分知ってもらうために、第一回の役員会では結構時間をかけなければならず、事務局の庶務部では大変な作業と労力を費やさなければならない。それに本年度より、本部事務局の組織にも一部手直しが行われ、研究部が運営一部（研究大会迄の総括）と運営二部（研究大会当日の総括）に分割され、事務局内の部長が一名増えてしまった。

また昨年から懸案となっていた「地区支部活動の為の道教委への補助金増額要請」も行われた。

道教委では、諸経費削減の方向へ動いている折でもあり、高教研の補助費もそうしたなかでままならぬ状態であった。そうかと言って、急に会費の値上げに踏み切るわけにはいかず、本年は昨年度より縮小した予算の中で全体の活動を見直さなければならず、予算面においても苦労の多い一年であった。このままの予算では来年度以降、財政的にも苦しくなることがはっきりしており、会員登録料の値上げと参加料の値上げの検討の時期ではないか（第三回役員会）という話しも持ち上がり、本部事務局でも話し合ってもらいたいという意見が出された。

60・1・10（参加人数4,054名）

研究大会を校長会の方から木曜日に全体集会、金曜日に教科別集会を行ってほしいという申し入れがあった。それというのも、この研究大会に合わせて、全道の校長会が前日に行われ、その準備にどうしても2日間はかかるので、月・火は準備をしたいという意向であった。それで今回より木・金の2日を高教研に当てようということになった。

全体講演の講師は、午前が文系なら午後は理系という方向で、今迄お願いしてあったが、本年は準義務教育化している高等学校の教育と今大きな問題となっている「生涯教育」について黒羽先生に、昨年の「北方圏」と並列はしたが、北方民族を多面的にとらえて話していただく岡田先生で、本年はお二方とも文系という内容であった。第一回の役員会で「新しい教育のあり方」を話していただく方にということが話題となり、16回大会の工業部会で「21世紀を目指す高校教育の課題」として話された黒羽先生に、また違った角度からお

願いしたいということであった。

（全体講演 午前の部）

「なぜ 今 教育改革か」

日本経済新聞社論説委員 黒羽 亮一氏

1. 臨時教育審議会の在り方

昨年（昭59）1月の首相発言に端を発し、8月の法案成立により臨教審が発足したが、これに対しては教育を政治に利用しようとするものだという批判も多く聞かれる。しかし、昭和50年代に入った頃から急激に質の変化が見られる学校教育の現状に対し、種々の教育団体を始めとする教育専門家集団が実質的な改革の成果をあげてきているかと言うと、残念ながら首肯し得ない。また、政府与党とそれらに批判的な野党及び専門家集団との対立それ自体は、肝心の教育改革をないがしろにする空氣の問題であると思わざるを得ない。あくまでも教育改革自体を視野の中に据え、対立を収斂させていくことが、臨教審の担わねばならぬ役割であると考えている。

2. 学校制度の歴史と問題点

近代学校制度は産業社会の発展とともに生まれ変遷してきたのであった。近代以前、所謂初等教育は、家庭・職場・宗教的機会等に融合して存在していたのであったが、ヨーロッパ産業革命以後の社会構造が大衆に統一的な知識・教養を要求したため、初・中・高等教育それぞれを連続したものとして結びつける統一学校運動の影響もあり、学校教育は大衆化されると同時に、産業社会の要請と密接に対応して制度化されてきたのであった。

西洋の文化・制度を移入することから始まった日本の近代化は、教育制度においてもほぼ同様の道を辿る。

つまり初等教育の義務化による教育の大衆化が行われる一方、明治30年以後の産業政策の隆盛に伴い、個人の学習意欲が社会・国家の向上につながるとする学校教育立国の理念が掲げられて産業の高度化に対応するのみならず、帝国大学を頂点とする学歴が文化的な価値基準になるまでに至ったのである。戦後は更に6・3・3・4制が確立し、初・中・高等教育がそれぞれ労働者層・中間層・管理層に対応して位置づけられるようになった。

しかし現在、高校の進学率は90%を越え、高卒男子の4割が大学へ進むという状況を迎えてからは、大卒者が必ず会社の管理層に位置づけられるという図式は成立しなくなってきており、学歴は依然として社会の価値基準ではあるにしろ、高等

教育はランク付けられて多層化せざるを得なくなっている。昭和50年以後、「脱工業化社会」・「生涯教育」が称えられ始めたのは以上のような変化によるのである。今後は「～のための教育」という近代学校教育の理念が、浮動し多様化する社会の変化に通用しなくなることは明らかであろう。制度の改革が急務な所以である。

3. 学校自由化論について

学校自由化についての多様な解釈が混乱を招きつつあるが、次の3つに収斂させて考えたい。まずは憲法26条を根底に置きながら、学校や教育形態を選択できる自由をすすめること（選択の自由化）。次に、4年制とするなどして、現行の6・3・3・4制をより弾力的な制度と考え、工専を増設し、私立工専等の設立も考慮してはどうかと考える（制度の自由化）。最後に主として義務教育のカリキュラムをよりシンプルなものにしてはどうかと考える。小学1年時から7教科を履習させ、スペイタル式でカリキュラムを設定するという現況には疑問を感じる（カリキュラムの自由化）。教育が恣意に流れる心配はあるにしろ、より弾力性のある改革を望みたいところである。

4. 生涯教育・学校観・教師観

学校教育というものは、生涯にわたり学習し教育を受けられるための基礎固めをする場である。——というのが生涯教育の理念である。ともすれば、生涯教育は意欲の教育であるという一面をもっているだろう。しかし、5教科をまんべんなく履習し偏差値化していくことからは、学習意欲の育成は望めまい。何故生涯教育が必要とされているのかを検討してみる必要がある。

社会の様相の著しい変化に対応する形で生涯教育論が高まっている現況を無視するわけにはいかない。視点を変えてみるならば、近代学校創立以来、私達は教育というものを余りにも学校中心に考えすぎたのではないだろうか。教育の場そのものについて考えなおす時期に来ているように思われる。学歴社会のはらむ矛盾はいまだ数多くあるにしろ、それは言わば入口の学歴社会である。一方出口と言えば、多用化・多価値化しているのが現状であり、そこに今後の道が開けそうな気がするのである。

教育の現実的な担い手は教師であるならば、その今後の在り方についても考えなさねばならない時期にきているだろう。聖職か労働者かなどという論議もかつて聞かれたが、やはり教職は広い視野をもった現場の専門職であって欲しい。いふ

までもなく教員免許がその専門性を保証するのではないかとすれば、眞の意味での専門性とは何かを考えていかねばならないのではないか。

臨教審のなげかける問題に対する受け取り方は様々であろうが、原点に立ち戻り考えるならば、教育政策とは制度の政策であると同時に、国民一人一人が教育とは何か・学校とは何か、と考えるきっかけになるべきものではないだろうか。

（全体講演 午後の部）

「北方民族における伝統と近代」

北海道大学文学部教授 岡田 宏明氏

北方に住む原住民、中でもツンドラ地帯で獲物を対象にして生活している狩猟民は、インディアンよりエスキモー（生肉を食べる人）と呼ばれていた。エスキモーの生活実態については既に「カナダ・エスキモー」（本多勝一著）などで紹介されているが、自分が研究対象にしたのはアラスカのエスキモーについてである。エスキモーと呼ばれた人は、アラスカ、カナダ、シベリヤ、グリーンランドなどに住んでいる。

アラスカ・エスキモーも20年前（1960年代）までは、氷の海でアザラシを取り、雪原の上でカリブー（トナカイ）を追う移住生活であったが、文明社会の波が押し寄せるようになり、その生活実態も大きく変化してきた。エスキモーの伝統的な生活習慣である“生肉を食べること”“移住生活であること”“妻貸しの風習”なども厳しい寒さの中で生活する者の知恵であり、社会生活の工夫であったのが、近代化の波、白人との接触により根底から覆されてしまったのである。

今日ではアラスカ・エスキモーのほとんどが定住化し、パイプライン工事等に従事する人夫として現金収入に頼る生活となり、その食生活も根本から変化してしまった。教会、学校、商店、飛行場、と文明化が進み、食生活もパン、牛、豚肉、砂糖等の白人風の生活に切替わっている。しかしながら近代化の波は様々な問題を提起することになった。食生活の変化が、肥満、コレステロール障害などの文明病を増加させ、それらの病人を収容するための病院が作られたが、そこに入院させることにより、家族から離れて暮らしたことのないエスキモーは精神障害を起こすようになり、更にその対策も迫られているようになった。一方では、50番目の州となったことにより、従来からの習慣である鴨や鯨を取って食べる生活も、渡り鳥保護協定や鯨保護問題に抵触することになり、処罰問題も起きるようになった。また居住地域であ

った土地そのものも國に組み込まれたが、その一方では市民権も投票権もない生活を強いられており、こうした問題解決のために1967年にはアラスカ原住民同盟（インディアンを含む）が結成された。1971年にはアラスカ原住民土地請求権解決法案が提出され、失地回復に取り組んでいる。そのための補助金が10万ドルも集まつたという。

近代文明の移入がエスキモーの人達にとって幸福であったかどうかは別として、一度経験した生活を旧に戻すことはできないので、現在の生活実態の上に立って、白人と同等の地位獲得、伝統的な生活習慣の確保、労働条件の改善等、今後取り組むべき問題が多い。同じ北方圏に住む我々北海道の人間は、同じようなアイヌ問題を抱えているので、他人事とせずこのエスキモーの問題に取り組み考へいかなければならないのではなかろうか。

○昭和60年度（会員数6,231名）

登録人数もここ数年20人前後減少する傾向がみられ、それに伴って道教委からの補助金も再三に亘り削減され、そろそろ、ここで登録料と大会参加料の値上げを検討する時期に来ているのではないかということが、本部事務局でもささやかれるようになった。偶数年度で役員改選年であったが、昨年より学校長の退職・転勤が今迄になく多く、地区支部長・教科部会長合わせて27人中11名の部長さんの変更を見た。この役員会でも、2~3年前から保健体育部会の中での養護教諭の取り扱いが問題として取り上げられ、この一年間研究を重ねた上で、新しく部会を設置する方向はどうか、という結論を得た。

全体講演の講師についても、午後の部の講演では、講演をしていただく講師に失礼に当たるぐらい閑散としていて、何とか対策を立てなくては、という意見も役員会に出たが、結局は参加される先生方の自覚に待つしかないという結論を得た。

第三回役員会で、教科部会では養護部会の新設、それとからめて登録料会費値上げ、さらに大会参加料の値上げが同時に可決された。

61・1・9（参加人数4,012名）

研究大会のこの時期一時暖気が訪れるのであるが、本年もそれにもれず暖かい全体集会の朝であった。9時開場（その時の温度-3.5°C）であったが、8時40分を過ぎた頃からちらちら雪が降り始めたが、それでも会場前には200人近い人々が開場

を待っていた。寒い折りでもあったので、少し早く開場を考えたがステージの準備が間に合わず結局開場は9時5分前であった。会場準備も、各パートに分かれて短時間で済ませるように準備を進めるが、馴れない人々もいて思うように進まないことが多い。一応事務局員は8時集合であるが全先生方が快く仕事をしてくれるので、全体を指揮する事務局長にしても心強いものがある。

例年なく暖かい高教研であったが、本州から来られた加藤先生は「外は寒くて大変ですね。この寒さから北海道魂が生まれるのかもー」なんて言っておられた。加藤先生は午後7時から東京で会合が入っておられるということで、すぐ昼食を終え3時20分の飛行機で東京に向かわれた。

難なく全体集合が終了し、来年度の会場予約をして無事第一日目が終わる。

（全体講演 午前の部）

「生涯教育の将来」

放送大学教授 加藤 秀俊氏

日本という国が今日のようにあらゆる面において、極めて高度な発展を遂げたことは既に自他共に認めることであろうが、その理由としては様々なものが考えられる。とりわけ私は教育の力の大きさがその重要な因を成すものと考え、教育面から見られた日本の発展、更に今後の教育のあり方等について私見を述べてみたいと思う。

日本人一億二千万人の知的質度は極めて高いものであると言える。現在様々な形で起こっている教育問題に対する国民の関心の深さ、家庭における教育の意味づけの高さ等の他に政府の教育優先の政策等どれをとっても教育王国日本と言えるような現況が見られる。このような教育王国の現在を築いた要因は何か。四点にまとめて話してみたい。

一つには、日本人の生活を様々な形で律してきた大きな理念の一つに儒教が挙げられるが、儒教の根本理念は「学ぶ」ということである。あらゆる面で学ぶことの意義が説かれ、中国において「士大夫」といえば文字を読み書きできる人々を指し、それが国民の目標となっていたのである。

日本においては室町期の連判状他に庶民の文字が残存しているが、ヨーロッパのグーテンベルク以前に日本では庶民が文字を立派に書けていたのである。その後の織豊期に日本では「文武両道」が叫ばれるようになり、「武」のみならず「文」にも通ずるもののが立派な武士と言えたのであった。「平家物語」にも合戦のさなかの漢詩・和歌のや

り取りが描かれている。

更に十七世紀の鎖国政策が「文」を重要視してきた日本の伝統をエスカレートさせた。外に発散すべき国のエネルギーがことごとく内向したのである。道路整備が国内旅行を国民的規模のものとし、文化面での消費活動が盛んになり、寺子屋、藩校の発達等によって、十九世紀半ばの日本人の文盲率はわずかに40%であった。これらに見られる「文」の重視の根底には当然のことながら利害心が働いていたことは否定できない。つまり、読み書きに秀でた者が金もうけできたのである。それと共に日本の個人主義が挙げられよう。身分家柄不問で、知的に優れた者が出世できたのである。

要因の二点目として戦後の日本の軍事支出が極めて少なく、軍需にとられるべき優秀な技術を身に着けた人材が民需に向かう点が挙げられよう。ことごとくが内需型であり、したがって教育も内側に向かうのである。

三点目には日本の科学技術の変動の激しさを挙げられよう。社会の停滞は教育につながらぬものである。変動の時代こそが教育の進歩を要請し、さらに学校教育だけでは済ますことのできぬ生涯教育の必要を強く訴えかけるのである。変動に合わせて、人は日々勉強を続けなければ時代に追いついていけない事態が生じているのである。様々な変動は技術にのみとどまらない。国語の語彙・発音・表現方法ですら変化をまぬかれていない。新しさにただ無自覚に迎合することは避けねばならないが、すくなくとも新しさをしらねばならない時代が来ているのである。この点については日本の企業や医学の世界において、いかに就職後の研修が重視されているかを確認すれば明白なことであろう。

四点目は、他国に例のないほどの日本の長寿化がもたらした新しい時代の要求である。「人生50年」と言われた時代ははるかかなたに遠ざかり、今や人生80年という時代を迎えた。個人にとってその変化がもたらした本質的な意味は何かと言えば、60歳定年後の20年をどう生きるか。無為に過ごすことには耐えられぬ。昨今の老齢者の自殺の増加はそれを物語るものであろう。

私は人間の学習意欲というものは死ぬまで続くものであると考えている。そしてその意欲の底には自己実現の希求があると思っている。自己実現とは自分が自分であるということを、具体的な能力の表現によって確認し得ることであると思う。

以上の四点を総合すれば、学校教育の終了が教

育の終了を意味した時代は既に過ぎ去ったのである。言うなれば、人間は生きている限り勉強しなければならないのである。

通常、人間は教育を受けることによって学習意欲をもつようになると考えられているが、私は、人間は教育という営み以前に学習意欲を存していると考える。学習意欲による自己表現を助けるのが教育というものではないだろうか。以上の観点から私たちは今後の教育のあり方を真剣に考えなおさねばならない時期に来ていると思う。

(全体講演 午後の部)

「これからの企業の求める人間像」

北海道拓殖銀行常務取締役 石黒 直文氏

最近の企業経営というものは1980年以降、実に大きな変貌を遂げてきた。かつては、ほとんどの企業に於ける業績が景気変動に大きく左右され、それに伴って企業経営の方もまたその動きに合わせてやり方を考えていればよかったのである。いわば、何でも隣(他企業)を基準にして考え、隣が不景気であれば、自分の企業が不景気であってもそれで安心するといった発想で間に合っていたのである。だから各企業に於ける業績をグラフに表して比較してみても、業績の低い企業から高いところまで実に整った正規分布の曲線を描いていた。

ところが1980年代に入ると、その様相が大きく変化してきた。産業技術の革新が行われ、たとえば情報革命とか、エレクトロニクス革命とか呼ばれ、かつての産業革命のときと同様に全ての企業経営に大きな影響を与えるようになった。しかもそれに伴って人間そのものの思考形態や行動もまた激しい変貌を遂げてきたのである。そうした状況の中で、旧態以前とした従来のやり方にしがみついている企業が果して激しい時代の流れについていけるであろうか。現代こそ企業に於ける自己変革、自己革新が求められている時代はないであろう。従来の方法で業績が伸びなければ、死にもの狂いで発想を大きく転換し、やり方を変え、工夫していかなければならないのである。つまり1980年代の企業経営に於いては、企業自身がどう自己変革を重ねていくかが最も重要な課題であると言えよう。

たとえば、1980年代の各企業に於ける業績をグラフに表してみると、企業としての業績が極端に低いグループと、逆に極めて高いグループにはっきりと分離され、その中間層がほとんどない。しかも時代の変化に対応できず、自己変革の出来な

い企業は、まさに次から次へ倒産の憂き目を見ているのである。かつては業界第一位の業績を示していた企業が、経営不信から倒産していく姿は昨今では珍しいことではない。また逆に、自己変革を遂げ、時代の変化に適応できた企業は、みごとな実績を上げている。

そういう成功例を考察してみると、その企業がいかに時代を先取りにし、柔軟な発想で時代の変化に対応しているかがよく分かるであろう。一人一人の人間に的を絞まり、いわゆる「お客様」がいったい何を悩み、何を望んでいるのかをいかに的確に把握するか。このような点を追求している企業こそ、1980年代に於いて最も求められているものであろう。そして、これは言い換えれば、人間の幸せというものをよく考え、地域のひとつと憂いを共にしながら、一人一人の人間の魂の裏に入り込んでゆくような発想でもある。

そういう企業経営のあり方を踏まえて考えてみると、「これから企業が求める人間像」とは、時代の新しい変化に勇敢にチャレンジし、適応していく人間であると同時に、礼儀正しく、かつ人の悩みや苦しみに涙を流して共に憂えることができかるような、人間性豊かな人材であると言えようか。

○昭和61年度（会員数5,859名）

会員登録者数が最も多かったのが53年度で6,549人で、その後漸次減少傾向を示し、昨年60年度は6,230人台と300人くらいの減を見た。その上、国や道からの予算が52年度に10%（100万円のうち）、さらに59年度に90万円のうち10%削減され、研究会全体の運営がきびしくなったこともあって、本年から登録料500円参加料200円の値上げに踏み切った。この値上げに関しては、昨年度の本部事務局の会議でも、第2,第3の役員会でも、会議が開かれるごとに話題となり、結局前述のように登録料が1,000円から1,500円に、参加料が1,500円から1,700円にと、特に登録料には50%もの値上げ率となった。その結果、7月末の各地区支部の登録者集計は、昨年より大幅に減となり—380人をかぞえた。ここ数年、毎年数%の物価上昇により、地区支部運営費・教科部会運営費・講師の謝金の値上げ・教科別集会の諸経費等も苦しい情勢から、登録料の値上げに関しては、地区・教科の運営費と本部事務の事務合理化費（ワープロリース料）、各参加費値上げに関しては、研究大会の講師謝金

と教科別集会の運営費に充当することとなった。

本部事務局においてこの研究会で相当に事務量が過重になり、登録料、参加料の値上げを機会に、臨時職員をパートを雇用してはという意見が役員会から出された。事務局では各先生方が献身的に奉仕していただいているので、専従のパートを雇っていただくという話は大変有り難いことでもあった。実際に会費は値上げをしたが、その人件費まで見通しての内容でなかったため、本年度の決算を見て、経済的に余裕があれば——ということになった。事務局長と事務局次長（事務長）の5本柱の2本が変わったことで、事務局次長の神田・増田両氏は忙しい一年を過ごしたようであった。

62・1・8（参加人数3,972名）

朝方は-7°Cぐらい迄気温が下がり、全体集会の出足が心配されたが、大部分の先生方は地下鉄利用のせいか、例年通り会場前に多数の先生方が待っておられた。定刻より早く開場を考え、準備に拍車をかけるが新人の役員の方もおられ、開場は8時50分になってしまった。でも予定より10分早く開けることが出来たが、息をつくひまもなく入場する先生方の対応——。この大会では、前もって資料の袋に入れておくべきものが、印刷が間に合わなかった（全体講演の参考資料となるプリント）ため、参加者に渡す資料が複雑で、手落ちのないように気を配った。

日中になると気温が高くなり、昼近くから大粒の雪も舞い始め、道路は氷が融けて水たまりが出来ている。心配した参加人数も登録者が減った割には思ったよりも多く、ことに非会員としての参加者が600人をこしたのも珍しい。結局は昨年より40人くらい少ない3,972人であった。何時ものごとき、やはり午後の講演の際には空席が目立ち、講師の先生に淋しい思いをさせたのではないかという気持ちになった。

（全体講演 午前の部）

「ことばとこころ」

東京工業大学教授 江藤 淳氏

演題である「ことばとこころ」は、教育の根本に深く関わる事柄である。私は昭和30年から文芸批評に携わってきたが、この開祖は紀貫之である。彼は『古今和歌集仮名序』の冒頭において、「やまと歌は人の心を種としてよろづの言葉とぞなれりける」と述べ、心と言葉の概念を最初に提示した。日本の文化・文学を考えるためにには、この心と言葉との照應関係を理解することが大切である。

本居宣長も『古事記伝』の中で説いていること

であるが、『古事記伝』は上代人の心を上代人の言葉がそのまま表し伝えたものであり、心と言葉が「幸福な照応関係」をなしている書物である。

古今集を下ること800年。1763年5月、宣長が33才の時の賀茂真淵との出会い、「松坂の一夜」は感動的なものであった。真淵は伊勢参宮の帰途、既に古典文学研究に傾倒していた開業医宣長と初対面し、国学について語り合った。その時真淵は言った。「私はようやく『万葉考』を書きあげたが、この仕事を通じ古事記研究の必要性を痛感している。しし、日暮れて途遠しである。若い君にそれを託したい」と。こうして師弟の縁を結んだ二人は、真淵が亡するまでの6年間、書簡の往復のみによる、はげいし論争を含んだ指導が行われた。『古事記伝』はこうして成了ったのである。

真淵・宣長が直に体面したのは「松坂の一夜」のただ一度だけだったのであるから、言わば、通信教育が功を奏したことになるのであるが、実はこの手紙のやりとりは、文字を読みながらも互いにその声を聴いていたのである。声を聴き合うことによって、完璧に通じ合うことができたのである。学校教育の意味もこの声を聞き合うというところにあるのであって、声ほど偽りのないものはない。声に表れた言葉には人間の心そのものが示されているといえよう。声を聴き合うということこそが教育の原点ではないか。

日本の文化は、元来文字ではなく声によって、口伝えに伝えられてきた。声を媒介にして学問が伝習されてきたのであり、我々の言語体験の核は文字ではなく声である。

ところが、大化の改新は唐文明の導入という積極的な中国化政策をとったので、天智天皇も漢文を奨励した。その結果、声が失われただけではなく、声によって伝えられていた心や事までも見失われていった。文化の破壊が生じたのである。

天武天皇はこの危機に気づき、古事記の編纂を命じられた。それは、漢文で記されている文化(歴史)を、たとえば祝詞・宣命・歌などとして残されている真の言葉を拠り所にして、声の段階にまで逆上り、日本の古代語で記録させるというものであった。

こうして成了った古事記の日本語を見ると、それは1,000年後の江戸時代の言葉や心と何ら変わっていないことがわかる。つまり、日本人の言葉や心は強靭な持続力をもっているといえるのである。

過去、我々は文字と声とを止揚しながら保持してきたが、第二次大戦後、国語の大変革が行われ

た。ローマ字の採用・現代仮名遣い化・漢字制限など。この陰には、文字記号の改変により人為的に文化の断絶を図ろうとする占領軍の意図があつた。現代に至るまで秘匿されていることであるが、実は徹底した検閲も占領軍当局により行われた。それは川路柳虹の「帰れ靈」にみられるようなひどさであった。人の心を伝える詩を検閲することは、よりもなおさず、人の心をすたずたに削るものである。

しかし、日本の文化つまり言葉は強靭な持続力を持っている。それをかき消してしまおうとする力も占領軍に始まり、現代の学校教育においてもみられる。私は国語審議会の委員として、日本の言葉が自由に豊かに息づくように微力を尽くしたい。

(全体講演 午後の部)

「地方自治と教育」

北海道虻田町長 岡村 正吉氏

地方自治とは何か、それは「国や道に頼らず自分の町のことは自分の町でやる。」ということである。北海道・札幌市といった巨大な地方自治体はともすれば1つの権力機構になりかねない。今日は、地方自治本来の精神を發揮することができる町や村など小規模な地方自治についてお話をしたい。

私が虻田の町民に推され町長となった昭和49年頃は、伊達火力発電問題で町が2分し、それ以前の10年間に5回も町長が変わる程であり、町は政争に明け暮れ、正に「人間砂漠」の様相を呈していた。私は火力発電反対の立場である革新勢力に推されたのであるが、国や道からの補助金によって町を活性化しようという賛成派の推す候補者との票差はわずかに200票であった。このような経緯の中で、町長という役職は、権力の方を向いて頭を下げる「乞食」となるし、自分の良心だけを頼りに様々な圧力に屈しない「王様」にもなれると考えた。

私の考えている町づくりは、この町に住んでいて良かったと町民が思える、物質的な豊かさではなく精神的に豊かな町をつくることである。自分以外の弱い者のことを皆が考えるというユートピアが虻田町でも有珠山大噴火の折りに実現した。町民は「嵐の中を漂う船乗り」であり、皆が団結して復興に力を尽くした。灰まみれの中でのユートピアであった。

しかし皆の力のおかげで町が復興すると30軒程の旅館の間で醜悪な競争が起り、そのユートピアも束の間のものとなった。しかしながら以下の

政策を実行することでその実現を目指している。

※町長室の撤廃—町長の垣根を越えて—

私が町長になって最初に手がけた仕事は町長室を撤廃し、役場のクローケを撤去し、町民と役場の垣根を取り払い、ガラス張りの政治を行うことであった。権力に目を向けるのではなく町民に目を向ける姿勢を貫く為にである。自分は冠婚葬祭町長であると自負しているが、町の発展に尽してくれた功績に敬意を表し、町民を代表して自ら弔辭を書き心から弔意を表している。

※行政区画を超えた地方自治

虻田町は全国有数の温泉地を抱えており、女性の働く場が多く、その為母子家庭も多い。母親が早朝から夜遅くまで勤務するため、保育所の整備は必須で、本町では100%保育である。子供の健全な成長の為には、従来管轄が異なっていた保育行政と初等教育の一貫性が必要だと考え、厚生省管轄の保育行政を教育委員会管轄とした。

又、昨年12月末には西胆振の5町村の農協が大同団結して新しく洞爺湖農協として発足した。さらに噴火湾を囲む、渡島、胆振両支庁で話し合いをもった。農業や漁業を振興するために従来の枠組みを超えて結束するこの試みは、今後道内のモデルケースになるであろう。

※終わりに

東京で受験勉強ではない理想の教育を目指し私塾を経営していた芳賀氏から「東京は教育の場ではない。自然環境に恵まれた洞爺湖畔で私塾“青桐の家”を開きたい。」との申し入れがあり、実現の運びとなつた。

「強いものが集まったよりも弱いものが集まつた方が、幸せに近いような気がする」

(詩画集「風の旅」星野富弘著)

この詩のようなユートピアを築きつつあるわが町虻田に皆様、どうぞお越し下さい。

○昭和62年度（会員数5,729名）

昨年度の第三回役員会で、事務局の先生方に高教研にかかる仕事で多大な負担をかけているということと、予算の裏付けも出来たということで、臨時の事務職員の配置が決まった。会計報告の折り、事務局のみによる配慮でなく、地区支部、教科部会にもわずかな予算処置として、①地区支部、教科部会の運営費の値上げ（100円～130円）②支部長・教科部長と各事務担当者の会議の折、一回のみ旅費の支給が認められた。だが登録会員数は

昨年が一昨年に比べてほぼ400人減じたのに、本年は更に150人近くも減じ、60年以降毎年100人単位で登録者の減少が続き、歯止めがかからない状況になって来ている。会議があるごとに地区支部長に入会を呼びかけてはいるが、その効果は一向に出て来ない。研究大会の全体の参加者が、登録数の割には減っていないところを見れば、非会員という形での参加が多くなって来ていることは、若い先生の中での登録者が少なくなっているという傾向を示しているのかも知れないという。

高木さんという臨時職員の方にこの四月から来ていただいて、事務職員専従がおかれたことはまさに画期的なことで、事務局の先生方の仕事も大きく軽減された。議案書・地方発送用書類が今迄の手書きや和文タイプライターに比べて、ワープロで作成され、事務作業もスピーディーになった。

校長協会での事務職員の方の変更もあって、校長会が日曜日以外なら研究大会開催が可能ということになり、高教研も元に戻して、1月の10日前後に設定するよう開催日も改められた。

63・1・7（参加人数4,118万人）

本年度より印刷所が変わり、大会資料や研究紀要の要領が今迄と違つて大混乱した年であった。印刷が多いことと、資料作成や校正の時期は、学校行事（試験や成績処理）と同じ時なので、結局は事務局の中でも一部の部長級の係の先生に大きな負担がかかってしまった。全体講演の講師の先生も、充分な謝礼をもってお迎えしたいが、現時点ではそこ迄にはいたっていない。

全体集会の当日は昨年同様、寒い朝であった。午前の講演の中程で風を伴つた雪が降り始め、吹雪模様である。でも気温は高く講師の先生の帰りの飛行機が飛ぶかどうか気掛かりである。午前の部の講演が終わるころには雪がやみ、太陽の顔も見えはじめた。午後4時すべてが完了し、一年間の集大成が終わると疲労がどっと出てくる。

（全体講演 午前の部）

「近ごろ思うこと」

作家 野坂 昭如氏

—技術の先に願うもの—

僕は1930年生まれで、14歳のときに終戦を迎え世の中がすっかり変わってしまった。しかしこの歳になって戦中に受けた教育が露わになり、食べ物を残すものを見ると腹が立ったりする。人間、15歳までに叩き込まれたことは、何歳になろうとも変わるものでないし、そう簡単に抜けるものもない。

今の子供たちについて、大人は、無気力であるとか無責任であるとかいろいろ言つては、これはそういう教育を行つてきた大人の方に責任がある。今日の教育をみると、根本的問題を忘れた技術ばかりに走っている。確かに教育は技術であり、読み・書き・そろばんをわかり易く教え身につけさせることも大切な事である。復活されてはかなわないが、戦前・戦中には教育勅語なるものがあり、人間が生きていく上での基本となっていた。しかしそれに代わる新しい教育の拠り所となるものを作り上げたかというと、はなはだ心もとない。

—天皇以外の新しい価値観—

明治以後、天皇が政治的に表に出され、国民は天皇を拠り所にしてきた。戦中、現人神と奉られていたが、それが虚構だということは子供心に直感していた。しかし、戦争をするためには誰のために死ぬかということが必要であったて、天皇陛下万歳と言って死んだわけではないだろうが、天皇を拠り所にしていた時期があったのは事実である。

戦後、「これから民主主義社会になる」と言わされた時、それが何であるかさっぱりわからなかつたが、46年の選挙の折に目にした自由な演説、又学校新聞や討論会を通して自由に発言できる民主主義の有り難みを実感した。しかし、この民主主義は、自らの手で築きあげたものではなく、与えられたそれであったから、その本質を考えることなく、自分にとって都合のよいところだけを取り、権利ばかりを主張し義務を果たさない、民主主義の悪い面ばかりが目立つようになってきた。天皇がカリスマ性を失い、民主主義も定着していない現在、我々は何を拠り所として、何をアイデンティティとして生きてゆくのか。

—アイデンティティとしての文化—

1970年の万博をピークとして日本はわずか20年の間に世界一の金持ちになった。そして日本人は、売春旅行に、あるいは棚毎全て買い込むような買い物旅行に出向き、醜い成り金ぶりを世界中で発揮している。アメリカもイギリスもかつては成金のいやらしさを持っていたが、大英帝国は250年、アメリカでも60年の繁栄の間に成熟し、彼らには、これだけは譲れないというプライドがある。ヨーロッパ諸国には長い歴史によって成熟し、伝統と文化に支えられたアイデンティティがある。それく比べて日本は、敗戦後急速に復興し豊かになつたが、日本人なりのお金の使い方すらできない。17・8歳の日本人が外国へ留学することも最近は

多くなってきたが、語学に優れ会話ができるも人間としては尊敬されていない。歌舞伎とか能、俳句や浮世絵、日本人の作り上げた文化、日本文化の片鱗すら身に付けていないからである。

—生きていく上の基盤を—

母親から離れ自我を形成し、自分が今属する社会はどういう社会なのか、自分は何に根ざしていきるのか、そういうことを考えるのはちょうど高校生ぐらいの時期である。しかし今の学校教育は、偏差値教育で、いい大学に行き、いいところに就職すれば美人のお嫁さんがもらえる、いいところにお嫁に行ける、だいたいはこういうことになっている。人間についての思いを欠いたまま、大学に進むためのノウハウ、数学や英語の文法などテクニックばかりが優先している。大学でいうと、理工系は進んだが、文学とか哲学とか宗教といった人文系は衰退してしまった。国文科の学生ですら樋口一葉を読めない。せいぜい90年ぐらい前の日本の文学が読めない。これはもう文化の断絶としか言いようがない。

現代は国際社会であるといわれるが、日本固有の文化を身につけることで初めて日本人は国際人と呼ばれるようになるだろう。天皇をアイデンティティとして世界の孤児になるのではなく、天皇に代わって日本人にアイデンティティを与えるものは何か。自分たちの拠って立つ基盤を、教師も親もそれぞれが持ち、次の世代に伝えていかなくてはならないと思う。

(全体講演 午後の部)

「心臓移植をめぐって」

札幌医科大学副学長・付属病院長 小松 作蔵氏

1. 心臓の機能について

心臓はにぎりこぶし大でありながら1日に10万回の拍動を打ち、7・8屯の血液を人体に送り続けている。年中無休で働いているのに普段は存在感がない。しかし、一度異変が起こると、動悸・息切れ・胸の痛みなどの注意信号が発せられる。

2. 心臓疾患と治療法

循環器病はガンに次ぐ死亡原因を占めているが、1970年に心臓の血管の造影に成功し、心臓医学は技術的に大きく進歩した。

①虚血性疾患（狭心症・心筋梗塞）

動脈瘤や動脈狭窄などによるもので、喫煙・運動不足・脂肪過多・高血圧・ストレスなどがリスク・ファクターとなる。これは予告なしに急激に襲ってくることが多く、24時間以内の致死率も高い。カテーテルをつかった内科的療法やバイパス

を作る外科的療法がある。

②慢性心不全（弁膜症・心筋症など）

超音波診断の進歩により病状の進行もよく分かるようになり、適切な治療が施されるようになってきた。人工弁も小型化し耐久性に優れたものが出てきた。

③不整脈（徐脈・頻脈など）

ペースメーカー・薬剤投与・外科治療・24時間心電図等々、この方面的医療技術も進んでいます。

3. 心臓移植の必要性

近代の療法は飛躍的に進歩したとはいえ、1000人に5・6人いる先天的な心臓奇形や重症の患者などは、心臓移植によるしかない。移植手術は全世界で過去4000件、昨年だけで1,400件行われていて、疾患別内訳は「虚血性心疾患」40%、「心筋性疾患」50%、「弁膜症等」10%である。免疫抑制材（シクロスボリン）の開発により80%以上は成功し、その70%以上が会社復帰できるようになってきた。我が国においても、年間数百名の移植を必要とする患者が認められる。

4. 心臓移植の諸問題

欧米に比べて我が国の心臓移植は大きく立ち遅れているが、その原因と問題点を探ってみる必要がある。まず、心臓移植には脳死者からの速やかな心臓の提供が第一条件となるから、脳死の判定ということが問題となる。さらに、人間が人間の生命の根源を操作してもよいのかという生命倫理の問題、個人の死生観、心臓は人格をもつとする考え方、脳死は部分死との考えを初めとし、患者の人権・手術の経費・手術の優先順位の問題等々、解決しなければならない多くの困難点があり医師の間においてさえも合意に至っていない事が多い。こういう状況だから日本での臓器移植はまだ先のことである。

それに代わるものとして人工心臓があり、過去に66件の手術例が存在する。しかし、これは患者の行動が大きく制限されるため、現段階では心臓移植へのつなぎでしかない。

5.まとめ

医者は、患者の命を救うことを第一の務めとし、患者の延命、さらに患者の生活の質の向上を図ることを務めとする。所謂ターミナルケアである。一方、病気をみて病人をみないのではないかとの批判があるが、医師たる前に人間でなければならない。所謂プライマリ・ケアである。

この医の倫理を確立するためには、人間性の涵養が何よりも大切である。医学生に向かっても耐

えず叫び続いているところであるが、困難を感じている。義務教育・家庭教育段階から人間教育に力を入れなければならぬものと痛感している。

○昭和63年度（会員数5,645名）

役員補充年であったが地区支部長は15支部中13支部での変更と教科部会でも5教科の大移動があった。それともう1つの本年の特色は支部長校の事務局が大きく変わったところである。第一回の役員会では、役員全体の自己紹介から始まった。大幅に役員が変わったせいか初めのうちは議事の進行も順調に進んだが、最後のその他の事項で、地区支部の果たす役割についてと、全体講演の講師の選出方法がどのようにになっているのかの質問が出た。前者の地区支部の内容については、詳細に説明をし地区支部でも積極的に教科の研究会を開いてもらえるように協力してほしいと会長からの話しあつた。又講師の選定には、この役員の方々からの推薦や、一般会員からも推薦していただき候補者を出し、そこから選出していきたいとの旨が話された。

第二回役員会で全体講演の講師について、講師の謝礼を引上げてはどうかとの意見が出て、種々の協議が行なわれたが、現行予算との兼合いから困難ということになった。

講師の選定を含めて、会員の要望を充分踏まえての大会運営に一層努力して行かなければならぬと考える。

平成1・1・10（参加人員3,972名）

研究大会の準備は、九月末の第二回役員会が終わると同時に始まる。各教科部会から研究大会用の各資料が提出されると、それによって大会要項が作られる。それを各高校に発送と同時に受付が開始される。11月末の教科部会の事務担当者会議で研究大会の総ての資料が提出される。この資料の整理と同時に、各パートに分かれて原稿作りがなされ、印刷業者との校正の打合せ等をすべて年内に終了してしまわなければならない。近年印刷業者も、年末年始の休暇を長くとり、研究大会が1月7日くらいから始まる時には、参加者名簿から袋詰め迄年末の27~28日には終えなければならないので、この一ヶ月は授業・テスト処理、講習さらに高教研の仕事と追いまわされる。正月も5日くらいから最後のチェックと厚生年金の会場と正月休みも十分休むことが出来ないくらいで、ゆっくり正月を過ごすことの出来るのは、高教研明

けの10日過ぎになってしまう。

研究大会が始まる当日の朝、学校から各種の資料を運んでいたが、当日大雪で遅れたこともあって、本年からは前日の講師を囲む会に資料を搬入するようになり、1つ気をもまなくともよくなつた。

(全体講演 午前の部)
「日本人と創造性」

千葉大学教授 多湖 輝氏

1. はじめに

私は大正15年生まれなので文字通り昭和とともに生きてきた。この時期、いろんな思いで昭和を感じている。一番の思いは戦争にまつわることである。本来文科志望だったのに、徴兵を逃れるために旧制高校は理科に転向したこと。終戦の年の3月に父を亡くした時、木場が空襲にあって木材も手に入らなかったので、押し入れの棚板で棺を作って焼き場まで運んだこと。終戦直後、いかに生きるかを新潟の寺に参籠して模索したこと。その後も大学紛争をはじめいろんな出来事に遭遇してきたが、旺文社に依頼されて書いた「読心術」「頭の体操」が空前の大ベストセラーになり、私の人生は変わったのだった。私の本で心理学に親しみを持つ人が増え、世界的な学者が出るようになってくれればと思いやってきたが、4月からは「零歳児教育」などの教育の基礎のところを研究することに力を入れていきたいと考えている。

2. 日本の現状

教育面で世界のトップに位置する日本は、知識を開発して世界に提供していかなければならない。言わば「創造の時代」に入ってきている。果して日本人に創造性はあるのかということを心理学の面から考えてみたい。

創造的人間とは扱いにくいものである。しかるに日本の親は「素直な子」を欲望する。私が公開テレビで行った実験では、子供たちは大勢に従い自らの判断を表明しなかった。運動会にみられるように日本では「一斉に」というスタイルが普遍化している。「長いものには巻かれよ」風の価値観が日本的なものであり、「3人寄れば文殊の知恵」といわれるよう、チームワークよく一つのものを作り上げることには長けている。

しかし欧米に於いては「素直」という言葉も見当たらないように、扱いやすいということがメリットとしては捉えられていない。いつの世にも強烈な自我の持ち主が時代の立役者であった。今の日本の土壤からは創造的な人間は生まれにくい。

欧米型の個人主義的教育こそが望まれる。

3. 井深氏にみる創造性

ソニーの井深大氏はこわい人だ、ご自分の考えを率直に言うし、露骨に不快感を表すからだ。長いお付き合いの中で井深氏に「創造的人間」を見た。列挙すれば、①不屈の反骨精神、②旺盛な好奇心、③柔軟な発想、④現状否定の精神などの特性を持っていることである。これは建築家の清家清氏、音楽教育の鈴木鎮一氏においてもご同様である。

4. むすび

井深氏に「あと半分の教育」という著書があるが、知育に加えて心の教育を忘れることなく、「習慣という名の帽子を脱いで」創造的に頭を働かせる。こうして、一人ひとりの先生方が新しいものにチャレンジしていくなら、子供たちはその後ろ姿から「創造性」を体得していくに違いない。

(全体講演 午後の部)

「バイオテクノロジーの現状と問題点」

帯広畜産大学教授 美濃 羊輔氏

バイオテクノロジーとは生命工学または、生物工学のことである。1982年パリにおいてバイオテクノロジーの国際会議で定義として確認されたのは、「生物のもっている機能を効率的にかつ合理的に利用する方法」というものであった。以上の定義から考えてみると、農業及び畜産など全てがあてはまり、一向に意味としてつかみどころがなくなる。そこで、以下5項目に関連語句を整理してみた。

- ①バイオテクノロジー：生命工学、生物工学
- ②ニュー・バイオテクノロジー：1970年以後にてきた語で生物と別の生物をかけ合わせ新しい生物を作ることである。遺伝子工学ともよべる。
- ③バイオ・インダストリー：①と②のものをつかって生産過程にのせてやること。
- ④ライフ・サイエンス：人間の生命及び存在にかかる総合科学である。たとえば、オゾン層の破壊に関する問題、食料の危機に関する問題などある。
- ⑤バイオ・サイエンス：①～④を総合。

さてそこで、バイオの源流を考えてみると、意外とふるくて各国でみることができる。たとえば、酒は約5千年前インドのトラビータ民族で飲まれていたことがわかっているし、古代エジプトにおいても酵母の力をかりて、ビールが作られていたこともわかっている。また、パンについても約5千年前メソポタミヤにおいては、野性の酵母を利

用していたらしい。こうようなことから考えてみると、バイオはすでに約5千年前からずっと続いてきたものである。そして、今現在ブームである。その背景を考えてると、日本の経済成長は昭和48年の石油ショック及びすぐそのあとの第2次石油ショックのため重化学工業の発展がとても困難になった。そのためエレクトロニクス分野の発展に力を、そそぐしか道はなくなった。また、農業、水産に目をむけるなら、肥料等の価格上昇、安価な輸入品の増加等の問題から新しい分野への大きな視点転換が必要となり、低エネルギーで生産性をあげるものへの重大な関心と期待がたかまつたのである。その中で、バイオは生物学であり我々に物質的なものだけではなく、精神的充足感を確認させてくれる。

このような中で、北海道の現状を考えてみると、バイオアイランド北海道として注目をあつめている。たとえば栗山に道のバイオを専門にあつかう機関として、中央農業試験場を設置したり、企業誘致を進めるためバイオサミット北海道キャンペーンを東京で開催した。これらは、北海道の特性である—①農業王国であること。②広大な土地があること。③環境（水、空気など）がとてもきれいであることを考慮したものである。

しかし、これから北海道の展望を考えるならば、地域の発展に結びついた企業誘致を考えてゆかねばならない。それには、3つほど条件として考えられる。①進出してくる企業が地場産業にむすびついていること。②従業員は地元の人間を採用すること。③単なる流通の拠点ではなく、研究開発から生産まで常に地元に結びついていること。

これらのことと常に考慮にいれ我々は技術のみにとらわれることなく、生物学との視点からバイオとの関わり合いを今後とも考えてゆかねばならないだろう。

○平成元年度（会員数5,586名）

役員改選年度で、地区支部・教科部会28の支部長・教科部会長合わせて18名の大改選が行われた。恒例のごとく地区支部長、教科部長、本部役員、本部事務局の順で自己紹介が終わり、議事の審議に入る。この第一回の役員会でも、前年の全体講演について、内容では大変好評を博したが、午後の講演の時には極端に人数が減ったことについて何とかならないか、という話が出た。いつの年でも午前の講演はホールにも溢れんばかりの大盛況

を果たすが、午後となると、それを引き止めておく対策は、各先生方の自主性におまかせするより他はないということになってしまう。これは翌日開かれる教科別集会でも同じことで、ここでも午後の参加者が減少するということで、各教科部会でも試行錯誤をしながら（午前に研究・午後に講演、又はその逆）対策は講じているが、その効果は出ていないという。年に一度の「顔合わせの会」ということでの参加者で、本来、本当の意味での研修で参加されている先生方がどれくらいいるかが疑われる面もある。先生方はいろいろな形で繋がりがあって親睦を楽しむのも結構であるが、研究会の意義や諸経費のことを考慮すると、もっと積極的参加を行ってもよいのではないかという感じもしないわけではない。全体講演講師も本年は他からの協力によって金田一先生と釧路の丹頂鶴公園長の高橋先生が早くに決定された。

2・1・9（参加人数4,118名）

各学校に大会要項を発送し、その要項を見て参加する先生が多いか少ないかがよく決まるが、今年は予想通り多く4,100人を超えた史上第2番目であった。（最大は19回大会広中平祐氏の時4,121名）金田一先生も、年に数回研究会等で講演されることがあるようですが、4,000人以上も集まるマンモス大会というのは初めてと言っておられた。それ程大きい会場でということであったが、やはり講演が始まる前には座席どころか、通路や最後列のところ階段、入口迄あふれんばかりの人数であった。講演が始まても、事務局の先生方はなかなかゆっくり講演など聞くことも出来ず、本部に詰めていて、旅費の支給とか翌日の教科部会の事務担当者の打合せ、遅れて参加される先生方の対応に走り回らなければならない。ヒマを見て、舞台の袖に当たる奈楽で10～15分くらい聞くのが精一杯で、いつもゆっくり聞くのはテープを戻してのことで済ましてしまう場合が多い。

研究大会当日、朝はいつもの通り凍りつくような寒さであったが、日中は気温が高く7°Cくらいになり雪も融けはじめていた。

（全体講演 午前の部）

「日本語の心」

文学博士 金田一 春彦氏

私は石川啄木のことを尋ねる人がいるが、アイヌ語の研究や啄木との交友で名高いのは京助の方で、私はそのせがれである。『悲しき玩具』に「そうれみろ、あの人も子をこしらへたと、何か気の済む心地にて寝る。」と詠まれたのが私の誕生のこ

とであって、啄木との関係はそれだけである。

さて昨今、国の内外を問わず日本語ブームである。しかし、日本語は教えることも習うことも難しい。日本人はことばに関し、特別な意識があるからだ。きょうはこのことについてお話しようと思う。

(1)ものはなるべく言わないようにする

森本哲郎氏の随筆に、フランスの車中での体験が書かれていた。次のようなものであった。『草枕』を読んでいたところ、隣席のフランス人がその内容を質問してきた。「智に働き角が立つ…意地を通せば窮屈だ」と訳して説明したところ、フランス人は釈然としない風であった。誤訳ではないかと言うのである。初対面の人には、いきなりこうした質問をすること自体、日本では見られないことだが、「智」や「意地」をひかえ目にするのは、日本人流儀なしである。

米国伝来のプロ野球では、選手が抗議をして自分の正当性を主張する場面が多いが、大相撲では、物言いのつくような際どい勝負の時であっても、当の力士は無言を通す。このように、自己主張を避ける傾向が強い。

(2)恩に着せるような言い方はしない

旧制中学時代、近所に住む女学生に恋文を送ったことがあった。数日後、今はその時でないなどと記した代筆の返事が届いた。私は失意のあまり落第をしてしまった。間もなく日清事変で私が出征することになった時、見送り人の中に私はその女学生と母の姿を認めた。恋の相手は、「歌のおばさん」で知られる安西愛子さんの少女時代だった。後に放送番組で対面して分かったことだが、恋文の代筆も見送りのお膳立てもすべて、安西さんの父親の無言の配慮によるものであった。

「お茶が入りました」「お風呂がわきました」と日常的に言う。これは「雨が降る」という言い方と同じように、自然にそうなったかのような優しい表現である。このように、黙って他人のためにするのが日本的心である。

(3)口下手であることが美德とされる

源為朝や西郷隆盛のような寡黙型が、歴史上の人物には多い。また、俳句にその典型をみると、凝縮・省略した表現も日本人の得意とするところである。

しかし、挨拶の場合は逆で、むしろ長い方がよいとされる。延々と話した後でなお、「以上甚だ簡単ではあります……」などとわびる類である。ついでにいえば、日本の挨拶では、わびる表現が

非常に多い。

英語では「陳謝」も「弁解」もapologyで同一語だが、日本語では全く別個の行為と認識していることからも、日本語の心は量り得よう。

(4)率直に言わずに、裏返しに表す

島崎藤村の『小諸なる古城のほとり』などは、すべて打ち消される表現であるために、欧米人には、何の意味もない詩だと感ぜられてしまう。しかし、日本人はこれを情緒として理解することができる。

日本人は、物は言わない方がいい、言うなら短い方がいいと考える性向がある。読む力や聞く力にすぐれていて、裏返しに表現してもそれを理解できるし、理論性に欠けていても、相手の気持ちを察するだけの訓練ができている。

話なればだが、皆さん聞き上手は日本人だから、私の言いたいことは分かってもらえたと思う。

(全体講演 午後の部)

「タンチョウの四季」

釧路市丹頂鶴自然公園長 高橋 良治氏

ただ今、身にあまる御紹介をいただきまして、本当に恐縮しております。非常に話がうまく続けられないことがございまして、スライドを通じまして、皆さま方と釧路湿原に住むタンチョウが、1年をどんなふうに過ごしているのか、もう一度勉強させていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

タンチョウは、古来から丹頂とし、絵にも描かれ、歌にも歌われ、日本人にとても可愛がってもらられた鳥です。このタンチョウは、頭のてっぺんが赤いというのが特徴です。今、ここに写し出されておりますタンチョウは、その赤い部分の大きいもので、普通のタンチョウの場合と、目のところから後ろが赤いわけですが、幼いときは頭のてっぺんに毛がたくさん広がっています。大人になるに従いまして、徐々にその毛が落ち、皮膚が露出します。この皮膚も、つるつるの皮膚ではなくて、イボイボの突起物がたくさんあるわけで、「頭にくる」とそんな言葉がありますが、怒らせたり、または、興奮した時に、短い時間で、この赤い部分に、たくさんの血液が集まることがあります。また、このタンチョウは目頭にもこの皮膚が露出していまして、この目頭の皮膚が出てているものはメスが多いわけですが、このメス、オスを調べる方法といたしまして、外見からは判らないわけです。

釧路湿原全体はどんどん気温が下がります。厚

い時には、1mをこす氷に閉ざされることもあり、ちょうど、1月の半ば頃になりますと、御神渡しといいまして、氷が割れていく、そんな現象があるのですが、その音は凄まじいたいへんな地響きです。5m・100m・1kmとどんどん厚い氷が割れていきまして、大きいものでは、3mも立ちあがるような現象が起こるわけです。もし、この御神渡しがないとしますと、どんどん地底まで凍ってゆきまして、氷の下で眠るいろいろな魚、生物が凍傷のために死ぬのだが、御神渡しのお陰で、ずい分たくさんの生物が助かるのかな、というふうにみせてもらっています。

御神渡しのおかげで、生き残って水面から頭を出して呼吸しているウグイたちも見れます。しかし、夕暮れには、また気温が下がりまして、上に空気を求める魚たちが、凍傷のためどんどん死んでいきます。死んでゆく数は何ともたいへんな量です。

エゾフクロウですが、いろいろと餌の少ないそんな時期に、ねずみは捕れない、そうなりますと、結局はこのウグイを餌とします。この御神渡しのお蔭で、いろいろな動物が生きのびてゆきます。

キタキツネですが、生まれて初めてキツネを見る幼鳥は、めずらしくこのキツネの側に寄ります。そんな時に、オスは防衛本能を表しまして、キツネに立ち向かい、蹴ります。蹴りまちがって足をかまれひき落とされた、ということがあります、事故でもないかぎり、キツネに敗けるような、そんなひ弱いタンチョウでないことがわかりました。

タンチョウの1本足について。僕の所に訪れるお客様にも、なぜ、タンチョウは1本足で立つのでしょうか、そんな質問が多いわけです。答えは、両方上げると転ぶから、というたいへん面白いお話を聞きましたが、実は、この1本足は、風見鶲というわけなんです。いつ、どこから風に吹かれても、吹いてくる方向に、向き直ることができるというわけです。厳しい冬を耐える時には、おなかに頭をすっぽりかくし、足も胸の中に隠し、交代交代で過ごすのですが、このように、それ程寒くない姿で、また片方の足も、たれ下げている、そんな時は、毛づくろいや、又は仮眠するときに、彼らは一本足で立つわけです。

タンチョウの卵は、丁度240g平均ですが、ヒナの体重は140gとなります。

たまたま、このタンチョウが自分の力で飛べる頃、御縁がありまして、常陸宮様御夫妻が来てくださいました。その時に、上司から、「高橋、名

前をつけていただいたらどうだ。」そういう話となりまして、恐る恐るお願いしましたところ、「よろしいですよ。」そういう言葉を頂戴いたしました。「この鳥は何月生まれですか。」「はい、5月生まれでございます。」「メスですか、オスですか。」高橋が一番困っていることとして、「たぶんヒナの時おなかがでていたので、オスだと思うんだがな。」と思いながら、「オスだと思いますが。」結局は、「5月生まれのオスだとすれば、五郎はいかがですか。」そういうことで、五郎という名前を頂戴いたしました。その日から、どうぞオスでありますように、と祈りながら、やがて大人になりました。何ともはやオスではなく、メスであったわけで、昨日まで五郎であり、今日からは「ごろっこ」となりました。本当に申し訳ないことをした。そんな記憶があります。

タンチョウは2羽生まれ、兄弟でありながら非常に仲の悪い鳥です。顔と顔をつき合わせると、「てめえ、このやろう。」みたいな顔に変わります。また、このように2羽生まれて、両方の脇毛をくわえさせたのですが、なぜか、心臓の方に抱いて寝るヒナの方が発育がいいということがわかりまして、2羽とも心臓の鼓動を聞かせて寝かせますと、ケンカをするどころか喜んで仲良く眠るということには驚きました。

夕暮時、急に天候が変わる時には、タンチョウたちは餌の食いだめをします。このようにながれるような夕暮れは、明日は間違いなく雪です。

何ともはや、花札みたいな写真が出てきました。タンチョウの頭の赤い色とお月様の白い色が、本当に色鮮やかです。

釧路丹頂鶴自然公園は素晴らしい建物に変わりまして新しくオープン致しました。ぜひ、一度いらしてください。おまちしております。長い時間、御静聴ありがとうございました。これで、講演を終わらせていただきます。

○平成2年度（会員数5,482名）

高教研の会長での一番の苦労は、全体講演の講師の選定といわれる。いろいろな方面から自薦・他薦で多くの候補者が出了場合、時にはどうしても断り切れない場合もあるらしい。昨年は大好評を博した講師に恵まれたため、本年もということで早くから手回しをし、何時もの年よりは早く講師が決まった。昭和60年度に登録料を1,700円(500円値上げ)、大会参加料を1,700円(200円値上げ)

をして以降、年々登録者数の減少を見、特に値上げした61年度には400人も減少をし、年度末になつての決算が赤字寸前に迄おいやられるといった事態もあった。その後は年々100～150人くらいの登録者が減り、最も多かった昭和53年度の登録者6,549人から本年度は5,482人と1,000人余り減少した。その背景には、高等学校の統廃合や炭坑地域の学級減による教職員減も考えられるが、教職員全体の数からはそれ程大幅に減っているわけではないのに、どこに原因があるのかがなかなかつかめない。原因の1つに研究会のあり方にも（マンネリ化したワンパターン）もあるのかも知れないが、おそらく、他にも要因があるようと思える。それで第二回役員会に本部事務局が提示した「教育関係団体の協賛」を仰ぐことを考えて見ることで、本年度検討することになった。役員の中には低い経済成長期にあることや時折吹く不景気の中で、毎年固定した形で協賛を得ることが出来るだらうか、という意見もでたが、半年間の研究期間を設けて調査した結果、何とかメドがついた。それで第三回の役員会で、次年度から「教育関係団体の協賛」を仰ぐことも考えることが決定された。

3・1・9 (参加人数3,734名)

(全体講演 午前の部)

経済法秩序における公正としての正義

——日米構造協議を中心に

青山学院大学法学部部長 菊地 元一氏

ただ今、御紹介にあづかりました菊地です。本日日米構造についてお話しさせていただきます。古くより法律学の原点は正義です。しかし、アリストテレス以来今日まで正義とは何かということをめぐり争い事は展開されてきました。今、私は経済法秩序における公正としての正義という立場から、日米関係における貿易摩擦の問題を考えてみます。昨年6月にまとめられた日米構造協議では、我が国の経済法秩序に対して問題提起がなされていると思います。米国が我が国の公共投資のあり方や独占政策のあり方に厳しい要求をしてくるのは内政干渉である、との主張が一部の政党にないわけではありません。

近代国家出現におきまして、国家間の国際関係を成立させた時から、内政不干渉の原則は、主張されてきました。近代はまさに、人間の理性、自立を重んじ、これこそが人間の尊厳を守ることであると考えられました。これと同じように国家も、国内事項について理性的にものを決めることが、国家主権の大前提であると考えられたのです。し

かし、今日、米国の経済事情は、直接大きく我が国に影響してきます。このように国家的な相互依存関係がますます強まっている中、なにが国内事情で、なにが対外事情であるかという明確な区別を行うことが、事実上不可能となってきています。我が国の通商政策をどうするかということは米国に大きく影響を与え、これは同時に米国の国内事項を左右する問題ともなります。米国の財政政策をどうするかということは、同時に我が国への経済影響を無視することはできないと思います。また内政干渉とはどのような状態を指すのかということも考えてみなければなりません。この点については、国際法上、命令的関与がそれに当たると判断されています。ですから、日米構造協議は、国際慣習法上の内政干渉にはあたりません。また、米国の通商法の規定は外国政府の政策が不合理であって、市場への参入が阻害されている場合には、経済制裁処置をとるという国内法です。この法律はたしかに米国の議会が定めた国内法ですが、米国が他国に対して経済制裁処置をとることを目的とした規定ですから、同時に国際法としての性格をもっています。このように、米国の通商法国内法であると同時に、国際法的要素を含んでいます。このように考えますと、今まで世界経済を支配してきたGATT（ガット）との関係が問題になります。ガットは第二次大戦が世界経済のブロック化により、ブロック間の激しい対立によって、戦争がひきおこさたという反省にもとづて「自由・無差別」の原則を基本とする。いわば自由貿易の論理を明らかにした、戦後世界経済の最も重要な国家間のとりきめです。我が国は、これに加盟し、法的には国家において批准し条約としての効力を与えています。第二次大戦後これを支えてきたのは、米国ですが、今日に至るまで米国はこれを批准していません。したがって米国の修正憲法から申しますと、ガットの規定よりも、米国の国内法税秩序という点からも、米国の通商法のほうが、ガットの規定よりも優位にあるのです。我が国は憲法で条約順守義務をうたっており、我国の通商政策は基本的にガットを順守するという枠組みの中で行わなければならないのです。しかし、我が国におきましては、日米両国の世界経済における比重が非常に大きいこと、ガットがいまだ未整備であることなどから、日米間における経済問題の解決方法を新たに模索しています。

さて、昨年六月にまとめられた日米構造協議の最終報告では、我が国に米国に対して次のような

六項目を約束しました。①貯蓄投資パターン②土地政策③流通政策④排他的取引慣行⑤系列関係⑥価格メカニズムです。⑦は公共投資10年で430兆円の投資を行います。特に、生活関連の下水道・住宅などの四分野を整備することを明らかにしました。このように公共投資として社会的ストックを欧米並みに充実させることは、大切なことだと思います。ビクトル・ユーゴーの「ああ無情」において、主人公がパン一片を盗んでパリの下水道へ逃げる場面があります。あの時代に、主人公が下水道を走りぬけるだけの社会的ストックをパリは持っていたのです。今日の我が国を見回してみても、このように充実した下水道は残念ですが、存在しません。昭和30年に、1万円であった卸売り物価が平成元年にし2万円になりました。六大都市の地価は1万円であったものが128万円になっています。東京を売れば我が国の25倍の面積をもっている米国全土を買うことができ、それでもなお余ります。日本は、法人のもっている含み資産などのストックを米国へ直接投資しています。その結果、米国の財政赤字などは克服されていますが、その反面、自国が日本にコントロールされているような不安感をいだいています。我が国は国内の公共投資にめをむけ米国との関係を改善していくことが今後ますます必要でしょう。

(全体講演 午後の部) 心の危機と反応

札幌医科大学神経精神科教授 高畠 直彦氏

最近よく問題にされる心について、精神科医としての立場から取り上げていきたい。心とは情としての魂や理性としての精神、意志という分野があるが、それらの総体として心を捉えてみたい。教育者としての、或いは宗教家としての立場によってその解釈は異なるであろうが、シラケの問題、学校拒否、コンピュータ頭脳など、現代には数多くの問題がある。私もしょせん心という巨象を撫で回す群盲の一人に過ぎないが、三つの柱を立てて考えてみたい。

1. 中枢である脳の破壊
2. 個体を取り巻く環境としての文化における心
3. 現代という時代の危機

第一の脳の構造について（スライド）は現代医学の長足の進歩によってかなりのことか解明されている。多量の血液が供給されるスポンジのような脳の部分、例えば前頭葉、側頭葉、小脳などの機能は詳しく調べられるようになった。しかし、脳が生み出す心の作用はよく解っておらず、古く

からの心身二元論は全く滅んだわけではない。心身一元論は証明されておらず、精神病の発病メカニズムはよく解っていない。しかし、脳が壊れると精神に支障をきたすことははっきりとしいてる。老人性の痴呆症であるアルツハイマー症(Alz)はこれをよく示している。40才から発病し、65才以上の3.39%が罹患し、本邦30万の患者がいる。頭頂葉の血流障害に始まり、物忘れ、人物誤認、写字、数字等の障害、見当識障害、失語症等を経て恍惚に至る。血管性の脳障害との差違は後頭葉による目の動きが悪くなることで線が描けなくなること、鏡現象などである。鏡の中の自己の鏡像に他者を誤認し、実在するものとして話しかける。鏡像は虚像であることを認識できないのである。その後、鏡に関心を示さなくなる。これは子どもの認識障害と逆の現象である。Alz症とはつまるところ、象徴化機能と同一化機能の障害である。健忘から徘徊、盗害妄想、叫声の過程を或る人は「誇観と執着の狭間の苦悩」と言ったが、それはまさしく失われてゆく自我を見失わないとため、自己の存在を他者に示すための行動なのである。Alz症状はこの誤認と作話などを経て虚構世界での安住（過去化、自己化）に到達するのである。狂気とは時代によって変遷するものだがAlz症とは正に現代という時代の狂気なのである。

第二に文化における心を考えてみたい。ニューギニアやエジプトなどでは面やスフィンクスがアイミズムの存在を示している。そこでの世界観はトーテム哲学（自然・神話・人間の一体性）や時間の非連續性、自我の連續性を特徴とする。この安定が崩れる時とは異文化が混入する時であり、その時、面は角を持ったりする。このような文化の相克をアノミー（価値基準が混乱した状態から新秩序が誕生すること、デュルケームの造語）と言う。西洋ではルネッサンスにそれを見ることができる。デカルトによる理性の尊重と同時に進行する魔女裁判。有名なゴヤの魔女の絵に現れる悪魔とはキリスト教によって迫害された地元神の姿である。地元神は新秩序であるキリスト教によって混合、吸収または排斥されるのである。魔女に似た例はアイヌのイムフチに見ることができるし、ヨーロッパ文明の侵入という点ではメキシコ人の心性も一考に値する。さて我が国では明治時代に黒船によってヨーロッパを経験させられた。そこから生まれるのが対人緊張や憑依文化である。それは清潔に関する強迫的観念や三度目の宗教ブームとなって現代に脈を通じているのである。現在

の第三次宗教ブームは社会的な変動期に起きていくわけではない。にも関わらずそれが存在することは裏を返せば、現代が大変な時代にあることを示しているのかもしれない。現代とは紛れもないアノミーである。

最後に現代という時代を分析してみた。私が注目するのはマスコミと情報化、非自然化と原始宗教化、スピードと能率の三つの特徴である。マスコミではTVの影響が大きい。受身性は国民全体の主体性をなくす方向に動き、評論家の意見と自分のそれを混同させるし、変転性はニュースに顕著なように、情報量の多さのために人の心に残らず、感動も浅くなり、悲惨な出来事にも共感しなくなる。拡散性は世界の動向（イラクなど）をすぐに伝えることによって不安を与え、実存の危機に結びつく。次に非自然化、すなわち工業化は恐怖や不安を惹き起こす。人はストレスに対して運動の暴発、昏迷、妄想などで反応するが、殺伐とした事件や、動くことを拒否する登校拒否、分裂病やアルコール、シンナーによる現実逃避、記憶に新しい『イエスの箱船』事件などはこの反応に当てはまる。スピード化と能率化は青少年をよく似たスーパーの卵のようなものとし、没個性化した。

振り返ると一つの時代に一つの人格形成がある。人間存在は歴史と社会によって規定され、幅の広いものではなくて一つの枠の中で決められてしまうものである。アパシーや暴走族、オカルトに凝る人、登校拒否など様々な問題行動を持つものも人間存在の一つの様式なのである。人は孤独な存在であるが連帯意識を持つこともできる。先に述べた人とは時代の先兵であり、急激な変化に適応できない最も傷つき易い人なのである。私たちは共にこの時代を生きる仲間として手を携え、既成の価値観に捉われることなく生きてゆかねばならない。まことに平凡なことだが、人を大切にするという心を持って生きてゆくということしかない。次代を担われる皆さんに衷心からの期待を寄せたいと思う。

○平成3年度（会員数5,269名）

昨年の第三回役員会で関係団体等の協賛を得て研究会の運営が始まった新しい年であった。これについては、札幌市内では本部事務局が中心になって、石狩支部にも支援していただき、地方都市では地区支部が協力するということで出発した。

協賛をいただく箇所も、予め決め私立大学（短大も含む）等さしづめ高校と何らかの関係を持ったところにお願いすることとなった。協賛を得ることについては当初困難も予想されたが、各役員のご尽力により、ほぼ所期の目標を達成することが出来た。

年々登録者が減り7月末の締切時には5,250人とここ20年来ない人数で、当初予算の一部手直しも実施した年度でもあった。又来年度の1月の研究大会が、厚生年金会館の全面改修で使用不能ということを6月に連絡をうけ、其の後本部事務局では会場探しに奔走した。グリーンドーム、スポーツセンターを実地検分をして見たが、暖房の点でうまくいかず、結局は市民会館ということになった。丁度その時完成間近なホテル「ロイトン」にも出向いて打診したが、これも借用困難ということだった。

夏の研究大会ならば、暖房という問題をかかえていないから、大会場確保にはそれ程困難はないが、冬の大会は厚生年金会館以外講演を開く会場としてはなく、本部事務局でも頭痛の種の1つとなっている。講師の選定では前年度つらい目に逢っているので、会長は苦労した一年ではなかつたであろうか。それに来年度は30周年という一大事業もあり、本年から準備に取りかからなくては——ということで、本部事務局でも全教職員で本年度から体制を作つて臨むことにしている。

4・1・9（参加人数3,690名）

研究大会当時の全ての資料は、前日の夕方講師を囲む会の時に搬入してあるので、当日は手ぶらで行くことが出来、当日役員は午前8時に厚生年金会館へ集合ということになる。厚生年金会館の方も臨時職員を含めて8時半が勤務時間になっているので、早朝出勤手当を出して早くから準備に取りかかっている。とくに寒い折で、参加者をいつ迄でも外には——という配慮からであった。準備の段階では、舞台準備に多くの時間が費やされ、特に前日厚生年金会館で催し物が入っていると、大変忙しくなる。

本年度の大会は今迄になく寒く、前日も雪が降ったので講師の先生が来られるかどうか心配したが、予定通り午後の早い便で千歳に着かれた。午後6時から「講師を囲む会」（全体集会の司会者との打合せ）も、校長協会の会議が長びいて、なかなか来賓も見えず気をもんだが、午後6時10分には始めることが出来た。講師の「なだ　いなだ」先生も年間かなり講演に出かけられるようだが、

こんな多数の前では初めてということで、びっくりしておられた。全国規模でおこなわれる高校の先生方の研究会でも、4,000人近く集まることは文部省でもないと言われているので、おそらく高校の先生が全教科を通しての研究会としては全国一を誇れるのではないかと思われる。講演も終わり来年度30周年記念の大会が、会場の狭い市民会館では少し物足りなさを感じないわけでもないが、祝賀会、メイン講師等の作業は、この大会が終了すると同時に又始まることとなる。

(全体講演 午前の部)

心の底のぞく

精神科医・作家 なだ いなだ氏

どうか気楽に聞いてください。緊張して聞いて胃に穴があいたなどということになら精神科医が病気を作っていることになってしまいます。紹介の文章は私をえらそうに形容してくれるのですけど、私たちの育った時代は混乱の時代でして勉強などよくできなかつた時代です。ほとんど小・中学校は戦争の時代で、最後に陸軍の幼年学校で終戦をむかえましたので、東京にもどってきました。何もする気になれずニヒルになっていた所、母親がうるさく“医者になれ”と言いだして医学部を受けることになったのです。私は生来おっちょこちょいで、でもまあそのような気質の子供はとても心優しいのですが、子供の頃よくお手伝いなどしまして、お使いに行ってくれと言われますと“はい”といい返事でてかけるのですけど、自転車に乗って進んでいるうちに「さてどこに行くのだったかな」となります。家にもどって肉屋に行くということを聞いて、それ行けと肉屋の店先に来てから「さて何を買うのだったかな」とこんなことばかりしていました。まあそれで落ちるつもで、落ちはれば母親もあきらめるだろうと思い受けたら、医学部だけ受かってしまったのです。まあ、そんな時代があったのですね。その内申書を書いてくれた先生は、私が頼みに行ったとき私の成績をみながら、“まぐれということもあるからな”と励ましてくれたのですね。この言葉は人生で忘ることのできない大切な言葉の一つです。それでまぐれで入ったのはよかったですけど、入ってからが大変だと思いました。きっと回りは秀才ばかりでついてゆくのが大変だから、本当はやめようと思ったのですけど、授業にでるとそうではありませんでした。最初の授業はフランス語で「bonjour monsieur」を訳しなさいと言われたら、私の横にいたのが立ち上がり、「ポンジュー

ルさん、こんにちわ」と訳してくれたのですよね。ああ、ここにも俺と似たような奴がいる、こいつと仲良くしようと思いまして、そしたら彼も精神科医になったので大学でからも仲良くしています。そのあとまぐれが増えていきました。卒業の時には40人中38人はまぐれだった気がします。まあそれでこんな不勉強でおっちょこちょいの私が医者になってもいいのでしょうか、卒業時には先生の所に相談することになりました。すると先生は、世の中を単純にみろ。医者の所に来る患者は3種類しかいない。ほっとけば死ぬ奴。ほっとけば治ってしまう奴。ほっとけば治りもしないし、死にもしない奴。最初の奴は勘がよければわかる。お前は勘でここまでできた。それなら必ずわかる。そして見つけたらえらい先生の所へさっと送ってしまえ。残り10人中9人は最後の奴だ。治りもしないし死にもしない。とにかく後はほっとけ。この人達を大切にしろ。大切に長くつきあえ。この人達がお前の生活を支えるんだ。この人達をおろそかにしてはいけない。このように言われ、私は本当に良いことを学んだという気がしました。それで、ほっといても死ぬ人がほとんどないということを考えて精神科医になろうと思いました。そして、5年たち私にも転機がおどずれました。日本で初めてのアルコール中毒治療専門病院が建つからそこへ行けと言われたのです。その当時、アル中の患者はどこへ行っても嫌われものです。何故かと言いますとドアをぶち壊して逃げたり、窓から逃げたり、いろんな手段を使って逃げたりする人が多かったからです。その上、私はアルコールの勉強なんかいっさいしたことありませんから、途方にくれて教授にどうしたらいいか聞きました。そしたら、自信をもってやれと言ってくださいました。アル中は治らない、だからお前がやろうが、もっと優秀なのがやろうが結果は同じだ、だから心配するな、と励ましてくれました。治らないというならば治せなくても私の責任ではないと考えましたらとても気楽になりました。それで扉を壊されても困りますから鍵を開けてしました。こうなると逆に逃げないものですね。どこに行ってもダメだった患者がここで直ってしまったことがあります。彼が言うには日本で一番の名医の言うとおりにやればいいと思ってやってみたがダメだった。ここで初めて自分がしっかりしなくちゃダメだと気がつきました。自分に決めさせることが大切です。子供の心が見えないと言う人が増えていますが、話をしていないだけです。

ただひたすら相手の話を聞く、これが相手の心を理解できる唯一の方法です。登校拒否は親子関係からくる神経症の場合が多いです。何故行かなくなつたか理由をよく聞くことが大切です。子供は現在高校生でも小・中学校ひとつながりです。人間の心は目では見えません。心は心で見るしかありません。簡単なように見えてもなかなかできません。今後とも我々に求められていることだと思います。

(全体講演 午後の部)

オスとメスのエソロジー

北海道文理科短期大学学長 坂本 与市氏

私の恩師の一人に、当時まだ十九才の代用教員がいた。地球の全周を求めるある問題があり、私一人が解けたということがあった。彼は私に皆の前で発表する機会を与え、ほめちぎってくれたのである。おかげで数学が大好きになり、その後も数学だけは大得意にすることことができた。

当然大学は数学科が希望であった。ところが封建的な農家の家長であった祖父が許さなかった。農家のせがれだったら、それらしく近くの農業大学か、さもなくば京都の大学でお坊さんになる勉強をせよと厳しく申しわたされてしまった。私はやむなく農業を勉強しようと考えた。

昆虫を選んだのは泥いじりが少なかろうという、他愛ない考え方であった。ところがその後、大きな台風禍を目の辺りにして農業そのものへの意欲が萎えてしまい、卒業してから中学校で理数を教えていたのである。勿論、一度志した農業を捨てたことは後ろめたく、再び農業に進路変更をしようと決心した。

その時私を北海道に招いてくれたのが、酪農学園大学の樋浦学長であった。私が行くと学長は長ぐつ姿で、親しく出迎えてくれた。しかし何と、最初の仕事は牛糞運びや畑の除草を朝五時半からである。3Kどころか5Kくらいの重労働だったがなかなか給料がもらえない。いぶかって学長にたずねると、「君は農業をやつたことがないだろう。北海道の酪農はなおさらだね。それを教えてあげて授業料は免除してあげているんだから、云々。」という調子である。十か月もしてから、今度は高校へ行って化学を教えよという命が下った。苦手な化学であったが「化学の真髄」という易しく書きおろされた本で勉強し、助かった。東大の先生でも家の女中さんにも分かるように授業の原稿を練った方がいるというが、この時は本当に分かりやすい事が大切だと思った。

それ以来、給料も頂き、次に大学の助手を勤めることになった。ここで昆虫の研究に顕微鏡が欲しいと希望したら、樋浦学長に「他の大学と同じことをやってもしかたない。」と悟られ、草原の昆虫の観察を始めた。その一つにギシギシタコゾウムシがある。食草のギシギシも、この虫も応用的価値は当時全く無かった。しかし調べるうちに、自然のサイクルの中では両者はかけがえの無い存在である事を実感した。将来禍根を残さぬように、自然保護ではこのようなものも、守らねばならないと考える。

以上の事に私は1つのつながりを感じている。数学好きの生徒には、育てくれた代用教員。農家のせがれに食べる物か、心の問題のどちらかを学ばせようとした祖父。経験のない若者に本物の酪農をさせた樋浦学長。そしてギシギシとそれに依存するゾウリムシ。一見重要ではない存在が深い結びつきを持った、ユニークなかけがえの無い存在になるのだ。

さて、ゾウリムシの研究ではオス・メスの見分け方に苦労した。そもそも何故、生物にはオス・メスがあるのだろう。それは、両性生殖によって、子孫に豊かな個性が保障されるからである。オスメスの無い無性生殖で生まれた子にはそれがかけている。オスメスの共同で子孫が作られるのは自然の知恵の1つである。生物の生殖行動について以下に例を挙げてゆこう。

ウニは親自身で子供の世話をできない。その代替の戦略として八百万もの卵を生む。体内の栄養をまさにふりしぶるような行動は圧巻である。

モンシロチョウも、卵から我子が生まれる頃に親は居ないから状況は似ている。しかし母蝶は生まれてくる子の為に、まちがいなく食草の上に卵を生んでくれる。よく図鑑もしらべずに食草であるアブラナ科の植物を見分けられるものだ。

父親の例では、コオイムシが顕著である。オスが背面に産卵されるのだ。自分の運動性を犠牲にして、コオイムシのオスは子を守る。

夫婦ではダイコクガネが一夫一婦の見事なチームワークで子育てをする。オスは実験的に与えられたメスには見向きもせず、初めにつがつたメスが見つかるまで探し続ける。夫婦の絶妙な協力体制で、子が成虫になるまで数々の労働をこなすのである。

以上、何れの例も科学的には「本能」という言葉で説明することはできるかもしれない。しかし全てをこの言葉に帰してしまうことはできないよ

うな気がするのだ。オスとメスとその子は深い慈愛で結ばれている。どんな生物、人間にもその存在を意味づけるつながりがある。私はこういったものが、もっとスケールの大きな、大自然の計略の中にある様に思えてならないのである。

○平成4年度（会員数5,140名）

役員改選年度で地区支部長に、15支部中14支部で教科部会長は13部会中6部会の、計20の支部と部会長が変わられた。また、会長、副会長もすべてが入れ替わるといった大異動であった。第一回役員会は代行会長で始まり、初めて役員になった校長先生方が多く、少しとまどい気味であった。

本年度は30周年記念事業も同時に行うことがすでに承認されており、事務局の先生方にかなり負担がかかるという心配も出てくる。役員会（年三回）と研究大会の準備は、学校の中間・期末考査と時期的に重なるため、担任の持たれている先生方に並々ならぬ苦労をかけている。6月になって急遽厚生年金会館が国家予算がつかなくなったために利用できる形となり、うれしい反面市民会館をキャンセルせざるを得なくなってしまった。30周年記念ということで、昨年に引き続き教育関係諸団体より協賛を仰ぐことになったが、この件も順調に進んでいる。

この21回から30回迄のすべての役員（本部役員地区支部長・地区支部事務担当者、教科部会長、教科部会事務担当者、本部事務局）の校長をはじめ各先生方の退職者が大変多く、表彰に該当する先生方が前回（20周年時）に比べて、上回っている。とくに退職された先生方の居住先の調査ではかなりの時間が費やされた。その他30周年という事業を行うとなると業務量も増えて10月以降は、かなり各先生方に遅くまで残っていただいた。

講師の選定については、いつも苦慮しているところであるが、今年度も会員各位の関心が高まるなか、沢山の情報が寄せられそのなかから幸いにも下のお二人の講師の内定をみたのである。

（全体講演 午前の部）

技術革新の現在と社会変容

放送大学教授・京都大学名誉教授 伊東 光晴氏

（全体講演 午後の部）

耐えて勝つ

野球評論家 古葉 竹識氏

地区支部この10年のあゆみ

石狩地区支部

本研究会の30周年を迎える節目の年に当たり、石狩地区支部の現況を報告する機会を得たことは、草創期において教科部会にいささか下働きをさせていただいた者として感無量のものがある。本会の創立時にいわば萌芽した若葉が幾多の障害を乗り越えて順調に成長し、今や全国にも稀な質・量を備えた研究団体になろうとは誰が想像し得ただろうか。

石狩地区支部は本部事務局所在支部でもあり、本部と密接な連係を保ちつつ会の発展と共に歩んできた。ここに20周年以降の10年間の足取りを辿ってみることにする。

本年度の加盟校数は道立39校、市立8校、私立11校、特殊3校、行政機関4団体、合計65、会員数は1,756名に達している。

地区支部会員の全会員に占める割合は56年度26.8%であったが、平成3年度においては34.6%に増加している。このことは人口が集中増加する本地区において、学校数の増加=教員数の増加の事実から当然の現象ともいえようが、歴代の支部長（別表-1）や各校長をはじめ各団体の役員、会員相互の努力の賜であり、今後更に会員数の増加に努めていかなければならないと考える。ただこの10年間の会員数の推移をみると、前期の急上昇から中期の横這い、この1、2年の下降と鈍化の傾向にある。学校数の増加からいって、加盟校数の増加は当然のこととして、各校において登録率を高めるよう、校長を中心に方法論を検討する時期に来たともいえる。地方支部会委員の本会に加入する意義は、すぐれて研修を深める絶好の機会であることの外、各種情報の収集や人間的交流を図る場であることも大きな魅力であることは否めない。かえりみて本地区においては、地理的条件に恵まれて各種情報が収集しやすく、或いは安

定した立場に自己満足して本会に参加するメリットがうすいと考えられるがちな傾向はないだろうか。私の杞憂であればよいのだが、多少なりともその傾向があるとすれば、「初心忘るべからず」の精神にたちかえり、研究に向う態度の刷新であるとか、或いは自分が気がつかないうちにどっぷりとつかっているマンネリズムの打破につとめなければならないと考える。各校における校長を中心とした督励を縦割りのラインと考えれば、教科部会は横割りのラインと考えられ、双方の立場で会員登録を増加する方法を模索していきたいものである。

（別表-1）年度別支部長・会員数一覧

年 度	支 部 長	校 名	会員数
昭和58	清水 正康	札啓成	1,805
59	沼田 一夫	札西陵	1,858
60	沼田 一夫	札西陵	1,924
61	川崎 威	札東豊	1,877
62	川崎 威	札東豊	1,854
63	藤井 省吾	札真栄	1,854
平成1	藤井 省吾	札真栄	1,882
2	藤田 明郎	札真栄	1,916
3	藤田 明郎	札真栄	1,826
4	近藤 晃	札平岡	1,756

平成4年度の石狩地区支部役員研究協議会は7月2日（木）センチュリーロイヤルホテルにおいて開催され、3年度の会務報告、会計収支決算報告の後、4年度の事業計画案及び予算案が承認され支部役員（別表-2）が選出された。

(別表-2) 平成4年度支部役員

役職名	役員名	学校名
支部長	近藤 晃	札幌平岡
副支部長	安宅 英夫	北海道西
リ	頓所 永光	北海道西
監事	野元 哲浩	札幌新川
リ	中斎 孝則	札幌東商
理事	上記以外の加盟 高校長等	

教科部会

教科名	部会長名	事務局校
国語	小澤 正人	北海道
社会	納谷 浩一	札幌清田
数学	今西 義紀	札幌真栄
理科	佐々木 和夫	札幌月寒
体育	町田幸雄(恵南)	札幌南陵
養護	田川 昭	恵庭北
芸術	中野 友房	札幌開成
英語	東 永親	札幌拓北
家庭	村上 侃	札幌南
農業	井上 昌保	とわの森三愛
工業	高橋 淳一	札幌琴似工
商業	小松 信夫	札幌啓北商

本支部には50年から施行された規約があり申し合わせ事項により支部主催の事業に対し助成することになっている。本年度予算には研究助成費と

して20万円を盛り込み、原則として申請のあった5部会に各4万円ずつ助成することにしてある。本地区には全道・全国規模の研究会が開催されることも多く、それらの研究会に参加する意義も大きいが、同時に地区単位の研究会も又貴重である。

毎年、高教研研究紀要には支部会員から必ず何人かが執筆にあたり、全道的に著名の士が多いこともあるので、各部会みにおいて地区単位のきめの細かい研究会を開いてもらうよう期待するものである。ちなみに平成に入ってからの助成対象になった部会は次の通りである。(別表-3)

(別表-3) 支部研修活動

(研修テーマ、参加者数割愛)

年度 (平成)	開催部会名
1	国語部会、社会部会、養護部会、英語部会、家庭部会、(5部会)
2	国語部会、社会部会、養護部会、英語部会、家庭部会(5部会)
3	国語部会、養護部会、英語部会、家庭部会(4部会)
4	国語部会、養護部会、英語部会、家庭部会(4部会)

繰り返すことになるが、石狩地区支部の今後の活動は、地理的条件を十分に活用し、本部事務局との連携を深め、又、広く会員の意見を集約して、この30周年を一つの節目としてますます充実、発展を遂げるであろうことを祈りつつ、結びとする。

(札幌平岡高等学校長 近藤 晃)

渡島地区支部

渡島地方は、高教研発足当初、渡島及び桧山を含む道南地区支部として設置されたが、「20周年記念誌」の「地区支部20年の歩み」にも記述されているように、昭和58年、地区支部再編成に際し渡島地区支部として改編・独立し、今日に至っている。

現在、管内高等学校は公立21校、私立8校の合計29校があるが、今年度は27校が加入している。

会員数はこの10年間漸減気味ではあるが、石狩、上川、胆振、十勝支部に次いで有数の支部となしている。このことは歴代の支部長はじめ、先生方の深いご理解・ご協力と関係機関のご支援によるものである。

会員数推移

年 度	58	59	60	61	62	63	元	2	3	4
会員数	424	426	417	380	395	396	391	351	333	353

歴代支部長・事務局

年度	支 部 長	事務局校	事務担当者
58	及川 哲哉	函館東	東 永親
59	及川 哲哉	函館東	東 永親
60	深尾 彰	函稟北	渡辺文則
61	深尾 彰	函稟北	渡辺文則
62	石黒 正勝	函稟北	田村正郎
63	石黒 正勝	函稟北	田村正郎

元	藤原繁	函棲北	田村正郎
2	堂高栄治	函中部	青木茂生
3	堂高栄治	函中部	石郷岡春夫
4	野田義成	函中部	丸尾功一

支部会員は毎年、高教研大会には多数参加しており、研究成果、業績等の発表も活発に行われている。この地区は古くから教科・領域ごとの研究会（渡島管内高等学校学習指導研究会、同生徒指導研究会、函館地区高等学校英語研究会、同保健体育研究会等）があり、その成立に歴史的な由来をもつものが多く、また関係教科の教員が全員自動的に加入し、すぐれた実践、実績を上げているものも少なくない。これらの研究会に本会会員の先生方も加入し活動しているが、既設の教科研究会の会員と高教研支部の会員とが完全には一致していない。

こうした状況の中で渡島支部としては、これらの研究会活動や研究会の大会等に協力し、限られた予算の中から補助金を助成（今年度は渡島管内高等学校国語研究会、同社会教育研究会）して一層の活動を援助している。

高教研独自の支部活動はなかなかとりにくいのも事実であるが、高教研は全道的な視野から、この地域の教育の現況を見据えるための格好の研修活動の場である。多くの既存の研究会との連携を図り、研究・研修活動をどのように結びつけていくのかが、今後の大きな研究課題であろう。

平成4年度渡島地区支部役員

役職名	役員名	学校名
支部長	野田義成	函中部
副支部長	三沢誠一郎	函西
〃	浪岡則光	函中部
監事	高橋孝三	函商
〃	梅原皎司	函北
幹事	関原沖	函東
〃	伊藤義雄	函西
国語会	近江正博	函水
社会	藤田満弘	函機
数学	齋藤邦展	函西
理科	内田憲児	函中
保育	芹田重次郎	稜北部
養護	黒沢敦子	函北
芸術	川人弘隆	函稜
英語	田中久	函東
家庭	加賀美砂百合	函機
農業	岩田武	函農
工業	吉谷啓一	函工
工商	野口準一	函商
水産	中畠辰雄	函水

(函館中部高等学校教頭 丸尾 功一)

桧山地区支部

1. 概説

桧山地区支部が発足したのは昭和58年であり、それまでは、道南地区支部の中に含まれていた。道南地区が編成変えされ、渡島地区支部と同時に桧山地区支部が誕生した。地区支部としての活動は他地区支部に比較して歴史が浅い。

2. 年度別地区支部長一覧（会員数）

昭和58年度	鍵谷信郎	(126名)
昭和59年度	鍵谷信郎	(127名)
昭和60年度	鍵谷信郎	(110名)
昭和61年度	住山明	(123名)
昭和62年度	住山明	(111名)
昭和63年度	薄孝三	(110名)
平成元年度	薄孝三	(113名)
平成2年度	薄孝三	(101名)
平成3年度	内海彰	(101名)

平成4年度 佐々木 春夫 (110名)

3. 平成4年度支部役員名

支部長	佐々木春夫	(熊石高校長)
副支部長	三原正士	(江差高校長)
副支部長	近藤充男	(熊石高校教頭)
監事	赤井之明	(江差高校教頭)
監事	小林優幸	(桧山北高校教頭)
監事	川元外治	(江差南高校教頭)
監事	木下修	(奥尻高校教頭)
監事	小木進	(上ノ国高校教頭)
監事	伊勢幸久	(瀬棚商業高等教頭)
監事	楠本高弘	(大成高校教頭)
国語	宮内隆幸	(桧山北高校教諭)
社会	五十嵐幸男	(江差高校教諭)
数学	大沼博史	(熊石高校教諭)
理科	前田精太郎	(江差高校教諭)

保 体 菊 地 薫 (江差高校教諭)
 芸 術 小 川 真 実 (熊石高校教諭)
 英 語 国 島 喜久男 (上ノ国高校教諭)
 家 庭 渡 辺 瑞 穂 (桧山北高校教諭)
 農 業 安 藤 広 (桧山北高校教諭)
 工 業 柳 谷 良 逸 (江差商高校教諭)
 商 業 難 波 繁 之 (瀬棚商業高校教諭)

4. 活動の状況 (桧山管内高等学校教育研究会を中心)

桧山管内には既に、昭和47年4月から、「桧山管内高等学校教育研究会」が発足し、全体集会及び教科部会研究会等を通じた活発な研究活動と情報の交換を積み重ねるなど、実績が高い。

「高等学校教育研究会桧山支部」は昭和58年度に道南支部から分離独立した経緯があり、桧山管内の高校教育の研究活動は前者を主体とした研究活動であると言うのが現状である。

とは言え、高校教育研究活動という実体には変わりがないので、平成4年度の事業（今後の予定を含む）概要を記して活動の報告とさせていただきます。

- ・芸術 期 間 6月26～27日
会 場 奥尻高等学校
研究主題 「生徒の興味に訴える実技指導」
発表者 本田 勝哉 (江差高校)
- ・保健 期 日 8月26～27日
体育 会 場 大成高等学校
研究主題 「臨海での体育行事、体育授業における安全指導について」
発表者 宮田五輪夫 (大成高校)
- ・家庭 期 日 8月28日～29日
会 場 上ノ国高等学校
研究主題 ①『「食物」の教材選定とその指導法について』
②『男女共修における教材選定とその指導法について』

公開授業 佐紹 摂子 (上ノ国高校)

・商業 期 日 9月17日～18日
会 場 瀬棚商業高等学校
研究主題 「LANを利用した商業教育」

提言者 難波 繁之 (瀬棚商業高校)
澤田 耕 (瀬棚商業高校)

・国語 期 日 9月25～26日
会 場 桧山北高等学校
研究主題 ①「現代文分野における表現指導の位置付け」
②「新カリキュラムに関する各校の現状報告及び情報交換」

交換授業 宮口 隆幸 (桧山北高校)

・理科 期 日 10月5日～6日
会 場 桧山北高校学校
公開授業 能條 歩(桧山北高校)
巡査 I めのう工場, ピリカカイギコウ産地, ピリカダム
巡査 II ピリカ温泉鐘乳洞, 底なし湯つぼ

・社会 期 日 10月27～28日 (予定)
会 場 熊石高等学校

・数学 期 日 11月20日～21日 (予定)
会 場 上ノ国高等学校

・英語 期 日 11月27日～28日 (予定)
会 場 江差南高等学校

・全体 期 日 1月13～14日 (予定)
集会 会 場 桧山北高等学校

各研究集会では泊を共にし参加者の親睦を深める機会が与えられ、情報を交換できることは桧山管内高等学校研究会の活動の特徴である。

紙面の都合で各部会の講師と助言者は省略させていただきました。

後志地区支部

昭和38年北海道高等学校教育研究会創立時には当地区支部は小樽・後志両支部に分かれており会員数が合わせて86名で発足しました。昭和40年度に206名と会員数も漸次増加し、創立10周年を迎え

員数が合わせて86名で発足しました。昭和40年度に206名と会員数も漸次増加し、創立10周年を迎え

た昭和47年度に小樽支部と後志支部が合併し、現在の後志地区として発足しました。その後20年を経過し、現在加入校9校、会員数261名となっております。

本研究会事業の一つである研究紀要には、当支部も1号より9号までの寄稿数28編を数えその後10号から19号までの10年間で13編の寄稿がありました。その後20号から平成3年度の29号までの寄稿数はやや減少しておりますが、各支部の原稿と共に巻を重ねる毎に実践研究の記録がそれぞれの学校で生かされており、今後さらに、本会の趣旨にそい、創意工夫を重ね充実した研究が期待されているところです。

1. 歴代支部長・事務局 (会員数)

昭58年度	佐藤 隆一	ニセコ高校	
昭59年度	朝日 博夫	真狩高校	(282)
昭60年度	朝日 博夫	真狩高校	(297)
昭61年度	竹田 良一	喜茂別高校	(279)
昭62年度	松田 光次	喜茂別高校	(282)
昭63年度	野田 武夫	留寿都高校	(260)
平元年度	伊藤 稔	留寿都高校	(249)
平2年度	北井 昭彦	蘭越高校	(248)
平3年度	北井 昭彦	蘭越高校	(248)
平4年度	齊藤 公生	寿都高校	(261)

2. 全道大会研究発表者 (昭58年度～平3年度)

昭58年度

- 「労働問題」の一考察 (古平) 中西 邦夫
- 「記録タイマーを利用した自由落下運動の測定についての一考察」 (喜茂別) 中嶋 紀男
- 工業基礎の内容と指導法について
(俱知安) 高瀬 昇

- 「地域に根ざした農業教育は如何にあるべきか」
—生涯学習者の育成をめざして—
(真狩) 海老原四郎
(真狩) 岡崎 正昭

- 「生徒指導のあり方—現状と課題」
(小樽商業) 川岸 育夫
- 「栽培漁業科における「栽培漁業」の指導内容と指導方法について」
(小樽水産) 高山 裕斌

昭59年度

- 「地理における指導・学習課程の総合的研究について」 (古平) 菊 正敏

昭60年度

- 「喜茂別周辺の地表上部をおおう火山碎屑物について」 (喜茂別) 中嶋 紀男

- 「『種目選択』を実施して
(桜陽) 成田 積

昭61年度

- 「植物栽培技術教育の導入」
(真狩) 岡崎 正昭

昭62年度

- 「陸上競技の目標をどう設定させるか『陸上競技の評価と関連させて』」
(余市) 中町栄次郎

昭63年度

- 「本校における理科クラブの活動状況」
(潮陵) 滝田 巍

- 「『北海道の火山』その教材化」
(喜茂別) 宮嶋 衛次

- 「本校のスポーツテストに関する実践について」 (桜陽) 佐藤 實

- 「イギリスの大学における外国人研修生のための英語集中講座からのヒント」
(俱知安) 川口 恵子

平元年度

- 「効果的なリスニングとスピーチングの指導」 (小樽工業) 伊藤 一正

平2年度

- 「日本史を教える上での基礎基本はどこに置くべきか」 (潮陵定) 浅井 尚人

平3年度

- 「ビデオを用いた私なりの授業の工夫～現代社会オリエンテーションを兼ねて環境問題をいかに取り上げたか～」 (古平) 城座 研

- 「物理教材に使える『道具・機械の任期』～物理LAで授業できること～」
(俱知安) 佐々木 淳

3. 平成4年度北海道高等学校教育研究会後志支部役員名簿

○支部長 齊藤 公生 寿都高等学校長
副支部長 竹沢 昌弘

(小樽桜陽高等学校教頭)
副支部長 保格 秀雄 (蘭越高等学校教頭)
○監事 小松 翼 (小樽潮陵)
監事 高山 裕斌 (小樽水産)
監事 谷川 博 (俱知安)
監事 斎藤 輝雄 (俱知安農業)
監事 秋本 一弘 (余市)
○幹事 地主卓司 (仁木商)

幹事	齊藤	力	(共和)
幹事	中津川	皓	(古平)
幹事	伊藤	雅章	(喜茂別)
幹事	鈴木	齊	(ニセコ)
○国語	熊谷	正志	(俱知安)
社会	城座	研一	(古平)
数学	清水	隆弘	(喜茂別)
理科	佐々木	正克	(岩内)
保育	加藤	修	(寿都)

養護	小金	和子	(蘭越)
芸術	三上	俊明	(小樽桜陽)
英語	宮嶋	興二	(小樽潮陵)
家庭	谷内	総子	(真狩)
農業	高木	真一	(俱知安農業)
工業	吉川	弘明	(小樽工業)
商業	長谷川	詢	(小樽商業)
水産	平沖	道治	(小樽水産)

(寿都高等学校教頭 折戸 昭夫)

南空知地区支部

1 南空知地区の概況

南空知地区は、夕張、美唄、三笠という過去に大きな炭鉱地をかかえてきた地域であり、人口の減少による中学校卒業生の急減から、この10年間に、当地区的学校の状況は大きく変化した。

今年度、当地区的学校状況は、高等学校18校、高等養護学校1校で、10年前の昭和57年度と比較すると、高等学校数2減、間口数で全日制22減、定時制4減である。この傾向は、平成9年度まで続くものと考えられる。

2 会員数及び支部長校

高等学校の間口減に伴って、教員数が減少している現状もあるが、本研究会の発足当初の勢いが少しづつ弱まっていることから、当支部の会員数は減少の傾向にある。各学校の協力を得て、再び会員数の増加を図っていく必要がある。

会員数推移

年 度	58	59	60	61	62	63	1	2	3	4
会員数	279	303	295	290	268	227	231	247	224	207

支部長校は、発足直後一校に偏ったが、この弊害を反省して2~4年で交代しながら支部の運営に当たり、会員の啓発に努めているところである。

歴代支部長・事務局

年度	支 部 長	事 務 局 校	事 務 担 当 者
58	雨梅重嗣	長沼高校	高橋久志
59	新江政義	栗山高校	小林昭一
60	新江政義	栗山高校	小林昭一
61	丸山恵敬	美唄南高校	加藤正司
62	丸山恵敬	美唄南高校	奥平松一
63	磯部誠一	美唄南高校	奥平松一

1	磯部誠一	美唄南高校	小川俊三
2	和角一	岩見沢東高校	丸山豊
3	玉山治義	岩見沢東高校	丸山豊
4	玉山治義	岩見沢東高校	丸山豊

3 支部活動

会員相互の研修活動を地区支部として確立すべく、毎年度の支部長が努力をしているが、当地区には南空知高等学校連盟のもとに、教務部会、生徒指導部会、進路指導部会、養護部会、北理研、高音研、家庭研、商業研、倫理社会研、現代社会研、教育相談研、高放視研、情報教育研などがあり、各研究会は活発にしているところである。

このうえ、高教研として各教科の活動を行うことは混乱を招く恐れがあることから、支部としては特別に行事を行なうことはしていなかった。

しかし、平成3年度、支部として研修会をもち、教養を高めることも意義があることのことで、講演会を実施したが、盛会裡に終了することができた。

平成3年度高等学校研究会南空知地支部研修会

- (1) 目的……各階層の人々との交流を通して幅広い知識を得、教養を高めるとともに、創造性や先見性を身につけ、今後の教育活動に資する。
- (2) 期日……平成3年12月2日(月)
- (3) 会場……空知農業会館
- (4) 講師……近藤尚先生
陶芸家、「栗沢窯」開窯者
日本工芸会東京支部会員
道美術会員
日本工業美術家連盟会員

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

当地区は、地理的に札幌に近く、毎年1月に札幌で開催される研究大会には、多くの会員が参加している。また、この研究大会における研究発表及び本会の研究紀要への論文掲載には、当地区から積極的に日常の教育実践を発表し、本道教育の発展に貢献をしているが、さらに当支部の研究意欲を高め、今後も多くの人たちからの発表を望みたい。

研究発表者・研究紀要掲載者

年度	項目	学校名	氏名	教科
昭58	研發	岩見沢東	巣田脩	国語
		夕張北	大久保雅弘	社会
		岩見沢東	名西勵	理科
	紀要	夕張北	大久保雅弘	社会
		夕張北	丸山登太郎	数学
		美唄工業	田納正範	工業
59	研發	夕張北	太田尚寛	社会
		夕張北	亀岡敏克	社会
60	研發			

62	研發	南幌	田辺彰宏	理科
		岩見沢農業	押田勇	農業
		夕張北	加藤達夫	理科
	紀要	夕張工業	大西洋一	工業
		夕張北	鈴木敏雄	英語
		美唄東	浜津益恵	家庭
63	研發	月形	窪田範隆	社会
		美唄東	伊藤洋	理科
		南幌	中尾晃	英語
	紀要	美唄工業	杉澤投吉	工業
		美唄工業	寺本和啓	工業
		美唄工業	寺本和啓	工業
平2	研發			

5 今後の展望

今後の支部の活動としては、会員数の増加に努めるとともに、会員各位が日頃積み重ねた教育実践を、本研究会の発展に結びつけていくように働きかけていきたい。また、支部として研修の機会をもつ事業の推進を考えていきたい。

(岩見沢東高等学校教頭 丸山 豊)

北空知地区支部

1. 北空知高等学校連盟と高教研北空知地区支部

北空知高等学校連盟（北高連）は、総務部・事務部・体育部・文化部・研究部・指導部の6部で組織されている。この組織の中の研究部は、各教科、科目及び図書館・養護サークルの活動面をまとめ、研究部担当校校長は、高教研北区支部長を兼ねている。従って道高教研の傘下の組織として各教科、科目の担当理事を置きながらも、実質的な教科、科目の研究活動の母体は、研究部のサークルであると言ってよい。道高教研の地区支部としての直接的な活動は、2年に1度開催されている高教研地区支部研究大会のみである。その理由は、北高連という他地区支部と異なった独自の組織を持っていることに起因すると思われる。

2. 道高教研組織の発足と北高連研究部の由来

道高教研組織の発足した昭和38年に先立って、昭和26年、空知高等学校連盟が南北高等学校連盟に分離し、北高連として独立した時点で、教科・科目の教育研究活動の中枢をなす研究部が置かれていた。先行する北高連研究部をその組織から分離して、道高教研組織に組み込むことは困難であったのであろう。

3. 道高教研20周年記念誌より

1973年から82年までの10年間と言えば、一中略一員数も6,000人を超える一中略一歩を築き上げた時期とされるであろうかと思う。しかしながら、数的にも、これを発展というならば、北空知支部に関しては当たらない、といわねばならない。この地区は、石炭産業と水稻を主とする農業が主幹であったから、エネルギー部門の大転換や農業構造或いは食生活志向の変化がもたらした要因は、著しい激動を呼ぶものであったし、それらの影響も極めて顕著であった。

4. 1983年以降現在まで

20周年記念誌の引用の後段で述べられている状況は、その後の10年で何ら変容することなく、一層加速したと言える。数的な面での変遷を、20周年記念誌に載せられた資料に、以降10年分を加えることで示したい。
 「資料1」「会員数も、かつて400人を数えたところを、現在（1982年）は、ほぼ350名という現状である。」そして、1992年には232名である。「これは、そのまま、産炭地に於ける閉山或いは縮少、農業生産の変化に対応する人口の減少に裏打ちされているとすることが適當であろう。」

5. 北高連の教科サークルと研究部会

各教科、科目ごとに設けられたサークルと教務部長を以て構成される研究部会の実践・研究は、毎年「研究実践録」として刊行される。それが、1976年の増刊号以来、北高連誌として4年ごとに集録されている。教科、科目ごとのサークル活動の実践、研究が充実したものである点は、資料により窺い知ることができるであろう。〈資料2〉

資料1 (北海道高等学校長協会「北海道高等学校職員録」から)

	学校数	全日制を おく学校	定時制を おく学校	学級数 (うち定時制)	教員数 (うち定時制)	生徒数 (うち定時制)
昭和47年	24	19	13	345 (59)	821 (132)	13,391 (1,368)
昭和57年	21	20	4	277 (16)	682 (37)	9,835 (187)
平成4年	19	19	3	219 (12)	601 (31)	8,111 (210)

資料2 (平成3年度北高連研究サークル活動状況)

サークル名	活動状況	当番校実施時期
国語	国語科における教育課程編成のあり方(各学校の現状とこれからの問題点)、指導効果をあげるための工夫、各校の新学習指導要領への取り組み等について研究協議。	砂川北高校 平成4・1
現代社会	研究発表「インド・ネパールから眺めた日本」。自由討議、実践交流。 滝川市立郷土館巡検。	滝川西高校 平成4・2
歴史	「いかにして生徒にやる気を出させるか」研究討議。	歌志内高校 平成4・2
地理	研究発表「ツアーレイドを利用した地理教材について」。研究協議、研究発表についての意見交換、各校における社会科を中心とした教育課程編成の取り組みについて。	滝川高校 平成3・12
数学	「数学の授業とパソコンコンピューター」、道立教育研究所教科研究部数学教育研究室長小笠原英俊氏の講演。他学科授業参観。CAI体験。	芦別総技高校 平成3・11
物理	「原子力発電の未来」、理学博士大塚益比古氏の講演。内容はエネルギーと環境問題、原子力発電の未来。	秩父別高校 平成3・11
化学	トランジスタによるボルタ電池增幅器の作成。住電KK、釜屋電気工場の見学。	奈井江商業高校 平成3・10
生物地学	雨龍湿原の実態調査。事前研修、湿原の巡査、事後研修。	滝川西高校 平成3・9
英語	授業参観。「英語教育におけるドラマ的手法について」空知教育局AET S・ビューアイック氏の講演。講演についての質疑。	歌志内高校 平成3・11
芸術	全体研究発表「均整な文字の書き方」。音楽分科会「ソルフェージュの具体的導入について」。美術分科会「鑑賞及び表現指導の融合について」。書道分科会「半切り指導について」。各々研究討議。	砂川南高校 平成3・11
家庭	「家庭科の男女共通必修について」、研究討議。丸加高原伝習館の見学。	滝川北高校 平成3・11
工業	上砂川町地下無重力センター見学。滝川工業高校自主教材、空気圧駆動ロボットの演示説明。	滝川工業高校 平成3・12
商業	研究授業「オフィスオートメーション」。研究発表及び研究協議、「課題研究」について。	芦別総技高校 平成3・10
養護	レポート発表及び研究協議「パソコンによる学校保健のデータ処理」。「高校生の食文化を考える」、道消費者生活コンサルタント石井玲子氏の講演。各校の現状報告。	深川農業高校 平成3・11
図書	総会。研究協議「図書館活動を活発化させるためにはどうしたらよいか」。	芦別総技高校 平成3・8

6. 将来に向けて—課題—

北高連独自の教科サークルの地道な実践活動を更に充実させていく必要性と同時に、時期を得て道高教研との有機的な結びつきを求めて、実態を検証、分析してみる必要はないだろうか。道高教研が非会員にも門戸を開いていることに甘えてばかりおられないであろう。

上川地区支部

1 支部の推移

当支部は、昭和47年の高校長協会の地区割の変更にともない、それ以前の旭川支部に名寄の一部が合併し、現在の名称である上川支部として、高教研の活動を行ってきた。

支部長は、当支部発足当初の昭和38年度から42年度までの5年間、旭川東高校長があたられ当会の趣旨・目的の周知及び教科研究、支部組織の推進に努められた。

43年度からは、旭川市内の校長が2年間ずつの持ち回りとなり、支部活動の充実、発展を図ってきた。昭和58年度から平成4年度までの歴代支部長は別表に掲載した。

その他の役員、教科理事については、副支部長が2名で、1名は次回支部長校の校長、他の1名は名寄高校教頭である。監事は2名とし、旭川市内の教頭が担当している。教科理事は、各教科2名ずつ配置し、年度ごと各校に依頼している。

次に、会員数の推移をみると、当支部創立時には、223名、10周年の47年度には支部改変による加盟校の増加にもよるが、774名と3倍以上の会員数を擁していた。その後、48年度の789名をピークに漸減し、20周年の昭和57年度には643名、更に30周年の平成4年度は488名と減少の傾向になる。

2 支部の活動

毎年9月に地区支部役員・教科理事研究会を開催し、会務報告、事業計画、予算審議及び本部からの連絡等を行っている。又当支部発足当初から各教科研究会等を支援しており、特に昭和61年度に次の基準を設け、役員・教科理事の承認を得て、2~3の教科研究会等に例年それぞれ1万円ずつ助成をしている。

「教科研究会補助費の支出基準について」

(1) 北海道高等学校教育研究会上川支部が主催または共催により開催される大会・研究会について補助する。

(2) その他北海道高等学校教育研究会との係わりが深いものと支部長が判断した場合、役員の同意を得て補助することができる。

これまでに、上川北部高等学校保健・体育教育研究会、北海道高等学校英語弁論大会道北地区大会などに補助をしてきた。

なお、高教研研究紀要の掲載者は別表に掲げてあるように、教科に関するものが多く、教職一般

に関するものは本年度がはじめてである。あらゆる分野での研究発表を期待したいものである。

支部長・事務局及び会員数

年度	支 部 長	事務局校	事務担当者	会員数
S 58	佐々木浩充	旭 西	藤田 明郎	659
59	小柳 慶一	旭 北	佐藤 弘	654
60	小柳 慶一	旭 北	佐藤 弘	648
61	久住 盛	旭 工	村井 猛	603
62	小泉善治郎	旭 工	柚原 秀明	567
63	三上 尚志	旭 商	坂本源之助	569
H元	三上 尚志	旭 商	久保 茂光	568
2	竹田 良一	旭凌雲	藤原 忠	541
3	竹田 良一	旭凌雲	平井 文雄	545
4	奥田 利恒	旭東栄	笈川 晃一	488

研究紀要掲載者

年度	研究 紀 要 掲 載 者		
S 58	数 学	(旭北)	原 順一
59	国 語	(旭東)	島田 信重
	英 語	(旭西)	中島 隆智
	工 業	(旭工)	吉田 洋
60			
61	国 語	(名寄工)	石本 裕之
	社 会	(土別)	村田 尋如
	英 語	(名寄恵陵)	石本 祐子
62			
63	家 庭	(鷹栖)	二川 恭子
	商 業	(旭商)	土井 博之
H元			
2	社 会	(美瑛)	岸 甫一
	商 業	(中川商)	工藤 昭男
3	数 学	(旭東)	長岡 耕一
	商 業	(下川商)	商 業 科
4	教職一般	(旭農)	山名 国裕
			満月 広人
	商 業	(中川商)	山下 肇二

3 今後の課題

先に述べたように、課題の第1は会員数の確保である。減少傾向の要因はさまざまにあろうかと思われるが、一つには全道大会への参加が非会員でも容易であるという安心感、今一つには会員加

入費に対する学校事情、つまり個人負担、学校負担などの問題もあろうと考えられる。いずれにしても、高教研設立の趣旨、目的等を今一度考え、啓蒙を図っていかなければならぬ。

次に、支部活動の活性化について、現在年1回支部役員・教科理事研究会を実施しているが、この会もマンネリ化してきており、見直しの時期にあり、充実、改善を図っていきたい。同時に当支

部研究会との係わりのあるなしに拘らず、支部内の教科、分掌の研究会などと連携を図り、高教研の裾野を出来るだけ広げていきたい。

以上、北海道高等学校教育研究会30周年にあたり、当支部の30年の歩みと課題の概略を述べたが、これを機に新しい発想のもと、創意工夫を重ね、当支部の益々の充実、発展を図っていきたい。

(旭川東栄高等学校長 奥田 利恒)

留萌地区支部

1. 現況

留萌地区は北海道の西北部、日本海に面し、東北約67km、南北155kmの帶状で1市7町村の行政地区に分かれている。

管内の小学校48校、中学校24校、そして高校は8校と少ないが、南北に長く、離島も含まれていることから会合の機会をもつことが非常に困難な地域である。

しかし、この10年間、会員の数には変動があるが全教科別研究会、及び各種研究会が実施されるようになり、研究成果、業績の発表等も活発に行われつつある。

2. 年度別地区支部長及び会員数

年度	支 部 長 名	学 校 名	会員数
42	虎 谷 勇 作	羽 幌	137
43	虎 谷 勇 作	羽 幌	153
33	虎 谷 勇 作	羽 幌	151
45	正 津 富 男	増 毛	161
46	鈴 木 新 造	増 毛	155
47	山 下 三 郎	苦 商	154
48	山 下 三 郎	苦 商	167
49	野 崎 光 秀	苦 商	172
50	野 崎 光 秀	苦 商	190
51	野 崎 光 秀	苦 商	197
52	野 崎 光 秀	苦 商	184
53	佐 藤 枝 郎	苦 商	200
54	佐 藤 枝 郎	苦 商	191
55	三 上 尚 志	苦 商	197
56	三 上 尚 志	苦 商	187
57	三 上 尚 志	苦 商	175
58	乙 坂 英 司	苦 商	151
59	乙 坂 英 司	苦 商	165

60	乙 坂 英 司	苦 商	152
61	松 田 靖 夫	苦 商	139
62	松 田 靖 夫	苦 商	132
63	松 田 靖 夫	苦 商	127
元	柴 田 重 則	苦 商	129
2	柴 田 重 則	苦 商	122
3	柴 田 重 則	苦 商	113
4	安 田 健 七	苦 商	(103)

3. 北海道高等学校教育研究会 留萌支部規定

第1章 総 則

第1条 この会は北海道高等学校教育研究会留萌地区支部長の所属校に置く。

第2条 この会は北海道高等学校教育研究会々則第3条の目的を達成するため、同会則第4条の事業を行う。

第3条 この会の会員は北海道高等学校教育研究会の会員であつて留萌地区支部内の者をもつて組織する。

第2章 役 員

第4条 この会に次の役員を置く

- 1. 地区支部長 1名
- 2. 地区副支部長 2名
- 3. 監 事 2名
- 4. 理 事 1名
- 5. 監 事 若干名

第5条 地区支部長、監事は地区支部において選任し、理事・監事は地区支部長が委嘱する。役員の任期は2年とする。

第6条 1. 地区支部長は地区部を統轄し、本部役員となる。

- 2. 地区副支部長
- 3. 監事は業務及び会計を監査する。
- 4. 理事は会務の運営庶務の処理の中心となる。

5. 監事は会務の運営庶務の処理にあたる。

第3章 機 関

第7条 この会の機関とて役員会を置く。

第8条 役員会は適宜これを開きこの会の運営に関する事項を審議する。

第4章 会 計

第9条 この会の経費は北海道高等学校教育研究会の事業費およびその他をもってこれに当てる。

第10条 この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

附 則

1. この規定の改廃は役員会による。
2. この規定は昭和42年7月18日より施行する。

4. 平成4年度留萌地区支部役員

役職名	役員名	学校名
支部長	安田健七	苦商
副支部長	有澤松司	天塩
副支部長	長多廣	遠農
監事	小池一夫	留工
監事	高田健伍	天壳
理事	多田直治	苦商
幹事	松崎拓郎	留萌
幹事	佐藤正吾	羽幌
幹事	高瀬昇	留工
幹事	宮川靖夫	天塩

幹	事	山	口	芳	雄	増	毛
國	語	前	田	英	伸	苦	商
社	會	奥	谷	忠	浩	天	塩
數	學	豊	島	玉	肇	天	塩
理	科	児	工	藤	隆	留	萌
保	體	工	渡	辺	祐	遠	農
養	護	渡	西	條	美	留	工
芸	術	西	煙	真	子	増	毛
英	語	煙	山	人	訓	留	工
家	庭	山	田	訓		苦	商
農	業	竹	田	富	美	遠	農
工	業	井	畠	美	子	留	工
商	業	千	畠	俊	哲	苦	商
水	產	小	越	茂		天	売

5. 課題と展望

留萌管内は例年、新採用教員が多いこと、しかも、1校の教科担当者が1名という学校も多くある。

このような状況のもと、教科指導、生徒指導の面での相互の研究会を多く持ち、多様化している生徒の指導に対応していかなければならない課題がある。

今後、地区支部活動を拠りどころとして、研修交流の機会を拡充し、留萌管内の高校教育の一層の質的充実のため努めたいと念じている。

(苦前商業高等学校 教頭 多田 直治)

宗谷地区支部

宗谷地区は20周年記念誌に記載されているように、当初は上川北部及び宗谷地区を含む名寄地区支部として発足した。その後、昭和47年初頭の地区支部再編成に際し、宗谷地区支部として改編独立し、今日に至っている。現在、公立8校、私立1校の合わせて9校があり、当地区支部発足時と学校数は同じであるが、適正配置計画による間口減の影響もあた、会員数はここ数年110名前後の登録となっており、10年前と比べると約30名減となっている。

宗谷地区支部の事業としては、当初は宗谷地区教育局及び高校長協会宗谷支部と連携して教科に関するものをはじめ各種研究会を共催で実施していたが、昭和57年度に研究会のあり方について再

検討された結果、教科に関するものについては從来どおり高校長協会宗谷支部と高教研宗谷地区支部とが共催で、教科以外の領域に関するものについては宗谷教育局が主催することになった。以後校長会研究会協議会、教頭会研究協議会も含め学校事情等も十分に勘案して当番校、司会者、研究発表者(2名)のローテーションを定め、計画的に開催してきた。

高校長協会宗谷支部と高教研宗谷地区支部とで共催する教科研究会は学校数が少ないとや参加旅費の問題等もあり、各教科とも隔年開催となっている。この2年間は「新学習指導要領の趣旨を具現化するための教科・科目における指導はどうあるべきか」をメイン・テーマに、それぞれの教

科の指導上の課題について研究協議を深め、地域や生徒の実態に即した指導の充実を図っている。研究発表者とその主題は次のとおりである。

理科教科研究会 3/9/26

於 中頓別農業高等学校

「地域巡検学習での事前学習発表会の実施について」 豊富高等学校 伴井 善明 教諭
「高校での仮説実験授業」

稚内商工高等学校 佐々木 功 教諭

「理科Ⅰにおける生殖と発生の実践」

稚内商工高等学校 前田 敏章 教諭
数学科教科研究会 3/10/7

於 稚内商工高等学校

「低学力者の指導について」

利尻高等学校 岩崎 泰樹 教諭

「本校における指導法について」

豊富高等学校 吉田 賢一 教諭

保体科教科研究会 3/10/11

於 浜頓別高等学校

「スキー授業における効果的な指導について」

中頓別農業高等学校 大堀 賢治 教諭
「女子柔道の実技指導の実践について」

稚内商工高等学校 秋月 浩二 教諭
家庭科教科研究会 4/6/26

於 枝幸高等学校

「生徒が主体的に取り組める調理実習の試み」

中頓別農業高等学校 福本 智子 教諭
「住生活の指導について」

稚内大谷高等学校 宮川 道枝 教諭
社会科教科研究会 4/9/8

於 利尻高等学校

「ものを使った授業」

稚内商工高等学校 松本 直樹 教諭
「地理における作業学習の取り組み」

浜頓別高等学校 田村 豊 教諭
英語科教科研究会 4/10/5 於 礼文高等学校

「生徒を英語嫌いにしないための工夫」

豊富高等学校 糸 哲生 教諭

「学習指導要領の目標とチームティーチング」

稚内高等学校 辻 歩 教諭

国語教科研究会 4/10/8

於 稚内商工高等学校

「詩に親しめる授業をめざして」

中頓別農業高等学校 斎藤 錠二 教諭

「古文の暗唱指導」

利尻高等学校 古川 勝也 教諭

宗谷地区支部独立以来20年にわたってこのように教科研究会が計画的に開催され、教科の指導力の向上と、教師としての資質を高める上で大いに貢献している。今年度の家庭科教科研究会では北海道教育庁学校教育課、斎木政子指導主事を迎え活発な研究協議がなされた。その折、平成6年度からの男女共習を目前にし、当分の間、毎年開催してほしいとの要望が出された。当支部としてもその重要性を十分に認識し、前向きに検討中である。

この地区的教員は初任者が圧倒的に多く、2校勤務者にしても大半がA・B地区からの「新任4年目」である。この先何十年と教育に携わる人達であり、これから北海道の教育を担っていく人達といつても過言ではない。また、この地区は小規模校が多く、自校内では教科の研修を深める機会に恵まれず、「井の中の蛙」になりがちである。このような中で、この教科研究会を通して情報交換をし、教師間・学校間の連携を深め相互に刺激しあい、高めあうことは非常に意義のあることである。このように当支部の活動は高校長協会宗谷支部との密接な連携のもと地道に行われているが、会員の組織率は10年前と比較してやや低下している。今一度、高教研設立の趣旨・目的をアピールし、会員の増加を図ることが今後の課題である。

(豊富高等学校教頭 富士田祐三郎)

網走地区支部

1. 会員登録数の推移

昭和53年度～56年度の会員登録数は、歴代支部長のご努力により500人台となり、会員登録率も54%に達するまでとなった。その後4か年間は400人台を維持してきたが、昭和62年度より300人台に減少し、現在まで横ばい状態が続いている。な

お、歴代支部長、事務局校及び会員数については、下表のとおりである。

2. 支部活動

高教研網走地区支部と既設の各種管内教科研究会との関連については、過去に検討事項として、問題提起されたが、それぞれの教科研究会が活発

な活動をしてきた経過をふまえ、高教研支部研究会を設けることは、運営上むずかしいとして保留にされたまま今日に至っている。英語、数学教科研について、管内ブロック別の研究会にとどまり管内教科研究会として一本化がはかられていた。しかし、英語教科研究会については、本年度、湧別高等学校市川校長先生のお骨折りによって、管内高等学校英語教育研究会が設立され、去る9月25日、第1回管内高等学校英語教育研究会が盛大に開催されたことは、特筆すべきことである。管内高校数学研究会についても、現在、紋別北高が中心となって、設立の準備が進められている。

支部長・事務局校及び会員数一覧

年度	支 部 長	事 務 局 校	事 務 担 当 者	会 員 数
昭58	佐々木宰	斜里高校	佐藤 弘	457
59	久住 盛	紋別南	宝金克威	434
60	高橋伸夫	紋別南	宝金克威	418
61	原田由正	北見柏陽	畠山康正	397
62	原田由正	北見柏陽	畠山康正	365
63	工藤光夫	紋別北	垣内堯男	361
平1	旦股力雄	紋別北	垣内堯男	359
2	望月重幸	網走南ヶ丘	谷川 博	307
3	森 貞司	網走南ヶ丘	谷川 博	322
4	蓑口一光	北見緑陵	瀬戸 潔	339

3. 研究紀要掲載者及び全道大会研究発表者

会員登録数については、300人台を維持し、横ばい状態にあるが、研究紀要論文掲載者数は、5編あり、また、全道大会研究発表も、ほぼ毎年行われていることは、管内の活発な研究活動のあらわれである。

(1) 研究紀要掲載者

・昭和59年度(第22号)

情報利用による『総合実践』—第3学年の『総合実践の効果的な学習指導法—

北見商 奥平 松一

・昭和62年度(第25号)

各種企業内研修を終えて

—これからのマーケティング教育を考える—

北見商 加藤 正章

・平成元年度(第27号)

倫理における対話教材の導入について

—「哲学的談話室」の実践と分析

紋別北 中谷 信毅

地域に根ざした家庭科教育を目指して

—授業や家庭クラブ等を通しての高齢者教室との交流—

興 部 木村美和子

・平成2年度(第28号)

「紋別沖揚げ音頭」を巡って

—紋別市における芸術・文化活動の概要—

紋別北 松本 良一

・平成3年度(第29号)

倫理思想の志向的分析

紋別北 中谷 信毅

(2) 全道大会研究発表者

・昭和58年度(第21回)

現 社 部 会 雄 武 広瀬 隆人

倫理社会部会 遠 軽 竹田 由則

政治経済部会 女満別 水谷十三博

数学部会 網向陽 稲葉 茂敏

化学部会 雄 武 松本 春樹

英語部会 北見商 笹原 洋子

・昭和59年度(第22回)

国 語 部 会 網南ヶ丘 柏倉 正明

物 理 部 会 湧 別 堀 良一

英 語 部 会 紋別北 中條 伸義

工 業 部 会 紋別南 吉川 弘明

商 業 部 会 北見商 奥平 松一

・昭和60年度(第23回)

日本史部会 雄 武 広瀬 隆人

生物部会 斜 里 鈴木 隆一

工 業 部 会 北見工 海老名 優

・昭和61年度(第24回)

国 語 部 会 興 部 塩谷 哲士

倫理社会部会 紋別北 香川 光広

〃〃 網向陽 沢田 展人

数 学 部 会 網向陽 稲葉 茂敏

理 科 部 会 湧 別 堀 良一

保健体育部会 雄 武 加藤 和美

商 業 部 会 北見商 佐藤 強

・昭和62年度(第25回)

現 社 部 会 訓子府 寒田 稔彦

地 理 部 会 紋別北 武田 英俊

家 庭 部 会 滝 上 内藤しおり

・平成元年度(第27回)

日本史部会 紋別北 吉嶺 茂樹

政治経済部会 紋別北 釣井幸次郎

英 語 部 会 美 幌 笹田 巍

・平成2年度(第28回)

倫理部会 紋別北 中谷 信毅

数学部会 滝 上 横山 徹

生物部会 紋別北 小島 晶夫
 英語部会 佐呂間 中川 了之
 •平成3年度(第29回)
 理科I・II部会 紋別北 小島 晶夫

4. 今後の課題

- (1) 支部として年1回総会(各校係1名, 各教科事務局1名)を開き, 決算報告, 事業計画など検討し, 同時に研修会(例: 講演会など)

を開きたい。

(2) 平成3年度まで, 未加入であった英語部会さらに数学部会が今年ようやく高教研に加入してもらったので, 多少の問題はあったが, より教科部会が活発化になるよう事務局としても努力していきたい。

(北見緑陵高等学校教頭瀬戸潔)

釧路地区支部

1. 釧路支部の独立

昭和38年北海道高等学校教育研究会が創立され, 以後釧路支部は根室支部と合同で「釧路地区支部」として活動していた。昭和57年4月より校長協会の支部から釧路と根室に分かれることになり, それに伴って昭和58年度より本支部も釧路支部として改編独立し10年を経て今日に至っている。

2. 歴代支部長及び会員数

昭和58年度からの歴代支部及び会員数は下記のとおりである。

年度	支 部 長	事 務 局 長	会員数
昭58	上野 充夫	釧路北陽高校	406
59	松田 治基	釧路北高校	403
60	松田 治基	釧路北高校	352
61	大沢 昭夫	釧路東高校	295
62	大沢 昭夫	釧路東高校	298
63	西堀 国康	釧路西高校	311
平元	中島 正明	釧路西高校	260
2	宮川 史章	釧路工業高校	298
3	宮川 史章	釧路工業高校	272
4	佐竹 祥嵩	釧路湖陵高校	256
	笹山 平	釧路湖陵高校	

3. 平成4年度釧路支部役員

役職名	氏 名	学校名
支 部 長	佐竹 祥嵩	釧路湖陵
	笹山 平	釧路湖陵
副支部長	五十嵐 松夫	釧路江南
副支部長	谷川 幸雄	釧路西
監 事	瀬川 守	釧路西
監 事	福井 誠一	釧路湖陵

国語会	畠山 次雄	釧路北
社会学	板内 寛人	釧路江南
数学	山下 秀一	阿寒
理科	本田 健一郎	弟子屈
理	西方 信之	釧路東
保育	佐藤 敬子	釧路湖陵
養護	高橋 聰	白糠
芸術	佐藤 信浩	釧路西
英語	今野 祐子	釧路星園
家庭	戸野 塚征支郎	標茶
農業	吉毛利 正也	釧路工業
工業	安斉 康彦	釧路商業
工商	平野井 篤	厚岸水産
水産		

4. 「研究紀要」掲載者(20~29号)

21号

○新教育課程と英語教育

釧路湖陵 土屋 章

21号

○ギンザケ海中飼養について

厚岸水産 三輪 孝明

23号

○日本音楽史の通史における時代区分の変遷について

厚岸潮見 波多野紀雄

25号

○エミュエル・ペケットの戯曲“ゴドーを待ちながら”に見られる一つの実験をめぐって

釧路北陽 鈴木 五郎

○釧路湿原における土壤動物群集の組織

釧路西 村上 肇

27号

○水産高校における情報処理教育について—漁業科での指導内容と効果的な指導法に関する

一考察－

厚岸水産 高橋 生

28号

○西脇順三郎研究ノオト－詩集「旅人かえらず」から「礼記」に至る詩的世界についての考察－

釧路工業 鈴木 五郎

○一斉授業における個別化

－食物領域－

釧路北陽 松澤 正枝

○THE BIBLICAL BACKGROUND OF EAST OF EDEN

釧路湖陵 鈴木 敏雄

5. 課題と展望

管内には各教科ごとの研究会、研修会等は若干あるものの、本会支部としての活動としては活発性に欠ける。毎年多くの若い教員が配属されるだけに、支部活動としての研修交流の拡充が必要であり、今後も一層地味な支部活動のために努めたい。

(釧路湖陵高等学校教頭 古谷 僥)

根室地区支部

北海道高等学校教育研究会が設立（昭和38年）されて20年間、当根室地区は釧根地区支部に所属し、釧路市内の高等学校が輪番で支部事務局を担当し、活動を続けてきました。昭和57年4月、高等学校長協会の釧根支部が釧路支部と根室支部とに分離独立することとなり、これに伴い、昭和58年に高等学校教育研究会支部も根室地区支部として独立、羅臼高等学校が事務局を担当することとなり、歴代校長が支部長を務めて、現在に至っております。根室管内の高等学校は道立6校、町立1校の合わせて7校で高教研の会員数（一覧表参

照）は年度により若干の消長はあるが130名前後の登録をみており、毎年の高教研大会への参加はもとより研究成果、業績の発表等については他の地区に勝るとも劣らない程活発であります。

現在高教研根室地区支部としての教科、科目部会や各種（領域別）研究会は殆ど開催されていないが、高等学校長協会根室支部及び根室教育局の後援や共催の形で教科、科目に関する研究協議会をはじめ、各種領域に関する研究協議会まで幅広く開催され、充実、発展しております。

下記の表にみられるように各教科並びに担当分

昭和58年度以降の主なる根室管内教科・各種研究会・当番校等一覧

組織名	昭和58年	59年	60年	61年	62年	63年	平成1年	2年	3年	4年
国語科教育研究会	標津高校	根室	根西	中農	中標	別海	羅臼	標津	根室	根西
社会科教育研究会	中標	標津	根西	羅臼	中農	根室	別海	中標	標津	根西
数学科教育研究会	羅臼	中標	別海	根西	根室	中農	標津	羅臼	中標	別海
理科教育研究会	根室	標津	根西	羅臼	中農	中標	根室	標津	別海	根西
英語科教育研究会	標津	根西	別海	根室	羅臼	中農	中標	標津	根西	別海
保健体育科教育研究会	根西	中農	中標	別海	羅臼	標津	根室	根西	中農	中標
課程科教育研究会 (釧根地区)	釧星	根室	釧星	釧陽	標津	釧湖	釧東	別海	釧江	釧西
商業科教育研究会	根室	中標	根室	中標	根室	中標	根室	中標	根室	中標
生徒指導連絡協議会	中農	根西	羅臼	標津	別海	根室	中標	中農	根西	羅臼
進路指導協議会	羅臼	中農	標津	根室	中標	根西	別海	羅臼	中農	標津
教務担当者連絡協議会	根室	別海	羅臼	標津	根西	中標	中農	根室	別海	羅臼
学校教育相談研究会	釧湖	釧江	釧星	釧北	釧陽	別海設立	別海	羅臼	羅臼	根室
養護教諭研究会	釧	根	地	区	合	同	中標設立	中標	根西	中農
情報教育研究会							別海設立	別海	別海	中標
高教研根室地区支部会員数	128人	114	120	120	132	127	145	120	132	131

※根西－根室西 中標－中標津 中農－中標津農業

掌、分野の研鑽に努め、その成果を携えたり、より高い自己研修を期待して、毎年の北海道高等学校教育研究大会に多数の先生方が参加しております。特に教科部会の研究発表、記録、司会等に積極的に加わり、研究大会の充実・発展につくされたり、毎年発行される研究紀要にも根室地区の会員の日頃の研究の発表がみられることは誠に心強い限りであります。根室地区の7校の各高等学校が各校独自の研究、実践を研究紀要として毎年編集し、それを交換しあっていることも大変よい刺激となっている。加えて当地区は1市4町すべてが小、中、高の一貫教育の研究、実践を3年前から実施して、公開授業はもとより、連携指導、地区活動に着々と成果をあげている。

今後の課題と展望

根室管内高等学校教科教育研究協議会と北海道高等学校教育研究会根室地区支部との組織としての連携が今後の課題として残されています。

当地区は北海道の東端に位置し、交通の便が悪い、隣接高等学校間の距離が遠い、新任教員が多

い等決して恵まれた条件にあるとは言えないが会員各位が教育に対する真摯な情熱をたぎらせ、管内教科研究協議会の一員として又高教研の会員として、研究・研修及び実践活動に日夜努力されております。

今、学校教育並びに教師に課せられた使命は一人ひとりの生徒がこれから生涯学習社会において、主体的・創造的に生きることができる資質や能力を培うことであります。これまでの知識、技能重視の教育から自ら考え、主体的に判断し、行動できる理性や感性の育成を重視する教育へと学校教育の流れを変えることに努力することでもあります。具体策は自己教育の育成と個性を生かす教育の推進にあります。私達教師一人ひとりが生徒のよさを生かす教育、新しい学力観に立つ教育、教師の指導観の転換を求めて研鑽を積むことが管内の高等学校教育、ひいては本道教育界の前進に貢献するものと期待しております。

(羅臼高等学校長 平原 隆)

十勝地区支部

昭和38年北海道高等学校教育研究会が創立され、十勝地区支部では、藤田武男帯広柏葉高等学校長が初代地区支部長となり、各学校長の協力推進のもとに、多くの先生方が会員として加入し発足した。2年目の昭和39年には253名と会員も急速に増え、その後、徐々に会員数も増加して昭和56年、昭和57年には最高410名に達している。

研究会の会員数は毎年350名前後に定着し、創立30年目の今日までの10年間は会員数は安定した状況にある。

また、地区支部の支部長は次の通りであり、十勝地区支部の重鎮として、地区支部全体の発展に大きく貢献された。

支部長・会員数一覧

年度	支部長	高等学校名	会員数
昭和58	黒沼友一	帯広緑陽高等学校長	389
59	黒沼友一	帯広緑陽高等学校長	385
60	中島竜雄	音更高等学校長	400
61	中島竜雄	音更高等学校長	373
62	倉林雄幸	芽室高等学校長	370
63	山岸唯夫	芽室高等学校長	373

平成 1	増谷龍三	清水高等学校長	378
2	横田正人	清水高等学校長	363
3	田川 昭	幕別高等学校長	340
4	斎川信幸	幕別高等学校長	342

さて、この地区支部の内容をみると、地区内では内容は乏しい。北理研、北生研、数学教研、社会科教研、保育教研、家庭科教研など、教科研究組織があって、それぞれ独立し、相応の内容をつくっているのであるが、当地区支部とは直接つながりをもたない。

その中でも北海道高等学校英語弁論大会十勝地区大会が毎年盛大におこなわれている。

(幕別高等学校教頭 中野 雅教)

胆振地区支部

20周年記念誌の「胆振支部のあゆみ」には、支部事業として日高、胆振両支部合同の研究協議会が毎年開催され、多数の会員の参加があったことそして、会員数が500名前後の多きをかぞえていたこと他が記述されておりました。

その後10年間の支部の活動は、古い記録が不明ですのではっきりしない面もありますが、日胆両支部の合同研究協議会もいつのころからか開催されなくなり、各支部ごとの活動に変わってまいりました。胆振支部としては、その後各教科ごとの研究協議がなされておりますが、高教研の支部が深くかかわったのは、ごく限られたものになってまいりました。

最近の活動では平成元年度に理科、3年度に英語の研究協議に後援してきた程度で、他支部の活動に比べかなり見劣りするものになってしましました。

しかし、毎年開かれます本部研究大会の各教科部会においては、当胆振支部の先生方は随分と研究発表されております。また、「研究紀要」に執筆投稿された先生も多くおられ、これらは支部の事業に直接の係わりはないかも知れませんが、今後は何からの形でその研究を援助すべきだと考えております。

現在、30周年を機としてかつての活発な活動に戻すべく計画を練っているところです。

この10年間の会員の推移は別表のとおりで、59年度の515名を最大に漸減しており、平成4年度は360名とピーク時の155名減となっております。

これは、支部の活動が不活発であることが一部

影響しているものと反省し、この点からも事業の拡大発展を図っていかなければと考えております。

最後に昭和58年度以降の会員数、「研究紀要」執筆者名を記して、粗末なものとなりましたが、胆振支部10年の歩みとさせていただきます。

1. 会員数の推移（昭和58年度～平成4年度）

年 度	昭 58	59	60	61	62	63	平 1	2	3	4
会員数	506	515	510	409	413	385	385	399	382	360

2. 「研究紀要」執筆者一覧（敬称略）

号	教 科	氏 名	勤 務 校
20 (昭58.3)	英 語	多 田 英 夫	苫小牧南高
	理 科	四十九院正雄	登 別 高
21	英 語	井 上 貞 明	登 別 高
	家 庭	宮 家 優 子	追 分 高
22	英 語	齊 昌 巳	室 蘭 工 高
	工 業	宍 戸 寛	室 蘭 工 高
	生徒指導	大 島 巖	室 蘭 商 業 高
23	理 科	丸 山 博	登 別 南 高
24	国 語	渡 辺 登	室 蘭 栄 高
	理 科	丸 山 博	登 別 南 高
	工 業	浅 野 吉 保	苫 小 牧 工 高
27	国 語	渡 辺 登	室 蘭 栄 高
28	英 語	牧 野 篤	苫 小 牧 南 高
29	家 庭	浅 井 寿 子	苫 小 牧 南 高

（室蘭工業高等学校長 吉田 嘉彦）

日高地区支部

日高地区支部は8校による「日高地区高等学校連盟」（昭和52年発足）を組織し15年が経過している。途中定期制課程の閉課等があつて部会の開催についても幾多の変遷を経ながら、①教務、②生徒指導、③進路指導、④教育相談の4部会と、⑤教科部会；国語、社会、数学、理科、英語、体育、家庭、商業（8教科）について当番校を定め研究協議会を計画的に行なっている。

上記①、②、④については日高教育局との共催の形をとっている。

平成4年度の開催予定は別表の通りであり既に実施済みの部会もあるが、現在実施計画を進めているところである。

実施内容は各部会とも研究協議題を定め、公開授業、講演、研究発表、協議、地域の施設見学等となっている。講師、助言者については管内の校長、教頭、日高教育局が担当することが多いが、部会によっては外部から招聘することもある。

本連盟は昭和52年に発足以来、時に試行錯誤を重ねながら、次第に活動も定着し軌道に乗ってき

たところであったが、この間、集録の刊行には至らないまま当分経過してきていた。このことは何とも残念なことであり、勿体ないことであった。折角の研究成果を記録として保存し、系統立て普及を図り発展させていくために是非集録にまとめて軌跡を明らかにしておきたいという気運が高まり、昭和63年度から実現をみることになった。

「研究集録」刊行の実績は以後4年を経過して管内の研究成果の資料として、指導力の向上、教育水準の維持向上に活用されるようになり、これも発足以来10年余にわたる黙々とした活動実績があつたればこそその所産であり、連盟を支えてこられた先輩各位のご努力に思いを新たにするものである。今後も年度毎の「研究集録」を編纂刊行し、各校、各教師相互の啓発を促進する営みの証しなり、確かな財産となっていくことを念じているところである。

年度別支部長・事務局一覧

年 度	支 部 長	事務局	事務担当
昭和58	乾 正	様似高	会田 純俊
59	乾 正	様似高	菅生 肇
60	磯部 誠一	様似高	菅生 肇
61	磯部 誠一	様似高	吉口 新一
62	磯部 誠一	様似高	吉口 新一
63	川又 一善	平取高	渡利 淳
平成1	戸部 大了	平取高	渡利 淳
2	戸部 大了	平取高	伊藤 勝夫
3	佐藤 満	平取高	伊藤 勝夫
4	佐藤 重喜	平取高	小林 茂

平成3年度の各部会の開催状況

(1)教務部会 (11月~20日, 当番校; えりも高校)

①研究協議題

- I. 生徒や地域の実態に応じた教育課程の編成・実施

- II. 生徒の意欲を高める評価方法の工夫実践

②研究発表者

- I. 日高高校 館 行環
- II. 静内高校 大泉 幸一

③講 師

- 「学校経営における教務の役割」

浦河高校教頭 佐藤 重喜

(2)生徒の指導部会 (11月11~12日 当番校; 静内高校)

①研究協議題

- 学校不適応の実態と、適切な対応をどのように

にしたらよいか。

②研究発表者

I. 浦河高校 豊島 徳明

II. 平取高校 池田 毅司

③講 師

- 「生徒理解に基づく生徒指導」

様似高等学校長 吉川 實

(3)進路指導部会 (10月31日 当番校; 平取高校)

次の4点につき各校の現状を発表後、研究協議

- 1. 各校の進路希望状況と問題点

- 2. 各校の求人状況および就職内定状況

- 3. 各校の進路指導上の問題点と打開策

- 4. 卒業生に対する追跡調査と、その生かし方

(4)教育相談部会 (10月22日 当番校; 静内高校)

①研究協議

各校が「教育相談の現状と課題」について発表、次の観点で研究協議

- 問題生徒の指導の方法と留意点

- 保健室での養護教諭との係わり

- 諸検査の実施とその活用方法

- 教育相談の校内研修のあり方

②講 話

- 「学校教育における教育相談の意義と役割」

日高教育局高校教育指導班主査

佐藤 幹雄

平成4年度日高地区高等学校連盟部会開催日程

部 会	開 催 日	当 番 校
教 务	11月10~11日	静 内 農 高 校
生徒指導	11月10~11日	え り も 高 校
進路指導	10月29日	様 似 高 校
教育相談	10月20日	静 内 高 校
国 語	11月13日	静 内 高 校
社 会	10月15日	浦 河 高 校
数 学	10月27日	平 取 高 校
理 科	10月29日	富 川 高 校
体 育	9月29日	え り も 高 校
英 語	10月21日	平 取 高 校
商 業	9月3~4日	様 似 高 校
家 庭	9月8日	浦 河 高 校

(平取高等学校長 佐藤 重喜)

教科部会この10年のあゆみ

国語部会

昭和58年度に、高教研が発足して20周年を迎え、当時の記念誌には、会員の拡充や国語教育の充実を図るための努力、そして事務局のあり方、役員、各学校の連携をよりよくするための改善や研究会の企画推進の経過報告がなされていました。

この度、30周年を迎えるに当たり、過去10年間の国語部会の軌跡をたどってみると、講演、研究発表、研究討議等、回を重ねるごとに充実した内容で発展してきたものと思います。

研究発表の歩みを見ますと、それぞれの学校で地道に研鑽を積まれ、日々の授業も創意に富み、生徒の学習意欲を高める実践活動に深い感銘を与えるものばかりでした。

古典においては、どうしても文章の抵抗感は否めないため、生徒の興味づけをどうするか。現代文では、1時間の授業の中での課題設定・楽しい国語表現の授業と生徒一人ひとりの主体的学習を目指して、という所に難問を抱え教材研究を工夫されていました。

国際化、生徒の多様化と昨今喧伝されていますが、生徒一人ひとりへの対応の難しさは、火を見るよりも明らかのことだと思います。

又、詩の扱いをめぐっては、「いい詩とは………わからなくてもいい」という杉山平一氏の立場を理解し、「語句の評釈はきちつとすべきだ。読者の想像の世界にゆだねてよいものまで、選択肢を設けて理解させるようなやり方はしたくない」という研究者の文学教材の扱い方も印象的ありました。

助言者からは、「生徒の意欲の喚起を図り、生徒の心を把握し、一斉授業の中に個別学習を位置づけ、生徒の意欲を高めていく指導の工夫が必要である」等、国語教育はどうあるべきかを目指す、継続的実践の必要性が述べられています。

大学受験生を多く抱える学校、またそうでない学校と、それぞれ教材の取り組み方は違います。古典の教材内容も教科書には断片的に掲載され、生徒の主体的意欲をかきたてるのも非常に難しいものと思います。

今後も多くの方の研究・実践活動によりまして、国語教育のあり方を追究し、新しい時代に向かって大きな視点を持つことが必要のことと思います。国語部会がますます発展することを祈念し、会員の皆さんのご指導とご支援をよろしくお願い申し上げます。

歴代部会長 事務局担当者

年 度	部 会 長	事務局担当者
58年度	金箱戈止夫(北広島)	宮森 公夫(札清田)
59年度	金箱戈止夫(北広島)	松田 公平(北広島)
60年度	金箱戈止夫(北広島)	松田 公平(北広島)
61年度	上田三三生(大 麻)	若林 正(大 麻)
62年度	上田三三生(大 麻)	若林 正(大 麻)
63年度	丹 黙(大 麻)	中村 正昭(大 麻)
元年度	對馬 富喜(札東豊)	菊池 秀樹(札東豊)
2 年度	對馬 富喜(札東豊)	菊池 秀樹(札東豊)
3 年度	川治 静信(札開成)	菊池 秀樹(札東豊)
4 年度	小澤 正人(北広島)	須摩 守(北広島)

国語部会講師

58年度「情報社会における国語教育」

文部省教科調査官 大坪 浩哉

59年度「日本の私小説」

甲南女子大学教授 饗庭 孝男

60年度「作品解説の試み

－志賀直哉（清兵衛と瓢箪）を例として－」

大妻女子大学教授 池内 輝雄

61年度「漱石の文学」

大妻女子大学教授 三好 行雄

62年度「歴史にみる人づくり」

作家 童門 冬一

63年度「言語の変化と正しい日本語」

國立國語研究所長 野元 菊雄

元年度「韻文と散文について」

俳人協會當任理事 原 裕

2年度「近代短歌と現代短歌」

小学館取締役編集本部長 篠 弘

3年度「国語科・情報化社会の中の国語教育」

國學院短期大學助教授 川邊 爲三

4年度「日本人の心とことば」

東京工業大学名誉教授 芳賀 綏

(北広島高等学校 須摩 守)

社会部会

高教研30周年記念誌の発行にあたり、20周年記念誌の内容につなげるため、昭和58年度から平成4年度までのあゆみを中心にまとめることにする。

1. 歴代部会長と事務局担当者（事務局長）

(昭和58年度第21回～平成4年度第30回大会)

年度	回	部会長	事務局長
58	21	小林純幸(札南)	長繩哲郎(札月寒)
59	22	小林純幸(札南)	長繩哲郎(札月寒)
60	23	小林純幸(札南)	古木博(札東陵)
61	24	小林純幸(札南)	古木博(札東陵)
62	25	柳沢二郎(札稻西)	新明正寿(札稻西)
63	26	柳沢二郎(札稻西)	新明正寿(札稻西)
元	27	池田正一(札西)	神山健(札平岸)
2	28	納谷浩一(札清田)	三浦一夫(札清田)
3	29	納谷浩一(札清田)	三浦一夫(札清田)
4	30	納谷浩一(札清田)	三浦一夫(札清田)

2. 教育課程実施の社会的背景と社会部会の研究

昭和55年には高校進学率が94%に達し、後期中等教育は、高校の新設、増改築が進み施設・設備も充実し、教員数も大幅に増加していた。この量的拡大は生徒の多様化現象を生み出し、一方大学進学希望者も増加して大学入試競争が激化の一途をたどっていた。その重圧が高校教育を歪める結果ともなり、高校教師は学習指導、生徒指導、進路指導等、学校教育の面に多くの矛盾をかかえながら、この深刻な課題に直面してきた期間であった。同時に、社会の動向が科学技術の急激な進歩と産業構造の変化が進展したため、社会生活も家庭生活も急速に変貌しつづけてきた。

昭和57年度から実施してきた教育課程は、このような時代の要請に応ずるものであった。高教研社会部会に於ても、必修「現代社会」の分科会が

第19回大会（昭和56年度）から設けられ、この年には、伊東光晴（千葉大教授）氏の講演（これからの社会科教育）が行われている。「現代社会」の指導は、現に変貌しつづけている社会で生きている人間の生き方について、自ら考える力を養うことには主目標があるため、多くの社会科教師は、その指導内容と指導方法に創意工夫をしてきた。

その結果、生徒は学習の楽しさを知り、教師は研究と指導実践の面白さを覚えたのであった。

高教研大会の中からとらえると、第25回大会(昭和62年度)の現代社会部会で、窪田稔彦(訓子府)先生は、「生徒が社会事象について主体的に関心を高め、主体的に学習する中で認識を深めるための現代社会を目指して」を発表している。この中で、生徒が毎日、新聞を読んでまとめていく新聞学習ノートの指導のことや社会の変化に伴い多くのマスメディアが存在している中でNHK特集をビデオで学習する授業展開について発表されている。また、現代社会の研究で次のような講演も企画され実施されている。第24回大会(昭和61年度)

「現代社会と人間の生き方について」安澤順一(文部省教科調査官), 第26回大会(昭和63年度)「歐米学校教育における国際化と個性化」小木美代子(日本福祉大教授)等が目につく。

3. 臨教審以降の教育課程改訂と社会部会の研究

- ①心豊かな人間の育成, ②自己教育力の育成,
 - ③基礎・基本の重視と個性を生かす教育の重視,
 - ④文化と伝統の尊重と国際理解の推進, これらを改訂の基本方針として編成され, 地理歴史と公民に分けての学習指導が展開される平成6年度に向けて, 高教研社会部会では, 内容的には既にその研究が進められてきた。

倫理部会では、第28回大会（平成2年度）で、「人間としてのあり方の教育を、どうとらえ、どうすすめるか」金井肇（大妻女子大教授）先生の

講演が実施されている。

政治経済部会では、第28回大会で、「いま若者に政治学を如何に教えるか」河合秀和（学習院大教授）先生の講演が実施されている。

地理部会では、第29回大会（平成3年度）で、「国際社会における日本と東南アジア」高橋彰（東大経済学部教授）先生の講演が実施された。

なお、世界史部会と日本史部会での取りくみは「研究成果一覧の項で、ごらんいただきたい。

4. 社会部会全体講演の実施

全体講演は、第26回大会（昭和63年度）から行われている。その実施のねらいは、社会の変化に対応した高校教育を推進するにあたって、教師のより広い視野からの認識と判断力を高めるためでもあったと思う。特に、教育界以外の方々の講演は、人間の在り方生き方が求められる現代の教育

課題を研究するうえで有意義であった。

第26回「社会科教育における今日的課題とその指導方法について」柿沼利昭（文部省視学官）、第27回「国際情勢を見る目」山室英男（NHK解説委員）、第28回「経済の変化とこれからの日本人の生き方」本間至（大和実業、人事教育部長）第29回「21世紀の若者に求められるもの～いま高校教師は何をなすべきか～」西村秀俊（朝日新聞社アエラ編集長）、第30回「企業や大学の求めている人間像とこれからの高校教育に期待されるもの」代田恭之（旺文社専務取締役）

以上、部会のあゆみを述べ会の発展を祈りたい。

（札幌清田高等学校 三浦 一夫）

数学部会

数学部会が発足して30年、約600名の会員を擁し、このように発展、充実した姿で30周年記念を迎えることができましたことを、会員の皆様とともに慶びたいと存じます。

また、会員の先生方、ご勇退された諸先輩、関係各位のご熱意とご努力によって、かくも有意義な数学部会へと導かれたことに、心から敬意と感謝を申し上げます。

昭和39年2月1日、札幌旭丘高校を会場として第1回研究大会が開催され、午後の数学部会において、今後の運営方針、研究のすすめ方等について決定をみ、本部会が誕生いたしました。小生もこの部会に出席させていただきましたが、先輩諸氏の熱意あふれる協議の状況を今も鮮明に想い出されます。

特に協議の中心議題は北海道算数・数学教育研究会（北数教）との関連についてであります。

「冬に開催される本部会での研究成果を夏の日数教全国大会に反映させる。秋の北数教全道大会には日数教全国大会での課題を軸に研究を推進すること。このことを基本的なおさえとして、本部会と北数教との相互関連を図りながら、北海道における数学教育発展に資する」ことをねらいとして本部会が発足した次第であります。

次に、本数学部会のこれまでの足跡をたどってみたいと思います。

この30年間、科学技術の進展、情報化など社会

は急激に変化しています。このことに対応するため数学教育においても幾多の改訂がなされてきました。本数学部会にあっても、一貫して学習指導要領改訂に伴う研究・実践の取り組みがなされています。

発足当初からの10年は、数学教育の現代化を柱として、指導内容の研究に重点が置かれ、次の10年（昭和48～57年度）は高校進学率の上昇に伴い多様化しつつあった生徒に対応する学習指導のあり方が研究主題としてとりあげるようになりました。昭和58年度（第21回）以降は、社会の急激な変化、ますます多様化した生徒などに対応するための数学教育のあり方、学習指導の研究が主流になっています。

部会集会における研究発表も、当初の10年は指導内容についての研究とその指導法に関するものが多くみられ、次の10年は学力格差の大きな生徒に対する指導法についての発表が主流を占めるようになり、学習習熟度別指導の実践例が数多く発表されました。あとの10年は、指導内容の重点化、パソコン等の活用による授業改善（ソフトも含む）教材の構造化、指導法等多岐にわたっており、時代を反映したものであったと思います。

部会講演については、著名な先生を講師として招聘し、私達が当面している課題について示唆に富んだ貴重なお話を聞くことができました。本道数学教育発展のため、遠路来道くださいました先

生方に感謝を申し上げます。

研究熱心な諸先生のご努力と素晴らしい教育実践によって本部会は盛り上がり、より実り多い研究会として発展してまいりました。

これからも、会員の先生方一人一人が研鑽に努められ、会員相互の研究交流を深めて、本部会が更に素晴らしい歩みを続けることを祈念いたします。

〈数学部会の歩み〉

(昭和58年度以降)

回	年 度	研 究 テ 一 マ	講 演 演 題 ・ 講 師	研 発 件 数	部 会 長	事務局
21	58	新教育課程における数学の指導はいかにあるべきか	「問題点と解決のためのヒント」 筑波大学教授 三輪辰郎	5	外山慶治	札藻岩
22	59	〃	「直観的理解と倫理的理解」 津田塾大学教授 笠原乾吉	4	〃	〃
23	60	学習意欲を伸ばすための数学の指導・実践について	「学習意欲を伸ばすための数学の指導について」 早稲田大学教授 鈴木晋一	4	〃	〃
24	61	〃	「学習意欲を高めるための数学の指導について」 大阪大学教授 永尾汎	4	小原孝男	札厚別
25	62	〃	新教育課程と学校教育 筑波大学附高校 飯島忠	4	〃	〃
26	63	新教育課程に向けて —時代の進展に対応する数学教育のありかた—	明日の数学教育を考える 日本数学教育学会役員 大竹登	4	〃	〃
27	1	新教育課程にむけて —社会の変化及び生徒の実態に対応する数学教育のありかた—	気づき オーマイヤ教育研究所長 大宮豊穎	4	三島哲明	札啓成
28	2	新教育課程にむけて —基本的概念及び基礎的技能の習熟をはかる数学教育のあり方—	普遍的にして、しかも、個性豊かな 小樽女子短期大学講師 熊谷全弘	3	〃	〃
29	3	数学的な見方や考え方のよさを、認識させる数学教育のあり方 —数学を好きにさせるためには—	情報化対応における「新しい数学教育」 早稲田大学教授 寺田文行	3	〃	〃
30	4	新教育課程に向けて —一人ひとりを生かす数学指導はどうあるべきか—	数と図形の科学 —詩人の心をもうう— 学習院大学教授 飯高茂	4	今西義紀	札真栄

(札幌真栄高等学校 今西 義紀)

理 科 部 会

高教研理科部会の30周年を迎えて、部会の成長の節目として10年間の「部会のあゆみ」をまとめることになった。この10年間は、世界史に残る激動の10年間で、自然科学の分野でも光速度の新定義・超伝導物質・低温核融合・遺伝子科学の発達・今世紀最大のピナツボ火山の噴火・環境科学の重視などいろいろな出来事があった。

高教研理科部会では、「人間性豊かな児童生徒の育成」に基づく学習指導要領の流れ、「ゆとり」のための教育内容の徹底的精選、整理、統合とともに、基礎・基本の重視を考えて、「これからの中等教育はどうあるべきか」を部会テーマとして10年間、継続され研究されてきた。昨年の第29回大会から新学習指導要領の精神を受けて「一人一人を生かす理科教育」「調和のとれた自然観を育てる理科教育」というサブテーマを設定し、第30回大会では、さらに、「新学習指導要領の趣旨を生かした理科教育」を付記した。

20回大会から30回大会まで、部会長・事務局校
も、飯田保穂・札幌啓成、沼田一夫・札幌西陵、
尾尻久・石狩南、大石博・石狩南、佐々木和夫・
札幌月寒と変遷し、とくに、沼田一夫先生には、
21回大会から26回大会までを引き受けられ、部会
発展に大きく貢献された。

会場校も市立高校を中心に20・21回は札幌平岸高校、22・23回は札幌藻岩高校、24・25・26回は札幌開成高校であった。これ以降は、事務局校が知恵を絞り27・28回は石狩花川南コミュニティセンター・石狩南高校、29・30回は札幌月寒高校で開催された。部会の発展は、会場校と企画した事務局校の特段のご配慮とご協力による。

記念大会は、ちょうど教育課程の改訂期にあたり、18回大会から始まった理科I分科会は毎年度盛会で現在に引き継がれている。理科の教師は、理科Iの理科を通して物・化・生・地の四領域の交流や共同の教材研究など、理科教師全体の共通意識が高まり、今後の発展の基礎ができた。各科目の相互交流が連帯感を高め将来が期待される。

20～30回大会までの部会講演の演題と講演者で
理科教育の足跡をたどってみる。

20回大会「これからの理科教育」

東京都指導主事 前田穂氏
21回 「21世紀の理工教育—問題発見型人間に育

成

立教大学教授 松井好氏

- 22回「バイオテクノロジーの現状と課題について」
花王石鹼・研究開発本部副本部長 齊藤誠宏氏

23回「気象と気象衛星」京都大学教授 廣田勇氏

24回「科学史に見る人間模様」
鳴門教育大学副学長 今掘宏三氏

25回「物理と社会」上智大学教授 笠 耐氏

26回「有機合成法について」
東京大学名誉教授 野村祐次郎氏

27回「X線天文学について」
大坂大学教授 宮本重徳氏

28回「地球環境問題の問題点」
東京大学教授 濱田隆士氏

29回「新高等学校学習指導要領 理科の視点」
文部省初等中等局主任視学官 山際隆氏

30回「STS 教育は理科教育を変えられるか？」
茨城大学助教授 小川正賢氏

となっている。講演テーマは、正に時代の要請課題を表している。

分科会も理科Ⅰ分科会は25回大会より理科Ⅰ・Ⅱ分科会に発展し、理科Ⅰ分科会、物理分科会、化学分科会、生物分科会、地学分科会等の各分科会では、各専門分野の先端知識や新知見を普及すべく講演が行われ、各回分科会1名10年間で50名の講演者を得た事になる。その講演は実に多くの会員諸氏に感銘を与え、教材観の確立や教育内容に多くの影響を与えた。

理科部会全体の研究発表のスタイル・内容を見ると、個人発表・グループ発表など多彩で、当然の事ではあるが、授業に直結したものや地域に題材を得たものが多かった。また、教科の取り組み方や学習意欲の喚起のための授業と評価や大学入試、中学校との関連など、理科教育のあるべき姿を多角的に真っ向から取り組んだ研究が寄せられて、研究会は発展の途をたどった。

とくに、今回の教育課程の改訂期では、高校生の多様化への対応として、13選択科目が設定され、「日常生活に関連深い」基礎コース、観察・実験を中心として「探究活動」を位置づけた標準コース、基礎的概念や法則の理解を深め「課題研究」を位置づけたアドヴァンスコースと、今後、これを各学校で、どの様に計画し、実施していくか研

岡 部 令 子 (山ノ手養護)

◎陸上競技の目標をどう設定させるか。

中 町 栄次郎 (余 市)

第26回大会

◎スキー授業の実践。

山 田 直 秀 (芽 室)

◎本校のスポーツテストに関する実践報告。

佐 藤 寛 (小樽桜陽)

第27回大会

◎新設校における体育経営のねらいと今後の課題について。

大 野 憲 義 (大 麻)

◎水泳学習の実践と成果。

児 玉 佳 範 (阿 寒)

◎健康に関する認識を高める保健の効果的な学習指導の工夫について。

栗 塚 一 享 (室 商)

◎「授業書」方式による保健の授業。

釣 部 人 裕 (羅 白)

第28回大会

◎ラクビーの特性を生かした学習指導。

石 井 勝 (芦 別)

◎体力の向上をめざして。

会 田 悟 (北広島)

◎本校体育科における野外活動(実習)について。

坂 地 恭 澄 (恵 庭 南)

松 原 昌 一 (恵 庭 南)

第29回大会

◎生涯体育・スポーツに向けての剣道指導のあり方。

松 井 則 之 (月 寒)

◎選択制を取り入れた年間指導計画について。

戸 沢 久 夫 (恵 庭 南)

第30回大会

◎選択体育と体育的学校行事について

町 田 英 謙 (本 別)

◎性教育

立 川 晴 也 (興 部)

(3) 第23回全国体育研究大会(北海道大会)・平成2年10月18・19日開催の記録。

ーはじめにー

上記全国大会は、幼稚園分科会、小学校分科会、中学校分科会、高等学校分科会、特殊教育諸学校分科の5校種分科会より成り立っています。そ

の中の高等学校分科会は、北海道にあっては当高教研保健体育部会が参画し実践いたしました。

歴代部会長の指導と会員の協力によりさらに当会の27年間の偉大なる累積は大きな資産となり北海道の体育を全国的に表現した大会であったことを報告いたします。(高教研保健体育部会の役員各位は大会実行委員として活躍したことも記録させていただきます。)

ー高等学校分科会の記録ー

研究主題 「生涯体育、スポーツを目指して、生徒が運動に親しみ体力の向上を図る体育指導」

◎第11分科会 会場校・北海道恵庭南高等学校

・基本技術を生かしたゲームの喜びを求めて。

公開授業(恵庭南) 戸澤 久夫

・本校スキー授業における実践活動の現状。

研究発表(札幌白石) 体育科

・個人的スポーツ種目(スピードスケート)の特性に触れる授業を求めて。

研究発表(池田) 体育科

◎第12分科会 会場校・北海道篠路高等学校

・身体表現活動の自主的な取り組みを目指して。

公開授業(札幌篠路) 依田 玲子

・“自然”との対話(歩くスキー授業の実践例)。

研究発表(小樽商業) 体育科

・スキー指導者のためのビデオ(スキー上達練習教室)。

研究発表(紋別南) 亀岡 哲郎

◎第13分科会 開場校・北海道石狩南高等学校

・生徒が意欲をもち自ら進んで取り組む指導を目指して(視聴覚機器の効果的活用)。

公開授業(石狩南) 本庄 幸賢

・本校スキー授業における実践活動の現状。

研究発表(札幌新川) 近藤 建治

・生徒が意欲を持ち自ら進んで取り組む指導を目指して(地域的特色のある冬季スポーツ(スケート)への取り組み)。

研究発表(釧路江南) 大島 克巳

◎第14分科会 会場校・北海道札幌東高等学校

・運動の特性に基づいた効果的な指導の工夫。

公開授業(札幌東) 柴田 正繁

・歩くスキーの特性に基づいた効果的な指導を求めて。

研究発表(北広島) 稲飯 満紀

- ・体力機器を利用した体育指導の一考察（生涯体育推進から）。

研究発表（釧路工業）広田邦生

中木克明人
岩岡勝

余部 護養

道高教研に「養護部会」が新設されたのは昭和61年度であるが、その経緯は次のとおりである。

それまで、道内高等学校の養護教諭の全道規模の研究研修の組織が乏しく、道立教育研究所にも養護教諭のみを対象とする研修講座が開設されておらない状況で、広く道内高校関係者の間で、切実な要望として、道高教研に養護部会を新設してほしい声が高まっていた。

この養護部会新設の機運を高める原動力となつたのは、昭和61年1月10日に創設された北海道高等学校養護教諭研究会の組織化であった。

その当時、道内高等学校の養護教諭の研修組織としては、北海道養護教員会と各地区毎の高校養護教諭研究会の2つが主なるものであった。前者は、小・中・高 大・特殊教育諸学校及び幼稚園教諭で構成されており、高等学校が抱える独自の課題解決を図るための高等学校の養護教諭のみの研究・研修組織を整備してほしい要望が高まり、後者については、地区（地域）内の研究・研修のレベルにとどまるため、全道規模の研究・研修組織の新設を望む声が寄せられていた。

このような要望に応じて、昭和59年に石狩地区高等学校養護教諭研究会（会長・高澤博札幌手稲高等学校長）が、昭和60年に入り、道内高等学校養護教諭の全道的な研究組織をつくるための活動を進め、ついに翌年の昭和61年1月10日に発会式を兼ねた第1回研究会を開催して、正式に「北海道高等学校養護教諭研究会」がスタートとし、現在（会長・渡辺誠三札幌北高等学校長、事務局長・佐藤菜子札幌北高等学校養護教諭）に及んでいる。

このことは、換言すれば、道内の高等学校養護教諭の独自の全道組織としての「北海道高等学校養護教諭研究会」の発足が布石となって、道高教研に「養護部会」が新設されたと言える。そしてその母体は、石狩地区高等学校養護教諭研究会であった。

昭和61年1月10日の同会発会式で、推薦されて初代会長に就任した高澤博札幌手稻高等学校長は、挨拶に立ち、「高校独自の問題について研究し、更に道高教研に養護教諭の活動の場を求めて

いきたい。養護教諭は1校1名で大変な役割を担っている。近年の高校生の問題は複雑多岐にわたっており、とりわけ心身症の生徒の激動は大きな悩みだと思う。こうした問題には1人で係わるよりも、何人かで問題解決に当たることが大切である。現在の北海道養護教員会は縦の組織であり、高校で激動している問題に対処するには横の組織が必要だという声が各地から寄せられ、この研究会が発足することになった」と述べ、高校が独自で抱える問題の解決に向けての横のつながりの重要性と道校教研の「養護部会」新設の緊要性を強調されたのである。また、来賓として出席された道高等学校長協会の谷山治夫副会長（札幌北高等学校長）も挨拶の中で、「小・中・高校が1本になって専門性を高めることは、もとより大切だが、子どもの発達過程でそれぞれ抱えている問題は異なる。現在ある北海道養護教員会が発展するためにも、専門分化していくことは必要である。北海道高校教育研究会に養護教諭の専門部を位置づけたいと念じており、研究の一層の充実を期待する」と述べられ、道高教研への位置づけの必要性を強調された。

以上の経緯をたどり、道内高等学校養護教諭の全道的研究組織ができたことによって、かねて希望の声が高まっていた道高教研「養護部会」新設の機運が一気に高まり、昭和61年5月に開催された高養研（略称）役員会で審議され、同年度の道高教研に13番目の部会として仲間入りすることが決まったのである。

このような経緯で誕生した「養護部会」であるが、昭和62年1月に開催された第24回北海道高等学校教育研究大会において、初代の養護部会長に就任した阿部重雄札幌手稲高等学校長は、挨拶に立ち、「従来からある北海道養護教員会は、高等学校の研究会には明確に位置づけられていなかつた。これは、小・中学校の数が多いために、研究会の主流は小・中が占めているものと思われる。高等学校には、独自のかかえる課題があり、そのような高校の独自性にもとづく養護教諭のあり方、活動を明確にして、お互に連携しながら日常生活

動を進めていこうという骨子が昨年来高まり、昨年1月に高養研が発足したとのべ、「養護部会」を全道高校養護教諭の全道的実践活動成果交流の

場として積み上げていくことを強調された。初代の事務局が札幌南高校に置かれ、かくして活動がスタートしたのである。

芸術部会

芸術部会は、発足当初より、音楽、書道、美術、工芸の4教科合同の形で運営されている。高校における芸術科教育のあり方等、共通する問題を各教科の垣根を越えて討議することで、その成果をあげ、更に探求する場として定着して来ている。当初より第13回まで、午前は研發、午後は講演、すべて合同で行われたが、その後より午前の研發は3教科（音楽・書道・美術工芸）に分かれて運営されている。午後の講演は講師を音楽・書道・美術のローテーションで推薦し、最近は中央講師も招へいされ好評を得ている。午後の部には、定員増で別に広い会場を準備しなければならない程である。部会参加者も年々増加の傾向にあり喜ばしい。第30回からは会場を〔かでる27〕に変更するが、今後も更に発展を期して行きたいと思う。

以下、各教科の担当者よりここ10年間（第20回以後）のあゆみを記述する。

音楽部会

この10年間を振り返って見ると、研究発表においても、また運営についても世代交代が徐々に進んで来たことがあげられる。

研究発表者の依頼については、第20回より高音研の地区割り順に行なうことが決定され、以来現在まで各地区の中心となって活動している先生の貴重な研究発表から、若手の先生方の斬新的な授業や部活動、運営の発表に変わりつつあるよう思う。第20回の〔これから芸術教育〕長尾紀之(札丘珠)以降中嶋幸治(札月寒)、岩本允(俱知安)、佐藤公之(北檜山)のベテランの先生方より佐藤伸一(美唄南)森義之(滝川西)瀬野淑郎(留萌)蓬田秀泰(旭北)三栗伸久(美瑛)、石若拓哉(清里)へと、はつらつとした先生方に引き継がれて来ている。

今後は統一したテーマの継続研究をしてほしいと言う要望があり検討しなければならないし、今までの研究発表のまとめも必要と考えている。

美術部会

美術部会は、道内教科研修の場として、会員の美術教育にかける口マンとたゆまぬ実践に支えられ、充実した研究会に発展してきている。

この間、「これからの美術教育」を研究テーマに多くの研究発表と参加者による研究協議がなされ、会員の日々の指導の糧として大きな成果を上げてきた。

特に、ここ10年間の研究発表では、美術教育の根源に関わる問題から創造・創作意欲をいかにして喚起させるかを教材の面から扱ったものまで幅広く且つ、いずれも密度の豊い内容であった。

生徒の心を大切にし、その心に迫る研究発表者の姿勢と研鑽には敬意を表したい。

今後は、創立30年を一つの句切りとして会員相互の連携を一層深め、より多くの会員が参加できるように努力を重ねながらますます発展されることを切望している。

書道部会

書道部会は、こゝ数年50名を越える会員の参加を得て、極めて活気溢れる充実した内容となっている。これは前任の運営委員の先生方の努力は言うまでもないが、この研究会をきっかけとして発足し、共に歩を進めている「高書研展」の存在も併せて力となっていると思われる。

この部会は、学校事情によって毎年の参加が不可能な会員もあって、参加メンバーの入れ替りが多いものも悩みの種である。そのため2～3年先を見通して発表者を決定し事前に係としての参加をお願いすることで、研究の成果・会の雰囲気が繋がっていくよう配慮している。また司会等、他の役員も含め全道各支部より偏りなく参加していただけるような配慮も必要と考えている。

さいわい若い先生方の参加も増えており、今後に向けて、更に充実した研究会となるよう、会員と共に努力していきたい。

芸術科のあゆみ

回	部会長	講 師	発 表 者			研 究 紀 要
			音 楽	美 術	書 道	
20	佐々木甫	今日このごろ思うこと 小川東州 ハーヴァード大学客員教授	長尾紀行 これからの美術教育	小坂 茂（鉢江南） 文字のない絵本	吉本源之進（苦前高） 〔生活書〕の一方法としての刻字指導の試み	齊藤亮一（札丘珠） 豊かな文字感覚を育てる書 写書道教育～表現力を高める指導のあり方 第20号
21	佐々木甫	建築の世界 太田 寛 北大教授	中嶋幸治（札月寒） 自由演奏に見る生徒の限りない音楽性の発見	古館 章（留萌） 文化祭における大壁画（ポスター）制作	藤原正一（北広島） 書道の生活の関わりを求めて～鑑賞に重点を置いた授業の報告	第21号
22	佐々木甫	私とヴァイオリン 辻 久子 ヴァイオリン演奏家	岩本 充（俱知安） 高音研後志地区研究会及び研修会より	梅谷利治（函東） 創作凧と美術教育～北海大凧合戦～	思田史紀（静内） 実用書の学習について	第22号
23	佐々木甫	雪と水と人 若濱五郎 北大教授	佐藤公之（北檜山） 視覚教材と鑑賞ノートを使った鑑賞指導	武石英孝（札厚別） これからの美術教育について～芸術系としての取り組みの中から	佐藤 弘（千歳） 書道教育について本校の試行錯誤を語る	波多野紀雄（厚潮見） 日本音楽史の通史における時代区別の変遷について 第23号
24	浪花正雄	砂沢ビツキ 彫刻家	佐藤伸一（美唄南） 儀式的行事における音楽について	中谷有逸（帯柏葉） 生徒の創造性をひきだす美術科指導の試み	若林芳美（上富良野） 上富良野高校書道授業にかかわる一考察	三栗伸久（根室） グレゴリオ聖歌の教材化 第24号
25	浪花正雄	笛はうたう ～世界の笛・日本の笛～ 上杉紅童 古楽器演奏家	森 義弘（滝川西） 表現の喜びを伝えるために ～自主性のある音楽活動をめざして～	道川順也（札稻北） 美術Ⅰにおけるデザイン指導はどのようにするか	八重柏恵一（帯南高） 生徒を生かし、意欲を持たせるために	第25号
26	浪花正雄	ひとつの人生論 常本慈照	蓬田秀泰（旭北） これから音楽教育をどう進めるか ～音楽Ⅲの実践をとおして～	沖田守正（滝川） 美術科教育における〔伝達のためのデザイン〕の領域についての一考察	富岡 仁（音更） 創作の試み	第26号
27	唐津 愈	私と彫刻 佐藤忠良	瀬野淑郎（留萌） 創造的表現の工夫～生徒の個性や創造性を自由に發揮できる機会を～	小林智彦（札南） 美術科指導における創造的活動の一考察～自我の探究による抽象彫刻の製作～	角田彰司（留萌工） 創作指導の充実を目指して～厳冬の中、体育館での全紙1文字～	第27号
28	唐津 愈	私と音楽 廣瀬量平 作曲家 京都市立芸術大学教授	三栗伸久（美深） 八年目のなやみ～日々の音楽実践を考える～	本田勝哉（江差） 地域を題材とした授業から得るもの	長沢正美（恵庭南） 「創作学習」について	松本良一（紋別北） 紋別沖揚げ音頭を巡って ～紋別市における芸術文化活動の概要～ 第28号
29	中野友房	書を書く 中野北溟 書家	石若拓哉（清里） 小規模校におけるクラス単位の音楽授業はいかにあるべきか～学習意欲を高める合唱指導の試み～	高橋 聰（白糠） 美術ノートを利用した授業の一考察	峯岡 純（芦別） 蘭亭序の展開～同一教材の多角的、継続的取組～	第29号

英語部会

高教研英語部会事務局は昭和58年1月に20周年を迎えてからこの10年の間、札幌白石高校（昭和58～59年度）、札幌東高校（昭和60～61年度）、石狩高校（昭和62～63年度）、札幌稻雲高校（平成元年～2年度）そして現在札幌拓北高校（平成3～4年度）と2年毎に交代してきている。

まず、事務局の決定方法については、昭和63年度の石狩高校までは当該校長の教科に関係なく事務局が置かれ次の事務局が1年前には決定していたが、平成2年度の札幌稻雲高校から英語部会の事務局は校長の教科が英語の学校に置かれることになった。このため、現在の札幌拓北高校に事務局設置が決定したのは、校長人事が内定した平成3年3月下旬であった。

次に、大きな変遷と言えるのは、札幌稻雲高校の事務局時代（山口茂会長）に高教研英語部会を母体として、新たに北海道高等学校英語教育研究会（略称高英研）を発足させたことであろう。それまでは、高教研英語部会研究集会・中高英語教育研究大会・英語弁論大会等の事業をすべて英語部会で行って来たが、高教研主催のものは英語部会研究集会のみにし、その他の中高英語教育研究大会・英語弁論大会等の事業は全部高英研主催で行うこととしたのである。

事業を分けることによって事務局業務の繁雑さがかなり解消されたことは言うまでもないが、高英研と言う組織が発足したことを知らない人達が未だに多く、各事業を行う際に若干の不便さが残っている。会員の皆様には、高教研英語部会研究集会は本部からの指示で開催し、その他のものは高英研が主催し開催しているとご理解をいただきたい。

事業の内容に関してであるが、高教研英語部会研究集会については高教研からの連絡が周知徹底しており、既に会員の皆様がご存じのとおりの研究集会を行っている。ただし、第29回目の研究集

会で久しく行っていなかった公開授業（授業者札幌東高校森田裕教諭）を取り入れ、第30回目ではやはり公開授業（授業者札幌白石高校伊藤一正教諭）を行い、30周年の記念として研究発表の代わりに『異文化コミュニケーションと言語教育』と題したパネルディスカッションを行う。

中高英語教育研究大会は、北海道中学校英語教育研究会（略称北中英研）との共同主催で提言・公開授業・講演を毎年10～11月に行ってきている。また、中学と高校で開催回数を分けてきたものを本年度より統一し、平日開催の研究大会ではあるが全道一円からより多くの参加者を集めようと努力をして、昨年度及び本年度は150～180名の参加者を集めた盛大な大会となっている。

北海道高等学校英語弁論大会は今年で13回目を迎え、出場者のレベルも年々向上してきており、内容の充実した大会となっている。この大会は北海道を9地区に分けて地区大会の予選を行い、各地区1～3名の全道大会出場者が決定するのである。なお、大会は各地区当番校の協力なしでは行えず、また、地区大会開催に際して審査員の選定等多大な苦労があることを特記しておこう。ここで、財団法人梅津獎学院が、国際社会に貢献出来る人間を育てて欲しいと、英語弁論大会の開催に特段のご厚意を示して下さっていることを明記しておきたい。このおかげで、第2回目から全道大会の優勝者及び準優勝者の2名に1週間程度の海外研修の機会を与える事ができ、今まで22名が海外研修を行い、現在国際社会に貢献出来る人間として各方面で活躍中である。

最後に、毎年開催されてはいるが公式には記録に残ってこなかった北海道高等学校英語弁論大会第1回目からの優勝者と準優勝者、また、中高英語教育研究大会の公開授業者及び提言者のリストを記載して英語部会の歩みとしたい。

北海道高等学校英語弁論大会

回数	年度	優勝者	準優勝者
1	1980	Teruyoshi Tashiro (札幌光星)	Masato Ichikawa (留萌)
2	1981	Chikako Imamura (札幌旭丘)	Kumiko Murakami (遺愛女子)
3	1982	Yuka Kawai (室蘭清水丘)	Takako Miura (遺愛女子)
4	1983	Katsue Takahashi (函館東)	Maki Kurita (帯広柏葉)

5	1984	Akiko Takahashi (北見柏陽)	Noriko Ogawa (遺愛女子)
6	1985	Hajime Funada (旭川実業)	Akiteru Sasayama (帶広柏葉)
7	1986	Kirika Okada (遺愛女子)	Tomoko Minamiki (遺愛女子)
8	1987	Kaori Inaba (旭川東)	Nozomi Yoshii (函館ラサール)
9	1988	Kyoko Okudaira (函館中部)	Toshinori Kanayama (札幌東)
10	1989	Takekatsu Konno (函館中部)	Eriko Hamanishi (遺愛女子)
11	1990	Jun Watanabe (室蘭栄)	Nozomi Satoh (遺愛女子)
12	1991	Yasushi Komatsu (札幌東)	Junko Kosugi (とわの森三愛)

中学校・高等学校英語教育研究大会

1983.11.7	第9回北海道 第26回札幌市	提 言	鈴木 敏夫 教諭 (札幌真栄高校) 『中高連携にたつ英語教育をどう進めるか』
1984.11.7	第10回北海道 第27回札幌市	公開授業	菅原邦臣 教諭 (札幌西陵高校)
		提 言	佐々木 茂文 教諭 (札幌北陵高校) 『中高連携の文法問題について』
1985.10.24	第11回北海道 第28回札幌市	提 言	本堂藤昭 教諭 (野幌高校) 『英語嫌いは直せるか』
1986.11.12	第12回北海道 第29回札幌市	公開授業	中津川皓 教諭 (札幌丘珠高校)
		提 言	黒畠勝男 教諭 (北広島高校) 『中高の連携を配慮した授業の実践例』
1987.10.15	第13回北海道 第30回札幌市	提 言	竹内康二 教諭 (大麻高校) 『伝達能力を重視した学習指導』
1988.10.27	第14回北海道 第31回札幌市	公開授業	鈴木大二 教諭 (札幌北陵高校)
		提 言	佐々木勝志 教諭 (札幌篠路高校) 『基礎学力の定着と向上のために』
1989.10.27	第15回北海道 第32回札幌市	提 言	中屋晃 教諭 (南幌高校) 『わかりやすい授業の工夫』
1990.10.25	第16回北海道 第33回札幌市	公開授業	川口恵子 教諭 (札幌拓北高校)
		提 言	斎昌己 教諭 (札幌藻岩高校) 『興味を持たせる指導法』
1991.10.25	第17回北海道 第34回北海道	提 言	児玉秀樹 教諭 (石狩南高校) 『日常の授業の中での国際理解教育』
1992.10.23	第35回北海道	公開授業	船本龍一 教諭 (札幌稻北高校)
		提 言	竹村雅史 教諭 (岩見沢東高校) 『これからの英語教育におけるリーディングの可能性を探る』

(札幌拓北高等学校 高橋誠)

家庭部会

昭和38年に発足した高教研家庭部会も、30周年記念を迎えることができましたことを、部会員の皆様と共に喜び申し上げます。

第1回研究大会の部会参加者は6名だったとのことですですが、札東の細間先生を部会長に、まず部会の土台が出来ました。10年記念誌の中で先生は

「参加者があるかないかが一番問題でした」と述べられていますように、会員を増やすのには、どうしたらよいか、大変ご苦労したようです。私事ですが、この年7月に家庭科独自の研究会を開催した時から参加していますので感無量のものがあります。高教研と私とのかかわりも30年を経たわけあります。30周年に際し、その研究の足跡をたどってみると、昭和42年度より校長先生を部会長に、更に事務局も本部事務局と教科部会の事務担当者に分かれ、次第に大きくなる研究会の運営体制になって来ました。この創設期には、札西の藤森・篠田先生、札東の後藤先生が事務担当者としてご尽力下さいました。

昭和46年度（第9回）には会員数も270名となり、会場も市民会館会議室に、以来現在まで続いております。「これから家庭科教育はどうあるべきか」という永遠のテーマを掲げ、シンポジウム形式も取り入れて討議がなされました。

昭和49年（第12回）より6か月間は、札啓成の長谷部先生が引継がれ「家庭科教育の内容をより豊かに」・「家庭科教育における人間教育」・「家庭科教育の現代化」とそれぞれのテーマに基づいて、具体的な指導法の工夫について研究が続けられました。

昭和54年度（第17回）より3年間は、改訂指導要領の実施を目前にして「新学習指導要領を考える」とテーマを改め、家庭科は従来から体験を通して創造する喜びを体得させるよう学習指導を行っているか、改めて「体験的学習」をいつに具体化させるか、その指導方法、指導上の問題点について研究が続けられました。家庭部会の充実期であったのではないでしょうか。

研究紀要も応募なのであるが、部会として最低一編は提出したいということで、第9号より地区支部ブロック輪番制にして、支部役員の先生に執筆者を推薦していただき、原稿提出が続いておりますのも、歴代の諸先生のご努力と推察されます。

昭和57年度（第20回）より3年間は「人づくりとしての家庭科教育」を部会テーマとし、これに基づいて、生徒の実態に即した家庭科教育の在り方をどの様に考え、どこで、どの様な指導をしているのか、討議が続けられました。

昭和60年度（第23回）より家庭科教育の転換期を迎えることになります。婦人差別撤廃条約と関連して「家庭一般」女子必修を見直す。部会でもこの取り組みのための研修に入って行きます。テーマは「からの家庭科教育を考える」とし、

まず10年来男女共学を実践している、長野県立須坂高の中島先生に、これから研修の道しるべになる講演を、更に上川支部（旭川地区）、石狩支部（家庭科教育検討委員会）の取り組みの報告発表は、家庭科教育の必要性が、全ての教師の眼前に、具体的に展開されなければならないことを確認いたしました。又昭和57年度より男女共学に踏み切った、滝上高の内藤先生の実践発表は新しい家庭科の芽生えを投げかけて下さいました。

平成元年度（第26回）より現在までは「男女必修の家庭科の実施に向けて」平成6年度からの実現をめざして研究を深めております。

新学習指導要領が告示され、従前の「家庭一般」のほかに2教科を設け、これらの中から1科目4単位をすべての生徒に選択履修させることとなつた。3つの科目の特徴と実施上の課題—札南陵の尾崎先生の発表は、要領について理解を深め、各学校で対応していくための大きな指針となりました。津止登喜江先生をお迎えしての講演は更に詳しく、教育課程編成上の問題点、家庭科の科目の特性をふまえながら、男子も家庭科を学ぶ必要性等、今後ともより深い研修を重ねていかなければならぬことを痛感いたしました。

北海道高等学校家庭科教育推進委員会の第1・第2小委員会の報告発表は、新しい時代を創る家庭科教育をめざして、編集された冊子が、すべての学校の男女必修に向けて活用されることを願いました。

平成3年度（第29回）大会には樋口恵子先生をお迎えすることができました。広く知られておられる事もあって、他教科の先生方の参加もありました。高齢化社会のKEY教科としての家庭科教育の役割、重要性等身近な事を題材にお話しさされました。

最後になりましたが、大変お忙しい中、又厳寒という時季に来道下さった講師の先生方、研究発表・研究紀要に発表執筆下さいました先生、部会運営のためにご尽力いただいた歴代の部会長、助言者の先生、役員の方々に事務局を担当した一人として厚くお礼申し上げます。更に部会が発展するためには一層の努力が必要と考えます。30周年記念に際し気持を新たにして出発したいと思います。

家庭部会のあゆみ（昭和57年度以降）

回	部会長	講演演題・講師	事務担当者
20	増川 晓兒 (札北)	人づくりとしての家庭科教育 大妻女子大学教授 小笠原ゆり	大森 彩子 (札北)
21	〃	子供の社会化と家庭 大正大学教授 望月 薫	〃
22	〃	家庭科の今日的問題 北海道江別高等学校長 磯村 尚志	〃
23	村上 元治 (札開成)	家庭一般男女共修の実践 長野県立須坂高等学校 中島 百子	甕 郁子 (札開成)
24	鈴木 昭平 (札開成)	これから家庭科教育をどうすすめるか 横浜国立大学教授 奥田 真丈	〃
25	〃	これからの家庭科教育を考える 神奈川大学教授 村田 泰彦	〃
26	川治 静信 (札開成)	何故男子にも家庭科か 愛知教育大学教授 米川 五郎	〃
27	〃	変貌する消費者生活の果ては -豊かさを求めて、模索する消費者- 慶應義塾大学教授 井原 哲生	〃
28	本間 恒太 (札新川)	男女必修の家庭科の実施に向けて 群馬大学教授 津止登喜江	山崎 節子 (札新川)
29	野元 哲浩 (札新川)	高齢者問題と家庭科教育 東京家政大学教授 樋口 恵子	〃
30	〃	男女必修の家庭科の実施に向けての課題 文部省初等中等教育局 職業教育課教科調査官 河野 公子	〃

(札幌新川高等学校 山崎 節子)

第21回（昭和58年度）会員数（245名）39校

- ・ 主題
　　これから農業教育はどうあるべきか

- ・研究発表
地域に根ざした農業教育は如何にあるべきか
－生涯学習者の育成をめざして－

- 発表者 海老原 四郎（眞狩）
岡崎 正昭（眞狩）

- ・部会講演
士幌町農業協同組合長 理事 安村 志朗氏

• 講演內容

士幌町農協の生い立ち

第22回 (昭)

• 主題

これからの農業教育はどうあるべきか

- ・研究発表
—コンピュータの導入—
発表者 山田 進（遠別農）

・部会講演
帯広畜産大学 教授 田島 重雄氏

• 講演內容

- 農業教育の進歩とその課題

第23回（昭和60年度）会員数（227名）37校

 - ・主題 時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか
 - ・研究発表

- 発表者 押田 勇 (岩見沢農)
- ・部会講演
農林水産省農業生物資源研究所
所長 鳥山 国士氏
 - ・講演内容
農業におけるバイオテクノロジーの利用
- 第24回 (昭和61年度) 会員数 (230名) 36校
- ・主題
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか
 - ・研究発表
バイオテクノロジーの学習指導について
発表者 入宇田 尚樹 (士幌)
岡崎 正昭 (真狩)
 - ・部会講演
NTT 北海道支社高度情報通信システム事業部
部長 飯倉 正夫氏
 - ・講演内容
高度情報化社会の展望
- 第25回 (昭和62年度) 会員数 (226名) 33校
- ・主題
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか
 - ・研究発表
農業の教科指導における情報処理教育に関して
発表者 船瀬 敏朗 (遠別農)
松永 靖 (中標津農)
 - ・部会講演
文部省初等中等教育局職業教育課
教科調査官 角田 順三氏
 - ・講演内容
農業教育の現状とこれからの展望
- 第26回 (昭和63年度) 会員数 (236名) 33校
- ・主題
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか
 - ・研究発表
地域の活性化に寄与する農業教育はいかにあらるべきか
発表者 大高 優 (中頓別農)
田中 廣明 (壯瞥)
 - ・部会講演
北海道大学 教授 東 三郎氏
 - ・講演内容
森林保全の意義と方法
- 第27回 (平成元年度) 会員数 (235名) 32校
- ・主題
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか
 - ・研究発表
地域の活性化に寄与する農産物の付加価値増大とその消流の指導をどのようにしたらよいか
発表者 小野 武二三 (大野農)
北澤 住人 (更別)
 - ・部会講演
文部省初等中等教育局職業教育課
教科調査官 角田 順三氏
 - ・講演内容
高等学校学習指導要領の改訂と農業教育の課題
- 第28回 (平成2年度) 会員数 (215名) 32校
- ・主題
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか
 - ・研究発表
「課題研究」の取り組みについて
発表者 山本 政行 (旭川農)
 - ・部会講演
指導農業士 夏井 岩男氏
 - ・講演内容
農業教育と実践
- 第29回 (平成3年度) 会員数 (270名) 32校
- ・主題
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか
 - ・研究発表
「課題研究」の実践をとおして
発表者 小野寺 満 (標茶)
 - ・部会講演
国立教育研究所教科教育研究部
職業教育研究室主任 名取 一好氏
 - ・講演内容
青年期における職業教育
- 第30回 (平成4年度) 会員数 (223名) 32校
- ・主題
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか
 - ・研究発表
生物工学の基礎的な指導について
発表者 田口 晴男 (余市)
 - ・部会講演

・講演内容

工 業 部 会

昭和38年5月、本研究会が正式に誕生して以来30年が経過し、ここに30周年を迎えることができましたことは誠に同慶にたえません。

この間、本部会も全道工業教育研究集会並びに小学科でおこなわれている学科研究会等と共に充実発展を続け、今や工業教育推進のために欠くことのできない重要な研究団体として、その重責を果たすに到っております。

このように本部会が充実・発展し続けた中には10周年、20周年記念誌からも察せられるように、歴代の部会長を始めとし、部会役員の並々ならぬご苦労とご努力によるものであり、更に会員各位の熱心な研究意欲と積極的なご協力によるものであります。

今回、教科部会30周年の歩みを掲載するにあたり、10、20周年記念誌にならい、この10年間の歩みを研究集会を中心に簡単に振り返ってみたいと思います。

昭和58年度（第21回）～昭和59年度（第22回）は前年度に引き続き、川端保先生が部会長をつとめられ「時代に即応できる工業教育のあり方」を部会テーマとして、益々高度化する我が国的情報社会の実態とそれに対応する工業教育の指針等について、日本産業用ロボット工業会事務局長小林康宏氏と電電公社札幌無線通信部長阿倍幸夫氏のご講演を拝聴することができ、我々の意識と発想の転換に大いに参考になったところであります。

また、昭和59年度は新教育課程の完成年度でもあり、一般参加者による研究発表は新しい工業教育を目指しての課題と展望について、及び工業数理、工業基礎に関する実践的な指導方法等を中心に、研究討議が展開されました。

昭和60年度（第23回）～昭和61年度（第24回）においては、北村昭先生の部会長のもとに、「時代に即応する工業教育のあり方」に部会テーマも変わり、より実践的な方向に進むことになりました。一方ご講演者においては北海道電気通信監理局長佐藤允克氏より、演題「ニューメディア時代について」の中で近い将来やってくる多彩なニューメディアによって、家庭経済、地域社会がより効率

的に変容していく様子と工業教育のかかわりについてご教示いただきました。また北海道大学経済学部教授小林宏氏より、演題「サービス化、脱工業化社会における工業教育」の中で、進展する情報社会において学校教育も時代に即応した先端的分野を取り入れ、新しいやり方を工夫しなければならないが「読み、書き、そろばん」を重視することが多用な職業に対応できる一般的な能力を高める大きな要素であるとのご講演いただき、参加者一同大いに感動を受けたところであります。

昭和62年度（第25回）～平成元年度（第27回）の3年間、品川三雄先生が部会長として活躍され、部会テーマも2年目より「時代に即応する工業教育の創造と実践」に変わりました。それに伴って一般参加者による研究内容もコンピュータを活用した実践的な学習指導事例、並びに教材開発事例等多岐にわたる発表が見られ、参加者からも高い評価を得られることとなりました。一方講演においては北海道工業大学学長松本正氏より演題「時代に即応する工業教育」の中で、先生の長きにわたる貴重な体験から、どのような社会に変化しようとも教育の原点に立ち帰り、我慢と忍耐の中で愛情と情熱を持って対処し、感動と自信を持たせる教育が極めて大切であることを力説され、我々工業教育に携わる者として大きな感銘を受けたところであります。

また、昭和63年度より研究発表・研究討議の時間帯の中で短い時間ではありますが全国高等学校長協会主催で実施されている道外研修者からの研修報告を行ってもらうこととなり、一層研究会は充実したものとなりました。

平成2年度（第28回）～平成3年度（第29回）の2年間は小泉善治郎先生が部会長におつきになり本部会の充実・発展にご尽力いただき、研究発表・討議も一層その内容を深めることになりました。

特に科学技術の進歩と経済の発展により、情報化、国際化等に対応できる工業教育の推進が一層重要視されているなかで、北海道産業教育審議会副会長山田正氏の「国際化と職業教育」について

のご講演は、我々に新たな教育的視野を開かせて戴いたところであります。

平成4年度(第30回)、今ここに30周年を迎える年、部会長に高橋淳一校長をお迎えし、本研究会が一層飛躍するために、今日的な課題解決に向か、関係者一同叡知を結集し力強く動き始めたところでございます。

以上、ここ10年間の工業部会の足跡を振り返ってみましたが、ややもすると、部会運営について、マンネリ化しかねないと危惧いたしております。今後、会員各位のご理解とご協力によりまして、更に充実発展させて参りたいと考えておりますので、よろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。

年 度 回 数 会員 数	部 会 長 参 加 數 場 会	講 演	部会研究発表
58 第21回 286	川端保 180 教育文化会館	「わが国のロボット産業」 日本産ロボット工業会 事務局長 小森康宏	帯広工 函館工 俱知安高 大外 熊崎瀬 邦重昇
59 第22回 287	川端保 158 教育文化会館	「高度情報化社会の実現と工業教育のあり方」 日本電信電話公社 札幌無線通信部長 阿倍幸夫	名寄工 紋別南 美唄工 荻原吉 田納正 秀仁昭範
60 第23回 292	北村昭 179 協栄生命ビル	「ニューメディア時代について」 北海道電気通信監理局長 佐藤允克	旭川工 北見工 苦小牧工 吉田海老名宮川 洋優章
61 第24回 259	北村昭 170 教育文化会館	「サービス化、脱工業化社会における工業教育」 北海道大学教授 小林好宏	札幌工 小樽工 釧路工 志摩室崎佐藤 理人卯俊
62 第25回 252	品川三雄 184 北海道工業高等学校	「工業教育の現状と今後の将来展望」 文部省初等中等教育局 職業教育課教科調査官 岩本宗治	夕張工 富良野工 帶広工 大西杉石 洋本原惟義
63 第26回 251	品川三雄 161 教育文化会館	「人間の情報処理のしくみと工学的応用」 通商産業省工業技術院製品科学研究所 感覚情報工学課長 工学博士 清水豊	琴似工 芦別総合 浦河橋 笠川政久岡清生
元 第27回 240	品川三雄 159 教育文化会館	「時代に即応する工業教育」 北海道工業大学 学長 松本正	室蘭工 函館工 留萌工 岡本井田 義則弘豊
2 第28回 228	小泉善治郎 148 社会福祉総合センター	「工業教育の今後のあり方について」 北海道大学 教授 渡辺寛人	稚内商工 美唄工 滝川工 藤寺廣瀬 田舎和光
3 第19回 211	小泉善治郎 149 社会福祉総合センター	「国際化と職業教育」 北海道産業教育審議会副会長 山田正	旭川工 名寄工 江差南 清水次 高橋島貫
4 第30回 188	高橋淳一 社会福祉総合センター	「工業教育に期待するもの」 デービースoft株式会社 代表取締役 古谷貞行	苦小牧工 紋別南 北見工 辻村時常 高橋包省 時豪彰男

(琴似工業高等学校 塚本彰男)

商業部会

発展と充実の10年 発会以来20年間の歩みは、20周年記念誌に簡にして要を得た記述があり(松岡三千雄氏執筆)，それに尽きる。ここでは、その後の10年間の歩みについて略記する。

本研究会は、誰でも知っていることであるが、個人単位で会費を納めて会員となり、また、研究集会に参加するには別に参加費を払って参加する。教科部会を運営するには本部から支給される会場費・運営費等をもって賄う。事務局を引き受けた学校は、運営担当者会議に出て、それに則り、各教科研究集会の企画運営にあたる。もちろんどの

教科においても、校長協会傘下の当該教科の組織と連携しながら事を進めるであろうが、商業教科部会については、その度合いはきわめて強い。本来、校長協会商業部会と当商業教科部会とは別の組織であり、会の存在形式も明らかに異なる。しかも前者は自ら主催する強力な研究会を持っている。事務局が札幌啓北商業に置かれて20年近くになるが、この10年を振り返っても、分科会を2つから3つに増やして研究の場を広げ、また、部会講演の講師に毎年適任者を招くことができた。しかし、これも独り事務局の力ができるものではな

い。

校長協会商業部会との関わり　顧みれば、本研究会商業教科部会は、発足当初から校長協会商業部会が事実上の母体として、この会を支えてきた。しかも、近年とみにその連携の度は高まり、いまでは当教科部会が毎年の研究集会を企画する段階から、きわめて好意的な支援を受けている。大枠の組立てから具体的な設置分科会、さらに研究・司会・助言・記録・運営に至るまで、事務局が描く構想以上の事の運びと内容の充実を得ている状況である。校長協会商業部会の校長先生方のご理解がこれほどまでに浸透してくると、事務局としても意気に感じ、取り組みの労を惜しむ気など全く生ずる隙もない。まことに幸いなことである。

校長協会商業部会は、年間大変な数と種類の行事ないし研修会等をこなす。その中には伝統的なものもあれば、時宜を得た斬新なものまでいろいろある。それらに共通していることは、どれ一つをとっても、決して惰性に流れることなく、実施にあたっては毎回周到にして真摯な見直し・点検が行なわれている点である。「当たり前のこと」と言えばそれまでであるが、そのような姿勢が、次々に生ずる新しい課題への取り組みの活力となっているように思われる。その中にあって、夏の全道高校商業教育研究集会(略して「全道商研」)は圧巻である。毎年当番校をまわしながら、7月下旬に二日間の日程で行なわれるのが常である。この研究集会には全道各地から、商業科を置く学

校の校長を先頭に300名に達する商業教科関係の教員が集まる。研究会は数個の分科会に分かれて熱い協議がなされ、毎年盛会である。いつの頃からか、1月の高教研商業部会研究集会が、あたかも校長協会商業部会の事業の「正会員」のように遇され、「夏の全道商研」・「正月高教研」というふうに二大研究集会の観を呈するに至っている。

結びに代えて　20周年記念誌に当時の事務局長松岡三千雄先生(その後札幌藻岩高校長)は、当部会から夏の全道商研と並んで着々と発展してきた旨を述べておられる。まさに地道な苦労を重ねて当教科部会の研究集会の方向づけを固められた時期であった。20周年以降の10年間は、そのような礎の上にネットワークをいっそう広げ、文字通り全道的な研究会への道を進んでいる。事務局における先達のご労苦に、改めて感謝の意を表したい。その中にあって、敢えてお名前を挙げさせていただければ、前教科部会長の肥田進先生であろう。先生は事務局長として4年、教科部会長として3年、合わせて7年の長きにわたって当教科部会の発展・充実に寄与された。それまでの課題の全てに着手され、そして完成の域にまでもっていかれた。持ち前の広角な視野とすぐれたバランス感覚である周到な段取り、加えて相手方への気配りには他の追従を許さないものがあった。わたしは、それら諸々の遺産を引き継ぎ、その路線を進めるだけの恵まれた身である。

(札幌啓北商業高等学校 小松 信夫)

水 産 部 会

本年度から水産部会事務局を担当することになりました。先輩の担当者からうかがったり、研究紀要等の資料を参考にして、部会のこの10年のあゆみをふりかえってみたいと思います。

この10年間に部会長は瀧川茂登校長(故人・昭和58年度から2年間)、間山郁三校長(昭和60年から4年間)そして現在の勝木茂校長(平成元年から)と3人替りました。

本部会は昭和40年に発足しましたので、現在28年目にあたります。全道の水産関係教員約100名のうち8割近くの75名が会員登録しています。部会としては小人数ですが、発足当時から関係教員の大多数が加入しているのはこの研究会によせる関心が高いことを物語っていると思われます。また、毎年の部会研究大会への参加者も50~60名と計算

上は1人当たり2年に1回以上参加していることになります。部会終了後、会場を移しての懇親会では部会研究協議のつみ残しや参加者の各学校の情報交換の場となり、参加会員相互の親睦を深めてきました。

水産業は最近さまざまな懸案をかかえていますが、水産教育も同様に入口論(生徒募集)、出口論(進路対策)をはじめ学習指導要領の改訂にともなう諸問題など懸案事項も多く、研究協議の材料には事欠きません。

水産教育関係の研究組織としては、本部会の他に全国の水産高校関係教員を対象とした全国高等学校水産教育研究会(全国水教研)とそのブロック組織である北海道高等学校水産教育研究会(北水教研)がありますが、こちらの研究会では水産

の多様な学科－海洋漁業系学科、栽培漁業系学科、水産工学系学科、情報通信系学科、水産食品系学科－に関する内容の研究協議が多く行われてきました。

本部会の主テーマとして「これからの中等教育をどうすすめるべきか。」(昭和58～61年)、「新しい時代に対応する水産教育はどう進めるべきか。」(昭和62年～平成4年)副テーマ「各学科における専門科の指導内容と指導方法」、「各学科における新設科の指導内容と指導方法」というように学習指導要領の改訂を念頭において、新しい水産教育を目指した研究協議が多くなされ、その成果をもとにした教育がすすめられてきました。

講演では、文部省教科調査官の方より新学習指導要領、水産教育の現状や諸問題等についてお話を

し願う他に、水産関係大学の先生より水産に関する新しい知識技術を紹介していただく等その講演内容は会員の水産教育活動の一助になっていきます。今後も私共、水産教育関係者へ刺激ある講演を期待しています。

例年、研究会の1日目は札幌での全体会、2日目の部会は小樽に移って、小樽水高を会場として日程、運営方法もおなじようにおこなわれてきましたが、30年近くになりますので、マンネリにおちいらないように改善をはかっていく必要があると思います。会員諸氏の積極的な参加と協力をお願いし、併せて、今後とも意義ある部会であることを念願しています。

(小樽水産高等学校 平沖 道治)

高教研への提言

国語部会

現在の高等学校教育研究大会は、日程第一日目の全体集会と第二日目の教科別集会とで構成されていて、それぞれが整然と展開され、成果をあげてきているところでありますが、本年度30周年という記念すべき節目を迎えるに当たり、基本的に国語部会からの視点ということになりますが、提言をさせていただきたいと思います。

まず第一に、現在の第一日目の開会式のあと、道外・道内の講師による講演が、午前と午後の二つもたれていますけれども、この形態・内容の見直しを図ってはいかがでしょうか。

全体集会を午前中に限り、その中で開会式と講演を一つだけもつようにします。しかも、講演内容については、国内外ともに変化の激しい中にあって、教育の方向性を的確におさえたものが望まれます。

例えば、生涯学習審議会の答申案の中の、当面重点的に充実・振興方策を考えるべき四つの課題の、「時代の要請に即応した現代的課題に関する学習機会の充実」に対応するものであったり、あるいは、1989年に制定された教育改革法に基づく英国のナショナル・カリキュラムの中の五つのクロス・カリキュラムのテーマの一つの教科間の関連を図った環境教育に関するものであったりした方が、参加者の心の窓を大きく開くのに役立つものと思います。

講師料が高騰する中にあって、広い視野と豊富な経験をもつ人を発掘するのは至難のことかもしれませんのが、第一日目の全体集会における講演が高教研の基調講演として、質の高い学術的なものになることにより、高教研全体の性格も変化していくかもしれません。

第一日目の午後からの教科部会が、時間的余裕と内容・方法面で時代的要請に応えるものになる

ことによって、一層充実してくるものと思います。

また、大会要項は、これまで当日会場受付で配付されておりますが、これにつきましては各教科部会での研究発表の要旨を掲載し、12月の中頃までに各学校に配付し、参加者の事前学習に供するとともに、助言者への便宜も図り、協議内容の深化を期待したいものであります。

第二に、地区の各教科部会の活発化であります。全道には15地区ありますが、他の教科部会についてはわかりませんけれども、国語部会からみると、この問題は30年来の課題であり、なかなか有効な手立てを見い出すことができません。

国語部会の石狩地区では、幸い各学校の先生方の協力を得て、授業公開を主とした研究会を開き研修を深めていますが、今後は本部と地区ごとの各部会との連携の強化が特に求められています。

第三には、研究紀要の問題があります。内容的には、各教科の研究や実践、調査等を中心に編集されており、質的にも高いものがありますが、百花齊放といえるほど雑多であります。

新学習指導要領の実施を間近に迎え、学習指導の内容や方法の刷新が求められている今、各教科の研究実践を一層推進していかなくてはなりませんが、その観点からみて、現在の紀要がその期待に応えているといえば過褒になるかもしれません。

学校での教育研究や実践が、往々にして2・3年の期間で、同じ研究分野の先行の研究成果を、積み重ねることのない実態になりがちな通弊を避けるため、各教科部会の、その年度の活動状況のアピストラクトを載せることができないでしょうか。高教研の機関誌としては、この辺に重点を置くのも学校や先生方との結びつきを強めるという面で一助になるかもしれません。そうすると自然に高教研自体の在り方も変わってくるものと思ひ

ます。

以上、諸先輩の御苦労も顧みず多々申しあげました。望蜀の感なきにしもあらずというのが正

直なところであります。

(札幌稲北高等学校 大東 俊郎)

社会部会

1. 高校教師の弱点を自覚し、その克服へ

今日、変貌する時代と社会環境を反映して、高校教育は国民の大多数を社会に送り出すべきわめて重要な役割を果たすものとなっている。しかし、一般的に高校教育における教育研究は、従来から教科・科目に関わる専門的分野の研究が先行し、教育の対象である高校生の発達や行動等の研究やそれらの研究を基礎とした教育指導の研究（学習指導・生徒指導・進路指導・保健指導等を含む）、また、学校経営の問題として総合的に研究すること等は不十分であった。（教科経営・学年経営・ホームルーム経営等を含む）

高校教育をとりまく社会の教育的環境の変化は、高校の教育制度、教育内容、教育方法のみならず、教師のあり方、教師の学校経営への関わり方にまで、大きな転換が求められている。

高校教師は従来の考え方を一掃し、新鮮な発想を重視して新たな高校教育を創造していくことが急務になっているといえよう。1992年3月「週間ダイヤmond」の特集記事で、「人事部が評価した役に立つ大学」が報道された。これは上場企業非上場企業の人事部長を対象に実施した調査で、
①入学試験の偏差値、②学力以外での能力、③個性度、④大器晩成度、⑤要領のよさ、⑥組織適応力、⑦管理職実績度、⑧国際業務実績度、⑨就職指導のよさ、⑩定着率、⑪教育システムのよさ、そして⑫総合評価の各項目毎に有力100大学を上位から100位まで並べ評価点を出したものである。

その結果、②学力以外の能力（即戦力度）の評価では、1位は早大、2位は慶應、3位は明治、4位は同志社、7位は上智、9位は立教、10位は学習院、14位は関西、15位は青山、17位は立命館、18位は法政と20位中12校が私大である。国公立大を見ると、5位が神戸、6位が東大、8位が都立、11位が九大、12位が一橋、13位が北大、16位が横浜市立、19位が東北、20位が信州と9校である。

各大学では、臨教審第三次答申の高等教育機関の組織・運営の改革と、臨教審第四次答申の高等教育の多様化と改革を受けて、さまざまな大学の改革が進められている。そして国の政策も大学審

議会での審議をふまえて大学設置基準等の改正が行われている。その結果、大学はかなり面白い運営が行われ得るようになってきている。例えば、一般教育と専門教育の区分を取り扱うこと、また既に始められている多様な入試方法の採用等、高校教師は、毎年くるくると変わる大学入試制度に対して不満はぶつけるが、今後、高等教育が社会の変化に対応して、時代の要請も考えながらどう改革していくのかについて目を向けることが少ない。私達、高校教師は、高校教育の範囲から、もう少し社会全体に視野を広げてみることによって、高校生に、今、そしてこれから、どんな教育が必要なのかが鮮明になってくるといえる。

そして教師は教科の専門的知識の伝達者としてのみではなく、一人一人の生徒を生かすために、生徒の人間としての全体像をとらえながら発達段階に応じた適切な指導ができるように研鑽しなければならない。そのための研究組織も必要である。

2. 研究団体における指導者の役割

教育研究団体は、職能団体の一つとして教師が
自主的・自発的に教育実践研究と教育の理論的研究
を目指して結成される。従って日常の実践研究
活動を土台に教育研究の理論化と研究交流と研究
成果の普及活動が極めて重要なのである。しかし
教育実践研究の母体となる校内研修の組織体制が
確立されていなかったり、組織体制はあっても十分に機能していなかったりすることがある。

高教研をより発展させるためには、まず全道の各学校が、自校の校内研究組織体制を確立し、それを十分に機能させることである。第2に、教育実践を広い視野からの教育経営実践と一元化させることである。「教育経営」のとらえ方を「学校教育を含む諸種の教育機関である教育組織体及び潜在的教育機能を有する組織体において行われる学習者の変容を目指した或はそれに影響を及ぼすあらゆる活動を、人、物、金、運営、時間等の諸要素を総合的に考慮しながら、短期的だけでなく長期的視野に立って管理していくこと」とするならば、高教研という教育研究団体の諸活動は広義の教育経営におけるさまざまな活動にコミットす

ることができる。

高教研が研究団体としての機能を自覚し、計画的・継続的に組織的な研究と研修事業を展開していくということは、諸種の教育機関である教育組織体と連携・協調関係をとりながら、高校教育の振興に寄与していくことでもある。そして現実に教員の資質向上としての自己研修に、或は学習指導法等に関する研究等の面で影響を与えていた。

しかし、教育現場の支持あるいは納得できる研究活動がなければならない。

研究団体の指導者が果たすべき役割は、次に述べるような諸問題と積極的に取り組んでいくべきであろう。第一に、現行の教育課程下にあっても教育委員会の裁量で相当程度の教育研究に当っての先導的試行が可能であることについて指導者がまず認識することである。その専門的領域の研究については教育委員会に積極的に協力を求め、実践研究ができるようにはたらきかけ、先導的試行

研究ができるようにすべきである。第二に、地域の教育研究活動に、各種の研究情報を提供できるように、研究情報の収集、整理、提供体制を整えることである。いわば、専門的領域の研究活動を取り組めば、その専門性に依存し、情報の入手と研究指導助言を要請する度合いが高くなる。第三は、地域の教育実践活動を支援できる研究指導体制を整えることである。現在ある全国のさまざまな研究団体の組織は、そうした指導的力量をもつ研究者が、後輩を育てるような研究活動組織体制にはなっていないと言われている。第四に、専門化が進行すると研究内容が個性的になるので、異なる意見や考え方の意見交流・情報交換がより必要となる。第五に、研究団体としての活動資金を蓄積していく工夫が必要である。研究組織にもP₁-P₂-B-Sの経営サイクルが必要である。

高教研の一層の発展を心から願い結びとする。

(札幌清田高等学校 三浦 一夫)

数 学 部 会

平成4年4月に札幌啓成高校から当数学部会の事務局を引き継ぎ、現在第30回大会に向け、鋭意その準備をすすめております。

この度、本部事務局から高教研への提言を依頼されました。本来であれば、これまでの当部会事務局と担当された方々等と協議の上、提言すべきところですが、諸般の事情もあって、独断ではあります、引き継ぎ資料等を整理、勉強して、下記のようにこれまでの当部会総会等で確認されている事項と若干の話題を提示し、提言に代えさせていただきます。

これまでに確認されている事項について

(1) 数学部会のあるべき姿

- 第10回大会（昭和47年度）に提案、承認
- 創設当時の基本的な考えに則り、日数教大会への足がかりとなる方向に部会集会を推進すること。
- 学習指導要領を中心とした研究実践と先導的研究を推進すること。
- 各地区支部の組織化を図るとともに、共同研究を推進すること。

第20回大会（昭和57年度）においても、前述の事項を今後とも継承することが確認されるとともに、減少しつつある研究紀要への論文発表等、先導的研究の推進や部会としての地区支部への働き

かけによる系統的・組織的な研究にも力点を置くべきものであると強調された。

(2) 研究発表等について

第29回大会（平成3年度）において、第20回大会の強調事項並びにそれまでの研究発表等のあり方の反省に立って次の事項を事務局（札幌啓成高校）から提案・承認

- 研究発表及び研究紀要発表支部順
平成4年度 石狩、渡島、檜山、十勝
平成5年度 石狩、後志、釧路、網走、根室
平成6年度 石狩、南空知、北空知、胆振、日高

平成7年度 石狩、上川、留萌、宗谷
以降上のローテーション

- 研究発表3、研究紀要発表1を各地区支部役員で相談し、決定する。

以上(1)、(2)の確認事項を第30回大会以降も継承してまいりたいと考えます。

次に上記の事項をより確かなものとし、機能させることが大切であると考え、次のことを今後推進してまいりたいと思います。

- 各地区支部相互及び支部と事務局とのより一層の連携を推進する。
- 研究発表、研究紀要発表の依頼は、できるだけ早期に行うとともに、確認事項のローテ

ーションに加え全道からの発表を促進する。
(事務局へ連絡いただくなどの方法により)

- 部会報を発刊し、部会、支部等の活動状況などを広く会員諸氏へ提供する。
現在の数学部会は600名に近い大きな組織へと発展してまいりました。この間事務局担当者のご努力は勿論でありますが、関係各機関、各支部役

員及び会員各位の多大なご協力があったればこそとの思いでありますし、改めて事務局としての責務の重大さを痛感している次第であります。

今後とも会員の皆さんのご指導、ご支援を得て、部会の更なる飛躍を期したいと願っています。

(札幌真栄高等学校 今西 義紀)

養護部會

養護部会が高教研に加入し、位置づけられてから7年目を迎える。

高校に勤務する養護教諭の私達は、予てから全道レベルのそれも基盤のしっかりした研究会の確立を望んでいた。

その中で、「石狩地区高等学校養護研究会」(昭和59年度発足、会長、当時の札幌手稲高等学校校長 高沢 博先生)を基礎とした「北海道高等学校養護教諭研究会」(以下、高養研という)が、全道高校長協会のご支援とご指導のもとに設立の準備を進め、高沢 博先生の絶大なるご尽力により、養護教諭としての高校独自の問題や課題を研究する場として、昭和61年1月に設立された。

ただ、この「高養研」の活動のみでは、研究会を持つ時期や場所によって広い範囲からの参加が難しく、また、より質の高い研究活動をするためにも、この会が高教研に位置づけられることを望む声が多くあった。

そのような中で幸い、石狩地区の研究会が熱心に研究活動を積み重ねてきたことが認められ、念願の高教研への位置づけがなされたのである。

この高教研への加入により、全道の各地域で頑張っている若い後輩のために、1回でも多く新鮮でレベルの高い講演や、より実践的な研修内容を

用意して研さんに勵んでもらいたいというねらいも達成することができたのである。

高教研に位置づけられてからの研究活動は、内容として「養護教諭の専門性」と「養護教諭の行う相談活動」を主体的にとりあげてきたが、会員の要望にこたえ、現場で、即、実践に役立つものとして、「最新の医学的知識」、「救急法の実技」、「緊急時の処置や学校としての対応」等についてそれぞれの第一線級の専門家を講師に招き研修を行っており、内容も充実しているので参加者は満足してくれている。

また、研究会の折に毎回行なっている、各地域の養護教諭が抱える問題点や疑問、悩みなどについても、遠慮なく互いに出し合い、共に考え、自由に話し合う「フリートーキング」の場を今後も継続していきたいと考えているので、積極的に話題を提供してほしいと思う。

その話し合いの中から、全道高校養護教諭のもう一つ問題点や課題も探ぐことができるので、高教研養護部会としてさらに横の連携を深めながら、これから活動の在りかたや進めかたに方向づけを求みたいと考える。

折角与えられた研究部会であるので、全道の養護教諭諸姉と共に着実に歩んでいきたい。

保健体育部会

昭和38年に当会発足以来、本道高等学校教育の充実・発展に努力していただいた当会関係者に深く感謝の礼を申し上げる次第です。30年の経過の中には筆舌に尽しがたい御苦労も多くありましたことを推察いたしますと、本会の隆盛は、本道教育に従事する者の熱意の表われの歴史とも言及することができると思います。さて、今日は、激変の時代、変化の加速時代、グローバル時代等多様

な表現が使われます。20世紀を整理しているのか、21世紀を創造しようとしているのか、ともかく歴史の節目を人々は感受している。教育の場にあって多くの論議を惹起させ、同時に新しい路線を探究模索している時でもあります。与えられた課題は実に大きくその重圧に沈没しますが、堪えて、本研究会が継続しさらなる発展を念じて提言を描かせていただきます。

ある文に次のように書かれたものがありました。「教育ほど、いかがわしい理論のまかりとおる分野はない、なぜかといえば結果がすぐに出ないからである。明白な結果ができるまでは、数年、いや十数年が必要である。ということは、十数年は勝手なことをいい、勝手なことをやれるということである。」教育に従事する者にとっては、多種多様な意見、反論のあるところです。結果など生涯でません故に生涯教育なのです等となれば、尺度すら不明になる。ともあれ教育不要論はなさそうであるから重要なのは実践、授業、これが教師に

求められる最大の責務。授業を通して学校は友達と遊ぶところ、勉強は家に帰ってからにしようと言う構図は破壊しなければならない。そのためには教師は授業と言うステージで切磋琢磨することが要求される。現在の当大会にさらに支部単位で授業実践そのものを研鑽する研究大会・研究授業の開催を行ない、教師間の比較検討・授業の改善により会員の自他共栄を図る企画を推進してはと考えます。

(札幌南陵高等学校 玉置 重実)

高教研の発展によせて

理 科 部 会

高教研30周年記念大会が、新学習指導要領のもと小学校の新教育課程の実施年度に重なったことに特別の意義を感じる。新しい学力観に立ち小中高の一貫教育に基づいて、平成6年度実施の高等学校新教育課程をどのように編成するべきか、その手立てを与える記念大会となるだろう。

我が国は、飛躍的な科学技術の発展のもと経済の高度成長を遂げ人々に物質の豊かさを与えたが、同時に、かけがえのない地球環境の破壊と人々の心の荒廃をもたらした。

これから理科教育は、このような人間社会と地球環境の激しい変化に対応した新学習指導要領の趣旨と理科の改訂方針「児童・生徒の個性を生かし科学技術の発展に配慮しつつ、観察・実験等体験的学習を通して科学に対する意欲・関心を開発し、探究活動や課題解決学習を通して科学的思考力・判断力・態度を育成する」＝「新しい学力観を育成」するものでなければならない。

第29回理科全体部会に於ける山極 隆講師（文部省初等中等教育局主任視学官）の全体講演「新高等学校学習指導要領 理科の視点」は、新しい学力観に基づき理科の各領域を新教育課程の編成にどのように位置づけ・生かすかについて、大きな指標となった。講演要旨は次のとおりである。

1. 高等学校生徒の能力・適性・興味・進路など多様化に対応した「総合理科・IA」
2. 科学技術の進歩に伴う学際的な内容や考え方に対応した「IA」
3. 自然科学に相応の能力をもつ生徒に対応した「IB・II・探究活動・課題研究」
4. 観察・実験、探究活動・課題研究に対応した「コンピュータの活用」
5. 自ら学ぶ意欲や自ら考え、的確に判断し、行動できる主体的・能動的な態度の育成＝

「新しい学力観」に対応した「指導方法の工夫改善」

これまで高教研理科部会の趣旨にご理解とご支援を頂いた講師の諸先生、また、事業計画の立案から大会当日までの長期間にわたりご努力とご協力を頂いた関係の諸先生に、事務局から、改めて厚く御礼を申し上げます。ただ、今後一層の充実と発展が期待されている高教研・理科部会にとって、会員数の減少が続いていることは気がかりでならない。高教研・理科部会は岐路に立たされていると考える。

会員数減少の原因にはいろいろ考えられるが、各支部・各教科・会員の連携のもとで、多様な視点に立って、広く率直な意見を集約する過程で原因が浮き彫りにされるに違いない。また、減少の歯止めへの手立ても見えてくると考える。

私見ではあるが、減少の一因には開催地区的札幌固定制と開催時期の1月固定制であると思う。理科部会の現状は、役員の多くが北理研の組織中枢に所属しているので運営はスムーズであるが、北理研の会員が必ずしも高教研の会員になっていないこともあり、会員の意欲と関心が7月または8月開催・各年度地区別開催制の北理研に傾きがちである。

高教研の本部事務局はこれまでどおり札幌地区に置くとしても、各年度または隔年度地区別開催制としたならば、各支部・各教科の組織の活性化と会員数の増加という波及効果をどの程度期待できるのか、短絡的にはいかない難しい問題であると思う。

また、1月開催を学校年度の視点で考えると、当該年度における全教科の教育実践の総括に基づき次年度の教育実践への展望を開くところに大き

な意義があると考える。だが、どうしても正月気分ということもあり、大会参加者数が大会日程の進行に伴い激減するという現象が続いてきた。開催時期の安易な変更は、高教研の開催趣旨をも崩しかねないので、慎重な検討を要すると思う。

高教研40周年記念大会に向けて、高教研・理科部会が心機一転、再出発し、次代を担う子供達を育てるために、飛躍的な発展を遂げることを心から願っている。

(札幌月寒高等学校 斎藤 光男)

英語部会

北海道高等学校教育研究会を発足させ、幾多の困難を乗り切り会員数6,000名を越えるまでに発展させてきた諸先輩の先生方及び事務局の札幌旭丘高校で大変にご苦労をなさっておられる先生方に深い敬意を表します。

また、高校生に英語で自分の意見を発表する機会を作るために尽力された札幌開成高校の先生方、さらに中高英語教育研究大会を含めて上記の研究会と弁論大会を継続し、発展させるのに多大な努力を払われた先代事務局の先生方の功績に対しましても深い敬意を表します。

本年8月に、高教研の30周年記念誌を発行するので事務局担当者が一言書いて欲しいと本部から依頼があり、同時に送付されてきました20周年の記念誌に目を通させて頂きました。初代会長、2代会長等の方々の祝辞及び研究会の20年の歴史を読んで行くうち、現在の研究会の体制ができる上がるまでの障害や苦難の数々が次々と目の前に現れ、30年という高教研の歴史の中ではほんの2年間しか事務局を担当しないで、『高教研の発展によせて』を書こうとしていることがそら恐ろしくなりました。

そこで今回は、諸先輩の先生方の業績を踏まえこの2年間にかいま見てきたことから、今後の高教研の発展を祈念し、考えていることを少々書かせて頂きたいと思います。

高教研英語部会の事務局を担当させて頂く前にも、私は会員として全体集会及び教科部会に毎年のように参加していました。しかし、研究会に参加して何回目からか、高教研大会は新年交礼会だから、まず、厚生年金会館へ行って前任校の先生方と会うのが第一、そして研修をするのが第二、また部会では午前の講演を聞いたたら午後は他の学校の英語の先生と私設研修会と称して会場を抜け出すことが常となっていました。そして昨年3月に英語部会の事務局担当者を任せられることになり如何にして高教研会員の減少をくい止め、部会では午後の帰参者を少なくするかを考える立場となつたのでした。

すでに皆様がご存じのとおり、高教研の会員は昭和53年の6,549人をピークにその後は毎年100名ずつ減少し、本年度は5,129人(中間)となっています。英語部会に関しても、会員減少の影響は避けられず、本年度は700名を切ってしまいました。この減少は、大会参加の旅費が出なくなったということを第一の原因としてあげられますが、これ以外にも幾つかの要因を掲げることができます。

まず、高教研発足当時の目標『各教科の立場から本道高校教育を前進させたい』という願いを込め、あらゆる角度からの研究や発言が自由になれる場』がマンネリ化されずに現在も息づいているでしょうか。20周年記念誌で梶浦善次初代会長が書かれていた、『時代の要請に応じた教育は何であるか、全体に共通した問題の研究に踏み込むことが必要となるのではないか。この意味で従来の組織、運営を検討しつつ、新しい工夫を必要とするのではないだろうか。』との提言が生かされてきているのでしょうか。また、学校現場から言えば、高教研は「他校への奉仕」であるが、同時に「自校への奉仕」であり、それは引いては「自校の生徒への奉仕」であるという理念を、現在どの位の先生方が理解をして高教研の運営に協力をしているのでしょうか。

非常に生意気なことを書いてしまいましたが、事務局を担当させて頂いた立場から言えば、研究会に参加して下さった先生方が、参加してよかったです、学校へ戻ったときにこれは生徒へ還元できる、また、次の研究会が楽しみだと思って頂けるような企画をすることが、さらに参加する先生方は「よい教師はよい生徒である」という言葉を忘れずに研究会に参加し、常に多様化する教育を研修しようと心掛けて、初心に戻り『自由で自主、民主、公開』の研究会を事務局と参加者が一体となって作り上げることができれば、30代の成年期を迎えた高教研がますます発展して行くことと思い、今後の成熟を願って止みません。

(札幌拓北高等学校 高橋 誠)

工 業 部 会

工業部会の事務担当者として、部会役員並びに会員の皆様方のご協力のもとに微力ながら担当させていただいているこの私が、「高教研の発展によせて」の題材で掲載するのはあまりにも荷が重く、苦慮しているところでございます。

今回寄稿するにあたり、あらためて10周年記念誌を始めとし、20周年記念誌等を読み返し、一層、設立当時の本部役員並びに事務局の方々の並々ならぬご苦労とご努力を知り、深く敬意を表します。

本研究会がこのように隆盛発展をとげる事に到了一つには、本部役員の方々のしっかりした事業方針のもとに努力を重ねてこれらたからと思われます。その方針について改めて言うまでもありませんが、

1. 会員の一層多くの加入と研修への参加
2. 研究大会の内容の質的向上
3. 研究紀要の内容充実
4. 地区支部の教育活動の促進と教科部会との密接なる連繋

があげられます。

これらの4つの基本方針のもとに量的（会員数の増大、本部・地区・部会の組織の強化）、質的（研究内容と指導方法の深化拡大）な充実発展をとげ、今や本道高等学校の総合的な教科研究会として欠くことのできない重要な責務を果たし、時代と共におしよせてくるいろいろな教育問題解決の場として、また日頃の研究成果の発表の場として大いに活用させていただいております。

ここに到るまでには、常に全体研究テーマ、講師、大会期日、大会日程および運営など研究大会に関すること、研究調査に関すること、札幌以外での開催に関すること、機関紙に関すること、全体的な予算、会費に関することなど、いろいろ山積する諸問題を会員各位の立場に立って真剣に討議され取り組んでこられたからこそ、会員6,000名以上を有し、全道はおろか、全国にも類のない教育団体として発展してきたものと思われます。

しかしながら誠に残念なことに数年前よりの会員の漸減傾向は、工業部会としても同様で苦慮しています。今後その原因究明につとめるとともに、より魅力ある部会運営を目指して、日々努力していくことが、事務担当者の務めであり、ひいては高等学校教育研究会の発展に寄与することにつながるものと考えております。ついては関係各位の

今後より一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申しあげます。

さて、折角の機会でもありますので、ここで工業教育の現状と今後の進むべき方向等について、少しく触れて見たいと思います。

戦後、我が国は経済社会が着実に復興・発展を続ける中、中学校卒業者の進学率は、40年代に急上昇を示し、本道においても53年に90%を超え、平成4年には、96%に達しました。その結果、高校進学者の能力・適性、興味・関心、進路などの多様化が進行し、様々な社会の変化ともあいまって高校教育の在り方について、種々論議がなされるようになりました。

このような背景のもと、工業教育の目標も「日本の工業の建設発展の基幹である中堅技術工員の育成」から「工業分野の中堅技術者の育成」へ、そして「基礎・基本を重視し、工業の発展を図る能力と態度を育てる」教育へと変化してまいりました。

また、産業社会においては、今日、目覚ましい技術革新のもと、職種の専門分化や新しい職業分野の拡大なども進んでおり、今後も工業技術は、急激にしかも複雑に変化しつつ進展し、この傾向は一層顕著になると予想されています。そのため、これから工業教育においては、こうした変化に主体的に対応していくための素地を培うとともに、変化の激しい時代にあって、自らの手を通して考え、実際を通して問題の解決に当たる総合的な活動力を備えた実践的技術者を育成することが肝要であると考えられます。この認識のもと、「主体的で実践的な態度の育成」が今後の工業教育の目標として大きく取り上げられることになりました。

この目標を達成するため、各学校においては、まず、新しい教育の在り方として次のことを十分認識する必要があります。即ち「これまでの知識や技能を共通的に身に付けることを重視した教育から、一人一人の生徒が自ら考え主体的に判断し行動できる資質や能力を育成することを重視する教育へと教育の基調を変えること」であります。

その上で、専門教育としての工業の基礎・基本を重視した教育を徹底し、加えて、各専門分野の内容を充実・深化させていくことが大切であります。その際、情報化の進展への対応、エレクトロ

ニクス、管理技術・システム技術及び新素材に関する内容の近代化を図ることなどに意を注ぐ必要があります。

また、生涯学習社会への移行の観点からも、地域や学校の実態、課程や学科の特色などに応じ、それぞれの立場でどのような役割を果たしていくべきかを検討し、適切に対応していくことが必要あります。

これらのこととを具現化し、工業教育を父母・生

徒にとって魅力あるものにするとともに、地域や産業社会からの期待に応え得るものにするためには、工業教育に携わる者一人一人が、研鑽に努め、さらにその成果を持ち寄り研究協議するなどして、お互いを高めていくことが肝要であります。この高等学校教育研究会の工業部会がそのための一翼をない、工業教育の充実・振興のためさらに発展していくことを期待して結びといたします。

(札幌琴似工業高等学校 塚本 彰男)

商 業 部 会

昭和53年「新指導要領に関連して」

文部省教科調査官 斎藤 勝久

昭和54年「80年代のマーケティング」

横浜国立大学名誉教授 久保村隆祐

昭和55年「北国のくらし」

毎日新聞社 宮嶋 獲

昭和56年「わが国の産業構造の変化」

経済企画庁 小林 進

昭和57年「わが国のコンピュータの現状と発展」

(株)富士通 林 圭吉

昭和58年「北海道経済の現状と課題展望」

(株)拓銀 取締役 石黒 直文

昭和59年「企業が商業教育に期待するもの」

(株)リクルート 橋爪 年幸

昭和60年「海団なき時代の経済と社会生活」

(株)北洋相銀社長 武井 正直

昭和61年「カード社会の到来と発展」

(株)HCB 社長 藤田 照巳

昭和62年「流通業の情報戦略」

(株)セブンイレブンジャパン東京本社

総括マネージャー 上杉 敏

昭和63年「これからの商業教育」

文部省教科調査官 岡田 修二

平成元年「新しい商業教育への展望」

富山大学教授 澤田 利夫

平成2年「高度情報化社会と教育」

東京情報大学教授 石井 康雄

平成3年「これからの商業教育」

全国商業高等学校長協会理事長 大橋 信定

平成4年「新しい商業教育について」

札幌大学名誉教授 横川 義雄

近年、本校で行われた商業部会全体の講演、最近の演題と講師名である。その内容は、それぞれ

の急激な社会の変化を反映し、豊かな経験から含蓄のある言葉で聴衆を魅了した。その多くが先見性、示唆性に富んだものであった。この全体講演が商業部会の発展を支えてきた柱であり、全道から参加した会員を充分に満足させるものであった。

もう一方の柱は午後からの分科会。この分科会は当初、第一分科会と第二分科会のみであった。第一分科会は主として教育課程、教科内容に関するものであり、第二分科会は生徒指導、進路指導ときには教科内容といった具合に定まったものではなかった。しかし会員の増加、時代の要請もあって昭和61年度第24回大会から第三分科会を設けるにいたったのである。そして第一分科会は「教育課程」、第二分科会は「OA関連科目」第三分科会は「進路指導」とした。しかし本年度における第三分科会は多数の要望もあって「課題研究」となっている。分科会に於ける過去の研究発表を眺めるとき、珠算・簿記・商業経済を中心とした教科内容から情報処理教育をメインに据えたものへと大きく変遷した。

「商業教育のカテゴリを変えた10年」の感すらある。それだけに高教研の集会で得る教科内容の情報・知識が、時流に沿った明日からの授業におけるコアとなっているのである。

この研究集会の運営にあたっては、道教委をはじめ校長会商業部会のご指導ご助言を頂きながら全体会、各分科会の研発者・助言者・司会者・記録者・協議題提言校・研究紀要発表校をお願いしている。会場は、小樽商業高等学校・経済センター・北海学園大学を経て現在の啓北商業高等学校になった。もう20年近くになるが、それぞれに懐かしい思い出がある。20周年記念以前のことについては、当時の事務局長松岡三千雄先生が記念誌に掲載されておられるので省略させていただくが、

自分がその仕事を担当して初めてつくづく諸先輩のご苦労が偲ばれる次第である。

部会長もこの10年間で油屋真一校長から豊島一三・吉田弘一・肥田進・小松信夫校長へ、事務局長は松岡三千雄教頭から織田久・肥田進・小松信夫教頭へと変わった。30周年記念の今年、商業部会の会員数は実に371名。飛躍的に発展したその陰に、これら諸先輩のなみなみならぬ地道な努力がある。一例をあげると、毎年「北海道高等学校職員録」で全道の普通高校で孤軍奮闘している商業担当の先生を調べ、案内状をだしたり、電話をかけたり、徹底して推進したのが肥田進先生である。高教研に関する全ての資料を網羅して確立さ

れたのが肥田進先生であり、その膨大な資料を整理・統合し持前の企画力・組織力・実践力で高教研商業部会を不動のものにしたのは小松信夫先生にほかならない。わけてもうれしいのは、校内の協力体制の確立である。本校の先生方も全員会員であるが、事務職員も含めて全ての業務を分担している。総務、会場、掲示、放送、受付、会計、庶務、接待、……。そのために初日の厚生年金会館で行われる講演をなかなか聞くことができない悩みもある。「高教研が終わればお正月…それまで頑張ろう」先生方の合言葉である。

(札幌啓北商業高等学校 高塩 光明)

農業部会

北海道高等学校教育研究大会が創立30周年を迎え、今日の隆盛発展に至りましたことは誠に喜ばしく、心からお祝い申し上げます。

今では教員研修のよい機会として「年の始めは高教研から……」といわれるようすっかり定着した教育研究大会ですが、札幌旭丘高校の講堂を会場として335人の参加でスタートした第1回大会も、全体特別講演に期待するところが多く、5回目にして2,300人、現在では4,000人を越えるマンモス大会にまで発展し、本部事務局が会場確保に頭を悩ませる状態ですが、発足当時に比べて隔世の感があり、30年の歴史にふさわしい成長振りがうかがわれます。

教科別研究会は札幌旭丘高校で行われていましたが、参加者の増加により、第5回大会から、農業・国語・保育を除く各教科部会は、札幌市内の高校に分散し実施されるようになりました。

農業教科部会が単独会場で開催したのは、道庁赤レンガ会議室を借用しての第7回大会からでした。発足当時は、産業教育の充実振興を図るために、農業教育の体質をどのように改善すべきか、基本的取り方、具体的指導内容・方法など、農業教育の近代化に向けて研究協議を繰り返していた時期でもあり、農村が高校の教育に何を望むか、本道農業教育の近代化の展望や、西欧の農業教育について、世界的視野よりみた農業教育の方向、などの講演は我々に大きな刺激を与えてくれました。又、47年度の10周年記念講演では、農業教育の近代化と教育課程の編成について、文部省職業教育課教科調査官松下魏三先生に来道いただき、能力・適性に応じた教育課程編成の多様化、学習の

消化不良をなくすための精選と構造化など、教育課程改訂に対処する考え方を直接聞くことが出来ました。この時の会場は札幌市民会館でしたが、以後20年間、札幌市民会館で開催されています。そして、この10周年を契機に、農業教科部会の事務局校は2年交替制となりました。

第11回以降の10年は生活文化の向上、産業構造の急激な発展などにより、農業の環境要因の変化に対応する農業教育のあり方、などが研究主題の視点ともなりました。大学・関係機関から講師をお迎えした「新しい農業技術」「北海道農業の現況と今後の方向」、実際に農業を営んでいる北海道農業士の農業経営観、現職校長の教育の理念と農業教師に求められるもの、など時代に適した講演内容は、参加者に深い感銘を与えてくれました。

この頃から中学卒業生の減少期に入り、高学歴志向や普通科志向が強まるとともに、定時制農業高校の学科転換がみられ、農業科をもつ学校数が減り始めました。会員数は第11回(48年度)の424人をピークに、農業教科部会研究集会の参加者も200人を越え、市民会館の会場に入りきれない時期もありましたが漸次減少しています。しかし、最近では33校、会員数230人、研究集会参加者120~130人と一定の状態になっています。

第21回(58年度)以降の10年は、生徒や父母の普通科志向の高まりと農業情勢の変化などから、学校の減少があった状況の中で、特色ある学校づくりや、魅力ある農業教育のあり方を求めて、「時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか」をメインテーマとし、地域に根ざした教育のあり方や、新学習指導要領に基づいた新らたな科

目について、具体的な指導方法や指導内容が研究発表され、研究協議題として取り上げられています。又、高等学校教育に望む生物工学・情報処理など実践的な先端技術教育のあり方などについて、巾広い分野から講師を招聘し講演していただきました。文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官角田順三先生（現岩見沢農高校長）には、62年「農業教育の現状とこれからの展望」について示唆いただき、平成元年には、教育目標をどうとらえ、新科目の位置付けなどを検討し、多様化した生徒の特性、進路に応じた教育課程の編成を行つたらよいか、全国に先がけて来道をお願いし、高

等学校学習指導要領（農業）改訂の要点についてわかり易く解説していただきました。

この部会は、常に研究熱心な諸先生方の教育実践、ご快諾いただいた講師の諸先生方の時代掌握と展望の確かさに支えられて来ました。研究会の目的は、会員の研修と識見の向上に努めることが第一義とされているので、今後の会の運営には、マンネリ化を防ぎ、会員各位の事業に対する協力と積極的な参加によって、30周年を契機に益々農業教科部会が発展するよう頑張りたいと思います。

（岩見沢農業高等学校 加藤 希一）

事務局及び会員数の推移

回	年度	教科部会長	事務局校	会員数	部 会 会 場
1	S 38	阿 部 悟 郎	名 寄 農 業	113	札幌旭丘高校
2	39	金 森 繁	名 寄 農 業	158	札幌旭丘高校
3	40	矢 口 猛	名 寄 農 業	214	札幌旭丘高校
4	41	矢 口 猛	名 寄 農 業	358	札幌旭丘高校
5	42	黒 沢 力太郎	酪農学園機農	336	札幌旭丘高校
6	43	黒 沢 力太郎	酪農学園機農	336	札幌市民会館
7	44	黒 沢 力太郎	酪農学園機農	365	道庁赤レンガ会議室
8	45	黒 沢 力太郎	酪農学園機農	404	道庁赤レンガ会議室
9	46	福 井 敏 夫	旭 川 農 業	416	北海道建設会館大ホール
10	47	清 水 小 十	俱 知 安 農 業	421	札幌市民会館
11	48	清 水 小 十	俱 知 安 農 業	424	札幌市民会館
12	49	高 坂 泰 彦	深 川 農 業	392	札幌市民会館
13	50	佐 藤 俊 彦	深 川 農 業	382	札幌市民会館
14	51	綾 野 正 美	名 寄 農 業	378	札幌市民会館
15	52	綾 野 正 美	名 寄 農 業	362	札幌市民会館
16	53	福 井 敏 夫	岩 見 沢 農 業	336	札幌市民会館
17	54	福 井 敏 夫	岩 見 沢 農 業	316	札幌市民会館
18	55	綾 野 正 美	静 内 農 業	296	札幌市民会館
19	56	綾 野 正 美	静 内 農 業	280	札幌市民会館
20	57	山 下 正 亮	酪農学園機農	264	札幌市民会館
21	58	山 下 正 亮	酪農学園機農	245	札幌市民会館
22	59	境 和 一	新 十 津 川 農	234	札幌市民会館
23	60	境 和 一	新 十 津 川 農	227	札幌市民会館
24	61	閔 広 司	俱 知 安 農	230	札幌市民会館
25	62	石 田 義 雄	俱 知 安 農	226	札幌市民会館
26	63	安 田 恭 一	深 川 農	236	札幌市民会館
27	H元	安 田 恭 一	深 川 農	235	札幌市民会館
28	2	山 口 隆 通	名 寄 農	215	札幌市民会館
29	3	山 口 隆 通	名 寄 農	207	札幌市民会館
30	4	角 田 順 三	岩 見 沢 農	223	札幌市民会館

研究成果一覧

【全体講演】

第20回（昭和57年）

共生の時代

黒川紀章（建築家）

アイヌー日本文化の基層

梅原猛（京都市立芸術大学教授）

第21回（昭和58年）

新しい人間像と教育

外山滋比古（お茶の水女子大学教授）

北からの出発

伊藤隆一（北海道教育大学教授）

第22回（昭和59年）

なぜ今教育改革か

黒羽亮一（日本経済新聞社論説委員）

北方民族における伝統と近代

岡田宏明（北海道大学文学部教授）

第23回（昭和60年）

生涯教育の将来

加藤秀俊（放送大学教授）

これから企業の求める人間像

石黒直文（北海道拓殖銀行常務取締役）

第24回（昭和61年）

ことばとこころ

江藤淳（東京工業大学教授）

地方自治と教育

岡村正吉（北海道虻田町長・元北海道教育委員会教育長）

第25回（昭和62年）

近ごろ思うこと

野坂昭如（作家）

心臓移植をめぐって

小松作蔵（札幌医科大学副学長・附属病院長）

第26回（昭和63年）

日本人と創造性

多湖輝（千葉大学教授）

バイオテクノロジーの現状と問題点

美濃羊輔（帯広畜産大学教授）

第27回（平成元年）

日本語の心

金田一春彦（文学博士）

タンチョウの四季

高橋良治（釧路市丹頂鶴自然公園園長）

第28回（平成2年）

経済法秩序における公正としての正義

一日米構造協議を中心に

菊地元一（青山学院大学法学部長）

心の危機と反応

高畠直彦（札幌医科大学神経精神科教授）

第29回（平成3年）

心の底をのぞく

なだいなだ（精神科医・作家）

オスとメスのエソロジー

坂本与市（北海道文理科短期大学学長）

【国語】

【講演】

第20回（昭和57年）

日本の文字と文章史をこう考えた

中田祝夫（筑波大学名誉教授）

陳述の副詞について

北原保雄（筑波大学教授）

第21回（昭和58年）

情報化社会における国語教育

大坪浩哉（文部省教科調査官）

第22回（昭和59年）

日本の私小説

饗庭孝男（甲南女子大学教授）

第23回（昭和60年）

作品読解の試み

—志賀直哉「清兵衛と瓢箪」を例として—
池内輝雄（大妻女子大学教授）
第24回（昭和61年）
漱石の文学—「こころ」を読む—
三好行雄（大妻女子大学教授）
第25回（昭和62年）
歴史にみる人づくり
童門冬二（作家）
第26回（昭和63年）
言語の変化と正しい日本語
野元菊雄（国立国語研究所長）
第27回（平成元年）
韻文と散文について
原裕（俳人協会常任理事・日本
文学風土学会理事）
第28回（平成2年）
近代短歌と現代短歌
篠弘（小学館取締役編集本部
長）
第29回（平成3年）
1970年代以降におけるパラダイムの変換
川邊為三（作家・国学院短期大学教
授）

【研究発表】

第20回（昭和57年）
「国語I」（古文）の学習指導の二、三の試み
島田信重（室蘭東）
国語I「表現」の指導について—新学指導要
領の理解と、それに基づく方法論・指導計画の
模索—
尾角一郎（函工）
「近代短歌」における授業展開の一例—思考
力を養い、創造力を育てるための発問をどう工
夫し、どう生徒を授業に参加させるか、をポイ
ントに—
鈴木扶（帯広工業）
思考力を養い創造力を育てる国語教育—新教
育課程を生かす指導のあり方—国語Iを中心と
して
小松栄太郎（帯広柏葉）
第21回（昭和58年）
実態に即した文章表現の指導—国語Iを中心
に—
蓑田脩（岩東）
入門期の漢文指導—実践記録—
小林昶聰（旭陵雲）

与える問題意識から「見出す問題意識」へ—
「こころ」をどう読むか—
小上泰（名寄）
総合的な科目「国語II」の学習指導—小林秀
雄「無常といふ事」を教材として—
久保田和良（俱知安）
第22回（昭和59年）
学習意欲を高める「国語表現」の指導をどうす
るか—科目的内容構成のあり方、評価方法な
どをめぐって—
柏倉正明（網南ヶ丘）
文学教材（詩）の扱いをめぐって—試みを中
心に—
手塚勲（北広島）
わかる授業を目指して—プリント学習による
『国語I』の指導—
眞壁智誠（厚岸潮見）
第23回（昭和60年）
古文を身近に引き寄せる指導—文法に片寄ら
ない指導の試み—
山崎康騰（江差）
生徒一人ひとりの主体的学習をめざして—
「現代文」における小説『舞姫』の読解・鑑賞
の実践を通して—
伊藤正浩（札新川）
生徒の声を取り入れる学習の試み—回覧批評
を柱にした授業実践—
坂口毅（芦別）
第24回（昭和61年）
自己学習力を育てる国語教育—低学力、低意
欲集団に対する国語表現からのアプローチ—
塩谷哲士（興部）
「古典」における学習指導の一考察—一斉授
業における個別化を考えて—
中川洋三（上磯）
理解領域の学習を、意欲的・主体的にするため
の試み—国語I・II「理解編」の実践例と考
え方—
細田勲（中標津）
第25回（昭和62年）
啄木短歌指導における動機づけの工夫—自主
教材（「啄木の人生と歌」）による魅力ある授業
をめざして—
森武（森）
古典教材と国語表現の関連指導について—
「表現の活動」を通して意欲や思考力を育てる
指導の展開例—

- 武井昭也（室清水）
絵本を作ろう－古典を表現する学習－
中村裕子（秩父別）
- 第26回（昭和63年）
自分で調べ、考え、まとめて発表する－プリント学習とグループ別学習について－
橋本孝夫（豊富）
楽しい「国語表現」の授業をめざして
高市道弘（熊石）
わかる授業のための教材作り
渡辺剛（中標津農）
- 第27回（平成元年）
CAI、国語の試み－『奥の細道』をたどる－
家野英晴（札篠路）
プリント学習による登場人物の心情把握と主題の考察－森鷗外『舞姫』を考え、まとめ、発表する学習－
堀内雅史（羽幌）
現代国語力を高める指導の工夫－興味・関心を喚起する補助教材の導入例－
福西一成（上士幌）
- 第28回（平成2年）
ことばへの関心を求めて－『枕草子』を考える－
伊藤克子（苫南）
学習意欲を高めなければ……－農業高校における「国語II」の実践－
阿部日出夫（大野農）
国語の授業の活性化の方策として－討論会の導入とその展開－
山谷浩光（別海）
- 第29回（平成3年）
課題のある授業（国語・現代文）－追求的な授業のために－
東谷一彦（室清丘）
漢文に対する生徒の興味づけについて－音読・作文指導の実践を通して－
高松洋司（沼田）
小説のしきけ（レトリック）を読む－「小さき者へ」の授業を通して－
平原正道（深川西）
- 学官)
第27回（平成元年）
国際情勢を見る目
山室英男（NHK・解説委員）
第28回（平成2年）
経済社会の変化とこれからの日本人の生き方
本間至（大和実業株式会社人事教育部長・採用情報研究会長）
第29回（平成3年）
21世紀の若者に求められるもの－いま、高校教師は何をなすべきか－
西村秀俊（朝日新聞社エラ編集長）
- 【現代社会分科会講演】**
- 第20回（昭和57年）
島田一男（聖心女子大学教授）
第21回（昭和58年）
日本経済の特質と課題
石垣博美（北海道大学教授）
「現代社会」の実践研究とその動向
武内光一（北海道教育研究所研究員）
第22回（昭和59年）
これからの消費者行政と消費生活について
小林紀之（名古屋経済大学教授）
現代社会の実践研究とその動向
木戸口道彰（上川教育局指導主事）
第23回（昭和60年）
日本文化と西欧文化の比較
杉田弘子（武藏大学教授）
第24回（昭和61年）
「現代社会」と人間の生き方について
安澤順一郎（文部省教科調査官）
第25回（昭和62年）
現代社会の今日的課題をめぐって
小暮得雄（北海道大学法学部教授）
第26回（昭和63年）
欧米学校教育における国際化と個性化
小木美代子（日本福祉大学教授）
第27回（平成元年）
マリンスナーと人間とのかかわり
梶原昌弘（北海道大学水産学部教授）
第28回（平成2年）
中国と国民生活の現状について

【社会】

第26回（昭和63年）

社会科の改善と展望

柿沼利昭（文部省初等中等教育局視

【全体講演】

梁 宝 傑 (中華人民共和国札幌総領事館領事)

第29回 (平成3年)

ソビエト民主化の行方

V・F・フォーキン (ソビエト総領事館領事)

【現代社会分科会研究発表】

第20回 (昭和57年)

「学習ノート」による指導=学習 ー自ら学ぶ
「現代社会」をめざしてー

石 井 勝 (北広島)

身近な題材を利用した「現代社会」の指導について ー導入部分の指導とその展開ー

太 田 真 (遠別農)

第21回 (昭和58年)

生徒の「現代社会」への関心を高めるために
ー学習指導方法上の工夫ー

今 一 男 (札白石)

地域教材の開発をめざして

広瀬 隆人 (雄武)

第22回 (昭和59年)

「受験校の現代社会」への模索

手 塚 賢 (札西)

「現代社会」の目標を実現するための一実践

成 田 知 弘 (利尻)

第23回 (昭和60年)

地域文化の教材化とその活用指導における一考察 ー地域の文化財を中心とした「現代社会」における地域調査ー

佐々木 憲一 (江差南)

生徒の学習意欲を喚起する授業のあり方について ー「現代社会」における野外調査学習についての考察ー

堂 徳 将 人 (札稻北)

第24回 (昭和61年)

現代社会における諸地域の文化と文化交流の扱いについて ー地域教材の扱いを中心としてー

中 村 和 之 (札稻西)

生徒が主体的に取り組む授業とは ー自作テーマ「嘉代子桜」を通して平和の尊さを考えるー

小野寺 亨 (旭凌雲)

第25回 (昭和62年)

現代社会における社会科学的思考育成の試み
ー班別調査研究活動の指導を通じてー

土 屋 亮 (釧北陽)

生徒が社会事象について主体的に関心を高め,
主体的に学習する中で認識を深めるための現代

社会を目指して ー新聞学習を中心としてー

窪 田 稔 彦 (訓子府)

第26回 (昭和63年)

「現代社会」における評価法の実践 ーグループ学習を軸としてー

湯 田 恭 丈 (赤平西)

生徒を活かす現代社会の授業を目指して ー課題発表学習(新聞発表・3分間スピーチ・現社新聞の発行)を通じてー

河 西 博 之 (沼田)

第27回 (平成元年)

現代社会におけるT・T(ティーム・ティーチング)による主題学習について ー松前高校での実践からー

練 谷 喜 文 (松前)

主体的に学ぶ意志・態度を育てる授業

市 岡 幸 治 (鹿追)

第28回 (平成2年)

憲法学習の展開

佐 藤 広 幸 (遠別農)

第29回 (平成3年)

ビデオを用いた社会科の授業あれこれ ー失敗,
成功いろいろとりましてー

城 座 研 一 (古平)

【日本史分科会講演】

第20回 (昭和57年)

新学習指導要領に於ける日本史の指導内容の構成と指導法の在り方

小 俣 盛 男 (文部省学校教育課教科調査官)

第21回 (昭和58年)

北海道の近世史をどう考えるか

榎 森 進 (函館大学教授)

第22回 (昭和59年)

北海道史上の「近代」

桑 原 真 人 (北海道開拓記念館学芸員)

第23回 (昭和60年)

北海道先史文化の変遷とその特性

野 村 崇 (北海道開拓記念館学芸員)

第24回 (昭和61年)

中世の朝廷と幕府

河 内 祥 輔 (北海道大学助教授)

第25回 (昭和62年)

北海道史認識の諸問題

田端 宏 (北海道教育大学教授)
第27回 (平成元年)
木簡と長屋王について
寺崎保広 (奈良国立文化財研究所研究員)
第28回 (平成2年)
鎌倉仏教について
追塩千尋 (北海道教育大学釧路分校助教授)
第29回 (平成3年)
古代蝦夷と北海道
関口 明 (静修短期大学教授)

【日本史分科会研究発表】

第20回 (昭和57年)
中世史における授業展開の試み - 「狂言」と「御伽草子」を授業に取り入れる
谷川信幸 (室東)
第21回 (昭和58年)
日本史に、北海道の歴史をどのように位置づけるか - 中世・近世における試み
滝沢正 (上富良野)
北海道を日本史教育の中で如何に教えるか - 地域社会の歴史と文化をめぐって蝦夷地から北海道へ
平田和光 (美深)
第22回 (昭和59年)
「地域社会の歴史と文化」の取扱いについて
- 視点とその実践 -
高橋純 (秩父別)
歴史学習の中に歴史学的な見方、考え方を養わせる学習法へのアプローチ - 近代史学習における試み
舛田規文 (浜頓別)
第23回 (昭和60年)
北海道における先史文化学習 - 地域の埋蔵文化財の活用を通して
広瀬隆人 (雄武)
生徒の興味・関心を高める授業を目指して
- プリント学習と主題学習の実践 -
三品純一 (帶広緑陽)
第24回 (昭和61年)
地域社会の歴史と文化の学習 - 郷土研究部の活動を授業に取り入れた試み
米田裕 (松前)
第25回 (昭和62年)
「日本史」における北海道の取り扱いについて

- 「薩摩藩天保改革」と北海道産昆布 -
屋敷健一 (釧路陵)
地域学習とその教材化を目指して - 雄武高校での実践と問題提起をもとに -
山北尚志 (静内)
第26回 (昭和63年)
北海道の前近代史をどう教えるか - 日本史像の再構成を目指して -
岸甫一 (名寄)
授業の中で日常的に実践してきた教材の整理 - 5年間を振り返って -
大阪幸弘 (釧路陽)
第27回 (平成元年)
日本史『板書ノート』実践の試み
吉嶺茂樹 (紋別北)
第28回 (平成2年)
日本史を教える上での基礎基本とはどこに置くべきか - 勉強嫌いな生徒と日本史の授業 -
浅井尚人 (樽潮陵)
第29回 (平成3年)
効果的な授業実践への試行錯誤 - 一瞬の集中
- 五感を使った授業の実践 -
二瓶耕一 (浜頓別)

【世界史分科会講演】

第20回 (昭和57年)
シオニズムとパレスチナ民族主義の100年
丸山直起 (小樽商科大学助教授)
第21回 (昭和58年)
フランス絶対主義研究に関する最近の動向
吉田弘夫 (北海道教育大学札幌分校教授)
第22回 (昭和59年)
ルネッサンスと地中海文明
樺山紘一 (東大助教授)
第23回 (昭和60年)
近世イスパニヤ史像の再構築
五十嵐一成 (札幌大学助教授)
第24回 (昭和61年)
ビザンツ帝国か、中世ギリシア帝国か
手嶋兼輔 (北海道工業大学講師)
第25回 (昭和62年)
戦闘期インドにおける民族運動 - 前半期の動向を中心に -
高畠稔 (北海道大学教授)
第27回 (平成元年)
現代中国について

李 海峰（中国国際経済貿易大学講師）

第28回（平成2年）

ロシア史の中の東と西 ～ユーラシア国家としてのロシア ソ連邦～

栗生沢 猛夫（北海道大学文学部助教授）

第29回（平成3年）

世界史におけるイスラム文明

後藤 明（東京大学東洋文化研究所教授）

【世界史分科会研究発表】

第20回（昭和57年）

アフリカ史の諸問題 ～私自身どのように認識し、生徒にかかわったか？～

味村 隆史（札東商）

第21回（昭和58年）

19世紀世界史の教材開発について

櫛井 征四郎（芦別）

第22回（昭和59年）

世界史授業での語句の理解について 一生徒は学習中の用語を理解しているか。その実態と、対応する授業と評価について～

江口憲人（釧路東）

世界史における総合化 ～10組学組一斉指導における4×35時間の実践～

田中一秋（札幌岸）

第23回（昭和60年）

基礎的基本事項の定着化を目指して ～世界地図の認識不足を契機として～

亀岡敏克（夕張北）

教科新聞の課題 ～生徒が書いた世界史新聞をどのように授業の中で活用するか～

福本直人（天塩）

第24回（昭和61年）

東西交渉史における発展学習 ～私のシルクロード～

西 寛（北広島）

世界史の授業展開への一考察 ～プリント学習を実践して考えること～

佐藤静也（深西）

第25回（昭和62年）

「国際理解」を推進させるため、世界史の授業の中でどう展開するか ～資料のみで歴史観つくれぬ「映像は2人目の教師」である～

田村松雄（釧工）

北アジアの歴史・考古学と民族学 ～シベリアの博物館・研究所を訪ねて～

中村和之（札稻西）

第26回（昭和63年）

西ヨーロッパ世界のキリスト教 ～文化変容の視点による授業展開～

窪田範孝（月形）

「わかる・楽しい授業」の試み ～漫画を利用したテーマ学習（人物中心の歴史）を通して～

林伸也（阿寒）

第27回（平成元年）

世界史教育における今日的課題とその指導方法について ～教材の精選と構造化による標準的な世界史の授業展開をめざして～

吉田彰（函稟北）

第28回（平成2年）

国際化理解のための世界史授業の展開について

橋本卓（留萌工）

第29回（平成3年）

わかる授業、考える授業を目指して ～教材の精選と日常の工夫～

藤井一志（美深）

【地理分科会講演】

第20回（昭和57年）

高等学校地理教育の課題とその方向

川合元彦（東京都立小山台高等学校長）

第21回（昭和58年）

日本の風土が日本（文化・技術）を創る

清水馨八郎（千葉大学教授）

第22回（昭和59年）

地理教育における今日的課題

品田毅（東京都立上野高等学校長）

第23回（昭和60年）

中国の人々の生活

北原安門（桐朋女子中学・高校副校長）

第24回（昭和61年）

アイルランドの自然と歴史

堀淳一（エッセイスト）

第25回（昭和62年）

高等学校における地理教育の動向と課題

濱澤文隆（文部省初等中等教育局教科調査官）

第28回（平成2年）

国際化社会における東南アジアの民族と文化について

高橋 彰（東京大学経済学部教授）

第29回（平成3年）

国際化社会における日本と東南アジア

高橋 彰（東京大学経済学部教授）

【地理分科会研究発表】

第20回（昭和57年）

新学習指導要領と地理学習の展開 —旧課程から新課程への移行にあたって—

山川 利勝（札南陵）

地理授業における生徒の活性化をめざして —地域調査による「地域と生活」の学習—

永幡 豊（津別）

第21回（昭和58年）

地理授業における教材の創意、工夫について

—地域調査と作業学習の実施—

大久保 雅弘（夕張北）

地理教育における教材研究の創意と工夫 一身近な教材を利用した学習—

熊谷 雅次（釧東）

第22回（昭和59年）

地理における指導・学習課程の総合的研究について —地理授業における作業学習の工夫—

菊正敏（古平）

「地理」におけるSystematic approachとRegional approachの総合化についての一考察

—「新地理」一年目の実践—生徒自らが選んだTopical approach—

市原 茂（富良野）

第23回（昭和60年）

地理授業における教材の創意・工夫について

—地域学習と地図学習の実施—

太田 尚寛（夕張北）

地理における学習指導の総合的研究 —世界地誌学習の二・三のとりくみ—

南川芳一（清水）

第24回（昭和61年）

基礎学力育成のためのひとつの試み —「架空旅行」を通して地理的なものの見方・考え方を育てる—

吉田 泰規（浦幌）

現代社会に生きる地理を目指して —VTRの効果的利用と教科通信の取り組み—

中田 貢（札丘珠）

第25回（昭和62年）

地理の「プリント学習」のあり方について

—「プリント学習」の試案と普通授業と比較した実践から—

武田英俊（紋別北）

生徒自身の活動による地域学習をめざして

—社会科・理科合同巡検から研究発表会へ—

矢崎一人 高橋宏太
(豊富)

第26回（昭和63年）

グループ別発表学習を取り入れた「世界地誌」

—「地域」学習について —多様化する生徒への対応の試み—

宮田日出夫（天塩）

生徒の興味・関心を呼びおこす教材の工夫について —地域学習における試み—

岩間岳昭（平取）

第27回（平成元年）

「心の国際化」にせまる地理の授業をめざして —オーストラリア・中国の教材化—

小野寺徹（旭凌雲）

地理での「環境問題」の取り扱いについて

—環境教育の充実に向けて—

佐藤直人（恵庭南）

第28回（平成2年）

旅行記を扱った授業の工夫について

永幡 豊（富良野）

国際化のための地理教育はいかにあるべきか —教科通信を利用した「たのしい」「わかる」授業の取り組みについて—

長沼 齊（札東陵）

第29回（平成3年）

効率的な“地理巡検（郷土学習）”に取り組む！

—授業実践— —宿泊研修のバスを利用した地理巡検、身近なドライブ（バス）コースで見る釧路湿原—

横田久貴（釧路北）

【倫社分科会講演】

第20回（昭和57年）

テストマーケッティングにみられる道民の意識

清水堯夫（電通北海道支社マーケティング部部長）

第21回（昭和58年）

実存主義について

木田之（中央大学教授）

第22回（昭和59年）

ルネッサンスと地中海文明

樺山紘一（東大助教授）
第23回（昭和60年）
音楽にみる美意識の比較
黒川武（北星学園女子短期大学教授）
第24回（昭和61年）
ギリシアの神々と思想
鬼丸吉弘（北海道教育大学教授）
第25回（昭和62年）
「漢字」にみる人間考
橋本宇外（書道家）
第27回（平成元年）
「幸せ」とは
松平樹人（常呂町教育委員会委員長）
第28回（平成2年）
人間としてのあり方の教育を、どうとらえ、どうすめるか
金井肇（大妻女子大学教授）
第29回（平成3年）
臓器移植と社会的諸問題
加藤正道（北海道大学医学部教授）

【倫社分科会研究発表】

第21回（昭和58年）
「倫理」教材研究の創意と工夫―方法を中心にして
－今日的社会問題の中からいかにして倫理的
関心を育成させるか－
矢倉芳則（札厚別）
キリスト教をどう扱うか アガペーとその実
践－
竹田由則（遠軽）
第22回（昭和59年）
読書活動による“倫理”学習
桜井芳徳（札東豊）
第23回（昭和60年）
「現代社会」における「倫理」的分野の位置と
その具体的な展開例
川原茂雄（下川商）
「現代社会」を踏まえた「倫理」の学習効果を
高めるための工夫をどうするか －倫理における
学習指導の工夫－
戸出秀邦（帯柏葉）
第24回（昭和61年）
倫理の『テーマ学習』のあり方について －『テ
ーマ学習』の試案と『愛』をテーマとした実践
から－

香川光広（紋別北）
レポート発表学習 －2つの試み－
山路秀丘（追分）
第25回（昭和62年）
倫理における「中国の思想」授業展開例 一問
答法による授業展開とその課題－
小西晴彦（標茶）
「甘えの構造」から学ぶ 一札倫研定期講読会
の取り組みから－
相沢克明（札山の手養）
第26回（昭和63年）
生徒と教師、教師と生徒の距離について －6
年間の試行錯誤の中から－
川瀬雅之（名寄工）
高校教育における倫理観の形成について
湯浅純人（札東陵）
第27回（平成元年）
社会科教育における今日的課題とその指導方法
について －「親の生き方」を倫理でどう取り
扱うか－
竹田由則（釧北）
知識の定着と日常生活への還元の試み 一プリ
ント学習と作文指導について－
野上徹哉（札厚別）
第28回（平成2年）
対話の原点を求めて
－自己対話からの可能性－
中谷信毅（紋別北）
第29回（平成3年）
「倫理」再考 －倫理という科目が担うモノ－
平泉信吉（旭川東）

【政治経済分科会講演】

第20回（昭和57年）
軍縮の展望－その障害と課題
中村研一（北海道大学法学部助教
授）
第21回（昭和58年）
日本の社会制度の諸問題
佐口卓（早稲田大学商学部教授）
第22回（昭和59年）
金融自由化の現状と課題
植田修己（北海道財務局理財部金融
課長）
第23回（昭和60年）
社会契約論の現代的意義
田中浩（一橋大学教授）

- 第24回（昭和61年）
ヤルタ体制と今日の世界
伊東孝之（北海道大学スラブ研究センター教授）
- 第25回（昭和62年）
金融の国際化・自由化の現状と課題について
野島和夫（北海道拓殖銀行調査情報本部長）
- 第27回（平成元年）
ソ連・東欧社会主義国家の改革の現状と問題について
伊東孝之（北海道大学スラブ研究センター教授）
- 第28回（平成2年）
政治学の教え方 ーいま若者に政治学を如何に教えるかー¹
河合秀和（学習院大学法学部教授）
- 第29回（平成3年）
日本の今後の政治改革の動向について
石川真澄（朝日新聞編集委員）
- 【政治経済分科会研究発表】**
- 第20回（昭和57年）
「現代社会」と選択「政治・経済」の関連について ー福祉単元の指導をめぐってー
奥田孝典（夕張北）
- 第21回（昭和58年）
「平等に生きる権利」の学習の展開 ー差別をなくし人権を守る闘いー²
水谷十三博（女満別）
ー「労働問題」の一考察ー
中西邦夫（古平）
- 第22回（昭和59年）
「政治・経済」における学習指導過程の総合的研究 ー「現代社会」に関連した選択「政治・経済」の学習指導の実際ー
板東修身（北広島）
- 第23回（昭和60年）
「政治・経済」学習における効果的な指導方法と評価の在り方について ー生き生きとした学習活動の展開を求めてー
阿知良渓一（野幌）
「政治・経済」における指導・学習過程の総合的研究 ー「現代社会」に関連した選択「政治・経済」の学習指導ー
浅井節夫（浦幌）
- 第24回（昭和61年）
「政治・経済」の指導内容の構成と指導方法及び評価のあり方について
菅原晃（森）
政治分野学習への動機づけの一試み
沢田展人（網向陽）
- 第25回（昭和62年）
政治・経済における国際化に関する学習の一方法 ー地域から学ぶ国際化ー
塙田敏信（釧北）
労働基準法の原理とはなにか ー日本国憲法第25条との関連についてー
平井良行（松前）
- 第26回（昭和63年）
低学力校における政治・経済の教材精選について ー日々の実践例からー
若浜真吉（根室西）
「わかること」の原点に立った憲法学習の試み ー「基本的人権の保障」単元の学習を通じてー
相沢克明（札山手養）
- 第27回（平成元年）
労働基準法の授業実践について ー理念と現実の調和をもとめてー
釣井幸次郎（紋別北）
- 第28回（平成2年）
何を、どう教えるか ー教科指導の原点を、再び問い合わせ直すー
白井雅己（中標津）
- 第29回（平成3年）
考察を深める学習指導を目指して ー「現代社会」から「政治・経済」への総合的な学習指導についてー
市岡幸治（木古内）
- 【数学】**
- 第20回（昭和57年）
数学における興味の所在
廣瀬健（早稲田大学教授）
- 第21回（昭和58年）
問題点とその解決のためのヒント
三輪辰郎（筑波大学教授）
- 第22回（昭和59年）
直観的理解と論理的理解
笠原乾吉（津田塾大学教授）
- 第23回（昭和60年）
学習意欲を伸ばすための数学の指導について
鈴木晋一（早稲田大学教授）

第24回（昭和61年）

学習意欲を高めるための数学の指導について
永尾 汎（大阪大学教授 理博）
田島 稔（日本獣医畜産大助教授）

第25回（昭和62年）

新教育過程と数学教育
飯島 忠（筑波大学付属高等学校教諭）

第26回（昭和63年）

明日の数学教育を考える
大竹 登（日本数学教育学会役員）

第27回（平成元年）

気づき
大宮 豊穎（オーマイヤ教育研究所長）

第28回（平成2年）

普遍的にして、しかも、個性豊かな
熊谷 全弘（小樽女子短期大学講師）

第29回（平成3年）

新教育課程をめぐって
寺田 文行（早稲田大学理工学部教授）

【研究発表】

第20回（昭和57年）

新教育課程における数学の指導はいかにあるべきか－生徒の意識変革を目指して－

柏川文隆（中標津）
辻敏裕（中標津）

生徒の習熟の度合いに対応する学習指導－習熟度別学級編成による指導の実践から－

頓所永光（網南丘）

「数学I」教科書研究－その二－不等式の公理と不等式の証明等について－

滝川信吾（岩見沢西）

数学のスロー・ラーナーに対する実践と生徒の変容について－ショート・ホームルームの活用による－

樋口泰久（清里）

第21回（昭和58年）

新教育課程における数学の指導はいかにあるべきか－「数学II」の指導計画について－

稻葉茂敏（網向陽）

「低学力」の実態にどう対応するか－2次関数の指導を中心として－

加藤渾一（夕張南）

S-P表理論によるデータ分析－形成的評価

をするために－

菅田昌義（名寄）
新教育課程の教科書を比較する－「代数・幾何」「基礎解析」について－

長岡耕一（旭東）
新教育課程における基礎的基本的事項を踏まえた数学教育はいかにあるべきか
成田雅昭（清水）

第22回（昭和59年）

新教育課程における数IIの指導と問題点－数IIはおもしろいか－

丸山登太郎（夕張北）
情意を形成する授業の導入は如何にあるべきか
矢代和明（芦別）

基礎学力の定着と学習意欲の向上のための学習形態の改善について－班別学習の試み－
原順一（旭北）

ひとりひとりの習熟度に応ずる自然学級における指導上の試み－グループ学習の部分的導入－
上山功夫（帯柏）

第23回（昭和60年）

学習意欲を伸ばすための数学の指導・実践について－1次変換と図形の移動について－

佐藤忠雄（旭東栄）
パソコンを利用した学習指導－プログラム開発から将来への展望について－

土屋英昭（滝工）
無学年制の習熟度別学級編成授業の実践
小川文忠（稚内定）
多様化する生徒に基礎学力の充実をめざして－基礎学力テスト・コンクールによる学力把握と活用を考えて－

坂井敏彦（帯農）
笠谷幸司（帯農）
西岡秀樹（帯農）

第24回（昭和61年）

学習意欲を高めるための数学の指導について－「数学I」の指導と校内各種テスト－

林勝敏（三笠）
学習意欲を高めるための数学の指導について－個人差に応じた学習指導をめざして－
稻葉茂敏（網向陽）

学習意欲を喚起させるための1つの授業形態－教科書かプリントか理論か演習か－

太田博之（釧江南）
入試と数学について－新しい試みとして研究発表と講演をセットにしてみました－

- 皆川一雄(札東)
第25回(昭和62年)
数学教育とパソコンのかかわりについて
—CMI, CAIへの道—
成田雅昭(千歳北陽)
基礎解析における「指導と評価の一体化」をめざした授業実践
佐々木和生(深西)
自己評価にもとづく学力の形成について
池原耕太郎(札手稻)
数学の授業改善の方途をさぐる ——斎授業について—
菊地芳文(旭西)
第26回(昭和63年)
教科書の解法と異なる解法の工夫
遠藤雅晴(帯三条)
本当の数字をいかに生徒へ伝えるか —プリント「数学談話室」を発行して—
安田富久一(札南)
実戦アラカルト数学
菊池隆夫(札東)
新しい学力を育てるために —多メディアによる授業の改善—
菅田昌義(旭凌雲)
第27回(平成元年)
学習指導方法の改善を目指したCAI教材作成のための一考察
樋木幸夫(札篠路)
パソコンによる関数のグラフ
後藤正美(深西)
新教育課程に向けて —社会の変化及び生徒の実態に対応する数学教育のありかた —平面幾何と数I, 平面におけるベクトルについて—
藤井勉(伊緑丘)
高等学校数学教育と北海道高等学校数学コンテスト
永渕敬二(札西陵)
第28回(平成2年)
学習意欲を喚起する指導方法について
横山徹(滝上)
教材とイメージと構造化 —コンピュータの利用をめぐって—
奥村稔(旭凌雲)
数学の周辺 —デジタル(左脳)数学とアナログ(右脳)数学—
小川英生(札星園)
第29回(平成3年)
- 多面的思考とその展開に関する一考察 —メネラウス型図形問題の解法をめぐって—
中村文則(札西)
数学的な見方や考え方のよさを教えるには —数学I指導メモ—
長倉伯幸(羽幌)
数学的な見方や考え方のよさを認識させる数学教育のありかた —数学を好きにするために—
池上学生志(共和)
- 【理科】**
- 第20回(昭和57年)
これからの理科教育
前田 穂(東京都教育庁高校指導課
指導主事)
- 第21回(昭和58年)
21世紀の理工学教育
—問題発見型人間の育成—
松井 好(立教大学教授)
- 第22回(昭和59年)
バイオテクノロジーの現状と課題について
斎藤誠宏(花王石鹼株式会社取締役
研究開発本部副本部長)
- 第23回(昭和60年)
科学の原点 —言語・イメージ・概念—
廣田 勇(京都大学理学部教授)
- 第24回(昭和61年)
科学史に見る人間模様
今堀宏三(大阪大学名誉教授鳴門教育大学副学長)
- 第25回(昭和62年)
「物理と社会」教育研究の国際的動向
笠 耐(上智大学理工学部教授)
- 第26回(昭和63年)
共通一次テストから新テストへ
野村祐次郎(東京大学名誉教授)
- 第27回(平成元年)
X線天文学について
宮本重徳(大阪大学理学部教授)
- 第28回(平成2年)
地球環境問題の問題点
濱田隆士(東京大学教養学部教授)
- 第29回(平成3年)
新高等学校学習指導要領 理科の視点
山極 隆(文部省初等中等教育局主
任視学官)
- 【全体講演】**

【理科I分科会講演】

第21回（昭和58年）

これから理科I・II指導のあり方について

奈良英夫（北海道立教育研究所）

第22回（昭和59年）

望ましい理科I・IIの指導はどうあるべきか
－理科Iの理念と方法－

高村泰雄（北海道大学教育学部教授）

第23回（昭和60年）

理科Iの必要性

野田四郎（札幌平岸高教諭）

第24回（昭和61年）

これからの理科I発展の展望

奈良英夫（北海道工業大学教授）

第25回（昭和62年）

物理と社会研究のアジアの動向－教材研究に
係わる話題－

笠耐（上智大学理工学部教授）

第26回（昭和63年）

歴史的に見た環境問題と国連の対応

山村悦夫（北海道大学大学院環境科学研究科教授）

第27回（平成元年）

野生生物の情報の集め方と環境問題

小川 嶽（野生生物情報センター運営委員代表）

第28回（平成2年）

地球・環境・人間－地球をどう読むか－

辻井達一（北海道大学農学部教授）

第29回（平成3年）

自然保護の立場より見た環境教育－緑の文化
史－

俵 浩三（専修大学北海道短期大学
教授）

【理科I分科会研究発表】

第20回（昭和57年）

都市部普通科高校における1人教授型理科I実
戦の結果と今後の課題

石井勝 高谷克郎
佐藤公征 福田 隆
山田大隆 春日秀夫
吉川元秀（札藻岩）

理科Iの指導と問題点

角張裕信（広尾）

初田昇（広尾）

私の学校の理科I授業の展開について

村尾清武（苦工）

川上正光（苦工）

荒井義昭（苦工）

第21回（昭和58年）

本校における理科Iの実践と今後の方向につい
て

井狩俊久（留萌）

理科Iの展開について

小島修二（池田）

これからの理科Iはどうあるべきか－理科I
を実践してみての意見－

三上富睦（帶柏葉）

理科Iの理念と今後の展望

山田大隆（札藻岩）

第22回（昭和59年）

理科Iの必要性とその内容

野田四郎（札平岸）

本校における「理科I」指導とその課題

鶴川昌光（旭凌雲）

私立女子高校における理科Iの実践報告

坂東節子（札静修）

理科IIを一年間実施して－理科IIの指導はど
うあるべきか－

梅原宏之（上ノ国）

理科Iの自然と人間の実践記録

荒井義昭（苦工）

第23回（昭和60年）

理科Iの原点に返って

池田正行 渡辺雄三

梅田昌希（美深）

自然と人間活動との関連を学ぶ環境学習－地
域の特性、各種学校行事とのかかわりをもつ理
科IIの展開－

八島庄吾（札稻北）

施設・設備及び地域の教材化

青塙健一（札新川）

奥井則行（札新川）

理科Iの新しい構成理念について

山田大隆（札藻岩）

地球生命圏の科学－新しい科学の冒険を求
めて－

丸山博（登別南）

第24回（昭和61年）

理科I『自然と人間』の教材化の試みとしての
河川の水質調査（環境学習）－亀田川をスト

ーリーの柱とした理科I・4分野の統合化の試みー

片岡辰三(札篠路)

理科Iでの人間生活環境教育と原子力発電所事故の教材

荒井義昭(苫小牧工)

本校における理科Iの授業実践

佐々木教夫(札東陵)

理科Iの新しい教材 一型の物理(ボロノイ分割)を中心としてー

山田大隆(札藻岩)

河村 勲(道教委)

霧多布湿原の水と土の調査の実施報告

松井伸一(霧多布)

ヒトの性を教材としてとりあげて ー理科I生物分野を深めるためにー

塙 良一(湧別)

第25回(昭和62年)

新川天狗橋上流域における生態系の教材化

奥井則行(札新川)

理科教育における概念習得 ー生徒のアタマと科学のアタマーー

児玉昌平(札新川)

M・METHOD

丸山博(登別南)

理科Iにおける私の一考察 ー幌延の核の問題を通してー

大友秀人(稚商工)

理科Iの新しい教材・型の物理(クラクタル)

(2) 一分岐及びソリトンについてー

山田大隆(札藻岩)

河村 勲(道教委)

第26回(昭和63年)

UNACAIを利用した教材開発

杉山剛英(札篠路)

北方圏から見た地域教材の開発

平松和彦(士別)

イギリス・アイアンブリジにおける環境教育の実際

山田大隆(札藻岩)

エネルギー資源における原子力の取り扱いについて

田邊彰宏(大麻)

第27回(平成元年)

地球環境保全保護の概念から新指導要領を探る

澤田八郎(北広島西)

佐藤一正(苫南)

虻田町周辺の自然

能篠歩(虻田)

エゾシロチョウの教材化

奥井則行(札新川)

コンピューターグラフィックを用いた ー理科I・IIにおけるフラクタル教材の展開ー

山田大隆(札藻岩)

河村 勲(函北)

課題研究例について ー農業科におけるホームプロジェクト(家庭学習)のいくつかの実践例ー

我妻尚広(幌加内)

第28回(平成2年)

環境問題はどの教科で取り組むべきか ー他教科と理科との比較、及び身近な題材にヒントを求めてー

小島修二(札手稻)

地域の教材化について

ー身近に行う野外実習ー

児玉昌平(札新川)

理科の授業における自作ビデオの作成について
ー実験授業の事前指導用ビデオの作成ー

岡恒一(釧路北)

北海道産業鉄道史と環境教育 ー産業考古環境教材の開発(2)ー

山田大隆(札藻岩)

第29回(平成3年)

自然を総合的に考える力を養う工夫 ー身近な題材と科学史をもとにしてー

水野雅文(室蘭東)

キタキツネの増加とエキノコックス症

小島晶夫(紋別北)

アキアカネの渡りの調査を通しての自然観の育成について ー理科研究部の活動を通してー

綿路昌史(札拓北)

北海道開拓の村産業遺跡を利用した産業考古環境教材の編成

山田大隆(札藻岩)

【物理分科会講演】

第20回(昭和57年)

物理学の多様性について

朝倉利光(北海道大学応用電気研究所教授)

第21回(昭和58年)

現代物理学の動向と高校物理の関連について

荒川泓(北海道大学助教授・応用電気研究所)

第23回（昭和60年）

氷の物性（水を通して物理を教える）
前野紀一（北海道大学低温科学研究所教授）

第24回（昭和61年）

原子力利用の現状について
熊田俊明（北海道大学工学部助教授）

第25回（昭和62年）

超電導とその電力技術への応用
長谷川淳（北海道大学教授）

第26回（昭和63年）

物理教育と大学入試
中島春雄（北海道大学理学部教授）

第28回（平成2年）

物理教育の基盤として培い続けたいもの
奈良英夫（北海道工業大学教授）

第29回（平成3年）

金属疲労の基礎と疲労破壊の実例
野口徹（北海道大学工学部教授）

【物理分科会研究発表】

第20回（昭和57年）

コンデンサーに関する実験
内田雄三（女満別）
計算力の劣る生徒への授業方法と自然を考える物理
武田伸彦（白糠）
電気抵抗の温度変化を示すデモ実験
樋棒光一（札幌成）
1Fコンデンサーによる演示実験
伊良原国雄（札幌成）

第21回（昭和58年）

波動について（物理I・II）
1. 岩東で行った簡単な実験例
2. 波動に関する質問例
名西励（岩東）
国公立大学入試共通一次テストに対する中学生の正答率
秋山敏弘（札東）
記録タイマーを利用した自由落下運動の測定についての一考察
中嶋紀男（喜茂別）
理科I年間指導計画の一例と実践報告
坂本洋和（苫東）
ホログラムの多重記録について
石井勝（札藻岩）

第22回（昭和59年）

理科I物理分野での教材としての氷雪の活用

塙良一（湧別）
北方圏の特色を生かした理科教育をいかに考えたか－物理の視点からの教材の開発－

一口芳勝（苫南）

Humanistic Scienceの試み

丸山博（秩父別）

第23回（昭和60年）

高校生のための原子物理学

高木伸雄（札幌北）

非直線抵抗に関する実験

伊藤四郎（札北）

定時制における物理教育はいかにあるべきか
一小人数を利用した体験的物理実験の試みについて－

穂積邦彦（斜里）

“FANTASY”としての相対論(1)

丸山博（登別南）

第24回（昭和61年）

物理計測にパソコンを使ってみて

関川準之助（石狩南）

等速円運動の実験指導について

大久保政俊（浜頓別）

物理における補助教材の活用－ワープロによる教材の作成－

富樫一憲（旭凌雲）

第25回（昭和62年）

高校物理における原子物理の視覚的実験－ラザフォード散乱のモデル実験により、原子核の存在がどのようにして確認されたかを理解する－

三上郁夫（津別）

ゲルマニウムラジオを用いた電磁気の総合的学習

大久保政俊（浜頓別）

第26回（昭和63年）

加速度分野におけるCAIもどき

佐々木和典（釧江南）

各種熱現象の分子運動論点説明－熱現象は分子運動で説明できることの再認識－

富樫一憲（旭凌雲）

「わかる物理の授業」への取組み－数値計算による物理現象のイメージ作り－

樋口泰久（札西陵）

理科実験課題の分析手段であるLAI－（The Laboratory Structure and Task Analysis Inventory）－

鶴岡森昭（札幌岡）

第27回（平成元年）

教科枠にとらわれない実験展開－光と色に関する実験例－

津谷直樹（札文）

今米国の物理教育のとり組みは？－ポートランド（オレゴン州）の高校での物理授業と新川高校でのとり組みの比較について－

青塚健一（札新川）

実験活動評価改善の試み（A Tentative Plan to Improve Assessment of Science Laboratory Activities）

鶴岡森昭（札平岡）

「簡易振動計の試作について」

中嶋紀男（樽潮陵）

高校生のための光速度測定実験－電磁おんぎを利用して－

斎藤孝（札北）

鋼板による固有振動実験

藤川康（札厚別）

第28回（平成2年）

「あくまでも、この子たちとともに」－受験物理を乗り越えた次元で－

武田和男（函西）

物理実験器具の制作－最新の技術を用いて－

高橋尚紀（根室）

第29回（平成3年）

物理教材に使える「道具・機械の仕組み」－物理IAで指導できること－

佐々木淳（俱知安）

コンピュータによる情報教育の取組みと課題－新指導要領による物理IBの学習ソフトの活用について－

吉川要（札白石）

【化学分科会講演】

第20回（昭和57年）

バイオテクノロジーをめぐって

江口良友（北海道大学農学部農芸化学科教授）

第21回（昭和58年）

松井好（立教大学教授）

第22回（昭和59年）

炭素化合物について

大沢映二（北海道大学理学部助教授）

第23回（昭和60年）

水質をどうみるべきか－調査と予測の実例を

みて考える－

那須義和（北海道大学工学部教授）

第24回（昭和61年）

化学教育の新しい次元

吉田仁志（北海道大学理学部教授）

第25回（昭和62年）

味とニオイの化学

栗原堅三（北海道大学教授）

第26回（昭和63年）

有機合成法について

野村祐次郎（東京大学名誉教授）

第27回（平成元年）

水質汚濁防止技術について

神山桂一（北海道大学工学部教授）

第28回（平成2年）

家庭用品の化学と最近の話題

掛川貞夫（花王生活科学研究所所長）

第29回（平成3年）

粘土を用いて分子の右と左を見分ける－光学分割の新手法－

山岸皓彦（北海道大学理学部高分子学科教授）

【化学分科会研究発表】

第20回（昭和57年）

本校における「酸と塩基」の展開について

石郷岡淳一（えりも）

「マイコンを利用したデータ処理」

羽柴宣宏（霧多布）

第21回（昭和58年）

「わかる授業」のための自作プリン授業と到達度評価

松本春樹（雄武）

化学の授業における一つの試み(1)－「物質の性質」の単元の指導について－

真田雄三（札白石）

選択「化学」の内容と展開

鈴木哲（札稻北）

第22回（昭和59年）

理科I（化学）における基礎概念確立のための実験について

角張裕信（札北）

興味のもてる化学をめざして（II）－実験を中心とした有機化合物の反応性に関する展開と指導について－

八島弘典（当別）

楽しい授業を目指して－音楽利用－

清末定子(旭東)
第23回(昭和60年)
実験と評価
 笹岡正紀(札平岸)
 楽しい化学のための場と教材
 田辺彰宏(南幌)
 ドライアイスを利用した実験あれこれ
 中村隆信(滝西)
 銅(II)イオンの反応について -硫酸銅(II)
 の結晶水と銅(II)の錯イオンの実験-
 菅野優(幕別)
 第24回(昭和61年)
 レモンの教材化
 三輪礼二郎(札真栄)
 生徒実験の取りくみ
 岩田憲(旭川東)
 化学の演示実験について
 角張裕信(札北)
 化学量とその計算
 野田四郎(札平岸)
 笹岡正紀(札平岸)
 第25回(昭和62年)
 化学における観察実験の一例 -硫酸銅の再結晶の観察-
 加藤達夫(夕張北)
 生徒の体験的かがくすすめ -化学授業のノートから-
 本間誠三郎(札篠路)
 酸化・還元反応をもっと本質にせまる内容で教えよう
 三好敬一(帶柏葉)
 第26回(昭和63年)
 電池作りの教材化 -フィルムケースを利用した電池実験-
 日野敬市(沼田)
 生徒の興味、関心を高める授業計画の一例
 -2時間続きの、未知試料実験の指導をとおして-
 西出雅成(広尾)
 地域の産物を用いた化学実験
 高橋尚紀(根室)
 本校における理科クラブの活動状況
 滝田巖(樽潮陵)
 より効果的な化学実験を探る -本校の化学実験環境の紹介-
 堀川伸(札白石)
 真田雄三(札白石)

切石町子(札白石)
第27回(平成元年)
週に一回の化学実験を目指して -教科書の内容に即した実験とその整理-
 田中宏幸(清水)
 興味・関心を高める化学授業について -紫キャベツの色素の教材化と課題研究の検討を中心として-
 八島弘典(札西)
 化学教育におけるパソコンの活用
 萬木貢(深川東商)
 第28回(平成2年)
 化学学習への興味・関心の動機付けとして -必修クラブ「生活の化学」の実践より-
 松平憲市(札稻西)
 生徒自らが学び、考える化学を目指して -元素をテーマとした生徒の課題研究並びに研究発表会の実践報告-
 常丸一也(豊富)
 第29回(平成3年)
 ケイ素の化学 -新学習指導要領における探究活動・課題研究の一試案として-
 玉利和弘(旭東栄)
 如何にして湖陵化学は全道1位なりし乎?
 安井陽二(鉤湖陵)
【生物分科会講演】
第20回(昭和57年)
 北海道のエンレイソウについて
 鮫島惇一郎(農林省林業試験所造林第二研究長)
第21回(昭和58年)
 石狩浜におけるアリの大群落について
 林田和男(光塩女子短期大学)
第22回(昭和59年)
 動物の越冬とサーカディアンリズム
 高田春夫(札幌大学教授)
第23回(昭和60年)
 自然から何を学ぶか
 安西英明(日本野鳥の会)
第24回(昭和61年)
 科学史にみる人間模様
 今堀宏三(大阪大学名誉教授・鳴門教育大学副学長)
第25回(昭和62年)
 湿原 -奇妙な世界-
 辻井達一(北海道大学助教授)

第26回（昭和63年）
知床の自然と動物
大泰司 紀 之（北海道大学歯学部助教授）

第27回（平成元年）
食うか食われるという関係について
葛 西 隆 則（北海道大学農学部助教授）

第28回（平成2年）
バイオサイエンス時代
富 田 房 男（北海道大学農学部農芸化学科応用菌学講座教授）

【生物分科会研究発表】

第21回（昭和58年）
地域に生棲する生物を教材として活用した授業展開－ショウジョウバエの生態を中心に－
前 川 洋（浜頓別）

第22回（昭和59年）
イトミミズの教材化
大 川 徹（石狩）
特別番組「地球に生きる」を利用した進化の学習に関する授業実践
中 村 隆 之（清水）

第23回（昭和60年）
高等学校理科生物教科書の用語における諸問題について
鈴 木 隆 一（斜里）

創造性を養うための授業展開－オオルリオサムシ(Acrotolabrus gehini)の起源を探る－
井 本 暁 正（静内）

第24回（昭和61年）
失われたコスモロジーを求めて
丸 山 博（登別南）
生物におけるマイコンアニメーション教材の開発と効果的活用について
杉 山 刚 英（鵡川）

第25回（昭和62年）
降海型オショロコマ（さけ科）の出現と植生
大 沢 達 郎（羅臼）

第26回（昭和63年）
大雪山黒岳の鳥類群集
磯 清 志（上川）

第27回（平成元年）
発光バクテリアの教材化について
前 川 洋（歌志内）

生物における理科II的要素を持たせた授業展開

佐 藤 公（中標津）
石戸谷 亮（中標津）

第28回（平成2年）
エゾタンポポとセイヨウタンポポの分布の教材化
小 島 晶 夫（紋別北）
作業学習をとおした生物の授業
岸 広 昭（根室）

第29回（平成3年）
生徒の実態に即した理科・生物教育課程の在り方について
横 山 武 彦（札白石）

アリを使った実験・観察－アリの採餌行動についての実験－

今 村 伸 児（日高）
生物における実験教材をどう扱うか－ウニに代わる発生実験教材の開発－
後 藤 寿 樹（札稻北）
「免疫を中心とした体の調節」の教材化
大 川 徹（札新川）
単位制課程における生物カリキュラムの編成
片 岡 辰 三（有朋单位制）
自然の中の人間を考慮した学習指導－流域を単位として考える－
守 屋 開（札星園）

【地学分科会講演】

第20回（昭和57年）
新しい視点にたつ日高造山論
新井田 清 信（北海道大学理学部助手）

第21回（昭和58年）
地震予知
島 村 英 紀（北海道大学助教授・地震予知センター長）

第22回（昭和59年）
放散虫化石より見た北海道の中世界
岩 田 圭 示（北海道大学理学部助手）

第23回（昭和60年）
気象と衛星観測
廣 田 勇（京都大学理学部教授）

第24回（昭和61年）
プレートテクトニクスからみた北海道のなりたち－日本海の形成も含めて－
前 田 仁一郎（北海道大学理学部）

第25回（昭和62年）
大気と海洋の起源
秋 山 雅 彦（北海道大学助教授）

第26回（昭和63年）
ヒマラヤ上昇のメカニズム
在田一則（北海道大学理学部）

第27回（平成元年）
広域変成帯の成立と日本列島の地史
渡辺暉夫（北海道大学理学部助教授）

第28回（平成2年）
絶滅を考える
濱田隆士（東京大学教養学部教授）

第29回（平成3年）
火山から地球を学ぶ
岡田弘（北海道大学理学部附属有珠火山観測所所長）

【地学分科会研究発表】

第21回（昭和58年）
月別に見た札幌市の気候と天気図解析－1982年度理科I実習の試み－
平松親（札幌成）

第23回（昭和60年）
喜茂別近辺の地表最上部を覆う火山碎せつ物について－郷土の自然の教材化にむけての試み－
中嶋紀男（喜茂別）

第26回（昭和63年）
「北海道の火山」その教材化
宮嶋衛次（喜茂別）
日本海中部地震・津波の教材化－地学の総合的学習に向けて－
丸山博（室栄）
河村勁（道教委）
板倉一（室清水）
新しい理科カリキュラムの試み
丸山博（室栄）

第28回（平成2年）
パソコン教材を用いた天文分野の指導
杉山剛英（札幌成）
地震の教材化－実習を中心とした、自作の教材を試用して－
梅原宏之（札幌成）

第29回（平成3年）
地学におけるパソコンの利用について
村中淑秀（有朋）

【保健体育部】

第20回（昭和57年）

【講演】

スポーツ指導とバイオメカニクス
金子公宥（大阪体育大学教授）

第21回（昭和58年）
学校体育のあり方
太田昌秀（順天堂大学教授）

第22回（昭和59年）
青年期の精神的特徴
稻村博（筑波大学教授）

第23回（昭和60年）
現代社会とスポーツ
梅村清弘（中京大学学長）

第24回（昭和61年）
運動処方の生理学
加賀谷渕彦（埼玉大学教授）

第25回（昭和62年）
現代社会とスポーツ－体育の転換によせて－
佐伯聰夫（筑波大学助教授）

第26回（昭和63年）
動機付けと運動学習の心理学
杉原隆（東京学芸大学教授）

第27回（平成元年）
スポーツ（球技）の指導について
稻垣安二（日本体育大学学長）

第28回（平成2年）
保健・体育指導上の諸問題
大澤英雄（国士館大学教授）

第29回（平成3年）
世界をめざす－全日本の女子柔道を指導して－
柳澤久（電気通信大学助教授）

【研究発表】

第20回（昭和57年）
持久走授業による体力の発達に関する基礎的研究（運動生理）－健康増進と体力作りについて－
加藤修、佗美靖
金子元、田中富子
南和孝（大樹）
効果的な格技指導を目指して－柔道－
宮腰三幸（旭工）
阿寒高校における地域的特性に応じた体力づくりとその成果－実践の内容・成果の概要と今後の課題－
児玉佳範（阿寒）

第21回（昭和58年）
本校における体力づくり活動について
谷口栄一（羽幌）

第22回（昭和59年）

初級者に対するスキーの指導 一様々な条件に対応して、安全確実なスキーを行なう為に－

上 杉 正 三 (旭 西)

「歩くスキー」を授業にとりいれての実践報告

大 友 藤 巳 (北広島)

高校生の生き方を育てる性の教授 一妊娠・中絶・避妊－

坂 本 熊 (札 商)

第23回（昭和60年）

生涯体育のあり方についての一考察 一運動の生活化をめざして－

池 田 好 行 (森)

教科体育における体力の発達に関する基礎的研究 一持久走授業による体力づくりについて－

侘 美 靖 (大 樹)

「種目選択」を実施して

成 田 穂 (小樽桜陽)

第24回（昭和61年）

生徒の意欲を高める教科指導の在り方 一縄とび授業における指導上の工夫－

加 藤 和 美 (雄 武)

高等学校における望ましい部活動のあり方について

坂 上 栄 一 (根 室)

第25回（昭和62年）

病弱生徒の効果的な体育指導 一心拍測定による運動処方の実践－

岡 部 令 子 (山の手養護)

陸上競技の目標をどう設定させるか 一陸上競技の評価と関連させて－

中 町 栄次郎 (余 市)

第26回（昭和63年）

スキー授業の実践 一充実と継続発展のために－

山 田 直 秀 (芽 室)

本校のスポーツ・テストに関する実践報告

佐 藤 寛 (樽桜陽)

第27回（平成元年）

新設校における体育科経営のねらいと今後の課題について

大 野 憲 義 (大麻高)

「授業書」方式による保健の授業 一自主的思考能力の習得を目指して－

釣 部 人 裕 (羅 白)

健康に関する認識を高める保健の効果的な学習指導の工夫について 一喫煙に関する効果的な学習指導－

栗 塚 享 (室蘭商)

水泳学習の実践と成果 一プールの設置から摸索の2年－

児 玉 佳 範 (阿 寒)

第28回（平成2年）

体力の向上をめざして 一3分間なわ跳びの試み－

会 田 悟 (北広西)

ラグビーの特性を生かした学習指導 一ラグビー授業のすすめ方について－

石 井 勝 (芦 別)

本校体育科における野外活動（実習）について 一本校々訓“自主、協同、創造”を目指して－

坂 地 恭 澄 (恵庭南)

松 原 昌 一 (恵庭南)

第29回（平成3年）

選択制を取り入れた年間指導計画について

戸 澤 久 夫 (恵庭南)

生涯体育・スポーツに向けての剣道指導のあり方 一「やらされる剣道」から「すすんでやる剣道」－

松 井 則 之 (札月寒)

【養護】

【講演】

第24回（昭和61年）

生徒指導への養護のかかわり

向 後 正 (千葉教育相談クリニック所長)

第25回（昭和62年）

養護教諭の専門性と教育活動

曾 田 早 苗 (元島根県教育庁保健体育課指導主事)

第26回（昭和63年）

教育活動を通して専門性を考える

森 田 光 子 (東京都立大泉高等学校養護教諭)

第27回（平成元年）

養護教諭の相談活動 一女子高校生の母子関係改善の事例を通して－

宮 本 裕 子 (東京都日野市日野第一中学校校長)

第28回（平成2年）

養護教諭と教育相談

神 保 信 一 (明治学院大学文学部教授)

第29回（平成3年）

養護教諭と専門性と健康教育

鎌田尚子(東京都立日比谷高等学校)

【研究発表】

第24回(昭和61年)

保健室の教育相談－高校生の性意識と実態を
ふまえた指導について－

加藤千恵美(苦前商)

「生徒指導と養護教諭のかかわり」－保健活動と生徒指導－

田中典子(熊石)

「保健委員による保健指導ビデオ制作」－環境
を考える“よい子・わるい子”－

小林久美子(釧星園)

第25回(昭和62年)

生徒が保健室を利用するとき

飯田淳子(上士幌)

生徒の心身の健康問題を探る－心と身体の関連について－

工藤米子(芽室)

第26回(昭和63年)

養護教諭の職務の実態と保健活動の望ましいあり方を求めて

寒川ナミエ(北広西)

小野寺ミツ子(静修)

第27回(平成元年)

腹痛を訴える生徒の実態について

小野晶子(富良野農)

第28回(平成2年)

パソコンによる学校保健のデータ処理

藤原洋子(沼田)

第29回(平成3年)

保健室における教育相談とその問題点について

十川光穂(枝幸)

【芸術】

第20回(昭和57年)

今日このごろ思うこと

小川東洲(ハーバード大学客員教授)

第21回(昭和58年)

建築の世界

太田實(北海道大学教授)

第22回(昭和59年)

私とヴァイオリン

辻久子(ヴァイオリン演奏家)

【講演】

第23回(昭和60年)

雪と氷と人

若濱五郎(北海道大学教授)

第24回(昭和61年)

私と創作

砂川ビツキ(彫刻家)

第25回(昭和62年)

笛はうたう－世界の笛・日本の笛－

上杉紅童(高崎短期大学教授)

第26回(昭和63年)

ひとつの人生論

常本慈照(元北海道武蔵女子短大)

第27回(平成元年)

私と彫刻

佐藤忠良(彫刻家)

第28回(平成2年)

私と音楽

廣瀬量平(京都市立芸術大学教授,
作曲家, 前日本現代音楽
協会委員長)

第29回(平成3年)

書を書く

中野北溟(書家)

【研究発表】

第20回(昭和57年)

これからの芸術教育

長尾紀之(札丘珠)

「生活書」の一方法としての刻字指導の試み

吉本源之進(苦前商)

「文字のない絵本」制作

小坂茂(釧江南)

第21回(昭和58年)

自由演奏に見る生徒の限りない音楽性の発見

中嶋幸治(札月寒)

書道と生活のかかわりを求めて－鑑賞に重点
を置いた授業の報告－

藤原正一(北広島)

文化祭における大壁画(ポスター)制作

古館章(留萌)

第22回(昭和59年)

音楽の諸活動における情意的分野の能力育成と
その評価について－高音研後志地区研究会及
び研修会より－

岩本允(俱知安)

実用書の学習について－小筆を用いての実用
的な書はどのようにして授業の中に組みいれる

- べきなのかー
思 田 史 紀 (静 内)
創作凧と美術教育 －北海大凧合戦－
梅 谷 利 治 (函 東)
第23回 (昭和60年)
視覚教材と鑑賞ノートを使った鑑賞指導
佐 藤 公 之 (北桧山)
書道教育について本校の試行錯誤を語る
佐 藤 弘 (千 歳)
これから芸術教育について 一芸術系として
の取り組みの中からー
武 石 英 孝 (札厚別)
第24回 (昭和61年)
儀式的行事に於ける音楽について
佐 藤 伸 一 (美唄東)
生徒の創造性をひきだす美術科指導の試み 一
生徒の『知』的な面へ働きかけた指導と『情』
的な面に働きかけた指導ー
中 谷 有 逸 (帯柏葉)
上富良野高校書道授業にかかる一考察
若 林 芳 美 (上富良野)
第25回 (昭和61年)
表現の喜びを伝えるために 一自主性のある音
楽活動をめざしてー
森 義 弘 (滝川西)
美術 I におけるデザイン指導はどのようにする
か 一楽しく考え、造形性を高めるデザイン指
導の実践例ー
道 川 順 也 (札稻北)
生徒を生かし、意欲を持たせるために 一グル
ープ学習を中心にー
八重柏 恵 一 (帯南商)
第26回 (昭和63年)
これから音楽教育をどう進めるか 一音楽III
の実践を通してー
蓬 田 秀 泰 (旭 北)
美術科教育における「伝達のためのデザイン」
の領域についての一考察 一印刷を伝達媒体と
したデザインの実際ー
沖 田 守 世 (滝 川)
創作の試み
宮 岡 仁 (音 更)
第27回 (平成元年)
創作指導の充実を目指して 一厳冬の中、体育
館での全紙1文字ー
角 田 彰 司 (留萌工)
美術科指導における創造的活動の一考察 一自
- 我的探究による抽象彫刻の制作ー
小 林 智 彦 (札 南)
創造的表現の工夫 一生徒の個性や創造性を自
由に發揮できる機会をー
瀬 野 淑 郎 (留 萌)
第28回 (平成2年)
八年目のなやみ 一日の音楽実践を考えるー
三 栗 伸 久 (美 深)
地域を題材とした授業から得るもの
本 田 勝 哉 (江 差)
「創作学習」について
長 澤 正 美 (恵庭南)
第29回 (平成3年)
小規模校におけるクラス単位の音楽授業はいか
にあるべきか 一学習意欲を高める合唱指導の
試みー
石 若 拓 哉 (清 里)
美術ノートを利用した授業の一考察
高 橋 智 (白 糠)
蘭亭序の展開 一同一教材の多角的、継続的取
組ー
峯 岡 純 (芦 別)

【英語】

- 第20回 (昭和57年)
音声英語の学び方と教え方 一外国語学習の原
点にもどってー
東 後 勝 明 (早稲田大学助教授)
第21回 (昭和58年)
学習英和辞典の歴史と現状
竹 林 滋 (東京外語大学教授)
第22回 (昭和59年)
高校英語教育に於ける文法指導のあり方
荒 木 一 雄 (名古屋大学教授)
第23回 (昭和60年)
コミュニケーションを目指した英語教育
石 井 敏 (大妻女子大学助教授)
第24回 (昭和61年)
英語の意味と日本語の意味
小 島 義 郎 (早稲田大学教授)
第25回 (昭和62年)
国際化と英語教授
斎 藤 次 郎 (東京外語大学教授)
第26回 (昭和63年)
Making English Come Alive Inside and Out-
side the Classroom

【講演】

BRLAN W. POWLE (ジャーナリスト)
第27回 (平成元年)

「聞くこと・話すこと」の効果的指導はどうあるべきか

田辺洋二 (早稲田大学付属早稲田実業学校校長)

第28回 (平成2年)

「聞くこと・話すこと」の効果的指導はどうあるべきか

大杉正明 (清泉女子大学教授)

第29回 (平成3年)

『国際的な英語教育に向けて』 Toward International English Language Teaching

岡秀夫 (東京大学教授)

【研究発表】

第20回 (昭和57年)

いかにして効果的に授業の世界に導いていくか
—定時制英語教師、六年間の体験から—

松田寿一 (苫東)

英語の授業改善をどのように効果的に推進する
か —英語習熟度別学習指導を試みて—

藤森英哉 (新得)

英語の授業改善をどのように効果的に推進する
か —新教育課程に関連して—

小沼勉 (鉤星園)

第21回 (昭和58年)

ひとりひとりの生徒の学力を伸ばす教科指導は
どうあるべきか

遠藤泰昌 (旭凌雲)

商業科における英語指導のあり方について
—本校における全商英語検定試験に対する取り組み—

笠原洋子 (北見商)

英語の授業改善をどのように効果的に推進する
か —定時制における英語の授業改善への一考察—

菅原浩 (足寄)

第22回 (昭和59年)

生徒の学習意欲を伸ばす英語の授業展開を求めて
—習熟度別クラス編成による、中位及び下位クラスでの授業に関して—

斎藤純一 (森)

生徒の学習意欲を伸ばす英語の授業展開を求めて
—教科書の内容の深化を通じて—

松田晃 (稚内商工)

生徒の学習意欲を伸ばす英語の授業展開を求めて

—英語を聞き、話し、読み、書く基本的な能力を養うための授業、教材の工夫—

中條伸義 (紋別北)

第23回 (昭和60年)

長文読解への模索

増田秀通 (旭北)

生徒の学習意欲を伸ばす英語の授業展開を求めて
—「協力教授法(二人制)」試行の実践報告—

郷内修 (江差南)

生徒の学習意欲を伸ばす英語の授業展開を求めて
—Reading (Speaking) と Listeningを中心
に—

渡辺祐二 (室清水)

第24回 (昭和61年)

生徒に意欲・興味を持たせる英語IIAの授業を
通して

石田晃 (美瑛)

農業高校における英語Iへのアプローチ

竹村雅史 (帶広農)

定時制における英語教育の充実を目指して
—札幌市立高等学校定時制英語教育研究会による
新入生テストの実施結果を中心にして—

笛原勇雄 (札幌北)

第25回 (昭和62年)

英語IIICの授業における工夫と改善

金子究 (釧路西)

日常英会話教材のVTR録画を活用して

盛合直人 (奈井江商)

定時制課程生徒における英語教育の実践

小林茂広 (士別東)

第26回 (昭和63年)

Team Teachingの実際

梶山優洋 (旭東栄)

「聞くこと、話すこと」の効果的指導の在り方
はどうあるべきか —総合的言語活動の視点から
イギリスの大学における外国人研修生のため
の英語集中講座からのヒント—

川口恵子 (俱知安)

「聞くこと・話すこと」の指導について —英
語I・英語IIAにおける実践例—

仲川武雅 (瀬棚商)

第27回 (平成元年)

コミュニケーション能力育成の一考察
—主に英語IIA・LL授業における実践を通して—

椎名裕之 (室清水丘)

An Attempt to Put Listening and Speaking

into Humanistic Perspective—Speaking for what?—

笹田 嶽(美幌)

効果的なリスニングとスピーチングの指導

—工業高校における取り組み—

伊藤 一正(小樽工)

「聞くこと・話すこと」の効果的指導はどうあるべきか 総合的言語活動の視点から 一声を出すことの意義を考える—

吉村 智幌(八雲)

第28回(平成2年)

英語Iにおける聞くことの指導 —基本動詞の理解とDialogue理解との関連について—

松永 務(標津)

「音」を生かす授業のために

新野 佐千絵(当別)

「国際化」と教材の再編成をめぐって —「聞くこと・話すこと」そして「考えること」を支える生き生きとした言語活動のために—

中川 了之(佐呂間)

第29回(平成3年)

オーラルコミュニケーションを重視した授業の可能性と限界

吉田 茂(釧星園)

不定詞の指導における一考察

松木 潤(中標津)

【家庭】

【講演】

第20回(昭和57年)

人づくりとしての家庭教育

小笠原 ゆ里(大妻女子大学教授)

第21回(昭和58年)

子どもの社会化と家庭

望月 嵩(大正大学教授)

第22回(昭和59年)

家庭科の今日の問題

磯村 尚志(江別高等学校長)

第23回(昭和60年)

家庭一般男女共修の実践

中島 百子(長野県立須坂高校)

第24回(昭和61年)

これからの家庭科教育をどうすすめるか

奥田 真丈(横浜国立大学教授)

第25回(昭和62年)

これからの家庭科教育を考える

村田 泰彦(神奈川大学外国語学部教

授)

第26回(昭和63年)

何故男子にも家庭科か

米川 五郎(愛知教育大学教授)

第27回(平成元年)

変貌する消費生活の果ては —豊かさを求めて模索する消費者—

井原 哲夫(慶應義塾大学商学部教授)

第28回(平成2年)

男女必修の家庭科の実施に向けて

津止 登喜江(群馬大学教授)

第29回(平成3年)

高齢者問題と家庭科教育

樋口 恵子(東京家政大学教授)

【研究発表】

第20回(昭和57年)

私の家庭科教育観

中村 知子(名寄)

私の家庭科教育観

射場 二三子(札東商)

私の考える家庭科教育と生徒の実態に即した家庭科教育

石田 悅子(遠軽家)

人間教育としての家庭科教育

三浦 恵美子(旭農)

第21回(昭和58年)

多様化した生徒の実態に即した家庭科の指導の理念と指導実践 —生活意識を持たせる家庭科の指導—

朝井 寿子(苦南)

多様化した生徒の実態に即した家庭科の指導理念とその実践 —自己評価活動を組み入れた授業の試み—

古湊 敬子(千北陽)

第23回(昭和60年)

これから家庭科教育を考える —旭川地区高校家庭科教員研究会家庭科教育検討会—

三浦 恵美子(旭農)

家庭科教育の必要性

赤坂 佑子(北広島)

「男女で学ぶ家庭一般」のあり方と必修選択の場合の問題点の検討

安嶋 真知(札南)

「家庭一般」を男女共学必修で履修する場合の問題点と指導内容

第24回 (昭和61年) 順昌 正 夫 (NTT北海道總支社INS
順昌は二二一アフアフ
第25回 (昭和62年) 管樂部員
管樂教員の現状は乙丸が50の展望
管 田 嘉 三 (文部省初等中等教育局職
森 田 三郎 (北海道大學農學部教授)
第26回 (昭和63年) 農教員課程教科調查官
農林保全の意義と方法
農 田 嘉 三 (文部省初等中等教育局職
東 田 三郎 (北海道大學農學部教授)
第27回 (平成元年) 高等学校農學部指導要領の改定と農業教育の課題
角 田 嘉 三 (文部省初等中等教育局職
原 田 嘉 三郎 (北海道大學農學部教授)
第28回 (平成2年) 農業教育課題調査官
角 田 嘉 三 (文部省初等中等教育局職
夏 井 吾男 (指導農業士)
第29回 (平成3年) 青年期における農業教育
名 取 一 好 (国立教育研究所在研修
第30回 (昭和57年) 新しい学校農業力と活動力の方 方
新しく学校農業力と活動力の方 方
地域の根柢となる農業教育技術研究会 (3ヶ月実
一生涯学習者の育成をめざして
海老原 四郎 (眞狩)
圓崎 正昭 (眞狩)
第32回 (昭和59年) 地域の根柢となる農業教育技術研究会 (3ヶ月実
一生涯学習者の育成をめざして
海老原 四郎 (眞狩)
圓崎 正昭 (眞狩)
第33回 (昭和60年) 山 田 道 (遠別農)
山 田 道 (遠別農)
「栽培環境」の指導法 (CIVIT)
第34回 (昭和61年) 拝田 重美 (岩瀬)
「栽培環境」の指導法 (CIVIT)
植物、生木子の口述による導入の如きなど実験
実験の内容 (CIVIT)
人字田 道樹 (土壌)

〔研究卷集〕

蘿蔔先生 (NTL) 第25回 (昭和62年)
農業教育の現状とこれから
角田彌三 (文部省) 第26回 (昭和63年)
森林保全の意義と方法
高等學校學問指導要領の改訂
東三郎 (北海道) 第27回 (平成元年)
高等教育學問指導要領の改訂
角田彌三 (文部省) 第28回 (平成2年)
農業教育の実践
夏井若男 (指導員) 第29回 (平成3年)
青年期における職業教育
名取一好 (国立) 第30回 (昭和7年)
農業

卷之三

- 岡崎正昭（真狩）
第25回（昭和62年）
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか－農業教科指導における情報処理教育について－
船瀬俊朗（遠別農）
農業教科指導における情報処理教育に関する
松永靖（中標津農）
- 第26回（昭和63年）
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか－地域の活性化に寄与する農業教育はいかにあるべきか－
田中廣明（壮瞥）
地域の活性化に寄与する農業教育はいかにあるべきか－学校の持つ施設・設備・人材を地域に生かして－
大高優（中頓別農）
- 第27回（平成元年）
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか－地域農業の活性化と農産物の付加価値増大を目指しての本校の役割－
北澤住人（更別農）
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか－生徒が主体となった地域と連携した学習－
小野武二三（大野農）
- 第28回（平成2年）
時代の進展に対応する農業教育はいかにあるべきか－「課題研究」の取り組みについて－
山本政行（旭農）
- 第29回（平成3年）
「課題研究」の実践をとおして
小野寺満（標茶）
- 第23回（昭和60年）
ニューメディア時代について
佐藤允克（北海道電気通信監理局長）
- 第24回（昭和61年）
サービス化、脱工業化社会における工業教育
小林好宏（北海道大学経済学部教授）
- 第25回（昭和62年）
工業教育の現状と今後の将来展望
岩本宗治（文部省初等中等教育局職業教育課程教科調査官）
- 第26回（昭和63年）
人間の情報処理のしくみと工学的応用
清水豊（通商産業省工業技術院製品科学研究所感覚情報工学課長）
- 第27回（平成元年）
時代に即応する工業教育
松本正（北海道工業大学学長）
- 第28回（平成2年）
工業教育の今後のあり方について
渡辺寛人（北海道大学工学部教授）
- 第29回（平成3年）
国際化と職業教育
山田正（北海道産業教育審議会副会長）

【研究発表】

- 第20回（昭和57年）
パソコン時代の学習と教育
青木由直（北海道大学教授）
- 第21回（昭和58年）
わが国のロボット産業
小森康宏（社団法人日本産業用ロボット工業会事務局長）
- 第22回（昭和59年）
高度情報化社会の実現と工業教育のあり方
安部幸夫（日本電信電話公社札幌無線通信部長）
- 第20回（昭和57年）
時代に即応できる工業教育のあり方－金属工業科における教育課程－
宍戸寛（室工）
- 時代に即応できる工業教育のあり方－工業数理学習内容の具体化に関する考察－
寺下征夫（滝工）
- 地域との連帯を強めた工業教育－本校・ITP実習の実践について－
真野満男（留工）
- 第21回（昭和58年）
時代に即応できる工業教育のあり方－工業教育の課題と展望について－
大熊進（帯広工）
- 時代に即応できる工業教育のあり方－座学と実習を融合した学習指導法の一考察について－
外崎邦重（函工）
- 時代に即応できる工業教育のあり方－工業基

- 基礎の内容と指導法についてー
高瀬 昇(俱知安)
- 第22回(昭和59年)
新しい工業高校を目指してー教育課程の検討ー
荻原秀仁(名寄工)
ー「工業数理」(特に内容の(7), (8)), の指導についてー
吉川弘明(紋別南)
工業高校の現状とこれからの方針について
田納正範(美工)
- 第23回(昭和60年)
時代に即応する工業教育のあり方ー「工業」における計測制御の指導法ー
吉田洋(旭工)
より実践的な土木教育の展開をめざして
海老名優(北見工)
時代に即応する工業教育のあり方ー工業数理の自校作成のテーマについてー
宮川史章(苫工高)
- 第24回(昭和61年)
時代に即応する工業教育のあり方ーNC・CAD教育の実践例ー
志摩理(札工)
時代に即応する工業教育のあり方ー情報処理教育とパソコンの利用についてー
室崎卯人(小樽工)
本道機械系学科における情報技術教育の現状と本校の課題
佐藤俊(釧路工)
- 第25回(昭和62年)
時代に即応する工業教育のあり方ーパソコンによる計測制御、図形処理の1例ー
大西洋一(夕張工)
機械系学科における資格取得教育の現状と今後の課題について
杉本洋佑(富良野工)
工業数理の授業展開について
石原惟義(帯広工)
- 第26回(昭和63年)
コンピュータを利用した学習指導
 笹川政久(札琴工)
時代に即応する工業教育の創造と実践ー自ら学び社会の変化に主体的に対応できる生徒の育成をどう図るかー
一岡外喜男(芦別総技)
地域における工業教育と体験入学の実践
橋本清生(浦河)
- 第27回(平成元年)
時代に即応する工業教育の創造と実践ーマイクロマウスを用いた教材開発例ー
岡本義則(室工)
本校における現場実習について
宮井弘(函工)
情報技術教育をどう進めるかー道内工業高校の実態調査から本校の進むべき道を探るー
田附豊(留萌工)
- 第28回(平成2年)
時代に即応する工業教育の創造と実践ー本校電気科における課題研究の取り組みについてー
広瀬覚(滝川工)
情報技術教育におけるC言語およびアセンブラーの活用について
寺本和啓(美唄工)
本校における制御実習について
藤田政光 中谷紀夫
(稚商工)
- 第29回(平成3年)
情報化社会における工業教育のかかわり
清水次幸(旭工)
時代に即応する工業教育の創造と実践ー課題実習の本校の取り組みについてー
高橋篤(名寄工)
時代に即応する工業教育の創造と実践ー機械実習をどうしたボランティア活動ー
島貫勇次(江差南)

【商業】

第20回(昭和57年)

わが国コンピューターの現状と展望

林圭吉(富士通システム本部教育事業部教育部長)

第21回(昭和58年)

北海道経済の現状と展望ー国際状勢を背景としてー

石黒直文(北海道拓殖銀行取締役)

第22回(昭和59年)

企業が商業教育に期待するもの

橋爪年幸(株式会社リクルート教育機関広報部広報制作部道路情報部部長)

第23回(昭和60年)

海図なき時代の経済と社会生活

武井正直(北洋相互銀行社長)

【講演】

- 第24回（昭和61年）
カード社会の到来と発展
薮田照己（株式会社エイチ・シー・ビー社長）
- 第25回（昭和62年）
流通業の情報戦略
上杉敏（株式会社セブンイレブンジャパン・東京本社総括マネージャー）
- 第26回（昭和63年）
これからの商業教育
岡田修二（文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官）
- 第27回（平成元年）
新しい商業教育への展望
澤田利夫（富山大学経済学部教授）
- 第28回（平成2年）
高度情報社会化と教育
石井康雄（東京情報大学教授）
- 第29回（平成3年）
これからの商業教育
大橋信定（全国商業高等学校長協会理事長）
- 【研究発表】**
- 第20回（昭和57年）
非行をのりこえ、生徒一人一人を真の学級の主人公に－一年間をふりかえって－
多田直治（帯南商）
本校教育課程の現状と課題－第2学年履修の総合実践を中心にして－
中村誠（中川商）
- 第21回（昭和58年）
生徒指導における今日的課題とその対応について
川岸育夫（小樽商）
本校における新教育課程の実施と課題－昭和57・58年度をふりかえって－
東本慎一（芦別商）
- 第22回（昭和59年）
情報利用による「総合実践」
奥平松一（北見商）
本校における生徒指導の充実をめざして－特に女子の生活指導を中心として－
大島巖（室蘭商）
- 第23回（昭和60年）
パソコンを利用しての学習指導について
- 森下繁義（札東商）
パソコンを利用しての学習指導について－本校におけるパソコンの導入から稼動までと活用について－
山田紀雄（室商）
坂本弘美（室商）
地域中学校との連携の在り方について－中高一貫した進路指導の在り方について－
辻美通（富良野）
高校生の就職環境の変化にともなう進路指導について
佐藤勝彦（帯南商）
- 第24回（昭和61年）
「総合実践」を主軸とした本校の教育課程－社会の変化に対応した商業教育を目指す教育課程の編成－
佐藤強（北見商）
パソコン・ワープロを活用した指導内容と効果的な指導法－OA機器を活用した総合実践－
梅村匡史（苫前商）
進路指導について本校の取り組み－職業意識の確立をめざして、目的意識を持たせる取り組み－
小坂橋利幸（奈井江商）
- 第25回（昭和62年）
本校教育課程の編成と実施
水尻賢治（仁木商）
本校におけるOA機器関連科目の指導法について－パソコン・ワープロの活用－
甲斐辰三 柴田秀世
今久美子（札幌北）
進路指導について本校の取り組み
柴田正直（江差南）
- 第26回（昭和63年）
本校教育課程の現状と課題－生徒の実態に即し、時代に対応した教育課程を目指して－
小笠原茂美（下川商）
OA化に対応すべく授業はどうあるべきか－「情報処理Ⅰ」本校の現状と今後の展望－
八幡次男（滝川西）
本校の進路相談の現状について
中川俊和（士別商）
- 第27回（平成元年）
普通科との併置校における商業科の特色をどう出すか
佐々木勇（浜頓別）
時代に即応する職業教育の創造と実践－専門

性を高める情報処理教育の展開－
高 谷 嘉 浩 (芦別総技)
望ましい生き方に視点をおいた進路指導の充実
清 野 康 宏 (士別商)
生徒自らが考え、取り組む、生徒主導型の進路
指導」
山 岡 久 (瀬 棚)
第28回 (平成2年)
新しい商業教育を求めて－専門性への仮説－
木 村 勝 彦 (深東商)
情報処理IIの指導方法について－POS情報
をデータとしたプログラム開発とシステムの展
開－
広 瀬 稔 (中川商)
社会見学(含む、販売実習)を取り入れた進路
指導
木 村 尚 (下川商)
企業体験学習の実施と進路意識の高揚
杉 澤 秀 人 (北見商業)
第29回 (平成3年)
社会の変化に対応した商業教育を求めて－小
学科に向けた教育課程のあり方－
舟 山 栄 治 (室 商)
情報処理機器を活用した総合実践
吉 本 満 (江差南)
職業観・勤労観を育てる、生きた商業教育－
「一日デパート」を中心に－
多 田 直 治 島 下 払 也
千 葉 茂 (苦前商)
情報処理に関する学科転換及び課題研究の取り
組みについて
宮 田 修 (士別商業)
表計算ソフトの利用状況とその内容について
宮 本 修 一 (旭川商業)
ホームルーム活動における進路指導のあり方
笛 原 光 雄 (深川東商業)

【水産】

第20回 (昭和57年)
これからの水産教育について
阿 部 憲 司 (文部省職業教育課長)
第21回 (昭和58年)
これからの水産教育
勝 木 茂 (文部省教科調査官)
第22回 (昭和59年)
水産教育をめぐる諸問題について

【講演】

勝 木 茂 (文部省教科調査官)
第23回 (昭和60年)
水産教育をめぐる諸問題について
勝 木 茂 (文部省教科調査官)
第24回 (昭和61年)
水産教育をめぐる最近の状勢について
勝 木 茂 (文部省初等中等教育局職
業教育課教科調査官)
第25回 (昭和62年)
水産教育をめぐる諸問題について
勝 木 茂 (文部省初等中等教育局職
業教育課教科調査官)
第26回 (昭和63年)
水産教育をめぐる諸問題
勝 木 茂 (文部省初等中等教育局職
業教育課教科調査官)
第27回 (平成元年)
水産教育をめぐる諸問題
工 藤 進 (全国水産高等学校長協
会)
第28回 (平成2年)
栽培漁業の動向と技術の進展
平 野 礼次郎 (北里大学水産学部教授)
第29回 (平成3年)
水産教育の現状と課題
中 谷 三 男 (文部省初等中等教育局職
業教育課教科調査官)

【研究発表】

第20回 (昭和57年)
各学科における専門科目の教育内容と指導方法
－栽培漁業の指導内容と指導法－
岡 部 実 (恵 山)
これから水産教育の進め方について
又 賀 信 (函館水)
第21回 (昭和58年)
これから水産教育をどう進めるべきか－栽培
漁業科における栽培漁業の指導内容と指導方
法－
高 山 裕 斎 (小樽水)
これから水産教育をどう進めるべきか－各
教科における専門科目の教育内容と指導方法－
藤 原 啓 展 (戸 井)
第22回 (昭和59年)
これから水産教育をどう進めるべきか－各
教科における専門科目の教育内容と指導方法－
対 馬 敏 幸 (南茅部)

これからの水産教育をどう進めるべきか－水産製造科における専門科目の指導内容と指導方法について－

中畠辰雄(厚岸水)

第23回(昭和60年)

これからの水産教育をどう進めるべきか－総合実習の効果的な指導法(グループ学習)－

澤辺修三(函館水)

新任水産教員が直面する種々の問題について

田中邦明(恵山)

第24回(昭和61年)

「総合実践」を主軸とした本校の教育課程－社会の変化に対応した商業教育を目指す教育課程の編成－

佐藤強(北見商)

パソコン・ワープロを活用した指導内容と効果的な指導法－OA機器を活用した総合実践－

梅村匡史(苫前商)

第25回(昭和62年)

総合実習の効果的な指導法について－漁撈長制度・工場長制度の展開について－

村上信一(恵山)

新教育課程における水産教育はいかにるべきか－学校以外との協力、連携の試み－

金田一良一(函館水)

第26回(昭和63年)

時代の進展に対応した水産教育はどうあればよいか－これからの時代に適応した教育内容の改善と学科の改善－

河原武則(厚岸水産)

魅力ある学科づくりを目指して

鈴木一幸(南茅部)

第27回(平成元年)

新しい時代に対応する水産教育はどう進めるべきか－新しい指導内容をどう編成していくか－

藤原啓展(戸井)

新しい時代に対応する水産教育は、どう進めるべきか－学科名及び指導内容の改変をどう進めるか－

関谷清司(小樽水)

第28回(平成2年)

新しい時代に対応する水産教育はどう進めるべきか－水産製造学科の学科改編について－

佐藤哲夫(小樽水)

新しい学習指導要領をふまえた学科の教育内容はいかにるべきか－学科改編について－

田口郁夫(函館水)

新しい時代に対応する水産教育はどう進めるべきか－漁業科の学科改編について－

東海林正行(小樽水)

第29回(平成3年)

新しい時代に対応する水産教育はどう進めるべきか－新設科目「課題研究」の指導内容、指導方法はいかにるべきか－

鈴木一幸(南茅部)

新しい時代に対応する水産教育はどうあるべきか－各学科における新設科目の指導内容と指導方法はいかにるべきか－

池田浩二(厚岸水)

研究紀要・研究調査一覧

第20号

- 卷頭言 (会長) 尾崎 信夫
〈部会関係〉
「蜻蛉日記上・中巻の文芸意識」—表現と構造から— (札平岸) 浅間 敏夫
「社会科における北方領土問題の学習指導」 (岩見沢西) 富永 慶一
「化学量の導入と扱いに関する二、三の実験」 (札平岸) 野田 四郎
「生徒・教師の継続的自己評価のためのマイコンによるS-P表分析の実践研究」 (札東陵) 佐々木 教夫
「実践・本校における水泳学習」—効果的な水泳学習をすすめるために— (千歳) 伊藤 隆
今井 昭義
桑原 洋仁
庄司 宏
堀江 健二
横山 長寿
「豊かな文字感覚を育てる書写書道教育」—表現力を高める指導のあり方— (札丘珠) 斎藤 亮一
「本校における英語熟度別学習指導の試み」 (新得) 藤森 英哉
「An Introduction to Selected Japan-related Research Studies made outside Japan: A Diagnosis of The Grammatical Errors made by Japanese Persons speaking English... R. Linde」 (苫小牧南) 多田 英夫
「スカート製作におけるミシン技術の実技調査とその一考察」 (枝 幸) 釜澤 邦代
「NIRA報告と農業教育」 (別海) 肥田野光之
「望ましい簿記会計教育の在り方について」—「簿記会計 I」の効果的学習指導法を中心として— (札東商) 柴田 重則
「商業科における総合的な実践科目による効果的

- な学習指導について」—第1学年における「総合実践」— (北見商) 商業科共同研究
「産学共同によるウニ人工採苗」 (恵山) 福原 昭俊
〈研究調査〉
「“天気度”の導入と、その測定結果による二地域の比較について」 (登別) 四十九院正雄

第21号

- 卷頭言 (会長) 尾崎 信夫
〈教職一般〉
「マイクロコンピューターによる成績処理の実践 報告—大容量のデーター処理と高速処理を追求して—」 (札東陵) 佐々木教夫
〈部会関係〉
「中国の思想—漢文学習と『倫理』の接点を考える」 (札東) 小野 鉄夫
「栗山工業団地の開発の経過について」 (夕張北) 大久保雅弘
「平安貴族の倫理」—『源氏物語』の罪意識」 (札厚別) 矢倉 芳則
「基礎学力定着と学習意欲向上のための授業実践—数学 I—」 (旭北) 原 順一
「電磁誘導の科学史」 (札旭丘) 須藤喜久男
「“Walden”と東洋思想」 (札啓成) 神原 栄一
「新教育課程と英語教育」 (釧路湖陵) 土屋 章
「A Study of the Present Progressive and Present Perfect Progressive」 (登別) 井上 貞明
「家庭経営総合宿泊実習実践報告」 (追分) 宮家 優子
「工業数理に期待するもの」 (札琴工) 稲澤 義泰
「普通科高校の就職希望者に商業科の履修を」 (札啓北商) 小松 信夫
「教科書『栽培漁業 1・2』の索引及び同書に掲載された動・植物の学名・英名一覧表」 (小樽水) 高山 裕斌
小林 照則

〈研究調査〉

「いま高校図書館に問われているもの」—自己教育力の育成と学習資料— (札平岸) 獅子原 正

第22号

巻頭言 (会長) 尾崎 信夫

〈部会関係〉

「『源氏物語』の英訳—古文の副教科として—」 (旭東) 島田 信重

「圧力団体としてのTUC (労働組合会議) の発展」 (稚商工) 尾藤 孝一

「高校生の社会認識および意識の調査」

(札旭丘) 鈴木 健吉

(札西陵) 村上 恒一

(札白石) 今 一男

「確率分布 (二項分布, 正規分布) の高校数学を用いた公式証明について」

(札東) 菊池 隆夫

「楕円について—その2—」

(小樽桜) 藤井 健一

「身近かに教材を求めて—生物実験4例—」

(札新川) 松田 健治

「ファラデーの単極誘導実験」

(札旭丘) 須藤喜久男

「英語の読みについての考察」

(室工) 斎 昌巳

「オルダス・ハクスレーの思想について」

(千歳北) 柏倉 章

「Ways of Helping Students to Improve Their Spoken English—Our Creative Performances & Proposals for Further Improvements of English Education—」 (旭西) 中島 隆智
「私の考える『望ましい家庭一般』のあり方」

(札南) 安嶋 真知

「陸上競技大会におけるパーソナルコンピュータ処理について」 (旭工) 吉田 洋

「金属工業実習—銀の製錬・写真用定着廃液からのAgの回収—」 (室工) 宮戸 寛

「本校における生徒指導の充実をめざして—特に女子の生活指導を中心として—」

(室商) 大島 嶽

「情報利用による『総合実践』—第3学年の『総合実践』の効果的な学習指導法—」

(北見商) 奥平 松一

「ギンザケ海中飼育について」

(厚岸水) 三輪 孝明

越智 等

〈研究調査〉

「『新地理』の気候の取り扱いはどのようになったか」 (札旭丘) 増田忠二郎

第23号

巻頭言 (会長) 小柳 六郎

〈教職一般〉

「—Career Planning—」 (根室) 三栗 伸久

〈部会関係〉

「風姿花伝の文章構成」 (札平岸) 浅間 敏夫

「政治学の役割と政治教育—教育基本法第八条を中心として—」 (稚商工) 尾藤 孝一

「世界史学習に於ける総合化—10学級一斉指導・4×35時間の実践」 (札平岸) 田中 一秋

武田 秀治

「“FANTASY”としての相対論(1)」

(登別南) 丸山 博

「日本音楽史の通史における時代区分の変遷について」 (厚潮見) 波多野紀雄

「“Walden”と現代」 (札啓成) 神原 栄一

「英語の授業改善におけるひとつの試み—俳句指導例—」 (網向陽) 伊藤 芳明

「男女共学をめざす家庭科教育」

(帯広農) 吉沢 澄子

「農業高校における家庭一般の取り組み—地域と連携をはかり、一人一人をいかす教育をめざして—」 (更別) 岸田 智子

「機械科におけるコンピュータ利用の一事例」

(小樽工) 斎藤 寛

「乗算における算法の段階的指導法に関する一考察」 (奈井江商) 桜田 寅衛

「科目『総合実習』における目標の明確化の試み」

(小樽水) 長尾 英一

第24号

巻頭言 (会長) 小柳 六郎

〈教職一般〉

「パーソナル・コンピューターを利用した入学試験の成績処理」 (恵庭南) 丸毛 卓

〈部会関係〉

「『莊子』と孔子」 (名寄工) 石本 裕之

「古代和歌における民俗と文学の相関」 (室蘭栄) 渡辺 登

「蝦夷錦と山丹交易」 (札幌稻西) 中村 和之

「福沢諭吉の経済思想の形成と『帳合之法』(その一)」 (増毛) 金巻 鎮雄

「形成的評価をめぐる一試行」

(土別) 村田 尋如
「内積空間(Inner product space)」
(札幌東) 菊池 隆夫
「化学量とその計算」 (札幌平岸) 野田 四郎
「自然と人間の教材化の試みとしての河川の水質調査」 (札幌篠路) 片岡 辰三
「“FANTASY”としての相対論(2)」
(登別南) 丸山 博
「効果的な保健指導をめざして」—放送による全校一斉指導を実施してみて—
(恵庭北) 藤森美智子
「グレゴリオ聖歌の教材化」
(根室) 三栗 伸久
「動詞句の代用形の用法について」
(名寄恵陵) 石本 祐子
「生きる力を育てる家庭科教育を考える」
(函館北) 工藤美彌子
「廃熱エネルギーを利用しての地域冷暖房計画の現況と今後のあり方」 (苫小牧工) 浅野 吉保
「商業科目におけるOA機器の効果的利用とその指導方法」—パソコン・ワープロの早期利用をめざして—
(苫前南) 梅村 匡史
「栽培漁業科における地域社会教育講座との連携の一例について」—漁協青年部を指導して的人工種苗ウニを生産—
(南茅部) 栽培漁業科ウニ人工採苗研究グループ
<研究調査>
「ヤナギ類の侵入と種子散布に関する研究」(理科一生物)
(札幌清田) 三沢 英一

第25号

卷頭言 (会長) 高畠 悅彦
<教職一般>
「本校におけるパソコンの利用事例」
(札東陵) 佐々木教夫
「サミュエル・ベケットの戯曲“ゴドーを待ちながら”に見られる一つの実験をめぐって」
(釧路北陽) 鈴木 五郎
<部会関係>
「国語科の研修旅行」 (砂川南) 国語科
「福澤諭吉の経済思想の形式と『帳合之法』(その二)」 (増毛) 金巻 鎮雄
「アフリカツメガエルの体色遺伝」
(札新川) 大川 徹
「欧州の科学博物館のオリジナル展示史料と科学史跡1」(英國編)—西欧科学技術史史料の教材論的再構成のための史料解説—

(札藻岩) 山田 大隆
「Psycho Logical Aspects of Language Learning and Teaching」 (小樽工) 伊藤 一正
「THE CHRISTIAN VIEW OF THE PEARL」
(夕張北) 鈴木 敏雄
「障害(肢体不自由教育)の克服をめざした被服指導」—基礎技術を身につけさせるための事例—
(岩高等養) 浜津 益恵
「小中・高校生の生活技術体験調査」—生活的自主能力を育成させるための家庭科教育を目指して—
(幌加内農) 浅田世以子
(横山まゆみ)
「本校における肉加工学習の実践と展望」<共同研究>
(東藻琴農場部) <代表> 鈴木 斎
「どんな構想で学校業務処理のコンピュータ化を進めるか」
(函館工) 佐藤 弘克
「各種企業内研修を終えて—これからのマーケティング教育を考える」 (北見商) 加藤 正章
「乗船実習ノートの作成について」
(小樽水) 平野井 篤
<研究調査>
「釧路湿原における土壤動物群集の組織」
(釧路西) 村上 肇
「蝦夷錦の残存数とその研究の調査(1)」
(札稻西) 中村 和之
<調査研究ねらい>
(石狩地区高校養護教諭研究会)
<代表> 阿部 重雄
第26号
卷頭言 (会長) 高畠 悅彦
<部会関係>
「『国語I・II』絶句40首」
(札月寒) 石本 裕之
「地域社会の歴史と文化の学習について—郷土研究部の活動を授業に取り入れた試み—」
(松前) 米田 裕
「化学平衡のシミュレーション・プログラム」
(札平岸) 野田 四郎
(美唄東) 伊藤 洋
「『北海道の火山』その教材化」
(喜茂別) 宮嶋 衛次
「英仏の科学博物館のオリジナル展示史料と科学史跡(補遺1)(英國)—キャベンディッシュ研究所、グリニッジ旧天文台、ロンドン科学博物館」
(札藻岩) 山田 大隆
「英語II授業研究—ナチュラル・アプローチの試

- み」 (南 幌) 中屋 晃
「『家庭一般』の共学をめざして」
(鷹 栖) 二川 恭子
「工業高校建築科に情報技術教育をどのように取り入れたらよいか—本校建築科におけるポケコン・CAD・制御等の情報技術教育実践例一」
(美唄工) 杉澤 投吉
「プログラミングの授業を効果的に行なうためのOA機器の活用について」 (旭川商) 土井 博之
「機関科における情報処理教育について」
(函 水) 谷口潤一郎
(函 水) 岡崎 玲
〈研究調査〉
「霧多布湿原におけるナショナルトラスト—道東低地湿原の調査(1)」 (恵庭南) 佐藤 直人
「養護教諭の職務に関する研究調査」
(北広西) 寒川ナツエ
(静 修) 小野寺ミツ子
- 第27号**
- 卷 頭 言 (会長) 高畠 慎彦
〈部会関係〉
「小泉八雲と夏目漱石—東京帝国大学文科大学での足跡」 (室 栄) 渡辺 登
「蝦夷錦の残存数とその研究の調査(2)」
(札稻西) 中村 和之
「倫理における対話教材の導入について—『哲学的談話室』の実践と分析」
(紋別北) 中谷 信毅
「反応速度—実験と計算」 (札平岸) 野田 四郎
「エゾシロチョウの教材化」
(札新川) 奥井 則行
「英仏の科学博物館のオリジナル展示史料と科学史跡(補遺2)(パリ) —キュリー博物館、パリ技術博物館」
(札藻岩) 山田 大隆
「『社会言語学的視点からの外国語学習』試論」
(札月寒) 沖本 正憲
「地域に根ざした家庭科教育を目指して—授業や家庭クラブ等を通しての高齢者教室との交流」
(興 部) 木村美知子
「積雪重量に関する基礎的研究—雪荷重の実態調査を中心として」 (札 工) 伊藤 茂樹
「商業科目におけるワードプロセッサの活用—科目『商業経済I』での展開」
(妹背牛) 服部 隆広
「制度会計と物価変動会計について」
(稚内商工) 塚本 清

- 「水産高校における情報処理教育について—漁業科での指導内容と効果的な指導法に関する一考察」 (厚岸水) 高橋 生
〈研究調査〉
「道東低地湿原の調査(2)—道東低地湿原の比較研究」 (恵庭南) 佐藤 直人
「北海道理工学教育の成立と北海道開拓」
(札藻岩) 山田 大隆

第28号

- 卷 頭 言 (会長) 高畠 慎彦
〈教職一般〉
地域巡検活動を中心とした課題研究についての展開 (豊 富) 伴井 善明
〈教科部会〉
西脇順三郎研究ノオト—詩集「旅人かえらず」から「礼記」に至る詩的世界についての考察—
(釧路工業) 鈴木 五郎
屋根の上なる大空は 青し 静けし—「翻訳詩」をめぐる断想—
(札幌星園) 中田 正良
近世後期の「蝦夷地」問題をどう見るか—「日本史」教科書・北海道史概説書の検討から—
(美 瑛) 岸 甫一
モンゴル初期のクリルタイ制度について
(札幌稻雲) 川音 強
欧洲の科学博物館のオリジナル展示史料と科学史跡(II)(そのI)(ドイツ・オランダ・イタリア・オーストリア編)(イタリアとオランダ)—西欧科学技術史史料の教材論的再構成のための史料解説と方法論考 (札幌藻岩) 山田 大隆
『紋別沖揚げ音頭』を巡って—紋別市における芸術・文化活動の概要—(紋別北) 松本 良一
英文パラグラフの構成理解と読解指導
(苫小牧南) 牧野 篤
サリンジャー試論—フランキーの見性—
(小樽工業) 伊藤 一正
一斉授業における個別化—食物領域—
(釧路北陽) 松澤 正枝
8ビット・A/Dコンバータの製作とアセンブラーによる高速測定 (美唄工業) 寺本 和啓
学習指導要領の変遷と計算事務
(中川商業) 工藤 昭男
新しい商業教育を求めて—専門性追求への道…小学科制への取り組み—(深川東商) 木村 勝彦
食品の変敗による脂質の変化について
(函館水産) 長谷 昇

第29号

- 卷頭言 (会長) 本間 恒太
<教科部会>
「古典の授業」やぶにらみ
(札幌星園) 中田 正良
倫理思想の志向的分析 (紋別北) 中谷 信毅
放物線 $y=x^2$ の接線・法線についての一考察
(旭川東) 長岡 耕一
数学してきた事をまとめてみたら
(滝川) 藤井 健一
欧洲の科学博物館のオリジナル展示史料と科学史
跡 (II) (そのII) (ドイツ・オランダ・イタリ
ア・オーストリア・スイス編)(ドイツ・オース
トリア・スイス) —西欧科学技術史史料の教材
論的再構成のための史料解説と方法論考—
(札幌藻岩) 山田 大隆
ハリディの音調理論の有用性とその後の展開につ
いて (中札内) 伊関 敏之
THE BIBLICAL BACKGROUND OF EAST
OF EDEN (釧路湖陵) 鈴木 敏雄
小・中・高校における家庭科についての調査〈中
間報告〉—衣生活領域—
(苫小牧南) 朝井 寿子
科目“建築法規”の指導計画例—自作テキストの
実践から— (札幌工) 伊藤 茂樹
地域と連携した販売実習一体験学習を通して、商
業教育の充実をめざす—
北海道下川商業高等学校商業科
<研究調査>
北海道の産業考古学史料の所在調査と環境教材編
成—技術史教育・環境教育としての産業考古学—
(札幌藻岩) 山田 大隆
(石狩南) 古屋 勤
保健室における相談活動に関する一考察
石狩地区高等学校養護教諭研究会

第30号

- 卷頭言 (会長) 染谷 昌志
<教職一般>
新教育課程の編成について
(旭川農) 山名 国裕
(旭川農) 満月 広人
<教科部会>
『論考』に関する一考察—王充・天命觀の基礎研
究— (札幌月寒) 石本 裕之
社会科教育における視聴覚教材の導入について

- (上ノ国) 浜田 哲也
簡易 pH計を用いた中和滴定曲線の作成—探求活
動をめざしての取り組みより—
(札幌真栄) 石山 英一
岩城 隆弘
INTRODUCING THE COMMUNICATIVE
APPROACH INTO THE ENGLISH-
CLASSROOM IN JAPAN
(札幌東) 久米 道雄
動詞句 MAKE ONE'S WAY に係わる一考
察
(札幌南) 村上 一彦
聴く力をつける英語科の授業—聴解指導によるコ
ミュニケーション能力の育成—
(釧路江南) 十河 克彰
「家庭一般」「生活技術」「生活一般」における育
成能力の明確化と指導展開例
(札幌南) 安嶋 真知
(札幌東) 安部 広美
(札幌星園) 鈴木里津子
(札幌開成) 永井あけ美
新しい時代に生きる農業者の育成—作品製作・課
題研究と国際化教育—(標 茶) 戸野塚征支郎
地域に根ざした勤労体験学習—全校生徒による水
像製作— (紋別南) 太田 潤一
特色ある商業教育への取り組み—「生徒海外(韓
国) 実践研修」を素材にして—
(中川商) 山下 肇二
商業高校における進路指導の在り方
(深川東商) 笹原 光雄
水産におけるバイオテクノロジーの現状とその取
り組みについて—サケ・マス類を中心として—
(小樽水) 高橋 篤

歴代役員名簿

昭和58年度

会長 尾崎信夫(札旭丘)
 副会長 増川暁児(札北)
 ハ 高尾典臣(札月寒)
 ハ 間島峰雄(札北)
 監事 竹内善隆(札新川)
 ハ 野呂稻夫(札東商)
 顧問 梶浦善次
 ハ 磯貝芳司
 ハ 長瀬米蔵
 ハ 瀬戸哲郎

(地区支部長)

石狩 清水正康(札啓成)
 渡島 及川哲哉(函東)
 檜山 鍵谷信郎(熊石)
 後志 佐藤隆一(ニセコ)
 南空 知雨海重嗣(長沼)
 北空 知宮武慶一(赤平西)
 上川 佐々木浩允(旭西)
 留宗 萌谷乙坂英司(苦前商)
 綱走 中村博(豊富)
 根室 佐々木宰(斜里)
 鈎路 上野充夫(釧北陽)
 十勝 黒沼友一(帶緑陽)
 胆振 荻田寿隆(室清水)
 日高 乾正(様似)

(教科部会長)

国語 金箱戈止夫(北広島)
 社会 小林純幸(札南)
 数理 学外山慶治(札藻岩)
 保育 科沼田一夫(札西陵)
 体術 春木利明(池田)
 芸術 佐々木甫(北広西)
 英語 佐々木明(白石)
 家庭 増川暁児(札北)
 農業 山下正亮(酪農機)

工業端川一保(札琴工)
 商業豊島茂三(札啓北)
 水産端川茂登(小樽水)
 (本部事務局)
 局長黒田治
 局次長神田昭
 ハ 増田忠二郎
 ハ 菅原弘
 幹事沢田正巳(編集)
 ハ 柴田雅美(研究)
 ハ 徳田裕(庶務)
 ハ 高橋勝昭(組織)
 局員旭丘高校教職員

(事務担当者)

(地区支部)

石狩	高橋稀一(札啓成)
渡島	永親(函東)
檜山	中木重信(熊石)
後志	志鈴重司(ニセコ)
南北	木橋久志(長沼)
上川	高林鼎吉(赤平西)
留宗	藤田明郎(旭川西)
網走	上川鼎郎(苦前商)
根室	萌谷浅能(豊富)
鈎路	登藤田四郎(斜里)
十勝	走室能佐(別海)
胆振	浜北義仁(別海)
日高	佐々木勇(釧北陽)
高橋	保進一(帶緑陽)
日高	泰賢(室清水)
会田	純俊(様似)

(教科部会)

国語	宮森公夫(札清田)
社会	長繩哲郎(札月寒)
数学	本間裕康(札平岸)
理科	林都久夫(札西陵)
体育	久保公男(恵庭南)
芸術	澤光郎(札開成)
英語	佐々木正男(北広島)

家農工商水
庭業業業產
森田田藤
彩泉彥久豐
子泉彦久豐
(札(酪(札(札(小
北)(農機工)北)(琴啟樽水)

局	長	黒	田	治	
局	次長	神	田	昭	
ノ		増	田	忠二郎	
ノ		菅	原	弘	
幹	事	沢	田	正巳	(編集)
ノ		高	橋	勝昭	(組織)
ノ		徳	田	裕	(度務)

昭和59年度

会	長	尾	信	夫	丘
副	長	小	純	幸	旭
会	ノ	高	典	臣	南
会	ノ	宮	公	夫	月
監	事	森	善	隆	清
顧	ノ	内	稻	夫	新
	問	呂	善	次	東
	ノ	浦	哲	郎	商
	ノ	戸	芳	司	
	ノ	貝			

局 員 旭丘高校教職員
(事務担当者)

(地区支部)

西陵	東石狩	山西北	商富南	臼北陽	西似
(札函)	(熊真)	(栗滝)	(旭苦)	(豊紋)	(羅釧)
悟親信和一男弘郎將威一雄一亨	永重忠昭邦	四克昭一進	前別綠	帶苦(樣)	輦
山影	山中島	山林地	藤田登金本	原保井生	井
石渡檜後南北上留宗網根釧十胆日	狩島山志知知川萌谷走室路勝振高	東田小小菊佐淺能宝坂福海今菅	影東田小小菊佐淺能宝坂福海今菅	影東田小小菊佐淺能宝坂福海今菅	影東田小小菊佐淺能宝坂福海今菅
空空	空空	空空	空空	空空	空空

昭和60年度

会	長	小	柳	六	郎	(札	旭	丘)
副	会	長	川	俣	民	生	(札	工)
〃		佐	藤	健	一	(札	白	石)
〃		宮	森	公	夫	(札	清	田)

監 事	竹 内 善 隆 (札 新 川)	(地区支部)	石 狩 影 山 悟 (札 西 陵)
// 顧 問	藤 田 昌 一 (札 東 商)	渡 島 渡 文 (函 稜 北)	山 边 中 島 重 (熊 石)
//	梶 浦 善 次	檜 山 志 (真 犬)	島 田 小 忠 (栗 山)
//	瀬 戸 哲 郎	後 南 空 知 (栗 山)	林 小 昭 (澁 西)
//	磯 貝 芳 司	上 留 空 空 (北)	菊 佐 大 (澁 西)
//	尾 崎 信 夫	宗 留 空 空 (北)	川 萩 本 (旭 北)
(地区支部長)		志 知 (北)	登 金 克 (苦 前)
石 狩	沼 田 一 夫 (札 西 陵)	谷 走 宝 (豊 富)	島 登 (紋 別)
渡 島	深 尾 彰 (函 陵 北)	宗 綱 根 (羅 白)	山 曜 (威 南)
檜 山	鍵 谷 信 郎 (熊 石)	網 伸 十 (羅 北)	志 朝 日 (羅 白)
後 南 空	志 朝 新 江 政 義 (栗 山)	根 鈴 十 (羅 北)	空 知 高 橋 豊 (澁 西)
北 空	新 江 橋 豊 (澁 西)	路 勝 振 高 (音 更)	空 知 高 橋 伸 (羅 北)
上 留	小 柳 慶 一 (旭 北)	十 胆 日 (音 肇)	宗 綱 伸 (音 肇)
宗 綱	乙 坂 英 司 (苦 前)	胆 日 (音 肇)	根 鈴 伸 (音 肇)
根 鈴	伊 藤 詰 男 (豊 富)	(教科部会)	高 高 (音 肇)
鈴 伸	高 橋 誠 三 (羅 白)	國 語 會 (北 広 島)	渡 渡 伸 (北 広 島)
十 胆	渡 渡 伸 (北 広 島)	社 學 會 (札 東 陵)	路 勝 伸 (札 東)
胆 日	松 田 治 基 (鉢 北)	數 理 保 芸 (札 西 陵)	勝 伸 (札 西 陵)
日	中 島 雄 (音 更)	理 保 芸 (惠 庭 南)	振 伸 (惠 庭 南)
(教科部会長)		英 家 (札 開 成)	高 高 (札 開 成)
國 語	金 箱 戈 止 夫 (北 広 島)	農 業 (札 開 成)	古 皆 (札 開 成)
社 會	小 林 純 幸 (札 南)	工 業 (新 十 津 農)	木 川 一 (札 開 成)
數 學	外 山 慶 治 (札 藻 岩)	理 保 芸 (新 十 津 農)	農 業 (新 十 津 農)
理 保	沼 田 一 夫 (札 西 陵)	體 術 (札 琴 工)	工 業 (札 琴 工)
芸 藝	林 司 (鉢 江 南)	語 言 (札 啓 北)	體 術 (札 啓 北)
英 家	佐 々 木 甫 (北 広 西)	英 家 (小 樽 水)	語 言 (小 樽 水)
家 庭	佐 々 木 明 (札 白 石)	農 業 (札 開 成)	英 家 (札 開 成)
農 業	村 上 元 治 (札 開 成)	工 業 (新 十 津 農)	農 業 (新 十 津 農)
工 業	境 和 一 (新 十 津 農)	理 保 芸 (札 開 成)	工 業 (札 開 成)
商 業	北 村 昭 (札 琴 工)	體 術 (札 開 成)	理 保 芸 (札 開 成)
水 產	吉 田 弘 一 (札 啓 北)	語 言 (札 開 成)	體 術 (札 開 成)
(本部事務局)		農 業 (札 開 成)	英 家 (札 開 成)
局 長	黒 田 治	工 業 (札 開 成)	農 業 (札 開 成)
局 次 長	神 田 昭	理 保 芸 (札 開 成)	工 業 (札 開 成)
//	増 田 忠 二 郎	體 術 (札 開 成)	理 保 芸 (札 開 成)
//	吉 川 鶴 治	語 言 (札 開 成)	體 術 (札 開 成)
幹 事	沢 田 正 巳 (編 集)	農 業 (札 開 成)	語 言 (札 開 成)
//	高 橋 勝 昭 (組 織)	工 業 (札 開 成)	農 業 (札 開 成)
//	鈴 木 徹 (庶 務)	理 保 芸 (札 開 成)	工 業 (札 開 成)
//	柴 田 雅 美 (運 営 一)	體 術 (札 開 成)	理 保 芸 (札 開 成)
//	松 田 五 郎 (運 営 二)	語 言 (札 開 成)	體 術 (札 開 成)
局 員	旭 川 高 校 教 職 員	(地区支部長)	農 業 (札 開 成)
(事務担当者)		石 狩 川 崎 威 (札 東 豊)	狩 島 深 尾 彰 (函 稜 北)
		渡 島 山 志 (羅 石)	檜 山 住 竹 明 (熊 石)
		後 南 空 空 (北)	後 南 空 空 (北)
		志 知 (北)	志 知 (北)

北空知富永定繼(砂川北)
 上川久住定盛(旭工)
 留宗萌松田靖夫(苦前商)
 谷網伊藤詰男(豊富)
 綱走原田由正(北柏陽)
 根室村上義夫(羅臼)
 鋤路大沢昭夫(釧東)
 十勝中島竜雄(音更)
 胆振青地巧(室東)
 日高磯部誠一(様似)

(教科部会長)

国語会上田三三生(大麻)
 社会小林純幸(札南)
 数学小原孝男(厚別)
 科理沼田一夫(札西陵)
 体保林司(札啓成)
 藻芸阿部重雄(手稻)
 術語浪花正雄(秩父別)
 英語河西久男(札東)
 家庭鈴木昭平(札開成)
 農業閔廣司(俱知安)
 工業北村昭(札琴工)
 商業吉田弘一(札啓北)
 水産間山郁三(小樽水)

(本部事務局)

局長河村袈裟夫
 局次長神田昭
 リ増田忠二郎
 リ伊藤隆喜
 幹事沢田正巳(編集)
 リ高橋勝昭(組織)
 リ鈴木徹(庶務)
 リ柴田雅美(運営一)
 リ松田五郎(運営二)
 局員旭丘高校教職員

(事務担当者)

(地区支部)

石渡狩鴨野昌次(札東豊)
 渡島渡辺文則(函稜北)
 檜山中島和彦(熊石)
 後志實吉正司(喜茂別)
 南空知加藤正司(美唄南)
 北空知森利三(砂川北)
 上川村井猛(旭川工)
 留宗萌谷大島巖(苦前商)
 綱走能登大島巖(豊富)

室根訓十胆日(教科部会)
 路勝振高
 坂山平丸吉
 本崎鍋山口
 昭憲新
 一(羅
 徹(釧
 一(音
 寛(室
 一(様
 臼臼) 東) 更) 東) 似)

林若古皆石久
 木川古澤宮原武肥
 一直人山保公藤
 公志郎登光田
 雄(札西陵) 人(恵庭)
 博(札東) 雄(札東) 人(札西陵)
 雄(札東) 人(恵庭)

昭和62年度

会長	高畠	淳彦	(札旭丘)
副会長	品川	三雄	(札琴工)
リ	松本	輝雄	(札真栄)
監事	宮村	公元	(札清田)
リ	上田	昌治	(札新川)
顧問	藤浦	善一	(札東商)
リ	崎	信夫	
リ	貝	芳司	
リ	柳	六郎	

(地区支部長)

狩川	崎	威	(札東豊)
渡島	石	勝	(函稜北)
檜山	住	明	(熊石)
後志	松	次	(喜茂別)
南北	田	光	
空上	山	敬	(美唄南)
空留	知	一	(砂川北)
南北	川	惠俊	
空空	丸尾	善治郎	(旭工)
上留	小	夫	(苦前商)
宗網	泉	正	(豊富)
走根	松	正	(北柏陽)
路勝	田	夫	(羅臼)
十胆	澤	幸	(芽室)
	林	巧	(室東)

日 高 磯 部 誠 一 (様 似)
(教科部会長)

(本部事務局)

局	長	染	谷	昌	志		
局	次	増	田	忠	二郎		
幹	ノ	伊	藤	隆	喜	(総)	務
	ノ	柴	田	雅	美	(庶)	務
	ノ	鈴	木	徹	巳	(編)	集
	ノ	沢	田	正	郎	(運)	營
	ノ	松	田	五	昭	(運)	營
	ノ	高	橋	勝	治	(会)	二)
	ノ	鎌	田	圓			計)

局 員 旭丘高校教職員

(事務担当者)

(地区支部)

石渡檜後	南北上	留宗網	根釧十胆日	豊北石別南北工商富陽白東室東似
狩島山志	知知川	萌谷走室路	勝振高	東稜茂噴
空空				(札)函(熊)喜(美砂)旭(苦)豊(北羅)釧(芽)室(様)
鴨田中	實奧森柚森松畠土山堀伊吉	原脇本山野崎澤藤口		次郎彦司一三明光正樹徹一郎一
野村島吉平				昌正和正松利秀俊 康茂道榮新

(教科部会)

国語若林正寿(大麻)
公社会新明正寿(札稻西)
数学会市毛明(札厚別)

昭和63年度

会	長	高	惇	彦	(札	旭	丘
副	會	品	三	雄	(札	琴	工
	〃	松	輝	雄	(札	真	榮
	〃	宮	公	夫	(札	清	田
監	事	森	元	治	(札	新	川
	〃	村	昌	一	(札	東	商
顧	問	藤	善	次			
	〃	棍	信	夫			
	〃	尾	芳	司			
	〃	磯	六	郎			
	〃	小					

(地区支部長)		栄北		石都		南西		商前		富北		白室		東取							
石渡	檜後	狩島	山志	藤石	薄野	井黒	田部	上上	田藤	藤堀	出岸	藤又	昭正	孝武	誠義	尚靖	賢光	国正	唯鉄	一	
檜後	南北	山志	知川	磯村	三松	須工	上田	上田	藤	堀	出岸	藤又	吾勝	三夫	一夫	志夫	吉夫	康夫	一夫	弥善	(札函)
南北	上留	川萌	谷走	村三	松須	工西	山藤	山堀	藤	堀	出岸	藤又	昭正	孝武	誠義	尚靖	賢光	国正	唯鉄	一	(平取)
上留	宗網	路室	勝振	上松	須工	西山	山山	山工	藤	堀	出岸	藤又	吾勝	三夫	一夫	志夫	吉夫	康夫	一夫	弥善	(平取)
宗網	釧根	室勝	振高	工藤	須工	西山	山山	山工	藤	堀	出岸	藤又	昭正	孝武	誠義	尚靖	賢光	国正	唯鉄	一	(平取)
釧根	十胆	高振	高高	又藤	堀出	岸藤	山山	山工	藤	堀	出岸	藤又	吾勝	三夫	一夫	志夫	吉夫	康夫	一夫	弥善	(平取)
十胆	日	高高	高高	又藤	堀出	岸藤	山山	山工	藤	堀	出岸	藤又	昭正	孝武	誠義	尚靖	賢光	国正	唯鉄	一	(平取)

(教科部会長)					
国	語	丹	勲	(大	麻)
社	会	柳	二	郎	(稻
数	学	沢	孝	男	(厚
理	科	小	英	二	(有
保	体	中		司	(札
養	護	島		人	啓
芸	術	林	吉		成)
		森	正	(札	手
		浪		雄	(芦
		花			別)

英 語 池 田 正 一 (石 狩)
 家 庭 川 治 静 信 (札 開 成)
 農 業 安 田 恭 一 (深 農)
 工 業 品 川 三 雄 (札 琴 工)
 商 業 吉 田 弘 一 (札 啓 北)
 水 産 間 山 郁 三 (小 樽 水)

(本部事務局)

局 長 染 谷 昌 志
 局 次 長 増 田 忠 二 郎
 幹 事 伊 藤 隆 喜
 佐 藤 公 征 (総 務)
 鈴 木 徹 (庶 務)
 沢 田 正 巳 (編 集)
 松 田 五 郎 (運 営 一)
 高 橋 勝 昭 (運 営 二)
 吉 本 勝 博 (会 計)
 高 木 百 合 子 (事務局員)
 局 員 旭 丘 高 校 教 職 員

(事務担当者)

(地区支部)

石 渡 狩 塚 本 慶 重 (札 真 栄)
 渡 島 田 村 正 郎 (函 稜 北)
 榛 山 中 島 和 彦 (熊 石)
 後 志 長 谷 川 豊 (留 寿 都)
 南 空 知 奥 平 松 一 (美 噴 南)
 北 空 知 田 川 昭 (深 西)
 上 留 川 坂 本 源 之 助 (旭 川 商)
 留 森 脇 俊 明 (苦 前 商)
 宗 谷 松 本 光 (豊 富)
 網 走 垣 內 堯 男 (紋 北)
 鈿 路 佐 藤 滿 (釧 西)
 根 室 土 野 茂 樹 (羅 白)
 十 勝 堀 澤 道 一 (芽 室)
 胆 振 西 澤 良 夫 (苦 東)
 日 渡 利 淳 (平 取)

(教科部会)

国 語 中 村 正 昭 (大 麻)
 社 会 新 明 正 寿 (札 稲 西)
 数 学 市 毛 明 (札 厚 別)
 理 科 石 山 直 人 (札 西 陵)
 保 養 玉 置 重 実 (札 南 陵)
 養 芸 浅 黄 谷 登 志 (札 南)
 藝 術 滝 沢 光 郎 (札 開 成)
 英 語 西 野 和 夫 (石 狩)
 家 庭 瓶 郁 子 (札 開 成)
 農 業 菅 沼 修 三 (深 川 農)
 工 业 武 部 良 平 (札 琴 工)

商 業 肥 田 進 (札 啓 北)
 水 産 小 田 切 幸 雄 (小 樽 水)

平成元年度

会 長 高 畠 悅 彦 (札 旭 丘)
 副 会 長 品 川 三 雄 (札 琴 工)
 リ 北 野 敬 典 (札 篠 路)
 リ 宮 森 公 夫 (札 清 田)
 監 事 本 間 恒 太 (札 新 川)
 リ 奥 平 松 善 次 (札 東 商)
 顧 問 浦 貝 芳 信 司 (札 東 商)
 リ 磯 尾 崎 夫 郎 (札 東 商)
 リ 小 柳 六 郎 (札 東 商)

(地区支部長)

石 渡 狩 藤 井 昭 吾 (札 真 栄)
 渡 島 島 原 繁 (函 稜 北)
 榛 山 山 志 孝 三 (熊 石)
 後 南 空 空 藤 稔 (留 寿 都)
 志 知 知 川 藤 順 一 (美 噴 南)
 南 北 上 留 空 空 部 藤 志 (深 西)
 空 空 上 留 空 空 須 尚 (旭 商)
 空 空 上 留 空 空 柴 重 (苦 前 商)
 空 空 上 留 空 空 須 賢 (豊 富)
 空 空 上 留 空 空 且 吉 (紋 北)
 空 空 上 留 空 空 中 島 正 (羅 白)
 空 空 上 留 空 空 坂 直 (清 西)
 空 空 上 留 空 空 増 通 (羅 白)
 空 空 上 留 空 空 工 龍 (清 水)
 空 空 上 留 空 空 增 三 (苦 東)
 空 空 上 留 空 空 谷 鉄 (苦 東)
 空 空 上 留 空 空 藤 大 弥 (平 取)
 空 空 上 留 空 空 戸 了 (平 取)

(教科部会長)

国 語 對 馬 富 喜 (札 東 豊)
 社 会 三 尾 田 正 一 (石 啓 成)
 数 学 町 島 岸 哲 明 (札 啓 成)
 理 保 養 町 田 幸 久 (石 狩 南)
 体 藝 森 岸 吉 雄 (夕 張 南)
 藝 術 唐 山 愈 (野 幌)
 保 養 英 家 長 茂 (札 稲 雲)
 養 芸 唐 山 口 静 信 (札 開 成)
 藝 術 澄 川 治 (深 農)
 英 語 川 安 一 (札 琴 工)
 家 庭 工 田 雄 (札 啓 商)
 農 業 業 田 三 進 (札 啓 商)
 工 业 水 菅 木 茂 (小 樽 水)

(本部事務局)

局 長 菅 原 道 行

局次長 増田忠二郎
 ノ 伊藤隆喜
 幹事 佐藤公征(総務)
 ノ 鈴木徹(庶務)
 ノ 沢田正巳(編集)
 ノ 松田五郎(運営一)
 ノ 高橋勝昭(運営二)
 ノ 村口康博(会計)
 ノ 高木百合子(事務局員)

局員 旭丘高校教職員

(事務担当者)

(地区支部)

石渡	狩島	深野	護	(札真栄)
檜後	山志	田村	正郎	(函稜北)
南北	南北	上村	右	(熊石)
南北	志長谷川	豊	(留寿都)	
南北	空知	小川	俊三	(美唄南)
南北	空知	田川	昭	(砂川西)
上留	川久保	茂光	(旭川商)	
宗網	萌地	主卓司	(苦前商)	
走路	太田	玲子	(豊富)	
鉤根	垣内	堯男	(紋北)	
十胆	佐藤	満	(釧西)	
日高	本藤	好成	(羅臼)	
(教科部会)		義勝	(清水)	
	加藤	文夫	(苦東)	
	中渡	利淳	(平取)	

国社	語会	菊池	秀樹	(札東豊)
数理	学芸	神山	健	(札平岸)
保養	芸芸	杉山	靖	(札啓成)
體育	英家	横山	博幸	(石狩南)
護衛	農工	玉置	重実	(札南陵)
藝術	商業	浅黄谷	登志	(札南)
英語	工商	岩崎	雅春	(野幌)
家庭	水産	菅原	一實	(札稻雲)
農業		甕	郁子	(札開成)
工業		久保	強	(深川農)
商業		塚本	彰男	(札琴工)
水産		小松	信夫	(札啓北)
		小田切	幸雄	(小樽水)

平成2年度

会長 高畠惇彦(札旭丘)
 副会長 小泉善治郎(札琴工)
 ノ 宮川行雄(札月寒)

ノ 事監 宮森公夫(札清田)
 ノ 顧問 黒田治(札星園)
 ノ 顧問 奥平一(札東商)
 ノ 顧問 梶浦善次
 ノ 顧問 磐貝芳司
 ノ 顧問 尾崎信夫
 ノ 顧問 小柳六郎

(地区支部長)

石渡	狩島	藤田	明郎	(札真栄)
檜後	山志	堂高	栄治	(函中)
南北	南北	薄井	孝彦	(熊石)
南北	空知	和大	吉彦	(蘭越)
南北	上留	竹田	一郎	(岩東)
南北	宗網	柴田	吉一	(芦別)
南北	走路	山田	凌一	(旭凌雲)
南北	鉤根	田中	重則	(苫前商)
南北	十胆	望宮	隆一	(豊富)
南北	日高	坂田	幸三	(網南丘)
南北	高橋	横田	章通	(釧臼)
南北	勝振	勝受	人	(清水)
南北	日高	戸川	格了	(虻田)

(教科部会長)

国社	語会	馬富	喜(札東豊)
数理	学芸	谷浩	一(札清田)
保養	芸芸	島哲	明(札啓成)
體育	英家	石幸	博(札月寒)
護衛	農工	田幸	雄(恵庭南)
藝術	商業	山村	侃(札篠路)
英語	工商	唐山	愈(野幌)
家庭	水産	本間	茂(札稻雲)
農業		山口	恒太(札新川)
工業		山口	隆通(名寄農)
商業		小泉	善治郎(札琴工)
水産		肥田	進(札啓商)
		勝木	茂(小樽水)

(本部事務局)

局長	長	菅原道行	
局次長	長	増田忠二郎	
幹事	ノ	伊藤隆喜	
島相	澤寿一	(総務)	
鈴木	徳昭	(運営一)	
高橋	勝昭	(運営二)	
村口	康博	(会計)	

〃 高木百合子(事務局員)
 局員 旭丘高校教職員
 (事務担当者)
 (地区支部)

石渡檜後南北上留宗網釧根十胆日	狩島志空知丸川藤佐藤地主太田玲大澤征田中陽三浦義加藤勝振高	深青上藤山原忠司(苦前商)功(芦別)豊(岩東)功(芦別)忠(旭凌雲)留谷走路室室勝振	野茂右(熊石)祝(蘭越)山藤功(芦別)原忠司(苦前商)地主太田玲子(豊富)大澤征次(網南丘)田中陽一(釧工)三浦洋(羅臼)加藤義勝(清水)森善晴(虻田)伊藤勝夫(平取)	護(札真栄)(函中)生(函中)右(熊石)祝(蘭越)山藤功(芦別)忠(旭凌雲)留谷走路室室勝振	(札真栄)(函中)(熊石)昭治正良重則(苦前商)卓史章隆(羅臼)受佐藤(平取)
-----------------	-------------------------------	--	--	--	---

(教科部会)

国社数理保養芸英家農工商水	語会学理科體護術語庭業業水	菊池秀樹(札東豊)三浦一夫(札清田)杉山靖(札啓成)横山博幸(石狩南)玉置重実(札南陵)佐藤菜子(札北)岩崎雅春(野幌)菅原一實(札稻雲)山崎節子(札新川)田澤友康(名寄農)塚本彰男(札琴工)小松信夫(札啓北)成田安孝(小樽水)	國語会學理科體護術語庭業業水	治谷島中野東野元山口肥勝木	靜浩哲和幸宗友永哲通(名寄農)善治郎(札琴工)進(札啓商)茂(小樽水)
---------------	---------------	--	----------------	---------------	-------------------------------------

平成3年度

会長	本間恒太(札旭丘)
副会長	小泉善治郎(札琴工)
〃	宮川行雄(札月寒)
〃	宮森公夫(札清田)
監事	梅澤彰(札平岸)
〃	中齊孝則(札東商)
顧問	梶浦善次
〃	磯貝芳司
〃	尾崎信夫
〃	小柳六郎
〃	高畠惇彦

(地区支部長)

石渡檜後南北上留宗網釧根十胆日	狩島志空知丸川藤佐藤地主太田玲大澤征田中陽三浦義加藤勝振高	藤堂内北玉實竹柴山森宮平田原川川藤	田明彦昭吉田重田卓史章隆(羅臼)受佐藤(平取)	郎治彰(熊石)彦義司(芦別)一(旭凌雲)則(苦前商)隆(豊南丘)司(網南丘)章(釧工)隆(羅臼)昭格(虻田)満(平取)
-----------------	-------------------------------	-------------------	-------------------------	---

(教科部会長)

国社数理保養芸英家農工商水	語会学理科體護術語庭業業水	川治谷島中野東野元山口肥勝木	信(札開成)一(札清田)明(札啓成)夫(札月寒)雄(恵庭南)紀(札篠路)房(札藻岩)親(札拓北)浩(札新川)通(名寄農)善治郎(札琴工)進(札啓商)茂(小樽水)
---------------	---------------	----------------	--

(本部事務局)

局長	越野	孝
局次長	増田忠二郎	
〃	伊藤隆喜	
幹事	佐藤公征	(総務)
〃	相澤寿一	(編集)
〃	鈴木徹	(運営一)
〃	高橋昭	(運営二)
〃	村口康博	(会計)
〃	高木百合子	(事務局員)

局員

旭丘高校教職員

事務担当者)	梅澤彰(札平岸)	井義清(札真栄)	
(地区支部)	石渡檜後南北上留宗網釧根十胆日	石島志空知丸川藤佐藤地主太田玲大澤征田中陽三浦義加藤勝振高	井義清(札真栄)春夫(函中)充男(熊石)

後志保格秀雄(蘭越)
 南空丸山豊(岩東)
 北空佐藤功(芦別)
 上留川平井文雄(旭凌雲)
 留宗多田直治(苦前商)
 網谷富士田祐三郎(豊富)
 鈍根吉毛利正也(鈍工業)
 十胆浦三洋(羅臼)
 勝瀬中森善晴(虻田)
 振高伊藤勝夫(平取)
 (教科部会)

国社語会菊池秀樹(札東豊)
 数理会学理三浦山一夫(札清田)
 保育学科杉山靖(札啓成)
 藻體育齊藤光男(札月寒)
 養芸玉置重実(札南陵)
 藤佐佐藤菜子(札南北)
 術英大木秀一(札藻岩)
 家農橋高山(札拓北)
 庭業崎嶠節子(札新川)
 農工商田澤友康(名寄農)
 業塚木本彰男(札琴工)
 業小松信夫(札啓北)
 産成田安孝(小樽水)

平成 4 年度

会長染谷昌志(札旭丘)
 副会長高橋淳一(札琴工)
 //高梨光昭(札北)
 //久保敏(札南)
 監事梅澤彰(札平岸)
 //中斎孝則(札東商)
 顧問梶浦善次
 //磯貝芳司
 //尾崎信夫
 //小柳六郎
 //高畠惇彦
 //本間恒太

(地区支部長)

石狩島野近藤晃(札平岡)
 渡島野田義成(函中)
 檜山佐々木春夫(熊石)
 後南北志齊藤公生(寿都)
 南空知玉山治義(岩東)

北空知川庵奥安(豊彦)
 留宗網谷走路室勝振高(教科部会長)
 網鉛根十胆日(教科部会長)
 鈍上留宗網鉛根十胆日(教科部会長)
 勝庵奥安(豊彦)
 振知川庵奥安(豊彦)
 高谷走路室勝振高(教科部会長)
 佐襄佐平吉佐(豊彦)
 嘉藤嘉重(豊彦)
 佐藤嘉重(豊彦)
 (教科部会長)

国社語会小納澤谷正浩(北廣島)
 数理会学理今谷紀(札清田)
 保育学科佐々木西(札真栄)
 体育芸英家渡中和(札月寒)
 護術語庭東野幸(札庭南)
 養芸英家渡中和(札月寒)
 藻體育芸英家渡中和(札月寒)
 工農業農工大木(札拓北)
 商業農工大木(札拓北)
 業農工大木(札拓北)
 業農工大木(札拓北)
 産水大木(札拓北)

(本部事務局)
 局長越野忠二郎(企画・運営)
 局次長増田正子(会計)
 幹事岳田公征(総務)
 //佐藤田惠(庶務)
 //武相澤木壽(編集)
 //相澤木壽(運営一)
 //鈴木勝昭(運営二)
 //高橋口康博(会計)
 //高木百合子(事務局員)

局員) 旭丘高校教職員

(事務担当者)

(地区支部)

石狩島野近藤晃(札平岡)
 渡島野田義成(函中)
 檜山佐々木春夫(熊石)
 後南北志齊藤公生(寿都)
 南空知玉山治義(岩東)
 空知川庵奥安(豊彦)
 留宗網谷走路室勝振高(教科部会長)
 網鉛根十胆日(教科部会長)
 勝庵奥安(豊彦)
 振知川庵奥安(豊彦)
 高谷走路室勝振高(教科部会長)
 佐襄佐平吉佐(豊彦)
 嘉藤嘉重(豊彦)
 佐藤嘉重(豊彦)
 (教科部会長)

網 釧
鉤 根
根 室
十 勝
胆 振
胆 高
日 (教科部会)

走路瀬 戸 潔 (北見綠)
室古 谷 倭 (釧湖陵)
中野 一 信 (羅臼)
中野 雅 教 (幕別)
中野 虎 雄 (室工)
堀田 小 林 茂 (平取)

國 語 須 磨 守 (北広島)
社 會 三 浦 一 夫 (札清田)
數 學 橫 山 保 重 (札真栄)
理 科 齋 藤 光 男 (札月寒)
保 休 玉 置 重 実 (札南陵)
養 護 佐 藤 菜 子 (札北)
芸 術 滝 沢 光 郎 (札開成)
英 語 高 橋 誠 (札拓北)
家 庭 山 崎 節 子 (札新川)
農 業 加 藤 希 一 (岩農)
工 業 塚 本 彰 男 (札琴工)
商 業 高 塩 光 明 (札啓北)
水 產 平 沖 道 治 (小樽水)

年 表

30 年 の あ ゆ み

1963(昭38)～1993(平5)

年月	高 教 研	教 育 関 係	社 会 の 動 き
1963 (昭38)	1 北海道高等学校教育研究会設立総会が札幌南高校で開かれ初代会長として梶浦善次氏が就任 5 昭和38年度会員登録者数 (1985名)	1 道学力向上対策協議会発足 4 能力開発研究所設立 6 高校に新教育課程が実施 7 中教審に後期中等教育の拡充整備を諮問 11 全国学力調査実施（小中） 11 能力開発研究所第1回能研テストを実施	2 青函トンネル調査坑着工式 9 松川事件全員無罪判決 10 日本初の原子力発電成功 11 ケネディー大統領暗殺さる
1964 (昭39)	1 第1回北海道高等学校教育研究大会 (札旭丘) 参加者（335名） 講師 森戸 辰男 （中央教育審議会会長） 『高校教育の問題点』 3 会報第1号発刊 研究紀要第1号発刊 12 昭和39年度会員登録者数 (2,228名)	2 文部省、小中学校の「道徳の指導資料」第1集70万部を発刊 4 高校入試制度を改訂し総合選抜制を打出す 5 道教委“教頭制”を公布 7 能力開発研究所 進学適正能力テスト実施 9 文部省体育施設五ヵ年計画発表 10 文部省全国学力調査を20%抽出に改めると発表 11 文部省「わが国の教育水準」（教育白書）発表	6 新潟大地震起る 8 道島にタンチョウヅル決定 10 東海道新幹線開通 東京オリンピック開催 11 日本近代文学館文庫発足
1965 (昭40)	1 第2回北海道高等学校教育研究大会 (静修高) 参加者（725名） 講師 高坂 正顕	1 中教審「期待される人間像」の中間報告を発表 5 道教委、公立高校の小学区制を廃止し、大学区制に移行を決定 高校再編成の基本方針発表	2 北炭夕張炭鉱事故 3 ソ連初の宇宙遊泳成功 5 I.L.O.87号条約関係国内法成立 6 利尻・礼文・国定公園に昇格

年月	高 教 研	教 育 関 係	社 会 の 動 き
3 7 12	(東京学芸大学学長) 『日本教育の課題』 同教科別集会 会報第2号発刊 研究紀要第2号発刊 会報第3号発刊 昭和40年度会員登録者数 (2,710名)	6 家永三郎教科書検定問題で 第1次訴訟を起こす 11 「わが国の社会教育」－現 状と課題－教育白書	9 シュバイツァー死去 10 朝永振一郎ノーベル賞受賞 12 三浦綾子「氷点」ベストセ ラー
1966 (昭41) 1 3 4 7 12	第3回北海道高等学校教育研究大会 (静修高) 参加者(1,200名) 講師 沢田 慶輔 (東京大学教授) 『考える力をもった人間を育てる教 育』 同教科別集会 会報第3号発刊 研究紀要第3号発刊 梶浦会長退職・長瀬米蔵氏会長就任 会報第5号発刊 昭和41年度会員登録者数 (3,343名)	1 教育課程審議会、愛国心の 育成などを内容とする教育 課程改定基本方針をまとめ る 2 盲学校及び聾学校の高等部 の学校を定める省令 4 札幌啓成高校開校 7 東京都高校の学校群設置と 入試教科を3教科に削減 10 中教審「期待される人間 像」を含めて「後期中等教 育拡充整備案」を正式に答 申した 11 道中等教育振興協議会、高 校入試科目削減を諮問する	2 全日空機羽田沖に墜落 3 英旅客機富士山上空で空中 分解 4 1972年冬季オリンピック大 会の札幌開催決定 6 国民の祝日法改正(敬老の 日・体育の日) 8 中共文化革命激化 9 北海道の木にエゾマツ決定 12 建国記念日政令公布
1997 (昭42) 1 3 7 12	第4回北海道高等学校教育研究大会 (静修高) 参加者(1,656名) 講師 平塚 益徳 (国立教育研究所長) 『後期中等教育への諸問題につい て』 中川 秀三 (札幌医科大学教授) 『大脳生理学と精神衛生について』 同教科別集会 会報第6号発刊 研究紀要第4号発刊 会報第7号発刊 昭和42年度会員登録者数 (4,426名)	5 二本木教育長勇退・岡村教 育次長が昇格 6 家永三郎、教科書検定は違 憲であると第2次訴訟を提 訴 7 公立高等学校の設置適正配 置および教職員定数の標準 等に関する法律を一部改正 8 高等学校における職業教育 の多様について答申 9 中・高教員の海外研修派遣 始まる 10 教育課程審議会、小学校教 育課程改正について最終答 申 高校生の意識調査	3 道旗と道章決まる 国際数字テスト(シカゴ大 学)で日本上位 4 北海道文学館を設立 7 鈎路湿原を国の天然記念物 に指定 9 北海道立美術館開館 10 黒田、ケプロン、岩村、永 山顕彰像の除幕 12 北大で本道初の「原子炉」 始動

年月	高 教 研	教 育 関 係	社 会 の 動 き
1968 (昭43)	<p>1 第5回北海道高等学校教育研究大会 (市民会館)</p> <p>参加者 (2,323名)</p> <p>講師 細谷 俊夫 (東京大学教授) 『わが国の中等教育』</p> <p>伊藤 祐時 (日本大学教授) 『進路指導について』</p> <p>教科別集会</p> <p>会報第8号発刊</p> <p>研究紀要第5号発刊</p> <p>会報第9号発刊</p> <p>昭和43年度会員登録者数 (5,090名)</p>	<p>2 日教組、超勤手当問題でマ ンモス訴訟</p> <p>3 私立高校統一入試始まる</p> <p>4 高校生の政治活動の指導を 徹底するよう指示 高校再編成計画を実施 副読本「北海道百年のあゆ み」発行</p> <p>5 71年度実施の小学校学習指 導要領案を発表 (歴史学習 の強化が特色)</p> <p>11 わが国の教育のあゆみと今 後の課題について中央教育 審議会でまとめる</p> <p>12 坂田文相、東京教大、東大 当局の話し合いで入試中止 を内定</p>	<p>4 小笠原返還協定調印</p> <p>5 十勝沖地震</p> <p>6 文化庁発足 富山県のイタイイタイ病政 府は公害と認定 北海道大博覧会開幕</p> <p>7 日本初の心臓移植手術</p> <p>9 水俣病と阿賀野川水銀中毒 事件を正式に公害と認定 北海道百年記念祝典</p> <p>10 東大、日大をはじめ51大学 で学園紛争が発生 川端康成ノーベル文学賞受 賞決定</p> <p>12 3億円強奪事件</p>
1969 (昭44)	<p>1 第6回北海道高等学校教育研究大会 (市民会館)</p> <p>参加者 (2,352名)</p> <p>講師 高坂 正堯 (京都大学助教授) 『転換期における日本の諸問題』</p> <p>犬飼 哲夫 (北海道大学名誉教授) 『開拓百年と北海道の野獸』</p> <p>同教科別集会</p> <p>会報第10号発刊</p> <p>研究紀要第6号発刊</p> <p>会報第11号発刊</p> <p>昭和44年度会員登録者数 (5,052名)</p>	<p>1 東大当局安田講堂等の学生 による封鎖の全面解除のた めの機動隊を導入</p> <p>2 政府の方針で東大の入試中 止を決定</p> <p>3 能研テスト、69年度から休 止決定</p> <p>8 「大学運営臨時措置法」公 布</p> <p>10 高校における政治的教養と 政治的活動について文部省 が通達</p> <p>11 教員の特別昇給実施要綱を 提示する</p>	<p>1 北大に世界最大の低温実験 室完成</p> <p>8 アポロ11号人類初の月着陸 に成功</p>
1970 (昭45)	<p>1 第7回北海道高等学校教育研究大会 (市民会館)</p> <p>参加者 (2,551名)</p>	<p>3 高校入試、猛吹雪のため延 期 英語科、理数科の増設</p>	<p>2 人工衛星第1号「オオス ミ」を打ち上げ</p>

年月	高 教 研	教 育 関 係	社 会 の 動 き
	<p>講師 岸本 康 (共同通信社論説委員科学評論家) 『宇宙開発と変革の時代』</p> <p>益井 重夫 (国立教育研究所第2研究部長) 『教育改革と後期中等教育の諸問題』—諸外国の実状と関連して—</p> <p>同教科別集会</p> <p>会報第12号発刊</p> <p>研究紀要第7号発刊</p> <p>長瀬会長退職・磯貝芳司氏会長就任</p> <p>会報第13号発刊</p> <p>昭和45年度会員登録者数 (5,213名)</p>	<p>3 「私学振興財団法」成立</p> <p>5 中教審、高等教育の改革基本構想の中間報告と初等中等教育の改革基本構想、試案を発表</p> <p>6 東京地裁の杉本良吉裁判官、教科書裁判で家永三郎勝訴の判決を下す</p> <p>文部省、杉本判決を不服として東京高裁に控訴</p> <p>10 高等学校学習指導要領告示</p>	<p>3 万国博大阪で開催</p> <p>日航機「よど号」赤軍派学生に乗取られる</p> <p>6 忠類村でナウマン象の化石骨完全発掘</p> <p>8 北海道百年記念塔完成</p> <p>11 札幌市「百万都市」になる</p>
1971 (昭46)	<p>1 第8回北海道高等学校教育研究大会 (市民会館)</p> <p>参加者(2,921名)</p> <p>講師 衛藤 潤吉 (東京大学教養学部教授) 『日本と中国』</p> <p>岸田 純之助 (朝日新聞論説委員、評論家) 『情報化社会における教育のシステム』</p> <p>同教科別集会</p> <p>会報第14号発刊</p> <p>研究紀要第8号発刊</p> <p>会報第15号発刊</p> <p>昭和46年度会員登録者数 (5,792名)</p>	<p>1 文部省小・中新學習指導要領の部分改定を告示(福祉優先の公害教育方針を明確化する) O.E.C.D 「日本の教育」で報告書まとめる</p> <p>2 文部省小・中学校の新しい指導要録を通知</p> <p>4 小学校の教育課程、10年ぶりに改定(神話、公害など登場)</p> <p>12 文部省の大学入試改善会議「大学入学選抜方法の改善について」最終報告を発表</p>	<p>1 札幌国際冬季スポーツ大会(プレオリンピック)開催</p> <p>4 北海道開拓記念館開館</p> <p>6 沖縄返還協定調印</p>
1972 (昭47)	<p>1 第9回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館)</p> <p>参加者(3,326名)</p> <p>講師 林 健太郎 (東京大学文学部教授) 『民主主義を考える』</p>	<p>4 札幌北陵高校開校</p>	<p>2 第11回冬期オリンピック札幌大会開催 「浅間山荘」連合赤軍が人質とともに立てこもる</p> <p>3 山陽新幹線(大阪～岡山)開通</p> <p>4 高松塚古墳で壁画発見</p>

年月	高教研	教育関係	社会の動き
	矢口 新 (能力開発工業センター所長) 『教育革新の課題』 同教科別集会 会報第16号発刊 研究紀要第9号発刊 会報第17号発刊 昭和47年度会員登録者数 (5,714名)	6 教育制度検討委員会「日本の教育をどう改めるべきか」の第2次報告書を日教組委員長に提出 高見文相第10期中教審に「教育・学術・文化の国際交流」について諮詢	5 沖縄返還
1973 (昭48)	1 第10回北海道高等学校教育研究大会 第10回記念大会全体集会 同10周年記念祝賀会 (厚生年金会館) 参加者(3,249名) 講師 和達 清夫 (中央公害審議会会长・前埼玉大学長) 『地球科学と環境問題』 市村 真一 (京都大学教授) 『変わりゆく日本と教育』 同教科別大会 会報第18号発刊 研究紀要第10号発刊 会報第19号発刊 昭和48年度会員登録者数 (6,031名)	2 札幌藻岩高校の土地代、史上最高の八億円 3 第一次高等教育懇談会最終答申まとめる(地方大学拡充諮詢) 校舎爆破の脅迫状で札幌啓成高校卒業式中止 4 札幌藻岩高校・千歳北陽高校開校 5 奥野文相「学校週5日制」の検討を支部当局に指示 6 都市部の公立高校入試50年から総合選抜制への切替え検討、道教委 9 動労スト続行で23高校が臨休、修学旅行延期・中止 中教審の筑波大学設置が特別国会で決まる 11 旭医大開設 12 公立高校適正配置計画決まる、定員715名増=道教委	1 大阪東亜ペイント工場で爆発事故91人重軽傷 ベトナム和平協定調印 2 浅間山36年8月以来12年ぶり大爆発 3 田中首相、ソ連書記長に平和条約推進の親書 5 ウォーターゲート事件起こる 8 金大中事件起こる 10 江崎玲於奈、ノーベル物理学賞受賞決まる 日本登山隊、エベレスト登頂
1974 (昭49)	1 第11回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者(3,255名) 講師 天城 勲 (日本育英会理事長) 『近代学校制度—その性格と展望』	4 札幌手稲高校開校 北教組の全日スト 9 道教委、稚内、美唄両市の養護学校開校正式決定(52年度開校)	2 早大調査隊エジプト古代王朝の遺跡発見 3 高松塚古墳壁画国宝指定 4 京都府知事選、蜷川虎三七選 8 米第38代大統領にジェラルド・R・フォード就任

年月	高教研	教育関係	社会の動き
	<p>橋本 重治 (応用教育研究所長) 『教育評価の今日的問題』 同教科別集会 会報第20号発刊 研究紀要第11号発刊 会報第21号発刊 昭和49年度会員登録者数 (6,143名)</p>		<p>10 佐藤栄作、ノーベル平和賞受賞決定 12 首相に三木武夫氏選出さる</p>
1975 (昭50)	<p>1 第12回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者 (3,321名) 講師 会田 雄次 (京都大学教授) 『日本の心と世界の心』 菊地 浩吉 (札幌医科大学教授医学博士) 『ガンの免疫』 同教科別集会 会報第22号発刊 研究紀要第12号発刊 会報第23号発刊 昭和50年度会員登録者数 (6,164名)</p>	<p>4 札幌丘珠高校・札幌清田高校開校 国立大学協会入試改善調査委員会、入試内容の為の共通テスト(一次試験)の実施検討、結果公表、出題範囲は必修科目(5教科7科目)とし2次試験は選択科目全国一斉実施53年春から実施の見通 7 公立高校入学選抜改善研究協議会は51年度の総合選抜制見送る 12 道教委、札幌市内に52年度開校メドに公立二校の新設決める (52.4札幌西陵高校・札幌白石高校開校)</p>	<p>4 第8回統一地方選挙 ベトナム戦争終結 6 スエズ運河再開(中東戦争閉鎖以来8年振りに) 12 三億円事件時効(43.12.10府中で発生した)</p>
1976 (昭51)	<p>1 第13回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者 (3,338名) 講師 池田 弥三郎 (慶應義塾大学教授) 『言葉としつけ』 田上 義也 (北海学園大学講師) 『北の環境の中で』 同教科別集会 会報第24号発刊 研究紀要第13号発刊</p>		<p>1 五つ子誕生 2 ロッキード疑惑事件 10 鬼頭判事補のニセ電話事件 11 天皇在位50年式典 12 総選挙で自民敗北、三木首相退陣し、後継者に福田赳氏</p>

年月	高 教 研	教 育 関 係	社 会 の 動 き
7 12	会報第25号発刊 昭和51年度会員登録者数 (6,201名)		
1977 (昭52)	1 第14回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者 (3,508名) 講師 加藤陸奥雄 (東北大学学長) 『自然保護』 岡路 市郎 (北海教育大学学長) 『「教え」への幻想』 同教科別集会 3 会報第26号発刊 研究紀要第14号発刊 4 磯貝会長退職・瀬戸哲郎氏会長就任 7 会報第27号発刊 12 昭和52年度会員登録者数 (6,272名)	1 海部文相と日教組トップ会談 (主任制について) 国語審議会「新漢字表」を海部文部大臣に中間報告 2 道教育委員会、昭和60年までの「北海道教育長期総合計画」決定 6 文部省、新しい「小・中学校学習指導要領」発表 7 道立近代美術館開館 (東北以北最高の) 8 文部省、教科書検定規則と同検定基準の全面的改正 道教委、53年度の公立高校入試の総合選抜制導入見送り 9 道教委、北教組対立の中気境公男道教育長辞職 12 道教委、53年度の道内公立高校適正配置計画を道議会、文教材務委員会に報告、三学区に四校新設	1 青酸カリコカコーラ事件起 こる 第39代米大統領にジェームズ・カーター氏就任 6 慶大商学部入試漏えい事件 ロッキード事件の児玉眞士夫等の初公判開かれる 7 わが国の「領海12カイリ」「経済水域200カイリ」スタート 8 有珠山爆発 日本K2登山隊のカラコルム登頂成功
1978 (昭53)	1 第15回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者 (3,660名) 講師 村松 剛 (筑波大学教授) 『国際情勢と日本の進路』 河邨文一郎 (札幌医科大学教授) 『医療と福祉』 同教科別集会 3 会報第28号発刊 研究紀要第15号発刊	3 道教委「公立高校の入試選抜に関する改善試案」を発表 4 北広島高校・石狩高校開校 5 道教委「公立高校の入試選抜に関する改善試案」の細則を発表 6 文部省は51年末の教育課程審議会の答申を基礎に、高校の新しい学習指導要領案を発表 8 文部省は57年度から実施する新しい高校学習指導要領を正式に決め告示	5 植村直巳北極点に立つ 成田空港開港 7 英で初の体外受精児誕生 8 日中平和友好条約調印 12 大平新内閣誕生

年月	高教研	教育関係	社会の動き
7 12	会報第29号発刊 昭和53年度会員登録者数 (6,549名)	10 道教委は道内14教育局、市町村教委、各小、中、高校長に対し主任手当実施通達 道教委、公立高校と公立特殊学校職員の人事異動の実施要領決める（各学校をA, B, C, Dの四つの“群”に区分） 11	
1979 (昭54) 1 3 4 7 12	第16回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者 (3,731名) 講師 黛 敏郎 (作曲家) 『日本の音』 田中 彰 (北海道大学教授) 『近代日本の岐路』 同教科別集会 会報第30号発刊 研究紀要第16号発刊 瀬戸会長退職・樋浦浩氏会長就任 会報第31号発刊 昭和54年度会員登録者数 (6,411名)	1 初の国公立大学共通一次試験が全国一斉に行われる 2 大学入試センターは1月に実施した国公立大共通一次試験の五教科総合の平均点は636.07点、最高は972点、最低は零点で標準偏差値は134.28点と発表 4 札幌東陵高校・札幌新川高校・札幌平岸高校開校	1 日本最初の史書、古事記、日本書紀の編者、太安萬侶の墓誌と骨が奈良市田原町で見つかる 6 東京サミット開催（東京迎賓館） 9 札幌豊平川にサケのそ上が25年振りに確認される
1980 (昭55) 1 3	第17回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者 (3,891名) 講師 犬飼 孝 (大阪大学名誉教授・甲南女子大学教授) 『万葉のこころ』 武谷 愿 (北海道大学名誉教授) 『エネルギー資源の今日と将来』 同教科別集会 会報第32号発刊 研究紀要第17号発刊	2 「ゆとりある、充実した教育」をキャッチフレーズにした小学校の新しい学習指導要領スタート 4 道内に高校が5校開設 南陵高校開校 11 道教委、56年度の公立高校適正配置計画を決めたが新設校ゼロで職業科中心に18校18学級削減	1 パンダのホアンホアンが上野動物園に到着 3 早大入試漏えい事件起る 8 鈴木内閣スタート 東京新宿駅西口広場バス放火事件 9 秘境知床に知床横断道路が開通 国境紛争をめぐりイラン－イラク全面戦争突入

年月	高 教 研	教 育 関 係	社 会 の 動 き
7 12	会報第33号発刊 昭和55年度会員登録者数 (6,450名)		
1981 (昭56)	第18回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者(4,121名) 講師 今堀 宏三 (大阪大学教授・理学博士) 『かけがえのない地球と私たちの環境』 倉田 公裕 (北海道立近代美術館長・明治大学教授) 『美術に見る東西のこころ』 同教科別集会 会報第34号発刊 研究紀要第18号発刊 会報第35号発刊 樋浦会長死去(8月) 尾崎信夫氏会長就任 昭和56年度会員登録者数 (6,317名)	2 道教大札幌分校、市内北区篠路に移転決定 4 教科書協会、中学社会科「公民的分野」を59年度から大幅改訂方針を決める 5 道教委、57年度から公立高校入試制度の改革(21学区を52学区に) 6 道教委、来春の入試制度改革案を発表(学区細分化、学力検査、日程の短縮、職業高校の推薦入学制導入など) 文部省高校教科書「現代社会」に厳しい検定 12 高校進学者の定時制離れが進み道教委は来年度から入試を行わないことを決定	1 レーガン新政権誕生 4 国家公務員の週休二日制スタート アメリカ、世界初のスペースシャトル「コロンビア」の打ち上げに成功 仏に23年振りの左翼政権誕生(ミッテラン大統領) 10 国語審議会の「常用漢字表」実施 ノーベル化学賞京大の福井謙一教授に決定
1982 (昭57)	第19回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者(4,121名) 講師 広中 平祐 (京都大学教授) 『日本の教育を考える』 小林 稔作 (北海道大学低温科学研究所教授) 『「雪華図説」と雪文様』 同教科別集会 会報第36号発刊 研究紀要第19号発刊 会報第37号発刊 昭和57年度会員登録者数 (6,230名)	2 文部省学力テスト16年振りに実施 5 道退職校長会の教育問題調査研究部、校長OBの意識調査まとめる(文部省の教科書検定強化反対)	2 我が国“酪農の父”黒沢西蔵死去 札幌で北方都市会議開催 ホテルニュージャパン火災(ホテル火災戦後最大) 4 アルゼンチン政府、英領フーケランド諸島占領 11 ソ連ブレジネフ書記長死亡

年月	高教研	教育関係	社会の動き
1983 (昭58)	<p>1 第20回北海道高等学校教育研究大会 創立20周年記念大会 (厚生年金会館) 参加者 (4,004名) 講師 黒川 紀章 (建築家) 『共生の時代』 梅原 猛 (京都市立芸術大学教授) 『アイヌー日本民族の基層』 同教科別集会 会報第38号発刊 研究紀要第20号発刊 会報第39号発刊 昭和58年度会員登録者数 (6,246名)</p>	<p>1 共通一次試験 (5回目) 終了 種々の問題点が指摘される 2 道内の公立高校新設校に人気 3 校内暴力が社会問題化する 4 札幌真栄高校・札幌厚別高校・札幌稻西高校・札幌稲北高校・札幌東豊高校・北広島西高校・石狩南高校開校 6 中教審「教科書の在り方にについて」瀬戸文相に答申 9 日教組定期大会で12年続いた楨枝氏に代わり田中一郎氏を委員長に選出 12 教頭昇任選考へ来秋から道教委 筆記試験導入</p>	<p>5 日本海中部地震発生 (M 7.7) 6 比例代表制初の参院選実施 8 アキノ氏暗殺事件 (フィリピン・マニラ空港) 9 大韓航空機墜落事件 10 三宅島大噴火で400戸焼失 おしんブーム</p>
1984 (昭59)	<p>1 第21回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者 (4,061名) 講師 外山滋比古 (お茶の水大女子大学教授) 『新しい人間像と教育』 伊藤 隆一 (北海道教育大学教授) 『北からの出発』 同教科別集会 会報第40号発刊 研究紀要第21号発刊 会報第41号発刊 昭和59年度会員登録者数 (6,245名)</p>	<p>1 「札幌芸術の村」原案出来る 2 首相直属の「教育臨調」設置 道内の公立高校4年ぶりに授業料値上げ 3 旧有島武郎邸芸術の村に移転決定 4 札幌稻雲高校・大麻高校開校 9 「道高校長期収容対策検討協議会、中卒者増に対する対策を道教委に答申 12 全国の公立高校で中退者が10万人の大台を上まわる</p>	<p>1 三井三池有明鉱坑内火災発生 (死者83人) 3 グリコ・森永事件 6 日本、男女とも「世界一の長寿国」に 7 ロス五輪開幕 (ソ連はじめ東欧諸国不参加) 11 千円・5千円・1万円札が衣がえ</p>
1985 (昭60)	<p>1 第22回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者 (4,054名)</p>	<p>3 北大の学長に有江氏再選 6 小樽に道内初の職訓大学設置決定 (61年開校の予定)</p>	<p>1 横綱北の湖引退 3 青函トンネル(全長53.85キロ・世界最長)貫通</p>

年月	高 教 研	教 育 関 係	社 会 の 動 き
	<p>講師 黒羽 亮一 (日本経済新聞論説委員) 『なぜ今教育改革か』 岡田 宏明 (北海道大学文学部教授) 『北方民族における伝統と近代』 同教科別集会</p> <p>3 会報第42号発刊 研究紀要第22号発刊</p> <p>4 尾崎会長退職・小柳六郎氏会長就任 会報第43号発刊</p> <p>7 昭和60年度会員登録者数 (6,231名)</p>	<p>「臨時教育審議会」第1次 答申まとまる「共通テスト」 案が浮上する 9 校内暴力が下火になる一方 「いじめ」が社会問題化す る(9月迄で自殺者が5人 も出る) 「教育課程審議会」が12年 ぶりに福井謙一氏を会長に 選出</p> <p>文部省全国の小・中・高校 へ入学式・卒業式における 「国旗国歌」について通達 を出す</p> <p>北海学園が創立100年式典 を挙行</p>	<p>4 日本電信電話公社・日本た ばこ産業会社が民間企業と して発足</p> <p>7 日航ジャンボ機墜落事故, 524人中女性4人生存</p> <p>9 メキシコ地震発生、死者・ 行方不明者8,800人に</p>
1986 (昭61)	<p>1 第23回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者(4,012名)</p> <p>講師 加藤 秀俊 (放送大学教授) 『生涯教育の将来』</p> <p>石黒 直文 (北海道拓殖銀行常務取締役) 『これから企業の求める人間像』 同教科別集会</p> <p>3 会報第44号発刊 研究紀要23号発刊</p> <p>7 会報大45号発刊</p> <p>12 昭和61年度会員登録者数 (5,859名)</p>	<p>1 道内の高校進学者人数3年 連続で増加(道教委間口増 に大童) 札医大学長に菊地浩吉氏選 出される</p> <p>2 全国で「いじめ」の発生は 2校に1校と文部省発表</p> <p>4 「臨時教育審議会」第2次 答申案を発表(生涯学習体 系への移行を主軸とする教 育の見直しを行う) 「国語審議会」40年ぶりに 「現代仮名遣い」を改定 札幌篠路高校開校</p> <p>9 藤尾文相・7月と9月の日 韓関係についての発言で罷 免される</p> <p>11 道教委、62年度の公立高校 の定員枠を30学級増と発表 文部省「共通一次試験」に 代わる「新テスト」を65年 から実施と発表</p>	<p>1 スペースシャトル爆発事故</p> <p>2 フィリピン大統領選挙、マ ルコス一家国外脱出</p> <p>4 ソ連・ウクライナ共和国の チェルノブイリ原子力発電 所で原発事故 天皇在位60年記念式典</p> <p>9 社会党土井たか子新委員長 誕生</p> <p>11 伊豆大島の三原山噴火(20 9年ぶり)</p>

年月	高教研	教育関係	社会の動き
1987 (昭62)	<p>1 第24回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者 (3,972名) 講師 江藤 淳 (東京工業大学教授) 『ことばとこころ』 岡村 正吉 (北海道虻田町長) 『地方自治と教育』 同教科別集会 会報第46号発刊 研究紀要第24号発刊</p> <p>4 小柳会長退職・高畠惇彦氏会長就任 7 会報第47号発刊 12 昭和62年度会員登録者数 (5,729名)</p>	<p>3 北大学長に伴義雄氏選出される 国公立大入試初のA・B日程で開始</p> <p>4 「臨教審」(岡本道雄会長)が第3次答申 (9月入学に向けて条件整備の必要性を力説)</p> <p>5 札幌平岡高校開校 道内の高校生の総数史上初めて24万人台になる</p> <p>文部省の「児童生徒問題行動実態調査」により登校拒否と自殺が過去最高と判明 同時に学習塾の過熱がみられる</p> <p>6 国大協 63年度入試における2次試験出願を共通一次以降にくり下げるなどを発表</p>	<p>3 若王子誘拐事件発生 4 国鉄民営化されJRに 9 大乃国の横綱昇進を発表 北海道3横綱時代はじまる 10 米マサチューセッツ工科大教授、利根川進博士がノーベル医学生理学賞受賞</p>
1988 (昭63)	<p>1 第25回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者 (4,114名) 講師 野坂 昭如 (作家) 『近ごろ思うこと』 小松 作蔵 (札幌医科大学副学長) 『心臓移植をめぐって』 同教科別集会 会報第48号発刊 研究紀要第25号発刊 7 会報第49号発刊 12 昭和63年度会員登録者数 (5,645名)</p>	<p>2 国大協 64年以降の入試は「分離・分割方式」採用を発表 道教委と北教組12年間もめ続けた主任制問題で「主任は中間管理職でなく主任を固定しないこと」で合意</p> <p>4 札幌拓北高校開校</p> <p>8 旭川北高同窓会4,000万円の基金で海外留学財団を設立</p> <p>10 「入試センター」は65年からの「新テスト」を12月ではなく1月中旬に移すことを決定</p> <p>11 北大、65年度以降「分離・分割」制度を導入と発表</p>	<p>3 「JR津軽海峡線」の開業 4瀬戸大橋開通 6 リクルート社、非公開株ばらまき発覚 8 イランーイラク戦争、停戦</p>

年月	高教研	教育関係	社会の動き
1989 (平1)	<p>1 第26回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者(3,972名) 講師 多湖輝 (千葉大学教授) 『日本人と創造性』 美濃羊輔 (帯広畜産大学教授) 『バイオテクノロジーの現状と問題点』 同教科別集会 会報第50号発刊 研究紀要第26号発刊</p> <p>7 会報第51号発刊</p> <p>12 平成1年度会員登録者数 (5,586名)</p>	<p>1 西岡文相「主任は中間管理職とせず」との道教委と北教組の合意案を強く批判(国庫補助の停止をおわす) 「共通一次試験」今回でその歴史に幕をおろす(受験者37.4万人)</p> <p>3 沢教育長「主任制の北海道方式」の白紙撤回を発表 文部省教科書検定図書調査審議会は40年ぶりに基準を改正(3段階審査を2段階に、文相に訂正勧告権を与える)</p> <p>11 道教育大が大学院新設構想を発表</p>	<p>1 昭和天皇崩御、在位62年皇太子明仁親王即位</p> <p>2 アフガニスタン駐留のソ連軍撤退完了</p> <p>4 竹下内閣、リクルート事件で引責退陣表明</p> <p>6 天安門広場事件 戦後歌謡界の女王 美空ひばり死去</p> <p>8 海部内閣誕生</p> <p>9 千代の富士閣が29回目の優勝を全勝で飾り、国民栄誉賞受賞</p> <p>11 総評解散し「連合」に「ベルリンの壁」崩壊</p>
1990 (平2)	<p>1 第27回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者(4,118名) 講師 金田一春彦 (文学博士) 『日本語の心』 高橋良治 (釧路市丹頂鶴自然公園園長) 『タンチョウの四季』 同教科別集会 会報第52号発刊 研究紀要第27号発刊</p> <p>7 会報第53号発刊</p> <p>12 平成2年度会員登録者数 (5,482名)</p>	<p>1 「共通一次」に代わって登場した「大学入試センター試験(新テスト)」が、43.5万人の参加をえて行われる</p> <p>9 寺山教育長「主任制の北海道方式」の平成3年度実施を表明</p>	<p>9 イラク軍がクエート侵攻</p> <p>10 ドイツ、国家統一を回復 ソ連の初代大統領ゴルバチヨフ氏がノーベル平和賞受賞</p> <p>12 TBS特派員秋山豊寛氏、ソユーズTM11号で日本人初の宇宙飛行を成し遂げる</p>
1991 (平3)	1 第28回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館)	1 「入試センター試験」で国公立離れが目立つ	1 多国籍軍がイラク攻撃、湾岸戦争勃発

年月	高教研	教育関係	社会の動き
	参加者(3,734名) 講師 菊地 元一 (青山学院大学法学部長) 『経済法秩序における公正としての正義』－日米構造協議を中心に－ 高畠 直彦 (札幌医科大学神経精神科教授) 『心の危機と反応』 同教科別集会 会報第54号発刊 研究紀要第28号発刊 高畠会長退職・本間恒太氏会長就任 会報第55号発刊 平成3年度会員登録者数 (5,269名)	2 「国語審議会」外来語の表記法について答申 3 兵庫県立農業高校で91年度入試答案の改ざん事件が発覚 4 「中教審」が特定高校の有名大学寡占化の是正を答申 6 明大で替え玉受験発覚 文部省「日の丸は国旗」「君が代は国歌」と92年用教科書で明記 11 「入試センター試験」の受験者、史上最多の47.2万人	3 東京西新宿に新都庁舎が落成 4 ペルシャ湾に掃海艇派遣 5 信楽高原鉄道で列車が正面衝突、死者多数 千代の富士引退 6 雲仙普賢岳で大規模な火砕流発生 8 米ソ、相次いで核軍縮発表 ソ連で保守派がクーデターを起こしたが失敗〔8月政変〕、共産党解体 12 ソ連邦消滅(11共和国首脳が独立国家共同体協定に調印、ゴルバチョフ大統領正式辞任)
1992 (平4)	第29回北海道高等学校教育研究大会 (厚生年金会館) 参加者(3,690名) 講師 なだ いなだ (精神科医・作家) 『心の底をのぞく』 坂本 与一 (北海道文理科短期大学学長) 『オスとメスのエソロジー』 同教科別集会 会報第56号発刊 研究紀要第29号発刊 本間会長退職・染谷昌志氏会長就任 会報第57号発刊 平成4年度会員登録者数 (5,140名)	1 センター試験47万人受験で行われる 高校中退者12.3万人にのぼる 2 筑波大学学長に江崎氏選出される 3 文部省学校5日制で通達出す 4 リクルート事件担当の堀田検事慶應大学の教壇にのぼる 6 姉妹校提携大はやり(全国で1,200校) 指導要録の全面開示問題裁判請求へ(大阪) 7 大検志願この10年で4倍に (全国で2万人台にのぼる) 8 不登校中学生100人に1人の割合－学校嫌い過去最高に 9 学校5日制…毎月第2土曜日休業になる	1 共和汚職事件で阿部文男代議士逮捕 2 佐川急便事件発覚 6 国連平和維持活動(PKO)協力法が衆院で可決・成立 7 新千歳空港の新旅客ターミナルビル開業 9 道産子宇宙飛行士、毛利衛氏「エンデバー」で宇宙飛行 10 天皇・皇后両陛下が中国訪問(北京・西安・上海) 11 「あかつき丸」、仏からブルニュム輸送

年月	高 教 研	教 育 関 係	社 会 の 動 き
1993 (平5)	<p>1 第30回北海道高等学校教育研究大会 第30回記念大会 同30周年記念祝賀会 (厚生年金会館) 講師 伊東 光晴 (放送大学教授・京都大学名誉教授) 『技術革新の現在と社会の変容』 古葉 竹識 (野球評論家) 『耐えて勝つ』 同教科別集会</p>	<p>1 入試センター試験51.2万人受験・史上最高</p>	

本部事務局のあゆみ

この高教研も本年で30年を迎えることが出来ました。満30年といいますと、人生で例えるならば最も血氣盛んな時であると同時に、そろそろ将来の方向づけをしっかり確認する時期でもあるわけです。高教研もご多聞に漏れず、新しい方向づけが必要な時に来ているのではないかと考えます。

この研究会は発足当初は、会員も研究大会も小規模のもので行われていました。ことに研究大会では、第一日目「全体集会」、第二日目「教科別集会」と2本柱を軸にこの30年間実施されてきたわけです。事務局員は昭和43年の第5回以来、事務局長以下、本部事務局員を旭丘高校だけで構成し、地区支部長、教科部会長の各分野での責任体制を確立し、正式に登録（地区支部）し教科毎に分けている方式が行われるようになつたわけです。

21回以降のこの10年間、高教研にとっても大きな激動期であったような気がします。その1つに役員の大異動をあげられます。会長はこの10年間で5代にわたって歴任し、本部役員（副会長・監査・顧問）も24人の変更をみています。地区支部長、教科部会長では146名。事務担当者は138名と大勢の先生方が高教研の役員として活躍していただいたわけです。これだけの多数の方々の変更が見られたということは、この10年間いかに校長以下各先生方の異動が多かったかということがうかがえます。

本部事務局の組織は、昭和58年度末迄は庶務部・研究部・組織部・編集部・会計部の5部があり、全職員がその中で何らかの役務分担を受けもって運営されていましたが、昭和59年度からは研究部を運営一部（会議等の資料作成）と運営二部（研究大会当日の業務）に分割して行われています。地区支部長の増加、研究大会での参加者の増大等研究部だけでは対応出来ないことなども変わった1つといえます。

また、役員会のあるごとによく話題となって出てくるのが、全体講演の講師の問題についてであります。講師の選定にあたっては、毎回、大会役員はじめ事務局が大変苦労しているところであります。時宜にかなった適切なテーマを設定し、且つテーマに相応しい講師をお迎えして來ることができたことは、本研究会発展の一つの足跡であります。

今後においても、講師の選定については、会員の要望に充分応え得るよう事務局として最善を尽くしたいと考えております。そのため、教育関係団体の協賛を得ることや参加料値上げは、会員に直接還元される意味からも仕方のないことではないかと思います。この高教研の1つの柱でもある全体講演と教科部会の講演

を考えれば、講師謝礼の引上げを含めて近い将来、考えなくてはならないことが多いようです。

また特筆すべきこととして61年度より、高教研独自で臨時職員を常駐させたことである。年ごとに地区支部部校の増設や教科部会校が増えることにより、事務量もかさみ、旭丘高職員では対応出来ないこともあって、何回かの役員会で研究機関において検討した結果、臨時職員の配属が認められた。高教研の仕事は丁度学校の諸行事と重なることが多く、多くの先生方を動員しても時には事務処理が遅れてしまう事が多かったからではなかろうか。第一回の役員会は一学期の中間試験と、第二回役員会は二学期の中間試験時に、又運営会議は二学期の期末試験、第三回役員会は高校入試の仕事、研究大会は二学期末の成績処理時期と年末・年始と重なり、相当数の職員を動員しても間に合わないことが多かった。臨時職員導入後は、ワープロも積極的に取り入れ、今迄外注していた内容も内部で処理するようになったし、各学校への配布物や封書の宛名も機械化して能率化をはかっている。人件費、ワープロ導入、諸経費の値上げに伴って61年度より登録料（1,000円から1,500円に）と参加料（1,500円から1,700円に）を上げたが、それが登録者数に敏感にあらわれ、前年6,200人台だったのが、5,800人台と急速に落ちこんだ。この値上げが引金になったかどうかはわからないが、昭和61年以降は登録者で毎年100人～200人と落ちこみ平成3年度は5,200人台である。

登録者も昭和55年度が最大で6,450名、その後の現在が5,100人台と約1,300名の減となった。物価はこの10年間で約40～50%くらいは上昇しており、地区支部も教科部会も運営費が十分でないために活動もにぎりがちである。それに近々30周年の事業も実施しなくてはならないという事もあって、平成元年度より関係団体から協賛を得ることに関して検討を始めた。平成元年度の第3回役員会（平成2年2月）に意見が出され、来年度（平成2年度）からすぐというわけにはいかないが、平成2年度の1年間は研究し、平成3年度から実施の方向で話しがまとまった。平成2年度の役員会や本部でも、どの機関から協賛を得たらよいかの検討に入った。関係機関には、この間多大のご支援を賜り深く感謝しているところであります。

ところで高教研を永続させる為にはやはり会員の登録料と参加料すべてを運営していくことが良策ではなかろうか。又地区支部の活動も今以上に発展させなくてはならないのではないかとも考えられるし、全体講演と教科部会の講師によりよい人材を得ることが、今後の高教研の発展につながるものだと思います。

編集後記

20周年記念誌と同様の編集方法を検討し、大筋としては大差のない30周年記念誌を作成し、お届けすることが出来ました。

研究会の記念誌ということになると、大体の形式はどこも同様なもので、この30周年記念誌も、研究大会に関する内容が主なるものとなっています。過去すでに10周年、20周年と記念誌を発刊している関係上、この30周年記念誌は21回大会（研究大会の講演は20回を含める。）以降30回大会（講演内容は29回まで）とし、20回以前のものについては割愛させてもらいました。ただ、年表については第1回大会以降を掲載し、全体の流れが理解出来るように作成し、この年表を見ただけで、今迄の研究会の全体の流れがわかるようになっています。

ことに30周年記念誌は、各教科からの提言ものせてあります。各支部、各教科から寄せられた貴重な提言は、今後の本研究会発展に生かさ

れるものと期待します。

30周年記念誌としては十分なものとは言えませんが、校務の多忙の中編集委員の各先生方のチームワークで、何とか完成することが出来ました。

また、この記念誌の発刊にあたりましては、歴代会長、地区支部長、教科部会長、ならびに地区支部・教科部会の事務担当者の方々に全面的にご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

平成4年12月

増田忠二郎
小池 熱
黒宮 輝夫
中野 繁男
佐藤 公征
相澤 寿一
武田 恵
村口 康博

平成4年12月24日 印刷
平成5年1月7日 発行

30周年記念誌

発行 北海道高等学校教育研究会
札幌市中央区旭ヶ丘6丁目5-18（札幌旭丘高等学校内）

発行責任者 染谷 昌志（会長）

印刷 岩橋印刷株式会社
札幌市西区西町南18丁目1番34号

編集 30周年記念誌編集部
